千里

—千里遺跡第1次・周船寺遺跡第19次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1117集

2011

福岡市教育委員会

SEN RI

千里

SEN RI　SU SEN JI

—千里遺跡第1次・周船寺遺跡第19次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1117集

遺跡略号 SNR-1
調査番号 0913
遺跡略号 SSJ-19
調査番号 0919

2011
福岡市教育委員会

1. 調査区遠景（北から）

2. 調査区遠景（南から）

調査区全景（簡易デジタル合成写真。西から）

1．千里遺跡1A区
竪穴住居 SC1990
（南から）

2．千里遺跡４区
方形周溝遺構 SX4022
（東から）

3．千里遺跡２区
土坑墓 SR2041
（西から）

序

玄界灘に面して広がる福岡市は、古くから大陸との玄関口として発展し、市内には多くの歴史遺産が存在します。これらは私たちの暮らしに潤いを与え、豊かな生活環境を作り出しています。福岡市教育委員会はこれらの遺跡を後世に伝えていくことを願い、様々な形で遺跡の保存・活用に取り組んでいます。

その一方で、最近の都市の発展により新しい開発事業が数多く手がけられることにより、重要な遺跡が破壊され、失われつつあるという厳しい現実があります。本市教育委員会ではこれらの遺跡については事前に発掘調査を行い、先人の足跡を後世に残せるよう、その記録保存に努めています。

本書は西区千里地内における千里遺跡第1次調査と周船寺遺跡第19次調査の成果を報告するものです。千里地区は糸島平野と早良・福岡平野とを結ぶ交通の要衝にあたり、多くの遺跡があります。今回の調査でも、縄文時代にはじまり、弥生時代・古墳時代・古代・中世・近世といった各時代の集落を調査することができました。この調査の成果は、この地域での貴重な資料になることが期待されます。

本書が文化財保護へのご理解とご協力を得られる一助となるとともに、学術研究の資料としてご活用頂けましたら幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行に至るまで、千里土地区画整理組合をはじめとする多くの方々のご理解とご協力を賜りました。ここに心より謝意を表します。

平成23（2011）年　3月18日

福岡市教育委員会
教育長　山田裕嗣

例言・凡例

1．本書は、土地区画整理事業に伴い福岡市教育委員会が平成21年度に実施した千里遺跡第１次調査ならびに周船寺遺跡第１９次調査（福岡市西区千里）の発掘調査報告書である。発掘調査および整理報告書作成は、民間受託事業として実施した。

2．本書作成における作業分担は以下の通りである。

・千里遺跡1A・1C・1D・3・5区（調査・整理）、周船寺遺跡1E区（調査）
遺構実測（山崎龍雄・青柳美子・三村悦子・吉岡員代・梅野眞澄・辻節子）、遺構写真撮影（山崎）、遺物実測（山崎）、拓本（木藤直子・渋谷健二）、トレース（山崎）、遺物写真撮影（山崎）

・千里遺跡1B・2・4区、周船寺遺跡2E・F区（調査・整理）、周船寺遺跡1E区（整理）
遺構実測（板倉有大・朝岡俊也・井上葵・瀬戸裕子・田口恵子・三村・吉岡）、遺構写真撮影（板倉）、遺物実測（井上加代子・板倉・比嘉えりか）、拓本（井上）、トレース（副田則子・藤野静子・井上・板倉）、遺物写真撮影（板倉）

・航空機写真撮影・バルーン空中写真撮影・簡易デジタル合成写真（有限会社空中写真企画）
・自然科学分析（パリノ・サーヴェイ株式会社）
・蛍光X線分析（西澤千絵里）
・鉄器保存処理（上角智希）
・執筆（第Ⅰ章・第Ⅲ章・第Ⅴ章・第Ⅷ章・第Ⅹ章：山崎、第Ⅻ章第１節：パリノ・サーヴェイ株式会社、第Ⅻ章第2節：西澤、その他：板倉）
・編集（板倉）

調査・整理の過程で諸氏のご協力を頂いた。ご芳名を掲げて感謝したい（五十音順・敬称略）。
今井隆博　江野道和　榎本義嗣　大庭康時　加藤隆也　加藤良彦　上角智希　上方高弘　久住猛雄
藏冨士寛　佐伯弘次　佐藤一郎　菅波正人　田上勇一郎　田中克子　武末純一　長家伸
比嘉えりか　森本幹彦　吉留秀敏　米倉秀紀　米倉法子

3．本書に使用した方位は磁北で、偏差は5.59度である。国土座標は世界測地系を用いた。

4．遺構略号はSA（柵）、SB（掘立柱建物）、SC（竪穴住居）、SD（溝・河川）、SE（井戸）、SK（土坑）、SP（ピット）、SR（土坑墓）、SX（その他）とする。

5．報告後の遺物・写真・図面の管理は、福岡市埋蔵文化財センターで行う予定である。

6．その他調査に関わる基本情報は下表の通りである。

遺跡名	千里遺跡	調査次数	1次	遺跡略号	SNR-1
調査番号	0913	分布地図図幅名	千里49	遺跡登録番号	020745
申請地面積	60,781㎡	調査対象面積	11,080㎡	調査面積	10,304㎡
調査期間	平成21年6月11日～平成22年3月31日			事前審査番号	11-2-676
遺跡名	周船寺遺跡	調査次数	19次	遺跡略号	SSJ-19
調査番号	0919	分布地図図幅名	千里49	遺跡登録番号	020689
申請地面積	60,781㎡	調査対象面積	302.5㎡	調査面積	301㎡
調査期間	平成21年6月11日～平成21年7月31日			事前審査番号	11-2-676

本文目次

第Ⅰ章　発掘調査の経緯……1
第Ⅱ章　遺跡の位置と環境……3
第Ⅲ章　調査の方法……7
第Ⅳ章　調査成果の概要……11
第Ⅴ章　千里遺跡第１次調査1A・C・D区……13
第Ⅵ章　千里遺跡第１次調査1B区……101
第Ⅶ章　千里遺跡第１次調査2区……109
第Ⅷ章　千里遺跡第１次調査3区……141
第Ⅸ章　千里遺跡第１次調査4区……159
第Ⅹ章　千里遺跡第１次調査5区……223
第Ⅺ章　周船寺遺跡第19次調査……225
第Ⅻ章　自然科学分析
　第１節　放射性炭素年代測定、樹種・種実同定、土壌分析……237
　第２節　石製丸玉の石材同定……249
第XIII章　総括……251

挿図表目次

第2-1図　千里遺跡・周船寺遺跡周辺の主要遺跡（1/50,000）
第2-2図　調査地点周辺の既調査区（1/5,000）
第2-3図　開発申請範囲と調査範囲（1/2,000）
第3-1図　平成11年度試掘トレンチ配置図（1/1,500）
第3-2図　試掘トレンチ土層図（1/45、1/60）
第5-1図　SC1990と出土遺物（1/60、1/3、1/6、1/2）
第5-2図　第1面遺構全体図（1/200）
第5-3図　第2面遺構全体図（1/200）
第5-4図　SX1235と出土遺物（1/20、1/4）
第5-5図　縄文グリッド遺物出土状況・土層図（1/60）
第5-6図　縄文グリッド出土遺物（1/3）
第5-7図　SB1603・1605～1607・1824（1/80）
第5-8図　SB1825・1095～1098（1/80）
第5-9図　各建物出土遺物（1/3、1/4）
第5-10図　SC1106・1211（1/60）
第5-11図　SC1106・1211出土遺物（1/4、1/3）
第5-12図　SC1826と出土遺物（1/60、1/3）
第5-13図　SD1793・1823土層（1/200、1/50）
第5-14図　SD1793・1823出土遺物（1/4）
第5-15図　各土坑1（1/40、1/60）
第5-16図　SK1112・1212出土遺物（1/4）
第5-17図　SK1212・1217出土遺物（1/4）
第5-18図　SK1220・1227・1236出土遺物（1/4）
第5-19図　各土坑2（1/40）
第5-20図　SK1788・1795（1/40）
第5-21図　各土坑出土遺物（1/4、1/3）
第5-22図　SK1792・1859（1/30）
第5-23図　SK1787・1792・1859出土遺物（1/4）
第5-24図　各土坑出土石器（1/3）
第5-25図　SX1232（1/60）
第5-26図　SX1232出土遺物1（1/4、1/5）
第5-27図　SX1232出土遺物2（1/4）
第5-28図　SX1232出土遺物3（1/4）
第5-29図　SX1232出土遺物4（1/4、1/5）
第5-30図　SX1232出土遺物5（1/4、1/3）
第5-31図　SX1232出土遺物6（1/3）
第5-32図　SB1604・1608～1610・1099（1/80）
第5-33図　各建物出土遺物（1/3）
第5-34図　SD1110・1113・1230出土遺物（1/3、1/1）
第5-35図　SE1107・1111（1/40）
第5-36図　SE1107・1111出土遺物（1/3）
第5-37図　SE1107出土石製品（1/3）
第5-38図　SK1103・1216・1221（1/40）
第5-39図　SK1216出土遺物（1/3）

第 5-40 図　SR1108 と出土遺物（1/30、1/3）
第 5-41 図　段落ち SX1101 土層と出土遺物（1/50、1/3）
第 5-42 図　ピット出土中世遺物（1/3、1/2）
第 5-43 図　ピット出土縄文～弥生時代遺物（1/4、1/3）
第 5-44 図　遺構面出土遺物（1/4、1/3、2/3）
第 5-45 図　ピット・遺構面出土遺物（1/3、2/3、1/1）
第 5-46 図　弥生時代集落（建物・溝）配置図（1/400）
第 5-47 図　1C 区遺構全体図（1/200）
第 5-48 図　調査区西壁・北壁土層図（1/60）
第 5-49 図　掘立柱建物と出土遺物（1/80、1/3）
第 5-50 図　SD1654 土層と出土遺物（1/40、1/4）
第 5-51 図　SC1680 と SK1720（1/60）
第 5-52 図　SK1741 と SP1760（1/30）
第 5-53 図　SK1720・1741 出土遺物（1/4）
第 5-54 図　ピット・遺構面出土遺物（1/3、1/4、1/2）
第 5-55 図　各遺構出土石器（1/3、1/1）
第 5-56 図　調査区東壁・SD1002 土層（1/60）
第 5-57 図　1D 区遺構全体図（1/200）
第 5-58 図　SB1010、SK1001（1/60、1/30）
第 5-59 図　各遺構出土遺物（1/3）
第 5-60 図　縄文グリッド土層図（1/60）
第 6-1 図　千里遺跡第 1 次調査 1B 区の全体図（1/200）
第 6-2 図　1B 区土層実測図 1（1/40）
第 6-3 図　1B 区土層実測図 2（1/40）
第 6-4 図　SX1023 出土遺物実測図（1/4、1/3、1/2）
第 6-5 図　SD 出土遺物実測図（1/4、1/3）
第 7-1 図　千里遺跡第 1 次調査 2 区の遺構配置図（1/500）
第 7-2 図　2B・D 区遺構平面図（1/120）
第 7-3 図　2A 区遺構平面図（1/120）
第 7-4 図　2C 区遺構平面図（1/120）
第 7-5 図　2 区土層実測図（1/40）
第 7-6 図　2 区 SD 断面・土層実測図（1/40）
第 7-7 図　2 区弥生時代 SK 実測図（1/30）
第 7-8 図　2 区縄文～弥生時代 SX・SD 出土土器（1/4、1/3）
第 7-9 図　2 区弥生時代 SX 出土土器実測図（1/4、1/3）
第 7-10 図　2 区縄文～弥生時代 SX・SD 出土石器（1/1、1/3）
第 7-11 図　2 区弥生時代 SX 出土石器実測図（1/1、1/3）
第 7-12 図　2 区弥生時代 SX・その他出土石器実測図（1/1、1/2、1/3）
第 7-13 図　2 区中世 SB 実測図 1（1/80）
第 7-14 図　2 区中世 SB 実測図 2（1/80）
第 7-15 図　2 区中世 SP 出土遺物実測図（1/2、1/4、1/3）
第 7-16 図　2 区中世 SD 出土遺物実測図（1/3）
第 7-17 図　2 区中世 SK・SR 実測図（1/30）
第 7-18 図　2 区中世 SR・SK 出土遺物実測図（1/2、1/4、1/3）
第 8-1 図　3C 区南壁土層（1/60）
第 8-2 図　3 区遺構全体図（1/200）
第 8-3 図　SD3001・3002・3037 土層と出土遺物（1/300、1/40、1/3）
第 8-4 図　SX3038（1/50）
第 8-5 図　SK3019・3025 と各土坑出土遺物（1/40、1/4、1/3）
第 8-6 図　SK3018・3034 と土層（1/120、1/60）
第 8-7 図　SK3026 と土層（1/120）
第 8-8 図　SK3018・3026 出土遺物（1/3）
第 8-9 図　SX3015・3024・3032 出土遺物（1/3）
第 8-10 図　縄文グリッド・包含層・遺構面・表採出土遺物（1/3）
第 8-11 図　縄文グリッド（1/60）
第 8-12 図　各遺構出土石器（1/3、1/1）
第 9-1 図　千里遺跡第 1 次調査 4 区の遺構配置図（1/500）
第 9-2 図　4 区下面調査トレンチ位置図（1/500）
第 9-3 図　4 区遺構平面図 1（北西部。1/150）
第 9-4 図　4 区遺構平面図 2（南西部。1/150）
第 9-5 図　4 区遺構平面図 3（北東部。1/150）
第 9-6 図　4 区遺構平面図 4（南東部。1/150）
第 9-7 図　4 区土層実測図 1（1/40）
第 9-8 図　4 区土層実測図 2（1/40）
第 9-9 図　SD4005・SD4050 実測図（1/80、1/40）
第 9-10 図　SD4005・遺構検出面中・ピット出土土器実測図（1/4、1/3）
第 9-11 図　SD・遺構検出面中・ピット出土石器実測図（1/2、1/3、1/1）
第 9-12 図　4 区弥生時代 SB 実測図（1/80）
第 9-13 図　弥生時代 SB・古墳時代 SP 出土土器（1/4、1/3）
第 9-14 図　4 区 SD 断面・土層実測図（1/40）
第 9-15 図　4 区 SD4006・4009・4010 断面・土層実測図（1/50）
第 9-16 図　SD4190・4006 出土土器実測図（1/4、1/3）
第 9-17 図　SD4009 出土土器実測図（1/4、1/3）
第 9-18 図　SD4010・4023 出土遺物実測図（1/4、1/1、1/3）
第 9-19 図　SD4023・4134・4226 出土土器実測図（1/4、1/3）
第 9-20 図　SD4004 実測図（1/40）
第 9-21 図　SD4004・4066 出土遺物実測図（1/4、1/1、1/3）
第 9-22 図　SX4191・4051 出土土器実測図（1/3）
第 9-23 図　SX4051 出土遺物実測図 1（1/4、1/2、1/3）
第 9-24 図　SX4051 出土遺物実測図 2（1/4、1/3）
第 9-25 図　4 区 SX 実測図（1/60）
第 9-26 図　4 区 SX 出土土器実測図（1/4、1/3）
第 9-27 図　SD4190・4006・4009・4010 出土石器実測図（1/2、1/3、1/1）
第 9-28 図　SD4134・SX4051・SX4239・SD4066 出土石器実測図（1/2、1/1）
第 9-29 図　SX4051・SD4066 出土石器実測図（1/3）
第 9-30 図　4 区弥生時代後期～古墳時代前期 SK・SP（1/30）

第 9-31 図　SK4075 出土遺物実測図（1/4、1/3）
第 9-32 図　SK4076 出土遺物実測図（1/10、1/3、1/4）
第 9-33 図　SP4140･4088･4233 出土遺物実測図(1/4､1/3)
第 9-34 図　SX4022 実測図（1/40）
第 9-35 図　SX4022 出土土器実測図 1（1/3、1/4）
第 9-36 図　SX4022 出土土器実測図 2（1/4）
第 9-37 図　SX4022 出土土器実測図 3（1/3、1/4）
第 9-38 図　SX4028・4034 出土土器実測図（1/3）
第 9-39 図　4 区中世 SB 実測図 1（1/80）
第 9-40 図　4 区中世 SB 実測図 2（1/80）
第 9-41 図　4 区時期不明 SB 実測図（1/80）
第 9-42 図　4 区時期不明柱穴群実測図（1/80）
第 9-43 図　4 区中世 SR・SK 実測図（1/30）
第 9-44 図　4 区中世 SB・SD・SR、近世 SP・SX 出土遺物実測図（1/4、1/3）
第 10-1 図　遺構全体図とトレンチ土層（1/100、1/50）
第 10-2 図　各遺構出土遺物（1/3、1/1）
第 11-1 図　周船寺遺跡第 19 次調査遺構配置図（1/400）
第 11-2 図　2E・F 区遺構平面図（1/100）
第 11-3 図　2E・1E 区遺構平面図（1/100）
第 11-4 図　周船寺 19 次土層実測図（1/40）
第 11-5 図　周船寺 19 次 SB・SD 実測図（1/80、1/40）
第 11-6 図　周船寺 19 次出土土器実測図（1/3）
第 11-7 図　周船寺 19 次出土石器実測図（1/3、1/1）
第 12-1 表　放射性炭素年代測定結果・樹種同定結果
第 12-2 表　暦年較正結果
第 12-3 表　珪藻分析結果
第 12-1 図　花粉化石群集
第 12-2 図　植物珪酸体含量
第 12-4 表　花粉分析結果
第 12-5 表　植物珪酸体含量
第 12-6 表　種実遺体分析結果
第 12-3 図　石製丸玉の蛍光 X 線分析チャート
第 13-1 表　千里遺跡第 1 次（2・4 区）・周船寺遺跡第 19 次調査出土未図化石器概要
第 13-2 表　SD4005・SD2019 出土剥片石器計測表

図版目次

図版 5-1　1.1A 区第 1 面全景　2.1A・1C 区第 1 面全景
図版 5-2　1. 第 1 面西側　2. 第 1 面南東側
図版 5-3　1. 第 1 面中央部遺構検出状況　2. 第 2 面全景
図版 5-4　1. 第 2 面全景　2. 同　炉跡　3. 埋甕 SX1235
図版 5-5　1.SC1990　2. 同　炉跡　3. 埋甕 SX1235
図版 5-6　1.SB1603　2.SB1605　3.SB1606　4.SB1607　5.SB1825　6.SB1096
図版 5-7　1.SC1106　2.SC1211　3. 同　遺物出土状況　4.SC1826　5. 同　遺物出土状況
図版 5-8　1.SD1793・1823 と西側柱穴群　2.SD1793・1823　3.SD1793 遺物出土状況　4. 同　1 号土層　5. SD1823 土層
図版 5-9　1.SK1787　2. 同　遺物出土状況　3.SK1859 遺物出土状況　4.SK1859 完掘　5.SK1792
図版 5-10　1. SD1587　2.SK1112　3.SK1212 遺物出土状況　4.SK1212　5. 同　完掘　6.SK1220　7.SK1236
図版 5-11　1.SK1363　2.SK1731・SP1258　3.SK1822　4.SK1788　5.SP1615　6.SP1537
図版 5-12　1.SX1232　2. 同　西側　3. 同　東西断面
図版 5-13　1. 縄文グリッド遺物出土状況　2.SB1604　3.SB1608・1609　4.SB1610　5.SP1949 怡土城瓦出土状況
図版 5-14　1.SE1107 遺物出土状況　2.SE1107　3.SE1111 井筒状況　4.SE1111 完掘状況　5.SK1611　6.SD1230 遺物出土状況
図版 5-15　1.SK1216　2. 同　遺物出土状況　3.SR1108　4. 同　遺物出土状況　5.SK1103
図版 5-16　各遺構出土遺物 1
図版 5-17　各遺構出土遺物 2
図版 5-18　各遺構出土遺物 3
図版 5-19　1.1C 区全景　2.1C 区東側下面遺構検出状況
図版 5-20　1.SB1732　2.SB1733
図版 5-21　1.SC1680　2.SK1720　3.SK1741　4.SB1093 の SP1668 遺物検出状況　5.SP1760 遺物出土状況
図版 5-22　1.1C 区各遺構出土遺物　2.1A 区包含層・遺構面出土遺物
図版 5-23　1.1D 区全景　2. 調査区北側と SD1002
図版 5-24　1. SB1010　2. SK1001　3. 打製石斧出土状況　4. 縄文土器出土状況　5.K2 グリッド遺物出土状況　6.J2 グリッド出土遺物　7.3 区 SK3018 出土遺物（1/3）
図版 6-1　1.1B 区全景　2. SX1023　3. SX1023 遺物集中範囲
図版 6-2　4. N-1 土層東側　5. N-2 土層西側　6. E-3 土層　7. E-1 土層東側　8. S-2 土層　9. S-3 土層　10. W-1 土層　11. トレンチ 7
図版 6-3　12. N-1 土層西側　13. N-2 土層東側　14. E-4 土層　15. E-2 土層西側　16. S-1 土層西側　17. S-1 土層東側　18. W-2 土層　19. W-3 土層
図版 6-4　20. SX1023 出土遺物　21. SD 出土遺物
図版 7-1　2D 区全景　2. 2 区全景　3. 2B 区東部　4. 2C 区東部　5. 2A 区東部

図版 7-2　6. 2D 区トレンチ 1 西壁土層　7. 2D 区トレンチ 2 西壁土層　8. 2D 区トレンチ 4 西壁・北壁土層　9. 2D 区トレンチ 3 西壁土層　10. 試掘トレンチ 1 東側北壁　11. SD2089 土層 C　12. SD2089 土層 D　13. SD2093 土層 B

図版 7-3　14. 試掘トレンチ 1 西側北壁　15. SD2089 土層 E　16. SD2093 土層 C　17. 2C 区トレンチ 7　18. 2C 区トレンチ 6　19. 2C 区トレンチ 5　20. 2C 区トレンチ 1　21. 2B 区トレンチ 3

図版 7-4　22. SD2001　23. SD2031　24. SD2030　25. SD2031　26. SD2093　27. SD2089 杭　28. SD2089　29. SD2089

図版 7-5　30. SK2094　31. SK2040　32. SR2041　33. SK2039　34. SK2091　35. 2D 区トレンチ 1　遺物 14 出土　36. SD2093　遺物 24 出土　37. SX2032 南区遺物出土

図版 7-6　38. J-11 区出土遺物　39. SX2099 出土遺物　40. 2D 区トレンチ 1、5 層出土遺物　41. SX2090 出土遺物　42. SD2031 出土遺物　43. SD2093 出土遺物 1　44. SD2093 出土遺物 2　45. SD2061 出土遺物

図版 7-7　46. SX2002 出土遺物　47. SX2032 出土遺物 1　48. SX2032 出土遺物 2　49. SX2032 出土遺物 3　50. 打製石鏃　51. 縦長剥片　52. 磨製石斧・磨石・叩石　53. 打製石斧 1

図版 7-8　54. 打製石斧 2　55. 打製石斧 3　56. 打製石斧 4　57. 楔転用石核　58. 横刃型石器・剥片・磨製石鏃・石鎌　59. SP 出土遺物 1　60.SP 出土遺物 2　61.SP2087 出土遺物

図版 7-9　62. SP2088 出土遺物　63. SP 出土遺物 3　64. SP2056 出土遺物　65. SP2055 出土遺物 1　66. SP2055 出土遺物 2　67. SP2055 出土遺物 3　68. SP 出土遺物 4　69. SD2089 出土遺物 1　70. SD2089 出土遺物 2

図版 7-10　71. SD2030 出土遺物　72. SR2041 出土遺物　73. SK2040 出土遺物　74. SK2039 出土遺物 1　75. SK2039 出土遺物 2　76. SK2039 出土遺物 3　77. SK2039 出土遺物 4　78. SK2106・SK2103 出土遺物　79. SD2089 出土鉄滓

図版 8-1　1.3 区全景　2.3B・3C 区 SD3001・3002

図版 8-2　1.SD3001・3002　2. 同　北壁土層　3.SX3038

図版 8-3　1.3B 区西側、SK3018・3034 検出状況　2.SK3034　3.SK3018 土層

図版 8-4　1.SK3026　2.SK3026

図版 8-5　1.SD3037 北壁土層　2.SK3019　3.SK3025　4.SK3026 倒木出土状況　5.SK3018 遺物出土状況　6.3A 区上面 SK3006 ～ 3007

図版 8-6　1.A 区縄文グリッド　2. 各遺構出土遺物

図版 9-1　1. 4 区上面全景　2. 4 区下面全景　3. 4 区北西部全景　4. 4 区西部全景　5. 4 区北部全景 1　6. 4 区北部全景 2

図版 9-2　7. 4 区鳥瞰 1　8. 4 区鳥瞰 2　9. トレンチ 3 北壁土層　10. トレンチ 8 北・東壁土層　11. SD4005 ベルト土層　12. SD4005 北壁土層　13. SD4190 南壁土層　14. トレンチ 18 北壁土層

図版 9-3　15. SD4009 土層 B　16. SD4009 土層 D　17. SD4023 土層 C　18. SD4004 土層 A　19. SK4076　20. SX4022　遺物 290 出土　21. SX4022 南ベルト東面土層　22. SX4022 東ベルト北面土層

図版 9-4　23. 北ベルト南面土層　24. トレンチ 27 南壁 SD4190 土層　25. SD4006 北壁土層　26. SD4010 土層 A　27. SD4010 土層 B　28. SX4001 西壁土層　29. SD4005　30. SD4050

図版 9-5　31. SP4085　遺物 37・38 出土　32. SP4090 遺物 39 出土　33. SD4006　34. SD4134　35. SD4066　36. SD4190 北東部　37. SD4023・SD4006 合流点

図版 9-6　38. SD4009　39. SD4009 冠水状況　40. SD4010　41. SD4023　42. SD4023 遺物出土　43. SD4145　44. SD4002・SD4004　45. SD4004 土器出土

図版 9-7　46. SX4051 遺物出土　47. SX4133 遺物出土　48. SX4221 遺物出土　49. SK4075 遺物出土　50. SK4076 遺物出土　51.SK4076　52. SP4088 土層　53. SP4140 遺物出土

図版 9-8　54. SP4233　遺物 283 出土　55. SX4022　56. SX4022 北溝土器出土　57. SX4022 東溝土器出土　58. SX4022 南溝土器出土　59. SX4022　遺物 295・294 出土　60. SP4043　遺物 313 出土　61. SP4139　炭化材出土

図版 9-9　62. SP4138　遺物 321 出土　63. SP4138　遺物 322 出土　64. SR4203　65. SR4029　66. SK4177　67. SK4079　68. SD4170　69. SD4032

図版 9-10　70. SD4005 出土土器　71. 遺構検出面中・ピット出土土器　72. SD・遺構検出面中・ピット出土石器　73. 弥生時代 SB・古墳時代 SP 出土土器　74. SD4190 出土土器

図版 9-11　75. SD4006 出土土器　76. SD4009 出土遺物　77. SD4010 出土土器　78. SD4023 出土遺物　79. SD4023・4134 合流出土土器　80. SD4134・4226 出土土器　81. SD4004 出土土器　82. SD4066 出土遺物

図版 9-12　83. SX4191・SX4051 出土土器　84. SX4051 出土土器 1　85. SX4051 出土土器 2　86. 古墳時代 SX 出土土器 1　87. 古墳時代 SX 出土土器 2　88. 4 区 SX・SD 出土石器 1

図版 9-13　89. 4 区 SX・SD 出土石器 2　90. SK4075 出土遺物　91. SK4076 出土遺物

図版 9-14　92. SP4140 出土遺物　93. SP4088・SP4233 出土土器　94. SX4022・SP4233 出土礫　95. SX4022 出土土器

図版 9-15　96. SX4022 出土甕　肩部刺突文　97. 古代 SX 出土土器　98. 中世 SP 出土土器　99. 中世 SD・SR 出土土器　100. 近世 SP4173・SX4001 出土土器

図版 10　1. 全景　2.SP5012 出土丸玉

図版 12-1　1. 樹種同定木材　2. 珪藻化石

図版 12-2　3. 花粉化石　4. 植物珪酸体・大型植物遺体

第Ⅰ章　発掘調査の経緯

第１節　調査に至る経過

福岡市西区大字千里地区は福岡市西端に位置し、現在も農村風景を残す地域であるが、九州大学の元岡地区への移転によって、当地域にも都市化の波が急速に及んできた。平成11年、同地区内で土地区画整理事業計画が立上がり、地元土地所有者達より11月29日付け（受付番号11-2-676）で埋蔵文化財事前審査申請書が提出された。計画地域は60,781㎡と広大であり、また周船寺遺跡、千里遺跡の範囲にかかるため、平成12年（2000）2月14日～2月29日の期間、事前試掘調査が可能な部分について、埋蔵文化財課第1係が担当して試掘調査を行った。試掘調査で遺構が確認されたので、調査が必要な部分を確定し、その取り扱いについて申請者側と協議を進めた。大規模事業で計画はなかなか進展しなかったが、地元に区画整理組合が結成され、事業計画も具体的になってきたため、協議が本格化し、平成21年度に、調査費用（事務所や重機など一部発掘調査に関わる機材は現物支給）を原因者負担として、平成21年度は調査、22年度は報告書作成を行うこととなった。調査にあたっては、委託者の福岡市千里土地区画整理組合のほか、株式会社へいせい、松吉建設株式会社、福岡市農業協同組合、および地元の方々より多大な協力を受けた。末尾ではあるが記して感謝の意を表します。

第２節　調査の組織

調査の組織は以下のとおりである。

調査委託　福岡市千里土地区画整理組合
調査主体　福岡市教育委員会
調査総括　文化財部埋蔵文化財第2課長　田中 壽夫
埋蔵文化財第2課調査第2係長　菅波 正人（現任）
埋蔵文化財第2課調査第1係長　杉山 富雄（前任）
調査庶務　埋蔵文化財第1課管理係　古賀とも子
試掘調査担当　平成11年度　埋蔵文化財課調査第１係　久住 猛雄（現 文化財整備課）
平成21年度　埋蔵文化財第1課主任文化財主事　加藤 良彦
同　課　事前審査係　木下 博文
埋蔵文化財第2課主任文化財主事　山崎 龍雄
調査担当　埋蔵文化財第2課主任文化財主事　山崎 龍雄
同　課　調査第2係　板倉 有大
整理作業　井上加代子　木藤直子　渋谷健二　副田則子　藤野静子　増永好美　村上信子

なお、紙面の都合上氏名を記載出来ないが、発掘調査は80人を越える作業員の協力で作業を行った。記して感謝の意を表します。

第 2-1 図　千里遺跡・周船寺遺跡周辺の主要遺跡(S=1/50,000)

第II章　遺跡の位置と環境

本調査地点は、糸島平野の沖積扇状地東縁、標高約13～14mの微高地上に位置する。調査地点の西側には瑞梅寺川、東側には周船寺川が北流し、東南に高祖山（標高416m）、北・西に糸島半島の柑子岳・可也山を臨む。調査地点は、福岡市内遺跡分布地図上で周船寺遺跡の南端、千里遺跡の北端にまたがっており、周船寺遺跡としては19次調査、千里遺跡としては1次調査となる。なお、西隣する糸島市では周船寺遺跡・千里遺跡と一連の遺跡群を高田遺跡群と登録している。

千里遺跡・周船寺遺跡が位置する糸島平野は、南の背振山稜（標高800～900mの浮嶽・獅子舞嶽・井原山、標高400～700mの飯場山・王丸山・高祖山など）を源とする長野川・雷山川・瑞梅寺川・川原川の沖積作用によって形成され、山系からの緩斜面を糸島扇状地とも言う。一方、南の博多湾・玄界灘の海岸線に発達した砂丘の背後には、加布里湾と今津湾を結ぶ排水不良の過湿地（糸島低湿地帯）を生み出している。標高約5mを境にこれら糸島扇状地と糸島低湿地帯は分断している。山塊部の地質的特徴としては、糸島平野の中部以南から背振山塊に糸島花崗閃緑岩が広く分布する。飯場付近には堆積岩を伴う変成岩類、その北には塩基性岩類が認められる。

糸島平野は、魏志倭人伝にある伊都国、律令時代の怡土郡に比定され、先史時代から多くの遺跡が存在する。調査地点周辺の調査成果を中心として歴史的環境を概観しておきたい（第2-1図）。

縄文時代では、曽根丘陵・三雲丘陵・高祖山北麓から早期の押型文土器や石器が少量出土している。高祖山北麓では、中期後半の阿高式系土器が少量出土する。丘陵部から低地部にかけて、縄文時代の遺跡が安定して確認されるのは後期後葉～晩期（三万田式～黒川式土器期）である。飯氏遺跡や周船寺遺跡では、埋甕（埋設土器）・溝などの遺構や遺物包含層が複数確認されている。西の糸島市二丈には、突帯文土器期の曲り田遺跡が存在し、次に述べる支石墓群の形成からも、本調査地点周辺は、大陸農耕文化の伝来・定着の地としても重要である。

弥生時代早期には、志登支石墓・井田用会支石墓・井田御子守支石墓・三雲加賀石支石墓・三雲石ヶ崎支石墓などが築かれ、柳葉形磨製石鏃や碧玉製管玉など朝鮮半島とのつながりを示す遺物が副葬されている。弥生時代前期末～中期前半には、三雲・井原遺跡群の甕棺墓に細形銅剣が副葬される。また、この時期には北東に位置する今山遺跡で玄武岩製の太型蛤刃石斧が生産され、北部九州に流通するようになる。弥生時代中期末には、三雲南小路遺跡の甕棺墓から、異体字銘帯鏡を中心とする中国鏡57面、ガラス璧・金銅四葉座飾金具などが出土している。弥生時代後期初頭の井原鑓溝遺跡の甕棺からは、方格規矩鏡など銅鏡21面、巴形銅器などが出土している。後期中頃の飯氏遺跡では、甕棺墓から雲雷文内行花文鏡が出土している。上鑵子遺跡では、人物線刻板など弥生時代中・後期の木製品が多数出土している。浦志A遺跡や元岡桑原遺跡群・今宿五郎江遺跡では、小銅鐸が出土している。潤遺跡群内の潤地頭給遺跡では、弥生時代終末～古墳時代の玉作工房跡が確認されている。弥生時代終末の平原遺跡の周溝墓からは、方格規矩鏡を中心とする40面の中国鏡が出土し、なかには直径46.5cm、重さ約8kgを測る倣製の内行花文鏡4面が含まれる。青緑色のガラス製丁字頭勾玉などガラス製品の出土も目立つ。このように、千里周辺地域には、弥生時代の重要遺跡が多数存在しており、唐津周辺の末盧国と福岡市・春日市周辺の奴国との中継点として「一大卒」が置かれたとされる伊都国の繁栄を偲ばせる。

古墳時代には、御道具山古墳・泊大塚古墳からなる泊古墳群、山の鼻1号墳・若八幡宮古墳・丸隈山古墳などからなる今宿古墳群、瑞山古墳・築山古墳・茶臼塚古墳からなる三雲古墳群など、前期（4

世紀代）からいち早く前方後円墳が築かれる点が特徴である。その後も、曽根古墳群などを含めて首長墳が継続して築かれ、高祖山から派生する丘陵には300を超える群集墳が造営される。

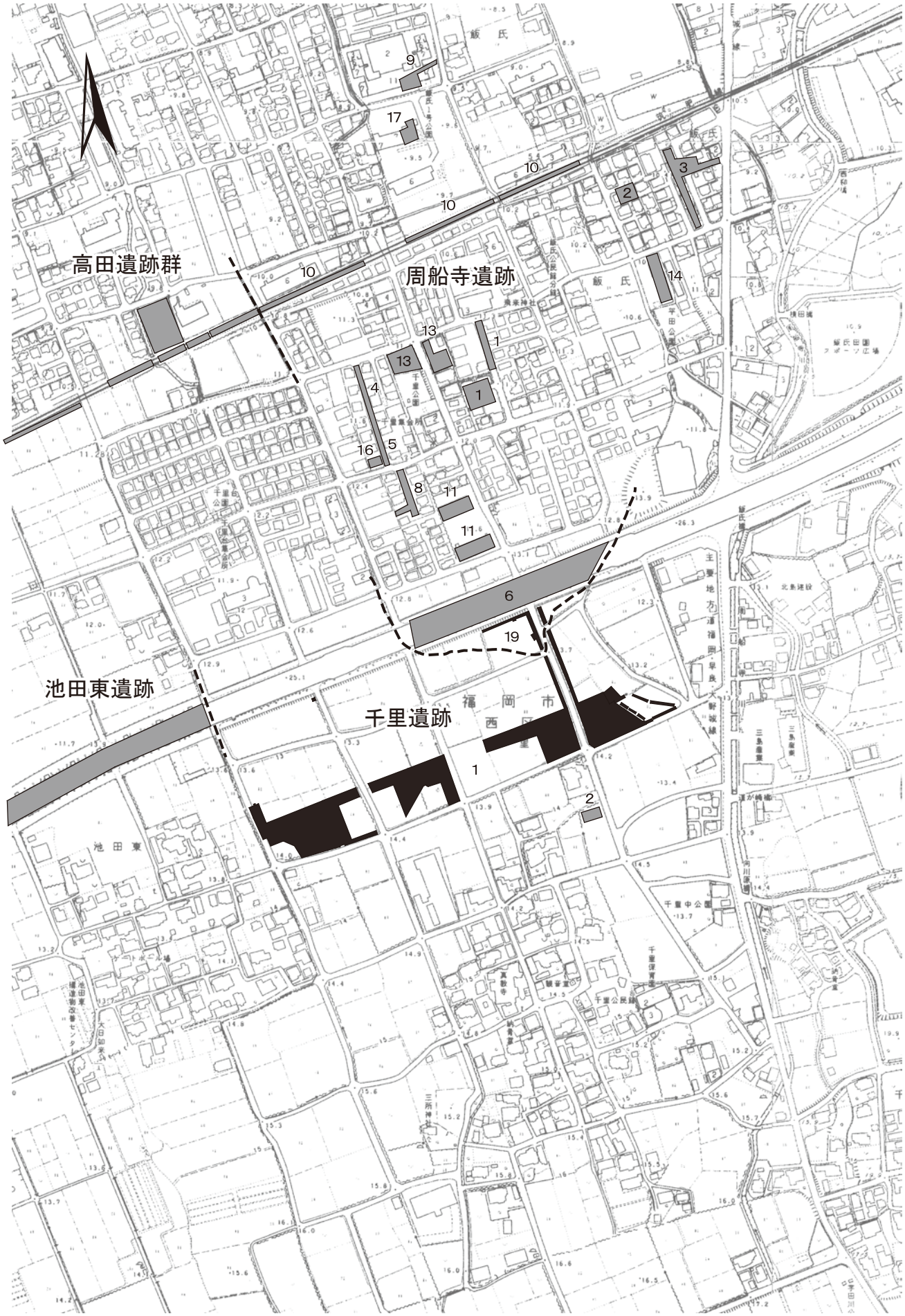
古代には、朝鮮式山城である怡土城が築かれ、高祖山西側で土塁・水門・城門が確認され、平瓦・鬼瓦が出土している。『続日本紀』によれば、天平勝宝8（756）年に吉備真備らにより築城がはじまり、神護景雲2（768）年に完成したとされる。また、南西の雷山には発掘調査等による詳細は知られていないが、7世紀代に構築されたとされる雷山神護石がある。怡土郡における怡土城を中心とした軍事は、『令集解』営繕令にみる大宰府の水軍施設である「主船司」との関連も指摘できる。

平安時代末期～鎌倉時代には、怡土荘の貿易港として今津が開かれ、誓願寺に日本臨済宗開祖の明菴栄西が長期滞在するなど、重要な役割を担った。また、高祖山には原田氏の本城である高祖城が築かれる。山頂部から中腹にかけて尾根筋に郭が残っており、城域は南北の空堀をもって区画される。発掘によって石垣・虎口・礎石建物が検出され、15世紀代～16世紀中頃の陶磁器、大内菱と想定される家紋瓦などが出土している。波多江には高祖城の原田氏に属した波多江氏の波多江丹波守屋敷跡が残っている。『筑前国続風土記』に「四方大堀をかまへ、高築地あり」と記され、堀は埋没しているが土塁は一部が残存している。その南には波多江遺跡があり、館跡が調査されている。この怡土地域の大内系城館に対し、今津・糸島半島の志摩地域には、志摩野城・水崎城・柑子岳城・臼杵端城など大友系の城が対峙している。

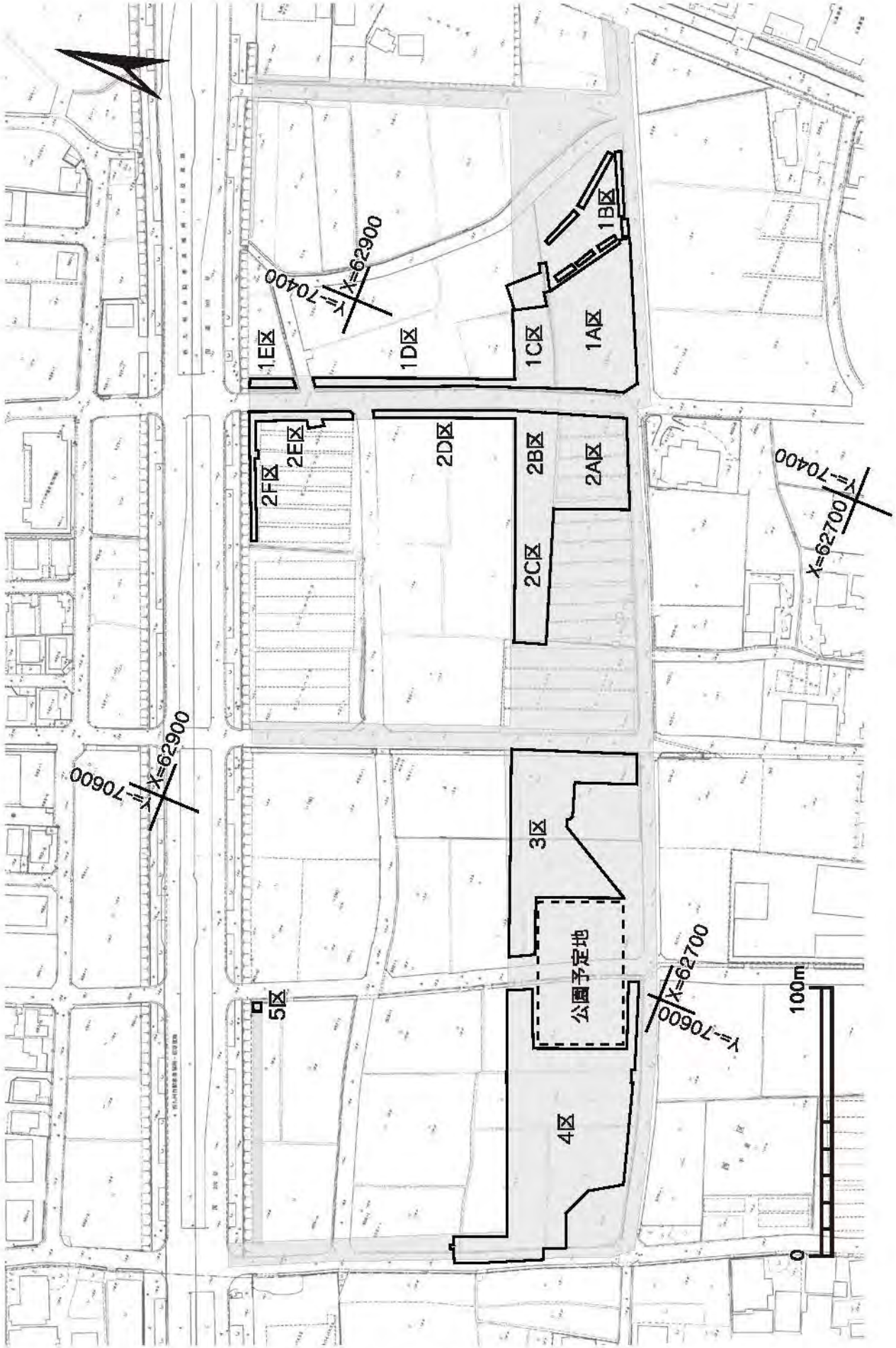
最後に、調査地点周辺の既調査について整理しておきたい（第2-2図）。周船寺遺跡は、弥生時代から中世にいたる複合遺跡であり、南隣する千里遺跡も、試掘調査で縄文時代から中世の遺物・遺構の存在が知られていた。2011年3月現在までに周船寺遺跡で20次、千里遺跡で2次の調査が行われている。また、西隣の糸島市域では、高田遺跡群と南の池田東遺跡の調査が行われている。主な調査成果を以下に列記する。周船寺遺跡1次調査（千里シビナ遺跡・福岡市報88）：縄文時代後期後葉（三万田式）の溝2条、弥生時代前期（板付Ⅱ式）の竪穴住居1棟。6次調査（福岡市報492）：縄文時代晩期（古閑式）の包含層、弥生時代前期（板付Ⅱ式）の甕棺墓8基、弥生時代中期後半（須玖Ⅱ式）の掘立柱建物・祭祀土坑。8次調査（福岡市報493）：弥生時代前期の甕棺墓4基、弥生時代中期の掘立柱建物1棟・溝状遺構4条・土坑11基。10次調査（福岡市報654）：縄文時代後期の包含層、弥生時代前期の溝。11次調査（福岡市報655）：弥生時代中期の竪穴住居・甕棺墓・祭祀土坑・溝状遺構。13次調査（福岡市報692）：縄文時代晩期（黒川式期）の埋甕8基・土坑3基、弥生時代前期（板付Ⅱa式期）の竪穴住居7棟・土坑。14次調査（福岡市報798）：縄文時代晩期（黒川式期）の谷状地形。16次調査（福岡市報882）：弥生時代前期後半～中期前半の甕棺墓6基。17次調査（福岡市報883）：時期の明確でない掘立柱建物1棟・ピット。千里遺跡2次調査（整理中）：弥生時代前期の甕棺墓、中世の溝・掘立柱建物・土坑墓、近世の溝。高田遺跡群1次調査（前原町報23）：板付Ⅱa式期の自然河道と溝。高田遺跡群平成9年度調査（前原市報67）：弥生時代前・中期、古墳時代、奈良時代、中世の水田遺構。高田小生水遺跡（前原市報76）：黒川式～突帯文土器期の自然流路、漆塗土器。池田東遺跡（前原町報37）：突帯文～板付Ⅰ式期の自然流路、古墳時代・中世の水田遺構。

＜主要参考文献（五十音順）＞

伊都国歴史博物館編（2009）『脊振山の南と北で：吉野ヶ里遺跡をとりまく国々と伊都国』　伊都国歴史博物館
川添昭二・柳田純孝（1988）「今津と栄西」川添昭二編『よみがえる中世1：東アジアの国際都市博多』　平凡社
小池史哲（1981）「糸島の縄文文化」『三雲遺跡Ⅱ（福岡県文化財調査報告書第60集）』　福岡県教育委員会
福岡県の城郭刊行会編（2009）『福岡県の城郭』　銀山書房



第2-2図　調査地点周辺の既調査区（数字は調査次数。S=1/5,000）



第2-3図　開発申請範囲（アミカケ部分）と調査範囲（S=1/2,000）

第Ⅲ章　調査の方法

第１節　調査の方法

① 調査区の設定

試掘調査の成果を基に個人住宅分譲部分、道路、水路など構造物を作る部分について調査範囲を設定した。調査区は道路などの区切りで大きく5か所に分かれる。東から１～５区とし、更に、各区の工事計画の内容によってアルファベットで小区を設定した。調査の進行中、工事側との定期協議のなかで、下水道埋設工事、道路の電線地下埋設工事など、当初の予定にはなかった工事が発生した。これらについては、工事区に近い現場担当者が立会、もしくは調査区を拡張して対応した。

② 調査区の基準

各調査区は遺構図の統一性を測るため、同一の基準ラインで行い、10mグリッドで基準杭を設定した。調査範囲が広いため、各区でグリッド番号を付している。基準ラインは任意の座標軸であるため、別個に国土座標値を測量し、調査区配置図に記入している。

第２節　試掘調査の成果

平成11年度に実施した文化財試掘調査の成果を調査者が作成した報告を基に、その後新たに追加で試掘した部分(62～70トレンチ)を補足して記述する。

① 調査概要

所 在 地　福岡市西区千里地内

調査期間　平成12（2000）年2月14日～平成12年2月29日、平成21年6月～7月

調査対象面積　60,781㎡

調査担当　平成11年度　埋蔵文化財課調査第1係　久住猛雄

平成21年度　埋蔵文化財第1課主任文化財主事　加藤良彦、同課第1係　木下博文

同　　2課主任文化財主事　山崎龍雄

立　　地　調査対象地（以下対象地）は糸島平野の東端、周船寺川と瑞梅寺川に挟まれた沖積地である。この沖積微高地上に周船寺遺跡が立地し、対象地の北側一部はこの遺跡の範囲となる。地質上の基盤は花崗岩と思われるが、表層には沖積堆積物である砂礫層、シルト層、粘土層が厚く堆積する。対象地の標高は12.5～14.5m前後であり、現状は水田・畑地で、北側には西九州自動車道福岡前原道路（今宿バイパス）が通る。

② 調査の記録

調査の方法　調査は対象地内の休耕地を基本に幅１m、長さは任意の試掘トレンチを図３-1のように62か所設定し、試掘調査を実施した。一部ビニールハウスがある場所や、作物の作付け中の場所については未試掘である。試掘はバックホーを用いて掘削し、人力で精査し、遺構・遺物包含層の有無を確認し、記録を作成した。基本的にはトレンチは遺構を確認した面まで掘り下げるが、一部は更に下層の遺構面・遺物包含層の有無と、地山の堆積状況の確認のため、これより深く掘り下げ、土層状況を記録している。

各試掘トレンチの状況　試掘トレンチは地形の状況を見て設定した。各トレンチを対象地東側から道路などを基準にA～G区としてトレンチの概要を説明する。A区：調査地東端（14～18トレンチ）、B区：対象地東側（1～13トレンチ）、C区：対象地中央東寄り（19～27トレンチ）、D区：対象地中央西寄り（28～37トレンチ）、E区：対象地西側（38～50トレンチ）、F区：対象地北西側（51～56トレンチ）、G区：対象地北東側（57～62トレンチ）である。各地区トレンチの遺物包含層、遺構面の状況は図3-2に示す。

A区：14～17トレンチでは遺構・遺物は検出出来なかった。砂礫層の堆積が見られ、旧流路と思われる。18トレンチでピットを少数検出した。東端は微高地であろうか。

B区：1～9・13トレンチで遺構または遺物包含層を検出した。主な検出遺構は溝、土坑、ピット。1・2・7トレンチは遺構密度が比較的濃密である。3～5・10～12トレンチでは遺構は検出出来ず、砂礫層となる。旧流路か。

C区：19～27トレンチすべてで遺構ないし遺物包含層を検出した。主な検出遺構は土坑、ピット。20・23・25トレンチでは遺構密度は比較的濃密である。遺物包含層には縄文時代後期・晩期～弥生時代前期頃の遺物を包含する。26・27トレンチ西側敷地は耕作中で試掘出来なかったが、北側の今宿バイパスの調査（周船寺遺跡第6次）の成果から遺構が広がると推定出来る。

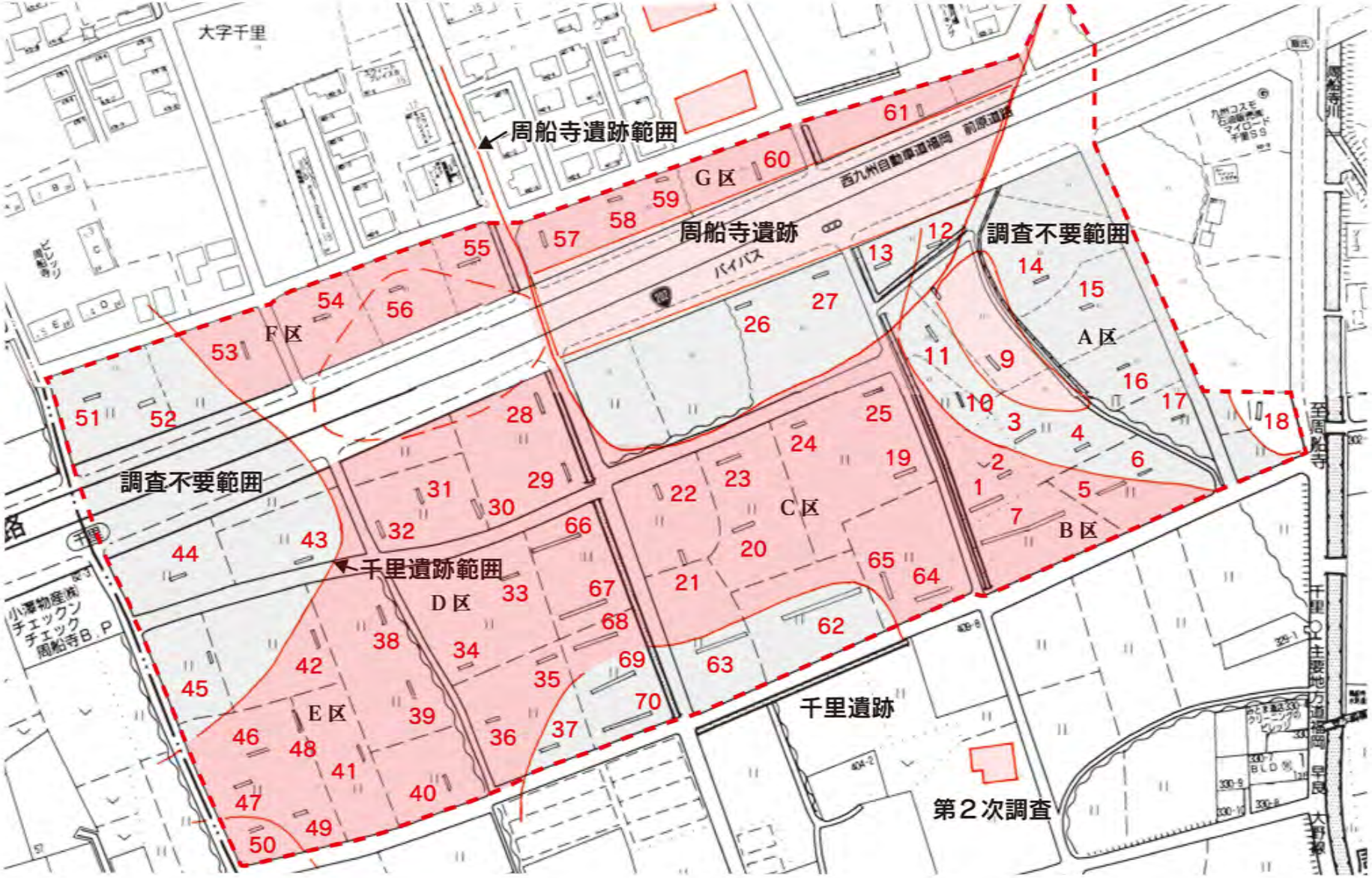
D区：28・30～36トレンチで遺構ないし遺物包含層を検出。主な検出遺構は溝、土坑、ピット。30・33・35・36トレンチの遺構密度は比較的濃厚。遺物包含層は縄文時代後期から弥生時代前期の遺物を含む。29・37トレンチは遺構の検出がなく、砂礫層が主体の堆積で、旧流路ないし谷が入る可能性がある。平成11年度では試掘出来なかった南東側の部分を21年度に試掘した。5か所のトレンチではシルト、砂礫層の基盤で、旧流路部にあたるが、2か所のトレンチで溝などの遺構を検出した。

E区：38～42・46～49トレンチで遺構ないし遺物包含層を検出した。主な検出遺構は溝、土坑、ピット。各トレンチの遺構密度はそれほど濃くない。46～48トレンチは弥生土器を含む大溝、38トレンチでは古墳時代前期の遺物を含む遺構がある。43～45・50トレンチでは遺構が検出出来なかった。遺跡範囲外と思われる。

F区：53～55トレンチで遺構ないし遺物包含層を検出した。遺構密度は比較的薄い。51・52・56トレンチでは遺構、遺物包含層は検出出来なかった。

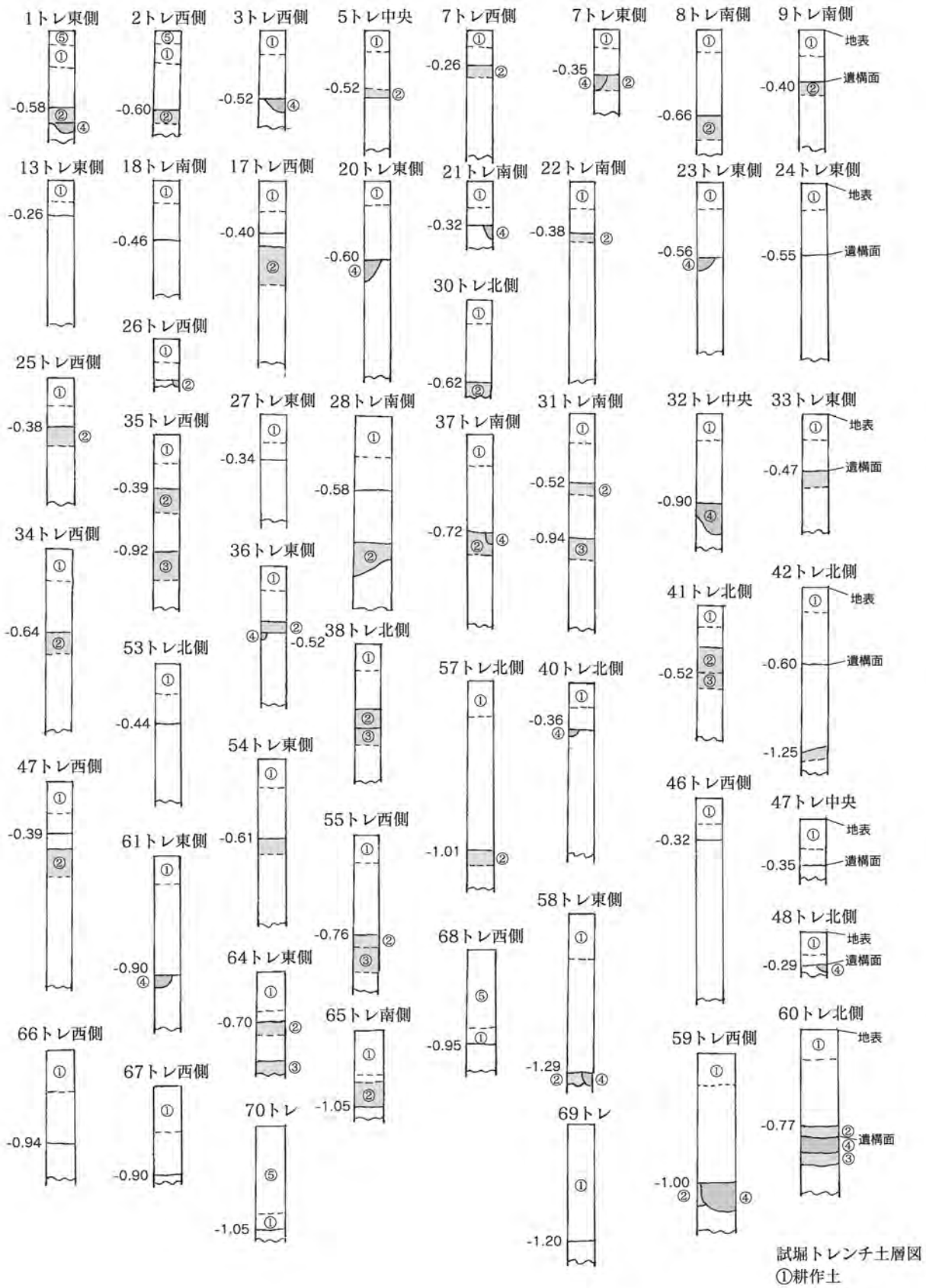
G区：57～61トレンチで遺構ないし遺物包含層を検出した。58～61トレンチはやや遺構密度は濃い。主な検出遺構は土坑、ピット、竪穴住居？などである。遺物包含層は縄文時代後期～弥生時代前期の遺物を含む。62トレンチは遺構・遺物の検出がなく、遺構面が砂礫層であることから、A区14～17トレンチから予想される旧流路の延長と思われ、東側を流れる周船寺川の氾濫原またはある時期蛇行した流路の可能性が高い。

発掘調査区と試掘調査区の対比は、千里遺跡第1次調査では、1区がB区、2区がC区、3区がD区、4・5区がC区に対応し、周船寺遺跡第19次調査区はB区・C区に対応する。



第３-1図　平成11年度試堀トレンチ配置図（1/1,500）※一部平成21年度試堀地点を追加

要調査範囲
調査不要範囲



第3-2図　試掘トレンチ土層図（1/45、1/60）

第Ⅳ章　調査成果の概要

各調査区の基本層序・遺構の概要は以下のとおりである。

千里遺跡第1次調査　1A・C・D区（調査面積2146.7㎡）　本書第Ⅴ章

1区は調査範囲の東側に設定した。1A区では、表土下約30cm、標高約13mの黒褐色土とその下層のシルト質土面で遺構を検出した。基盤層は砂礫・細砂・粘質土である。遺構検出面である黒褐色土は縄文時代晩期の遺物包含層でもあり、北側ほど厚くなる。1A区北側の1C区では、客土・水田耕作土下に、暗褐色粘質土の縄文時代晩期遺物包含層が堆積し、その下層の黄褐色粘質土に暗褐色粘質土ブロックが混じった層とその下層の黄褐色からオリーブ褐色粘質土の面で遺構を検出した。1C区北の1D区南側では、バラス・客土盛土約30cmと耕作土約60cmの下層のオリーブ褐色粘質土面で遺構を検出した。1D区の北側は南側に比べて現況で一段下がっており、水田耕作土下約15cm、オリーブ褐色粘質土面で遺構を検出した。1A・C・D区で確認された遺構は、縄文時代晩期の竪穴住居1棟・埋甕１基、弥生時代中期の竪穴住居2棟・掘立柱建物17棟・溝3条・貯蔵穴2基・土坑40基・土器溜まり1カ所、多数の柱穴・ピット、古墳時代前期の竪穴住居1棟、中世前期の掘立柱建物5棟・井戸2基・土坑4基、多数の柱穴・ピット、近世以降の溝11条である。縄文時代晩期以降、比較的安定した微高地を利用して集落が営まれている。微高地は北西方向へ狭小に展開しており、その範囲に遺構も広がると考えられる。

千里遺跡第1次調査　1B区（調査面積316.8㎡）　本書第Ⅵ章

1A区の東側、調査範囲の最東部に設定した。現代耕作土・床土下20～50cm、標高12.5～12.7mの砂礫層が露出する面で落ち込み・流路を検出した。遺構面は削平された状態であった。落ち込みSX1023の形成時期は縄文時代後期後葉・三万田式期、流路SD1020・1021・1022・1025の時期は、中世前期・11世紀後半～12世紀中頃である。三万田式土器は周辺調査においても比較的古い時期の遺物である。旧地形は西側の微高地（1A・C区）から東側へ傾斜していくと考えられ、1B区は氾濫原に近い環境であったと考えられる。西側の1A・C区で確認された中世前期（11世紀後半～12世紀前半）の集落と、1B区で確認した流路は同時期であり、水田等の耕地利用と関連する可能性がある。

千里遺跡第1次調査　2A～D区（調査面積2044.9㎡）　本書第Ⅶ章

調査範囲の東から2区画目に設定した。表土下約30cm、標高約13mの黄褐色・黄灰褐色粘質シルトで遺構を検出した。遺構面とその下層に約40～120cm堆積する暗褐色粘質土・灰褐色砂質粘土は、縄文時代晩期から弥生時代前期の遺物包含層となり、その下層が基盤の砂礫層となる。旧地形では、南北方向の狭小な微高地をなしていたと考えられる。検出した遺構は、弥生時代中期後半の溝3条・土坑2基・土器溜まり、平安時代後期の掘立柱建物もしくは柵列1基、11世紀後半～12世紀前半の土坑墓1基、12世紀中頃～後半の掘立柱建物7棟・土坑8基・ピット、14世紀の区画溝1条、15世紀の溝1条である。12世紀代の遺構群は、1A・C区の中世前期集落に続く時期の集落である。

千里遺跡第1次調査　3区（調査面積1887.2㎡）　本書第Ⅷ章

調査範囲の東から3区画目に設定した。東側は50～80cm程の造成客土と約10cmの水田耕作土・床土下、5～15cm堆積した黄灰色粘質シルト、鈍い黄色細砂質シルト上で遺構を検出した。西側は40～45cmの水田耕作土、10～20cmの黒褐色粘土下の灰オリーブ色シルト質細砂上で遺構を検出した。検出した遺構は、縄文時代晩期末～弥生時代前期の土坑1基、弥生時代前～中期の土坑3基、古墳

時代前期の土坑1基、古代～中世の溝3条・土坑4基である。溝の方向は糸島地域の条里方向に合っている。

千里遺跡第1次調査　4区（調査面積3832.8㎡）　本書第Ⅸ章

調査範囲の最も西側、糸島市との市境隣接地に設定した。北西側では耕作土下15～20cm、標高約13.3mのにぶい黄色砂質シルトが遺構検出面となる。遺構検出面から下層は、明黄褐色・黄褐色シルトが1.4mほど堆積し、細砂とシルトの互層、砂礫層となる。砂礫層上の黒色シルトに含まれるムクノキ片に対して4310±20cal.BP（δ13C：-27.19±0.15‰　PLD-16296）の^{14}C年代が得られている（第Ⅻ章第1節参照）。南東側では耕作土下25～35cmで遺物包含層を検出し、包含層・溝の底面は標高約11.7mで地山は明黄褐色シルトとなる。明赤褐色シルト下約1mで細砂とシルト互層・砂礫層となる。遺構検出面である黄色砂質シルトは部分的に縄文時代晩期の遺物包含層となっている。検出した遺構は、縄文時代晩期の溝3条、弥生時代の掘立柱建物5棟・溝7条・溜井2基、弥生時代終末期の祭祀土坑2基、古墳時代前期の溝2条・方形周溝遺構1基、古代の包含層、中世（12世紀中頃～後半）の掘立柱建物7棟・溝2条・土坑墓2基・土坑3基、近世の水田遺構・柵、近代以降の柵列・溝である。南東部側は谷状に下がっており、水辺的環境であったと考えられる。その谷部を利用する形で、縄文時代晩期以降、各種の水路が通されているが、竪穴住居等の居住施設は構築されていない。弥生時代後期中頃～古墳時代前期の祭祀土坑・方形周溝遺構の性格は、水辺環境における祭祀に関わる可能性がある。

千里遺跡第1次調査　5区（調査面積75.7㎡）　本書第Ⅹ章

調査範囲の北西部に設置した。水田盛土造成土下約1mの暗灰黄色粘土～シルトが遺構検出面となる。縄文時代晩期～弥生時代の土坑4基とピット群を確認した。ピットから市内で５例目となる天河石（アマゾナイト）製の丸玉が1点出土した（本書第Ⅻ章第2節参照）。

周船寺遺跡第19次調査　1E・2E・2F区（調査面積301㎡）　本書第Ⅺ章

調査範囲の北東部に設定した。西側は河成堆積層となり、東側は耕作土下20～30cm、標高12.5～12.6mの黄褐色シルト質粘土を遺構検出面とする。浅い部分では遺構検出面下10～20cmで砂礫層となる。西側の河成堆積層・流路は縄文時代晩期～弥生時代、東側の掘立柱建物2棟・溝1条は弥生時代中期後半である。本調査区と北側の周船寺遺跡第6次調査、南東側の千里遺跡第1次調査1区を含めた範囲が北西方向に延びる狭小な微高地となっており、その上に弥生時代中期後半の集落が形成されている。

本調査では、千里地区内において、縄文時代晩期から近世にいたるまで集落と耕地が営まれてきたことが明らかになった。縄文時代後期後葉～晩期（三万田式～黒川式期）の遺構・遺物は、日本列島における水稲農耕の導入をめぐる議論に重要な資料を提供する。弥生時代から古墳時代の遺構・遺物は、魏志倭人伝に記された伊都国の形成・展開を考える上で貴重な資料となる。古代には怡土城下、中世には高祖城下の集落という性格を有し、古代・中世の怡土郡・怡土荘の姿を復元する上でも重要である。また、本調査は千里遺跡としては第1次の発掘調査であり、千里遺跡が縄文時代晩期から近世にいたる複合遺跡として周船寺遺跡の南側に広がることが明らかとなった。本調査の成果を活かして、今後も千里地区内における埋蔵文化財の保護が一層図られることが期待される。

第Ⅴ章　千里遺跡第1次調査1A･C･D区

第1節　1A区の調査

1．調査の概要（第５-2・3図、図版５-1～4）

区画整理地東側の調査区。微高地部分にあたり、標高は遺構面で約13ｍを測る。事前の試掘調査で、最も遺構を確認した地区である。調査は平成22年6月11日の表土除去から開始したが、協議で北側道水路部分1D区を先行調査するということで中断した。1D区の調査が終了した8月5日から調査を再開し、12月9日に終了した。調査面積は1,494㎡である。遺構面は表土下0.3ｍ程の深さの黒褐色土上面で検出した。この面は遺物包含層であり、基盤面はその下の砂礫、細砂、粘質土やシルト質土となる。包含層は場所によって厚さは異なるが、北側ほど厚くなる。調査は包含層上面の第1面と、包含層を除去した第２面の調査を行った。各面で検出した遺構は竪穴住居3棟、掘立柱建物15棟、溝12条、土壙墓1基、埋甕1基、貯蔵穴2基、土坑多数、土器群、柱穴などである。遺構の時期は縄文時代晩期から近世の各時期にわたる。第1面、第２面の検出遺構の時期は異ならず、第1面で確認出来なかった遺構を第２面で確認したものが多いので、遺構面毎の報告ではなく、遺構の時期、種類で報告する。また第２面遺構面に縄文土器片が含まれていたため、出土が多い部分について調査区を設定し、遺物・遺構の確認を行い、遺物の取り上げを行った。

2．遺構と遺物

1）縄文時代の遺構

①　竪穴住居

SC1990（第５-１図、図版５-5-1・2、５-16）

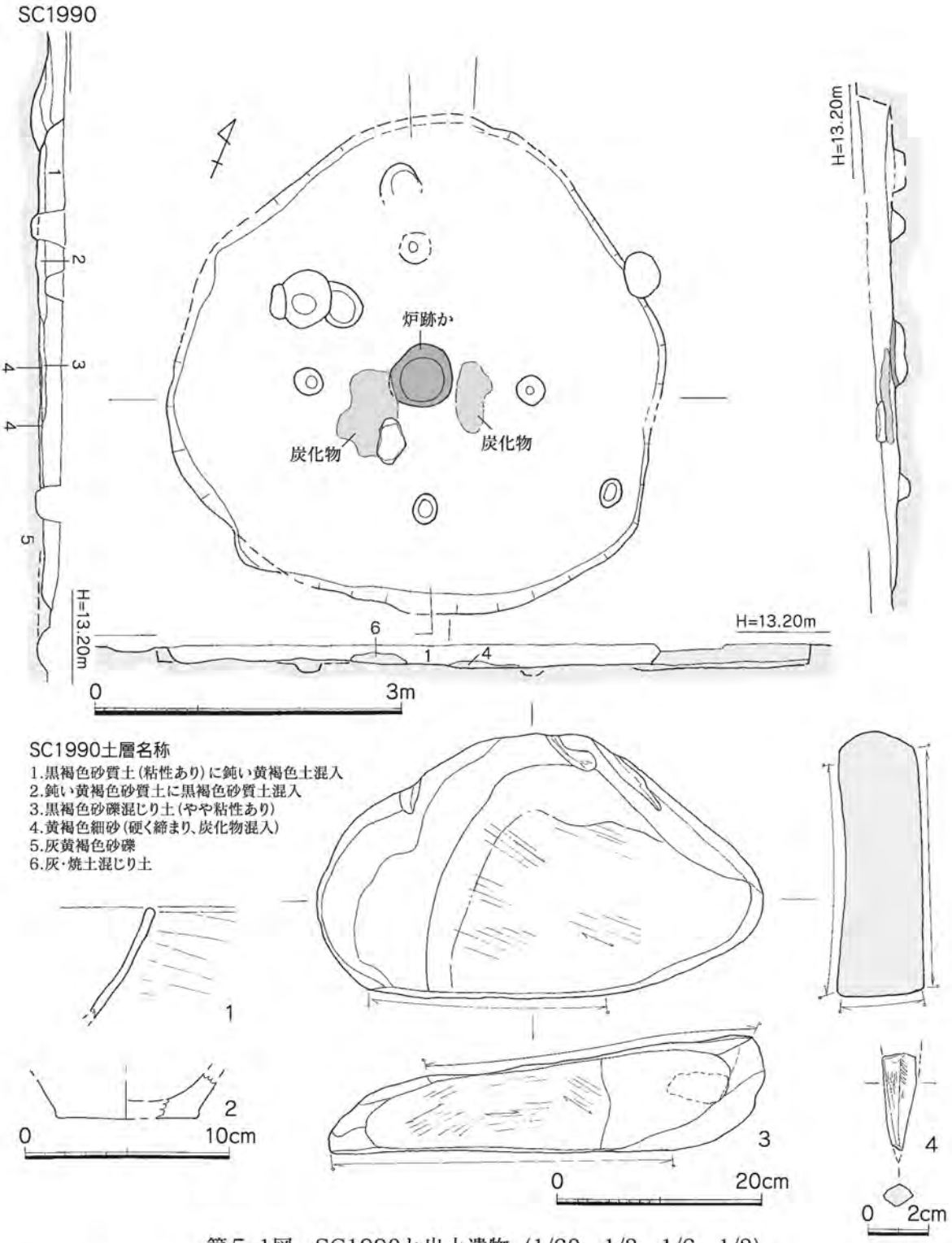
第２面Ｂ6区、第２面下で検出した竪穴住居。平面形は不整円形を呈し、規模は東西長4.85ｍ、南北長4.83ｍ、深さ0.20ｍを測る。埋土は黒褐色砂質土が主体で鈍い黄褐色砂質土を混入する。床面中央部には直径0.65ｍの不整円形の炭化物が詰まったピットがある。ピットの西側床面には炭化物が広がり、石皿も出土している。この部分に地床炉があったと思われるが、明瞭に床が焼けた痕跡は無かった。柱穴は上面からのピットなどを除去すると、中央ピットの周りに4基の直径0.3ｍ程の円形ピットがある。これらが主柱穴の可能性が強い。ただ深さが0.15ｍと浅いので、これらで屋根を支えることは難しく、竪穴外にも屋根を支える柱穴などがあったと考える。縄文時代の住居としたが、時期を決めうる土器の出土は少なく、**4**の石鏃などから弥生時代前期迄下る可能性もある。

出土遺物　埋土中から縄文土器片や石皿、黒曜石剥片などが少量出土した。**1**は縄文時代晩期前半頃の精製浅鉢と思われる口縁部小片。器壁はやや摩滅するが、調整は外面粗いナデか条痕、内面はナデ。**2**は底部1/4片、底径7.0㎝を測る。器壁の調整はナデ。胎土は、**1**は精良、**2**は2㎜内外粗砂多く混入。**3**は石皿。床面炉跡らしきピット、炭化物ブロックの横で検出した。長さ47.4㎝、幅27.0㎝、最大高11.9㎝を測る。上下両面、側面は使用で摩耗している。石材は花崗岩。**4**は磨製石鏃の基部。残存長3.1㎝を測る。石材は粘板岩。埋土上層出土で、混入の可能性がある。このほか図示出来なかったが、晩期前半広田式相当の粗製の深鉢胴部片などがある。

②　埋甕

SX1235（第５-4図、図版５-5-3、５-16）

第1面Ｃ6区で検出した。上半は後世の削平によるのか消滅していた。墓壙は確認出来なかった。鉢内には頸部片が剥離し落込んでいた。



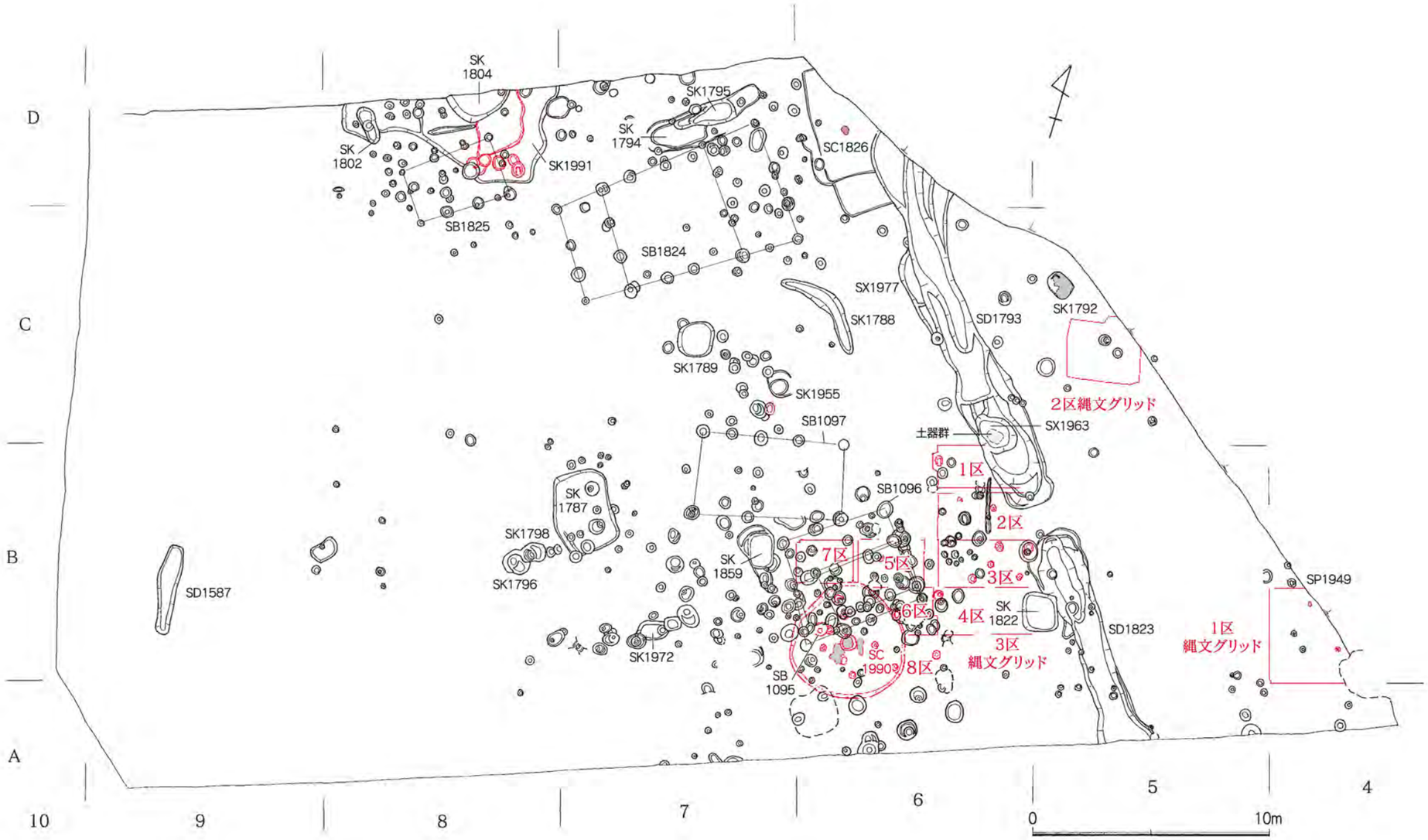
第5-1図　SC1990と出土遺物（1/60、1/3、1/6、1/2）

出土遺物　**5**は深鉢で残存高28.5㎝、胴部最大径33.3㎝を測る。底部は安定するように広がる。調整は外面粗い条痕、内面はナデで上半には条痕を加える。胴外面上半には黒斑がある。胎土は最大3㎜の石英粒など砂粒を多く混入。焼成は良好。

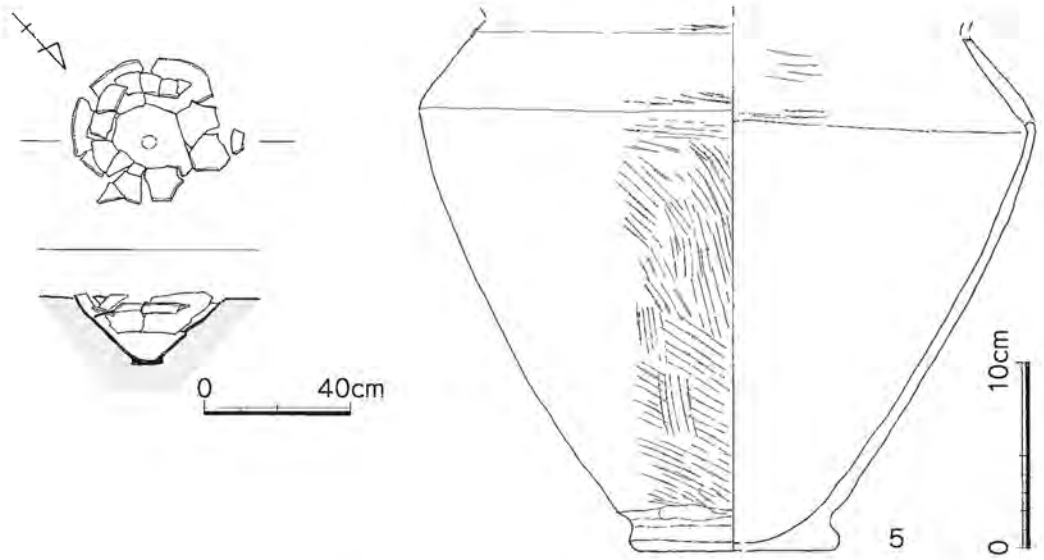
③　縄文時代包含層の調査（第5-5・6図、図版5-13-1、5-22-2）

第2面遺構面に縄文土器片を含む場所があったので、縄文土器が出土した3か所｛1か所はB4区(1区)、

第5-2図　第1面遺構全体図(1/200)



第5-3図　第2面遺構全体図(1/200)



第５-4図　SX1235と出土遺物（1/20、1/4）

1か所はＢ6区（2区）、1カ所はＣ5区（3区）トについて、遺構面を掘り下げ、遺物の出土状況と遺構の有無の確認行った。1・3区は遺構面の褐色粘質シルトを砂礫層まで掘り下げた。縄文土器の細片を少量検出したが、包含層・遺構は確認出来なかった。2区は褐色粘質シルトの遺物を含む遺構面を20㎝前後下の褐色粘質細砂まで掘り下げた。大半は細片であるが、縄文土器片が集中して出土した部分があった。ピットを数個確認したが、第２面からの見落としと思われる。

出土遺物　**6**～**12**はいずれも2区から出土した縄文時代晩期前半頃の鉢。**6**は精製の浅鉢口縁部。口縁部は屈折して直立する。器壁は黒色で内面ヘラ研磨。**7**・**8**は湾曲して開く口縁部。**7**の外面は粗い条痕が残る。**9**は口縁が開き、頸部が屈折すると思われる。精製の鉢で器壁の調整はヘラ研磨。胎土は微砂を含むが、精良。**10**は浅鉢胴部1/3片。胴部径28.4㎝を測る。胴部が屈折し上半が窄まる形態。器壁は摩滅するが、調整はナデか。**11**・**12**は鉢の底部。**12**は1/3片で底径9.2㎝を測る。内面にはススが付着する。**13**は打製石斧か。全長13.4㎝、幅5.8㎝を測る。粗割した剥片に雑な二次調整を加え、刃部を作り出す。石材は玄武岩か安山岩。

2）弥生時代・古墳時代の遺構

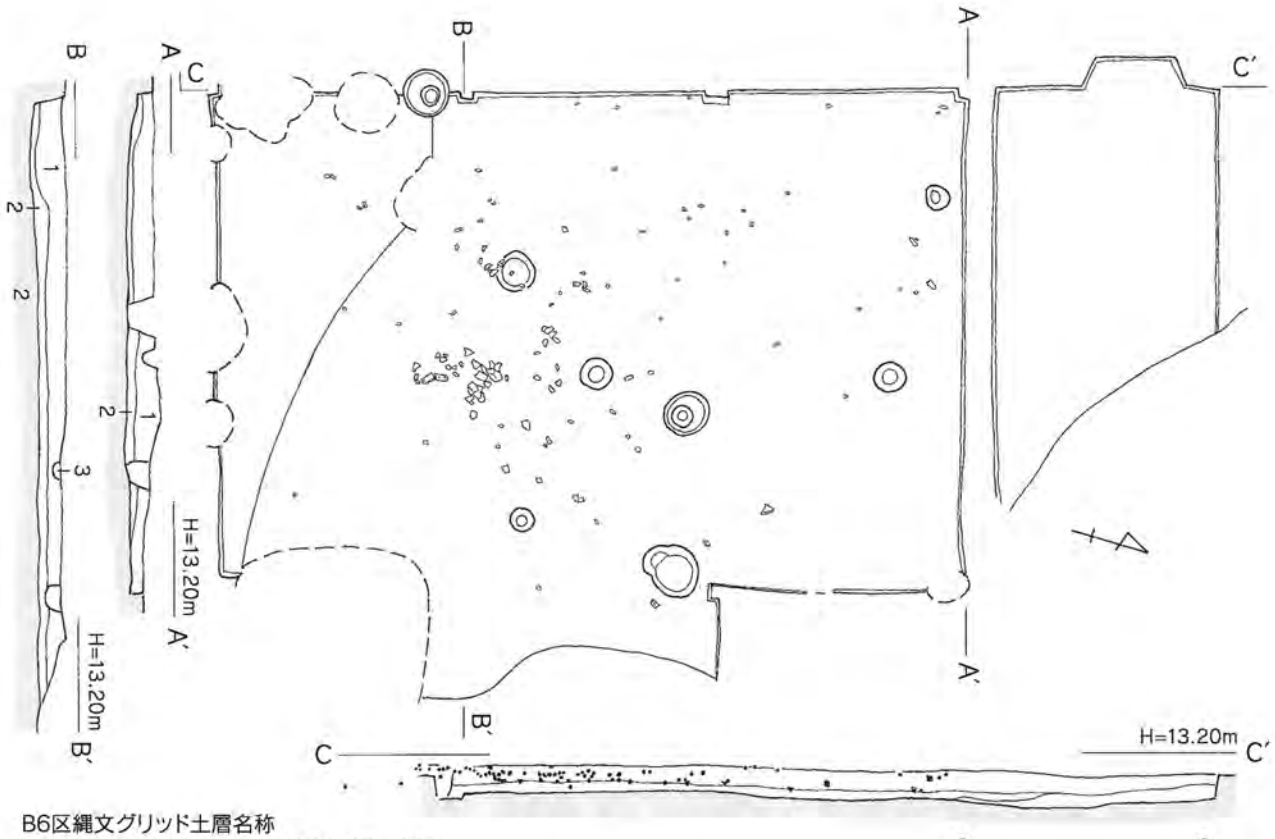
①　掘立柱建物

調査時及び図上復元したものは10棟であるが、柱穴が多く、まだ多くあるものと思われる。

SB1603（第５-7図、図版５-6-1）

第１面北西Ｄ9区で検出した１×２間の主軸をＮ-32°-Wに取る建物。規模は梁間2.40～2.50ｍ、桁行4.45～4.65ｍを測る。柱穴平面形はほぼ円形。規模は長軸径で0.4～0.5ｍ、深さ0.3～0.5ｍを測る。埋土は暗褐色粘質土が主体で鈍い黄褐色粘土ブロックを混入する。柱痕跡が残り、柱径は0.1～0.15ｍと推定する。

出土遺物　2基の柱穴から弥生土器片、黒曜石剥片が少量出土。細片で図示出来なかった。



B6区縄文グリッド土層名称
1.褐色粘質シルト(黒褐色粘質土微粒を斑状に含む)
2.褐色粘質細砂(1より明るく砂味が強い)下層は鈍い黄褐色粘質細砂に変化する
3.黒褐色粘質土(ピット埋土)
4.暗灰黄色粘質砂(シルト質～中粒砂)

※ドットは出土遺物

第５-5図　縄文グリッド遺物出土状況・土層図（1/60）

SB1605（第５-7図、図版５-6-2）

第１面西側Ｃ9区で検出した１×２間の主軸をN-8°-Eに取る建物。北側柱穴は試掘トレンチにかかる。規模は梁間2.55～2.80m、桁行4.60～4.70mを測る。柱穴平面形はほぼ円形。規模は長軸径で0.46～0.60m、深さ0.38～0.50mを測る。埋土は黒褐色粘質土が主体である。柱痕跡が残り、柱径は約0.2mと推定する。一部柱穴内には根締め石があった。

出土遺物　４基の柱穴から弥生土器片、黒曜石剥片が少量出土。細片で図示出来なかった。

SB1606（第５-7・9図、図版５-6-3）

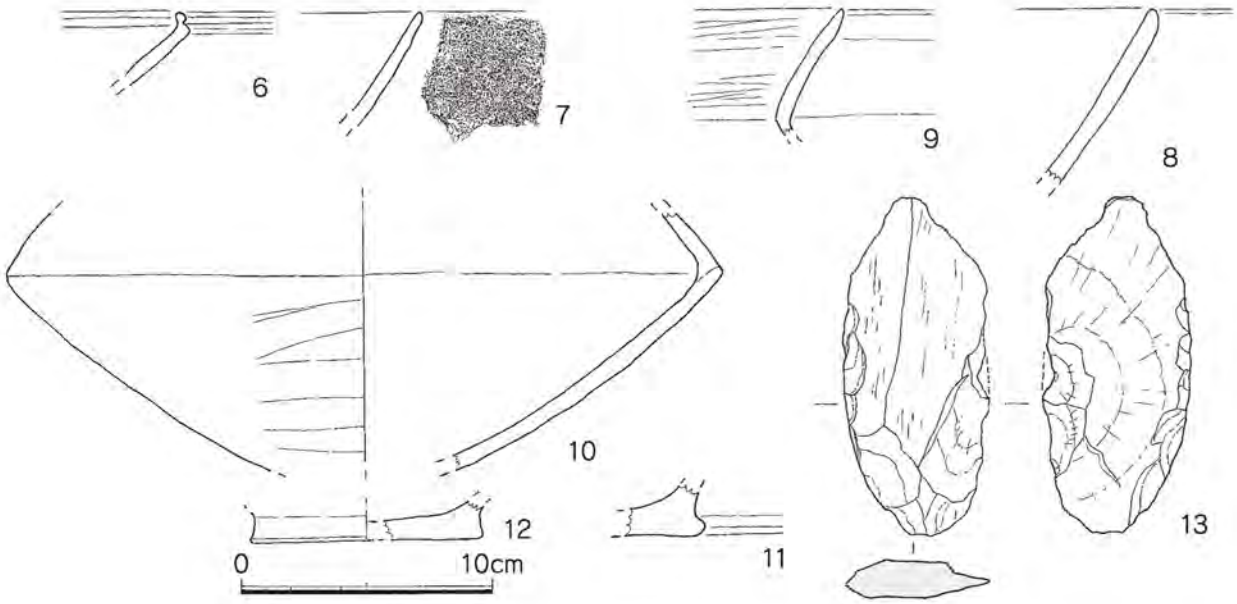
第１面中央Ｃ7区で検出した１×２間の主軸をN-65°-Eに取る建物。規模は梁間2.30～2.40m、桁行3.55～3.60mを測る。柱穴平面形は円形又は楕円形。規模は長軸径で0.40～0.74m、深さ0.2～0.3mを測る。埋土は黒褐色粘質土が主体である。一部の柱穴には柱痕跡が残り、柱径は0.2m弱と推定する。

出土遺物　4基の柱穴から縄文土器や弥生土器片、黒曜石剥片が少量出土。**14**は縄文時代晩期前半の精製の浅鉢口縁部小片。調整はヘラミガキか。胎土精良。混入品。**15・16**は弥生時代中期須玖Ⅱ式頃の甕口縁部片。**16**は鋤形口縁で、口縁部は水平。器壁の調整はヨコナデ。

SB1607（第５-7・9図、図版５-6-4）

第１面南側Ｂ7区で検出した１×２間の主軸をN-18°-Eに取る建物。SK1212に切られる。規模は梁間1.80～1.90m、桁行3.30～3.40mを測る。柱穴平面形は円形又は楕円形。規模は長軸径で0.44～0.68m、深さ0.18～0.26mを測る。埋土は黒褐色粘質土が主体。

出土遺物　各柱穴から弥生土器片が少量出土。**17**は弥生時代中期頃の甕口縁部1/9片。鋤形口縁で



第５-6図　縄文グリッド出土遺物（1/3）

口径は約25cmを測る。口縁部はやや内傾する。**18**は甕底部1/6片。底径8.4cmを測る。調整は外面粗いタテハケ目。

SB1824（第５-7・9図）

第２面北側Ｃ・Ｄ7区で検出した３×４間の主軸をＮ-55°-Ｅに取る大型建物。東西両側に束柱の柱穴がある。規模は梁間3.95～5.23ｍ、桁行9.10～9.41ｍを測る。柱穴平面形は円形又は楕円形、方形とまちまち。規模は長軸径で0.22～0.62ｍ、深さ0.22～0.54ｍを測る。埋土は黒褐色粘質土が主体。第2面で検出したが、第1面で確認出来なかった建物であろう。

出土遺物　8基の柱穴から弥生土器片や黒曜石剥片が少量出土。**19**は弥生時代中期須玖Ⅱ式甕口縁部細片。口縁部下にわずかに三角突帯が付く。調整はヨコナデ。

SB1825（第５-8・9図、図版５-6-5）

第２面北側Ｄ8区で検出した1×2間の主軸をＮ-57°-Ｅに取る建物。規模は梁間2.60～2.63ｍ、桁行3.80～3.83ｍを測る。柱穴平面形はほぼ円形。規模は長軸径0.24～0.54ｍ、深さ0.14～0.24ｍを測る。埋土は黒褐色粘質土が主体。第2面検出だが、第1面の建物群と同時期である。

出土遺物　3基の柱穴から弥生土器片が出土。**20**～**22**は弥生時代中期須玖Ⅰ式頃のもの。**20**は甕口縁部1/6片。口径26.2cmを測る。調整はヨコナデであるが、外面ススが付着する。**21**は甕か鉢の1/3片。口径は21.0cmを測る。調整はナデで、内面平滑なナデ。外面には粘土帯接合痕跡がかすかに残る。**22**は底部片。調整は外面タテハケ目。

SB1098（第５-8・9図、図版５-16）

第１面中央Ｂ・Ｃ6・7区で検出した1×2間の主軸をＮ-85°-Ｅに取る建物。規模は梁間2.00～2.06ｍ、桁行3.50～3.54ｍを測る。柱穴平面形は円形又は不整楕円形。他柱穴と切合う柱穴があるが、規模は長軸径で0.50～0.70ｍ、深さ0.17～0.40ｍを測る。埋土は黒褐色粘質土が主体。

出土遺物　各柱穴から弥生土器片が出土。**23**は須玖Ⅱ式期の蓋1/3片、口径26.8cm、器高10.4cmを測る。頂部は中窪む。調整は外面細かいハケ目とナデ、内面ナデで天井部はケズリ。4mm内粗砂多く混

入。**24**は甕底部1/4片。底径7.2㎝を測る。調整は外面細かいハケ目、内面は摩滅するがナデか。

SB1097（第５-8・9図）

第２面Ｂ６・７区で検出した1×3間の主軸をN-77°-Eに取る建物。規模は梁間3.15～3.45m、桁行5.92～6.31ｍを測る。柱穴平面形は円形又は不整楕円形。規模は長軸径0.44～0.62ｍ、深さ0.16～0.36ｍを測る。埋土は黒褐色粘質土が主体。一部の柱穴底面に柱痕の窪みが残る。

出土遺物　7基の柱穴から弥生土器片や黒曜石剥片が出土。**25**は底部片。縄文時代晩期頃の浅鉢の底部か。全体に摩滅し調整は不明。混入品。

SB1096（第５-8・9図、図版５-6-6）

第２面Ｂ6区で検出した1×3間の主軸をN-54°-Eに取る建物。規模は梁間3.60～3.70ｍ、桁行4.55～4.90ｍを測る。柱穴平面形は円形又は不整楕円形、隅丸方形。他柱穴との切合う柱穴があるが、規模は長軸径で0.44～0.80ｍ、深さ0.28～0.60ｍを測る。埋土は黒褐色粘質土が主体。梁間が広く間柱がある可能性もある。

出土遺物　各柱穴から弥生土器片や石斧片が少量出土。**26**は弥生時代中期須玖Ｉ式の甕口縁部1/7片。口径26.6㎝を測る。頸部に１条三角突帯が巡る。口縁部の調整はヨコナデ。**27**は扁平片刃石斧で、刃部を欠損する。残存長4.7㎝、幅2.6㎝、厚さ0.8㎝を測る。雑な研磨調整。石材は頁岩系か。

SB1095（第５-8・9図）

第２面Ｂ6区で検出した1×4間の主軸をN-53°-Eに取る建物。規模は梁間2.50～2.60ｍ、桁行5.15～5.40ｍで、歪みが大きい。柱穴平面形は円形又は不整楕円形。建替えがあるのか、一部柱穴は他柱穴と切合うが、規模は長軸径で0.22～0.64ｍ、深さ0.17～0.60ｍを測る。埋土は黒褐色粘質土が主体。

出土遺物　9基の柱穴から弥生土器片、石器が少量出土。**28**は略方形の敲石。花崗岩質の石材の上面と底面に使用痕跡の窪みが残る。二次的に火を受け赤く焼けた所や焦げた所がある。12.0×11.3×9.4㎝を測る。根締め石に転用されたものか。

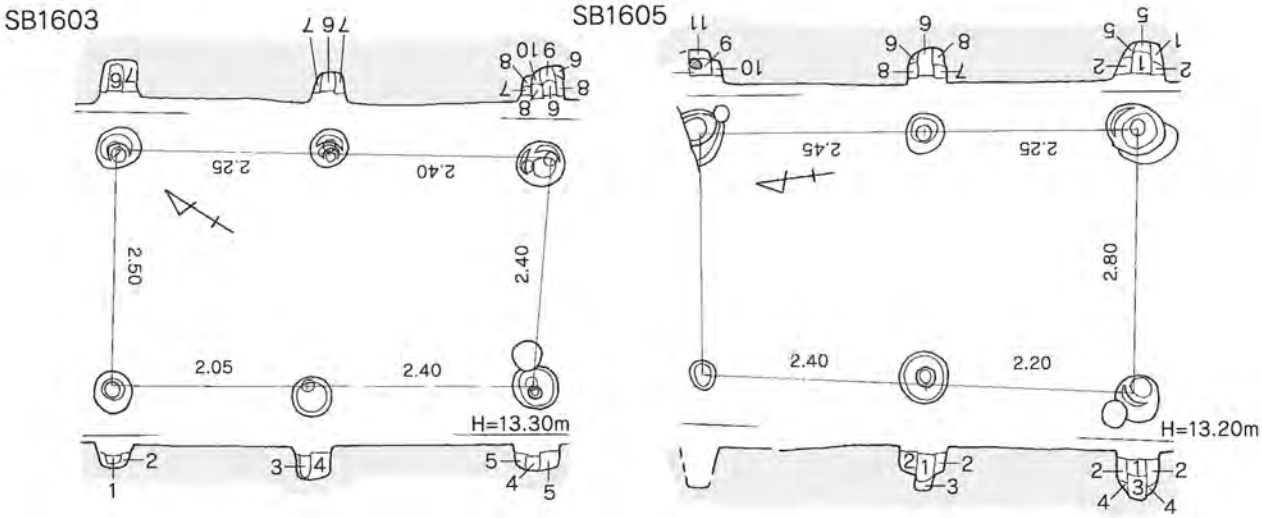
② 竪穴住居

竪穴住居としたのは3棟である。

SC1106（第５-10・11図、図版５-7-1）

第1面Ａ6区南東壁際で検出した平面形が長方形を呈す住居。一部調査区外にかかり、確認規模は長軸長3.90ｍ、短軸幅2.83ｍ、深さ0.20ｍを測る。他時期の柱穴などと重複する。埋土は黒褐色粘質土で鈍い黄褐色粘質土小ブロックを混入する。底面はほぼ水平で、北西隅と東側（SX1730）が帯状に落込む。主柱は北側東西両壁沿い1に2基のピットがあるが、確実ではない。地床炉などの焼土面も確認出来なかったが、規模・形状から住居とする。

出土遺物　弥生時代中期頃の土器や敲石、黒曜石剥片などが出土。**29～35**は弥生時代中期須玖Ⅱ式のものか。**29～32**は甕口縁部。**29・30**は鋤形口縁、**31・32**は逆L字形となる。**29**は中型甕1/7片で口径26.4㎝を測る。調整は外面粗いタテハケ目、口縁部ヨコナデ、内面はナデ。**30**は大型の甕口縁部1/8片で、口径35.6㎝を測る。頸部には1条三角突帯が付く。器壁は摩滅がひどく調整は不明であるが、口縁部には黒斑がある。**31・32**は口縁部小片。**31**は器壁が摩滅し調整は不明、**32**は口縁部ヨコナデ、内面はナデで平滑に仕上げる。**33**は広口の壺口縁部小片。器壁は摩滅がするが丹塗り。**34**は甕底部。底径7.8㎝を測る。調整はナデ。**35**は鋤形を呈す高坏口縁部小片。器表面には丹塗り痕が残る。

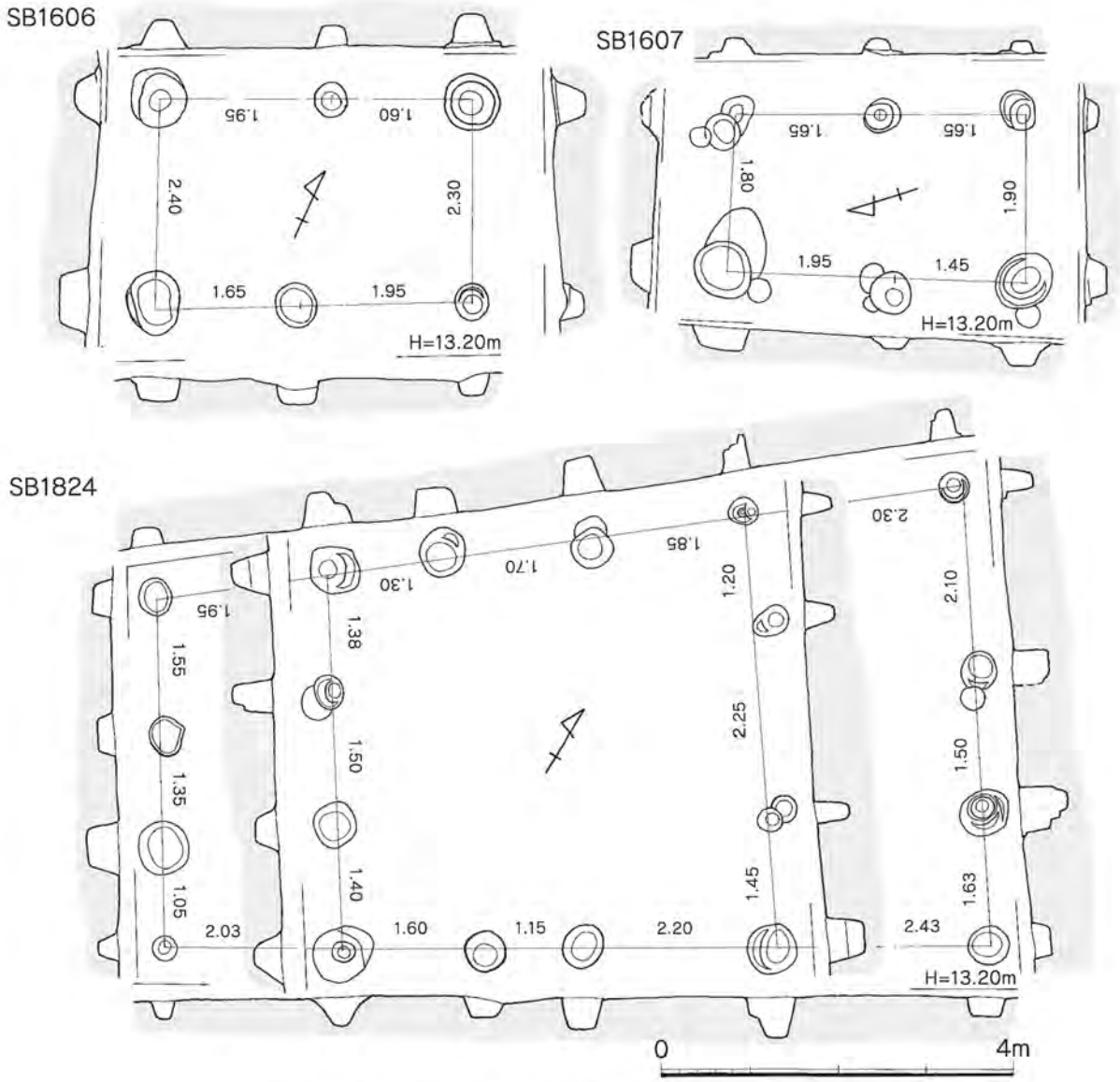


SB1603土層名称

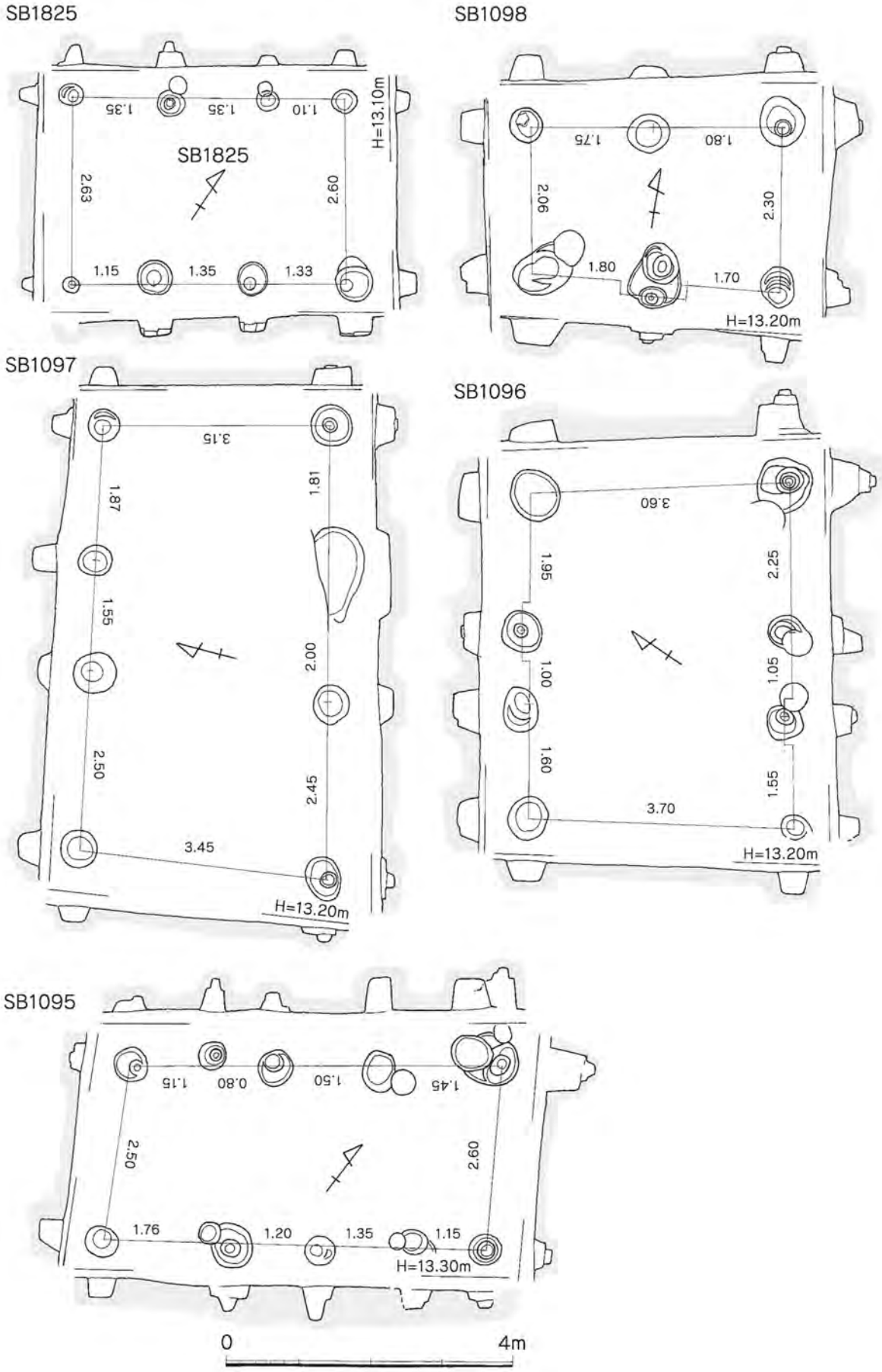
1.暗褐色粘質土
2.1に鈍い黄褐色粘土ブロック混入
3.1に黒褐色粘土と鈍い黄褐色粘質土ブロック混入
4.3より1の混入多い
5.1に黄褐色粘質土ブロック少量混入
6.黒褐色粘質土
7.6に褐色粘質土ブロック少量混入
8.7より褐色粘質土の混入多い
9.暗黄灰色粘土と鈍い黄褐色粘質土の混合
10.褐色粘質土と黒褐色粘質土の混合
11.鈍い黄褐色粘質土と黒褐色粘質土ブロック混合
12.11より黒褐色粘質土)の混入少ない

SB1605土層名称

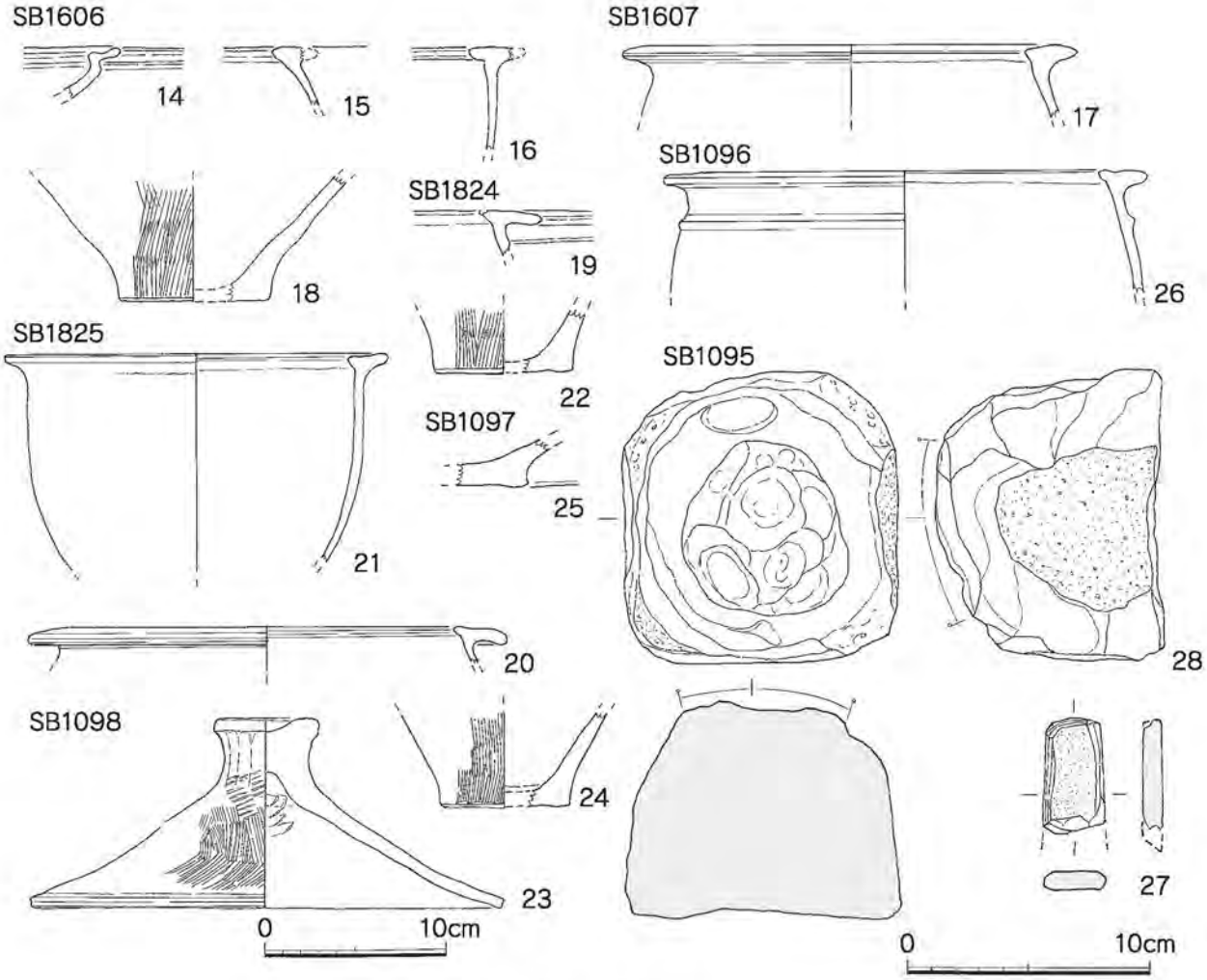
1.黒褐色粘質土少し締まらない
2.1に鈍い黄褐色粘質土ブロック混入
3.黒褐色粘質土
4.オリーブ黒色粘土
5.1に鈍い黄褐色粘質土ブロックやや多く混入
6.黒褐色粘質土に灰黄色)細砂混入
7.灰黄色細砂に黒褐色粘質土混入
8.黒褐色粘質土と灰黄色細砂の混合
9.黒褐色粘質土
10.9より暗く下に11を含む
11.オリーブ黒色粘土



第5-7図　SB1603・1605～1607・1824（1/80）



第5-8図　SB1825・1095～1098（1/80）



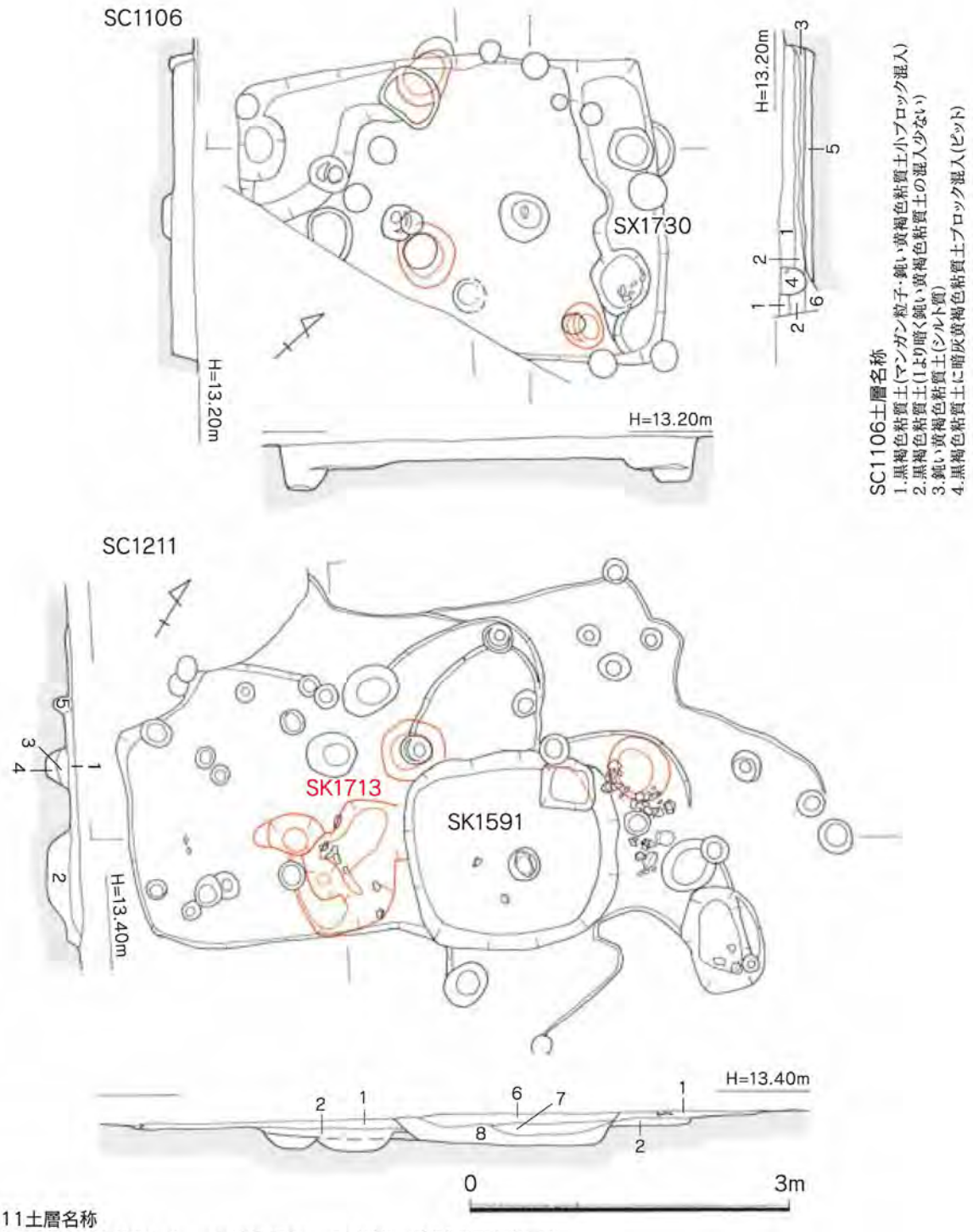
第5-9図　各建物出土遺物（1/3、1/4）

36は椀形の鉢1/4片。口径16.3cmを測る。器壁は摩滅が進むが丹塗り痕がわずかに残る。**41**は敲石。全長10.6cm、最大幅9.7cm、厚さ1.5cmを測る。砂岩の扁平な石材の上面には敲打調整痕と擦痕が残り、下端部と右側面は使用面で、表面はつぶれている。**42**は円板の未製品か。2/3片ほどで直径5.5cm、厚さ1.2cmを測る。上下両面は丁寧な研磨、側面も研磨調整であるが敲打調整痕が残る。石材は蛇紋岩か。**43**は円形の紡錘車1/4片。復元径7cmほどである。表面は丁寧な研磨仕上げ。石材は蛇紋岩か。**31**・**34**は床面、**43**は下層出土、他は上層出土。図示していないがSX1730から円筒の支脚底部出土。

SC1211（第5-10・11図、図版5-7-2・3、5-16）

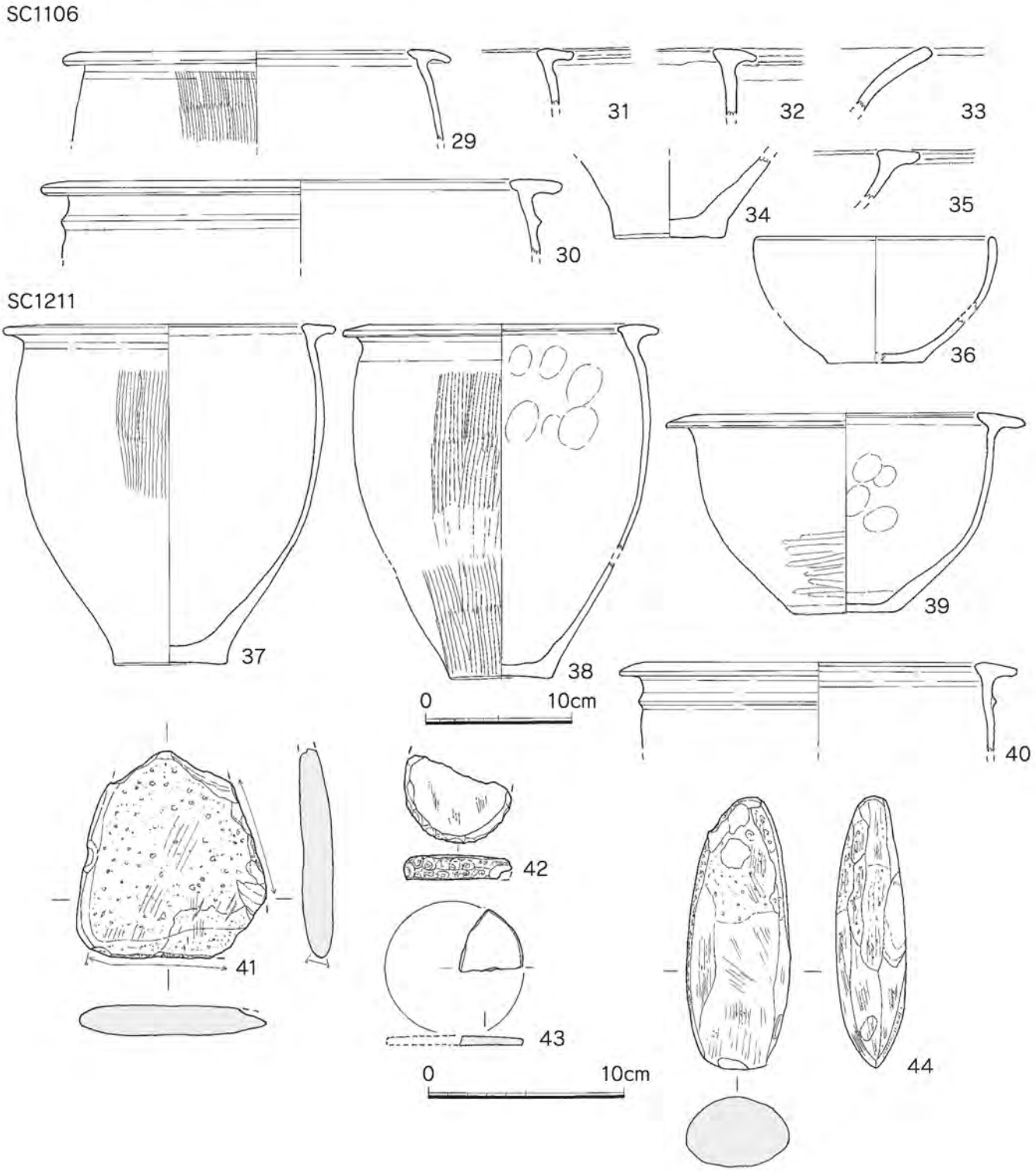
第1面南側A・B6・7区で検出した平面形が長方形を呈すと思われる住居。残りは悪く、SK1591など他遺構と切合いがある。地床炉などの焼土面なく、主柱穴は明確でないが、東側床面に土器がまとまって出土し、またSC1106と主軸方向が近いので、住居跡の可能性があるとして報告する。規模は長軸長5.25m、短軸幅2.95mを測り、深さは最深でも8cmと浅い。埋土は黒褐色土で鈍い黄褐色粘質土ブロックを混入する。南壁やや西よりに屋内土坑と思われるSK1713があった。

出土遺物　いずれも東側床面一括出土。**37**・**38**は中型の甕で弥生時代中期須玖Ⅱ式のもの。いずれも底部と口縁から胴部片で復元した。口径は22.8cm・21.6cm、器高約23.2cm・約24.2cmを測る。調整は、**37**は胴部外面ナデで上半粗いタテハケ目、内面はナデ。口縁部ヨコナデ。**38**は胴部外面粗いタテハケ目、内面はナデで上半はハケ目後ナデ消し、口縁部ヨコナデ。**39**は鋤形口縁の鉢1/2片。口径



第5-10図　SC1106・1211（1/60）

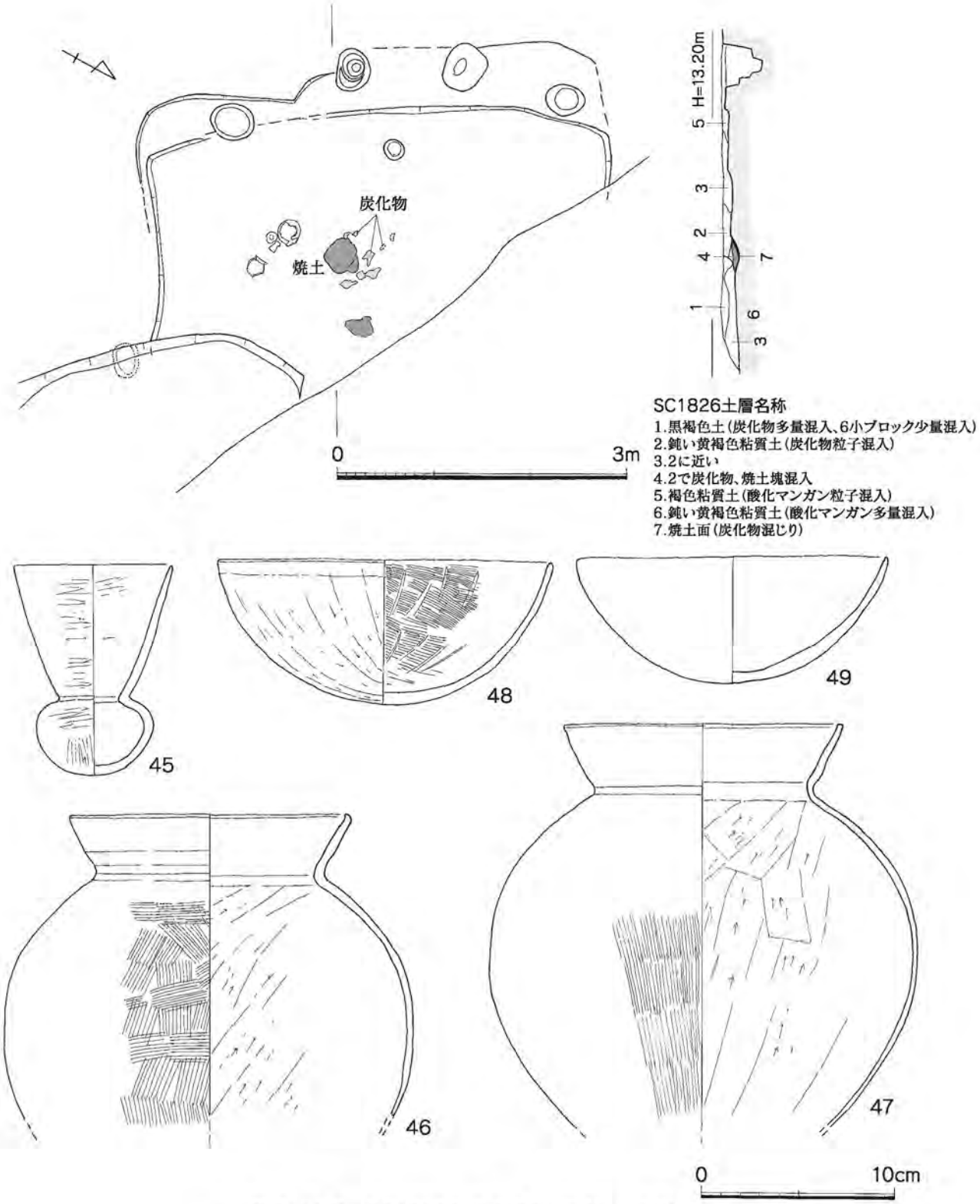
は24.6㎝、器高13.7㎝を測る。外面へラミガキで、口縁部内面まで丹塗り、内面はナデで指押さえ痕が残る。**44**は上層出土の縄文時代の乳棒状磨製石斧。長さ13.8㎝、最大幅5.4㎝を測る。研磨仕上げであるが、上半・側面は敲打調整痕が残る。使用によるのか基部と刃部は一部欠損する。石材は玄武岩。**40**は屋内土坑SK1713出土の甕口縁部1/3片。口径27.2㎝を測る。頸部に１条の突帯を巡らす。器壁は摩滅し調整は不明。



第5-11図　SC1106・1211出土遺物（1/4、1/3）

SC1826（第5-12図、図版5-7-4・5、5-16）

第2面D6区で検出した古墳時代前期の住居。重機による遺構検出で掘り過ぎた所もあり、遺構の残りは不良。確認規模は長軸長4.80m、深さ0.15mを測る。埋土は黒褐色土で炭化物を混入する。



第5-12図　SC1826と出土遺物（1/60、1/3）

床面はほぼ水平で、中央部に炉跡と思われる0.35×0.40m範囲の焼土面があり、その北側に炭化物ブロックがある。また南側には古墳時代前期の甕などの良好な土器がまとまって出土した。主柱についてはこの住居も特定出来なかった。３棟の住居とも主柱が特定できないのが特徴である。炉跡炭化物からイネの胚乳などが出土している。

出土遺物　古墳時代前期後半から末頃の土師器の甕・壺・鉢・高坏などが出土。**45**は小型丸底壺。

口縁部2/3欠く以外完存。口径8.2cm、器高11.0cmを測る。調整は外面ヘラミガキ、口縁部内面は磨きかナデ、胴部はナデ。口縁部一部黒班がある。**46・47**は甕1/3片。底部を欠損するが、口径は14.6cm・14.4cmを測る。頸部が締まり口唇部内面に段を有す形態で、器壁は薄い。調整はいずれも胴部外面ハケ目、口縁部はヨコナデ、胴部内面はヘラケズリ。**46**はケズリ後軽いナデか。いずれも胴外面ススが付着する。**46**の胎土は砂粒の混入が少なく精良。焼成は良好。布留式新段階のもの。**48・49**は鉢3/4片・2/3片。口径は17.4cm・16.2cm、器高7.6cm・6.6cmを測る。**48**の外面はケズリ上げ後ナデ、内面は細かいヨコハケ目で内底はナデ。胎土はいずれも精良、焼成も良好。

③ 溝状遺構

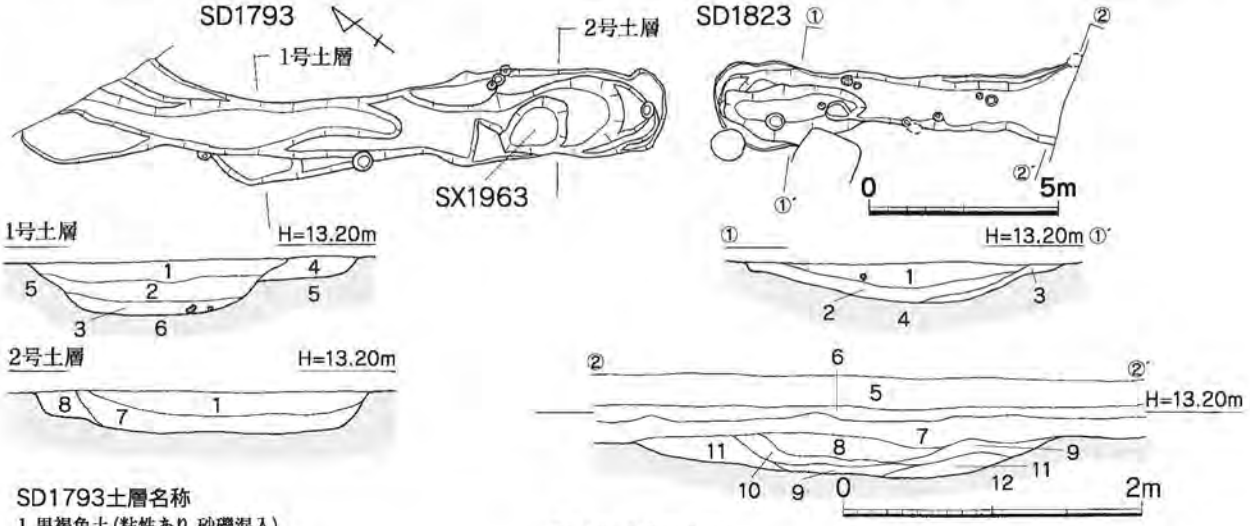
SD1587（図版5-10-1）

第2面B9区で検出した小溝。土器溜まりSX1232より下で検出。確認規模は全長3.80m、最大幅0.93m、深さ0.30mを測る。溝断面形は逆台形で、土層観察では第1面から掘り込む。埋土は灰黄色粘質土で黒褐色粘質土小ブロック多く混入。**出土遺物**は弥生時代中期の土器が少量出土したが、細片で図示出来るものはなかった。

SD1793（第5-13・14図、図版5-8-1～4）

第2面東側で検出した南東から北西にほぼ直線に延びる溝。北側は段落ちで消滅し、南側はB5区で立ち上がる。1.4m間を開けて溝SD1823となる。確認長は17m、幅1.5～2.3m、深さ0.30～0.35m程で比較的浅い。溝断面は逆台形を呈す。西側と東側に場所によってテラス状の高まりがある。土層断面で切り合いが認められるので、遺構の重複があるのかも知れない。埋土は上層が黒褐色土（粘性）、下層が暗褐色または上層に地山の灰黄色細砂を混入する。南側にSX1963とした土坑状の落込みがあり、その上面で廃棄された土器群があった。

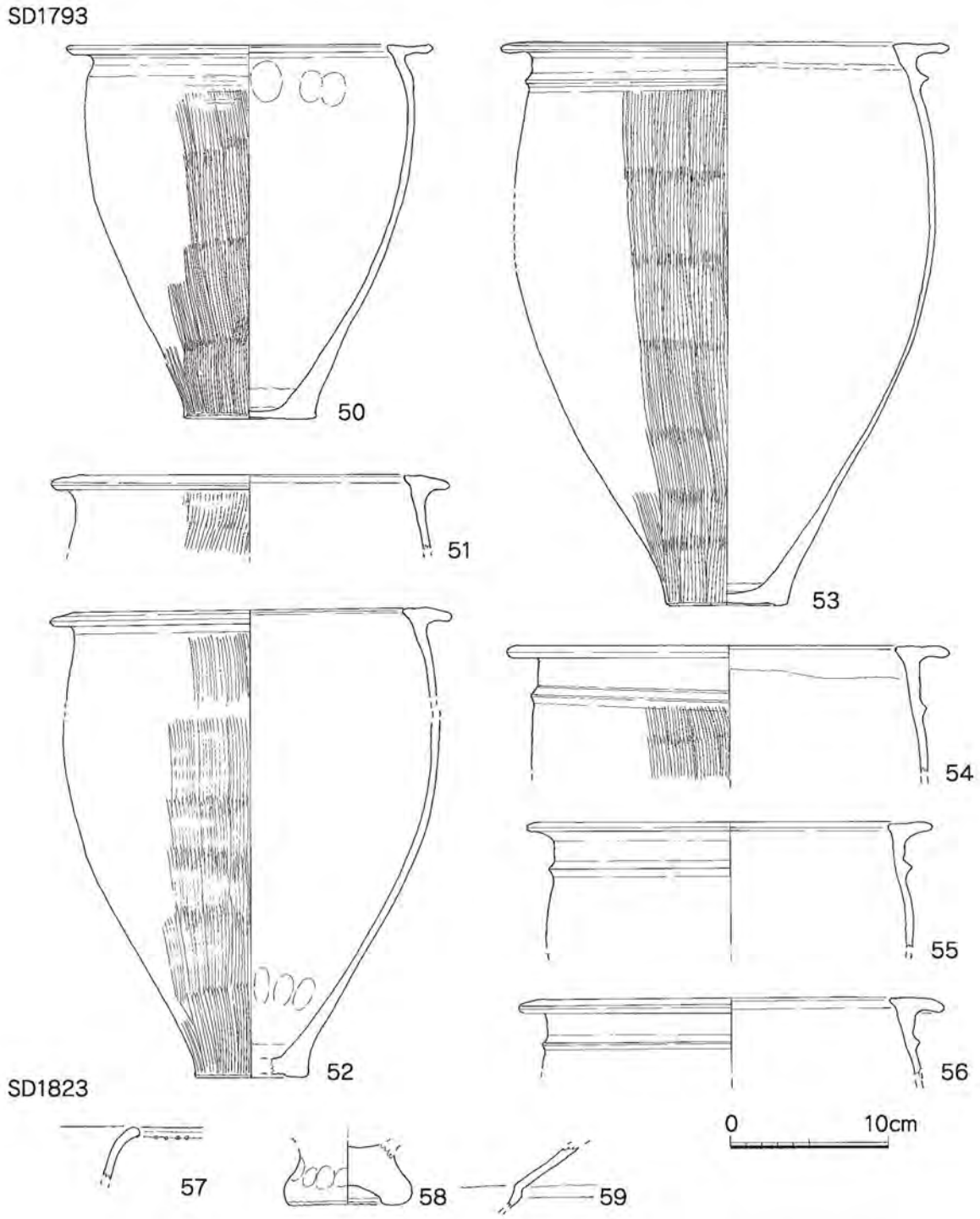
出土遺物　弥生時代中期須玖Ⅰ～Ⅱ式(古)期頃の式土器、黒曜石剥片などが出土。図化出来た大半の遺物が土器群から出土したもの。**50～56**は甕。いずれも鋤形口縁である。突帯がない**50～52**と三



SD1793土層名称
1.黒褐色土(粘性あり、砂礫混入)
2.暗褐色土(粘性あり)
3.鈍い黄褐色砂(砂礫多く含む)
4.2に鈍い黄褐色砂混入
5.鈍い黄褐色細砂
6.灰黄色細砂
7.1に6地山粘質砂少量混入
8.2に6微粒子少量混入

SD1823土層名称
1.黒褐色粘質土(粗砂礫わずかに混入)
2.1に灰黄褐色細砂ブロック少量混入
3.4に1ブロック混入
4.黄褐色粘質土(粒子が細かくシルト質)
5.暗灰黄色土(耕作土)
6.黄褐色土(酸化鉄分層 床土)
7.黒褐色土(やや砂質、粘性あり)
8.黒褐色粘質土(7より暗い)
9.褐色砂質土(7小ブロック少量混入)
10.暗褐色砂質土(細砂質、粘性)
11.暗灰黄色砂礫(5ブロック混入)
12.暗灰黄色砂礫

第5-13図　SD1793・1823土層（1/200、1/50）



第5-14図　SD1793・1823出土遺物（1/4）

角突帯が1条付くものに分けられる。**50**は破片から復元したもの。口径23.0cm、器高23.5cmを測る。調整は外面が細かいタテハケ目、口縁部ヨコナデ、内面はナデ。胎土は1mm前後砂粒少量混入。焼成良好。**51**は厚手の口縁部片。口径25.0cmを測る。調整は外面粗いタテハケ目、口縁ヨコナデ、内面はナデ。**52**は1/3片で図上復元。口径25.2cm、器高29.2cmを測る。底部は上げ底。調整は外面タテハケ目、内面は平滑なナデ。**53**は口縁から底部破片で復元。口縁下に突帯が巡る。口径28.0cm、器高35.4cmを測る。調整は胴部外面タテハケ目、内面ナデで粘土帯痕跡の凹凸がある。口縁部ヨコナデ。**54**は口縁部2/3片。口径27.6cmを測る。**55**は1/4片で口径25.4cmを測る。器壁は摩滅があるがナデ。

この他、弥生時代前期有軸羽状文の破片がある。**56**は落込みSX1963出土。中期須玖Ⅱ式の甕口縁部1/4片。口径26.8cmを測る。調整はナデ、口縁部ヨコナデ。

SD1823（第５-13・14図、図版５-8-1・2・5）

第２面で検出したSD1793の南側に1.4m間をおいて続く溝。確認長10m、幅2.1mを測る。深さは0.3m前後で浅い。溝断面は浅いV字形状を呈す。埋土はSD1793とほぼ同じである。図示した遺物はSD1793より古いがほぼ同時期のものと思われる。両溝は直線的で、間の空間は入口と思われる。集落を区画する溝の可能性が強い。

出土遺物　弥生時代前期から中期の土器、黒曜石剥片、縄文土器片が少量出土。図化したものを図示する。**57**は前期後半頃の甕口縁部。口唇部にヘラによる刻目が付く。調整はナデ。**58**は中期初頭頃の厚手の上げ底の底部。ナデ調整で指押さえ痕が残る。**59**は縄文時代晩期の精製浅鉢片。摩滅がすすむが調整はヘラミガキかナデ。3点はSD1793より古いが、**57**・**58**は溝の開始期を示すものかも知れない。

④　土坑

SK1112（第５-15・16図、図版５-10-2、５-16）

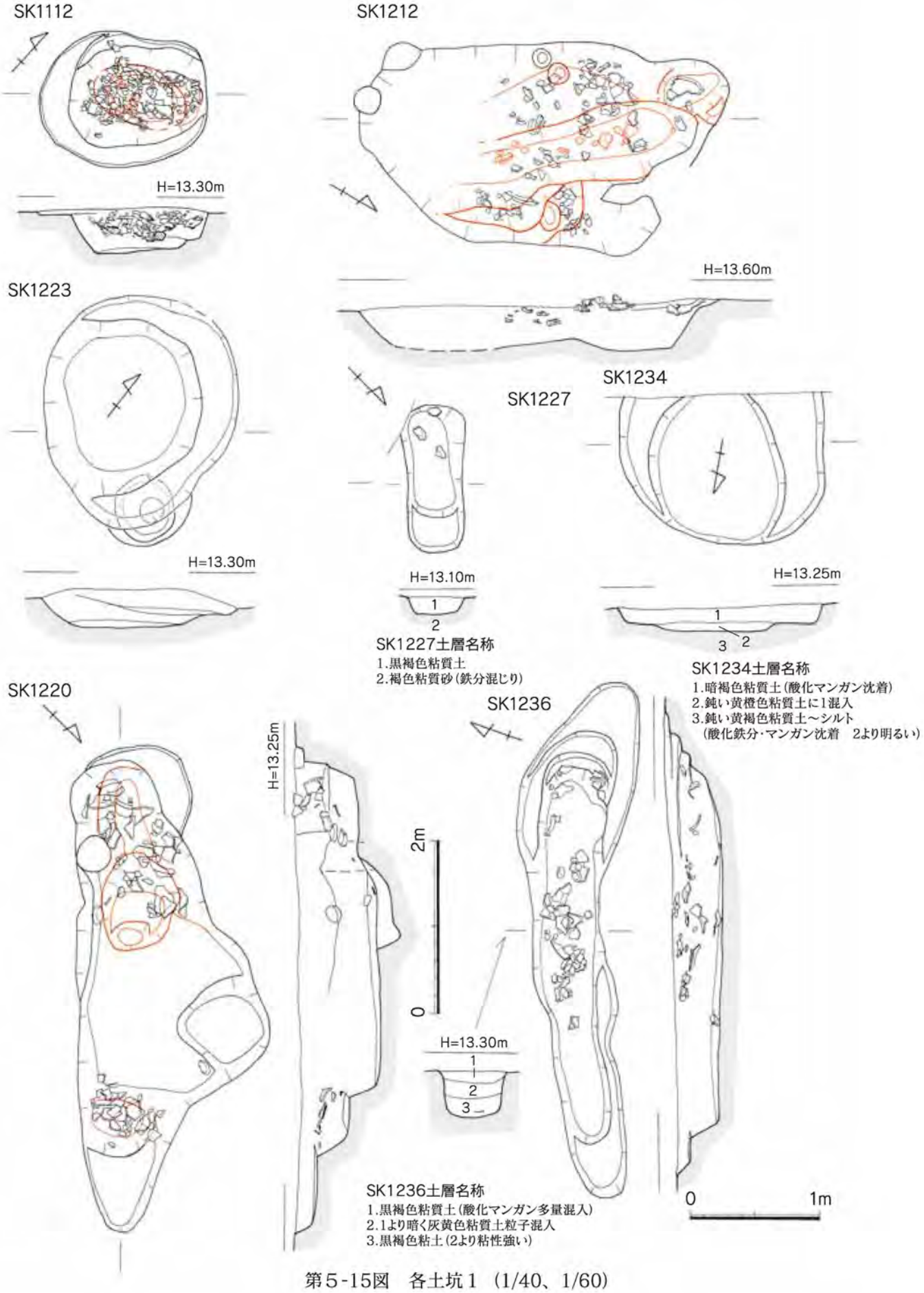
第1面Ｂ6区で検出した平面形状が楕円形を呈す土坑。上面規模は長軸長1.29m、短軸幅1.05m、深さ0.35mを測る。三方にテラスを持ち、テラス内側では長軸長1.07m、短軸幅0.78m、深さ0.31mを測る。廃棄土坑で大量の土器片が上中層を中心にぎっしり入っていた。土器群下層には炭化物・焼土があった。埋土は黒褐色土である。

出土遺物　弥生時代中期須玖Ⅱ式土器が多量に出土。**60**は甕か無頸の壺。口縁部1/8片で口径15.6cmを測る。器壁は摩滅するが、外面丹塗り痕が残る。**61**～**67**は甕。**61**は口縁部1/2片で口径22.5cmを測る。調整は外面ハケ目、内面ナデで粘土帯接合痕が残る。**62**～**65**は口縁部片で頸部に1条の三角突帯が巡る。**62**は1/3片、**63**は2/3片、**64**は1/8片、**65**は1/5片。口径は、**62**・**63**は27.2cm、**64**は30.6cm、**65**は28.2cmを測る。調整は外面ハケ目、口縁部内面はヨコナデ、内面はナデ。**66**・**67**は胴部から底部。底径7.8cm・6.6cm、残存高21.3cm・21.4cmを測る。調整は外面ハケ目、内面ナデ、下半に指押え痕残り、**66**・**67**の底は**66**が黒化し、**67**はススが付着する。**68**は鋤形口縁の高坏口縁部1/6片。口径24.2cmを測る。外面は二次的に火を受け荒れが著しい。丹塗り痕が残る。

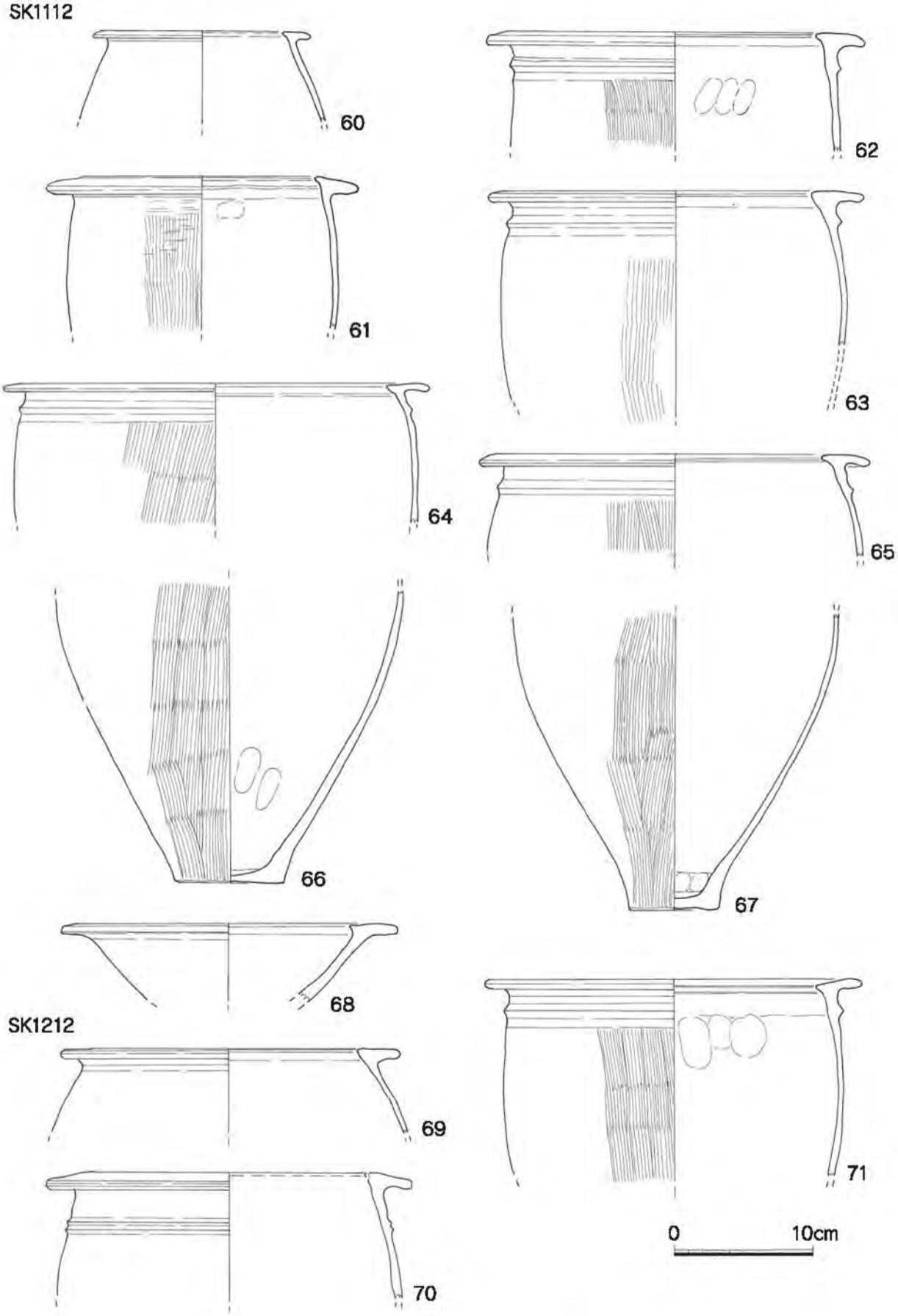
SK1212（第５-15～17図、図版５-10-3～5）

第1面Ｂ7区で検出した平面形状が不定形の大型土坑。規模は長軸長2.72m、短軸幅1.56m、深さ0.4mを測る。廃棄土坑で北側上層から大量の土器片が出土した。埋土は上層が黒褐色粘質土、下層が黒色粘質土で炭化物を含む。底面は凹凸があり、複数遺構の重複の可能性もある。

出土遺物　多量の弥生時代中期土器片や磨製石斧、黒曜石剥片が1点出土。**69**～**77**は甕。**69**は内傾する口縁部1/6片。口径24.4cmを測る。器壁は摩滅し調整は外面ヘラミガキ、内面はナデ。**70**～**75**は頸部に突帯が1条巡る。**70**は1/3片で口径26.4cmを測る。頸部突帯は断面M形を呈す。器壁はやや摩滅するが調整はナデ。**71**～**75**は三角突帯が巡る。**71**は1/2片で口径27.2cmを測る。突帯は口縁直下に巡る。**72**は1/5片で口径37.6cmを測る。**73**・**75**は口縁部小片。調整は外面ハケ目、口縁部はヨコナデ、胴部内面はナデ。**71**は内面に指押え痕、**73**は内面工具痕が残る。**76**・**77**は底部。底径は7.6cm・7.8cmを測る。調整は**76**が外面タテハケ目、内面はナデ、**77**は内外面ナデで、外面には黒斑がある。**78**・**79**は蓋。**78**は口縁部1/3片で口径27.0cmを測る。**79**は摘み部が縊れた天井部。調整は外面タテハケ目、内面はナデ。**79**の内面に指押え痕が残る。**80**は器台口縁部1/3片、口径10.0cmを測る。調整は外面タテハケ目、内面はナデでシボリ痕が残る。**81**は支脚1/3片。底径10.2cmを測る。調整はナデ



第5-15図　各土坑1（1/40、1/60）



第5-16図　SK1112・1212出土遺物（1/4）

で外面に指押え痕残る。胎土は砂粒を多く混入し重い。

SK1217（第5-15・17図）

第1面B7区で検出した浅い土坑。複数の遺構が重複し形状は不定形を呈す。

出土遺物　弥生時代中期須玖II式頃の土器や黒曜石剥片などが出土。**82**～**89**は甕の口縁部。**82**は1/4片、**83**は1/6片、**84**は1/4片、**85**は1/6片、**86**は全周、**87**は1/4片。口径はそれぞれ22.0cm・24.8cm・24.0cm・24.8cm・25.6cm・26.2cmを測る。**87**は頸部に1条の突帯が巡る。**88**・**89**は甕の口縁部小片。**90**は甕胴底部1/3片。底径7.8cmを測る。それぞれの調整は外面ハケ目、口縁部ヨコナデ、内面ナデである。**90**の外面は内外面二次的に火を受け、内面ススが付着する。**91**は丹塗り壺の底部。底径7.0cmを測る。器壁はやや摩滅するが外面ヘラミガキで丹塗り。内面指押さえ痕が残る。

SK1220（第5-15・18図、図版5-10-6）

第1面C6・7区にかかる柱穴と重複し、平面が不定形を呈す土坑。規模は長軸長5.60m、短軸幅2.20m、深さ0.96mを測る。壁は比較的直立し、底面には古い柱穴を確認した。埋土は黒褐色粘質土が主体。東西両端上層部で土器が流れ込んだ状況で出土した。廃棄土坑か。

出土遺物　弥生時代中期須玖I～II式頃の土器と黒曜石剥片などが出土。**92**～**94**は壺。**92**は口縁部1/4片。口径10.0cmを測る。**93**は無頸壺1/2片。口径18.6cmを測る。口縁部には2カ所径0.4cmの紐孔がある。**94**は広口壺1/4片で口径32.0cmを測る。口端部は凹線が巡る。いずれも外面丹塗りでヘラミガキ、内面はナデ。**94**は頸部にタテのヘラ暗文が入る。**93**の胎土は精良。**95**～**98**は鋤形口縁部の甕。**95**は全周でやや歪む。**96**は1/4片、**97**は1/3片。**98**は小片。口径は23.7cm・26.4cm・27.2cmを測る。調整は**95**・**96**が胴部外面タテハケ目、口縁部ヨコナデ、内面はナデ。胎土はいずれも粗砂多く混入。**99**は高坏の坏部1/5片。口径19.6cmを測る。器壁の調整はナデ。**100**は蓋頂部片。径5.5cmを測る。外面一部黒斑があり、内面しぼり痕残る。**101**は器台底部。底径9.6cmを測る。器壁は摩滅し調整不明。**101**以外上層出土。

SK1223（第5-15図）

第1面C7区で検出した楕円形状の土坑。規模は長軸長1.80m、短軸幅1.48m、深さ0.20mを測る。底面は緩やかに窪む。埋土は黒褐色土。

出土遺物　弥生土器が出土したが、いずれも細片で図示出来ない。

SK1227（第5-15・18図）

第1面A8区で検出した平面長方形を呈す土坑。規模は長軸長1.14m、短軸幅0.40m、深さ0.15mを測る。底面北東部が一段高い。埋土は黒褐色粘質土で西側に礫石が出土。副葬品などはないが、形態から土坑墓の可能性がある。弥生時代中期後半か。

出土遺物　弥生土器と黒曜石剥片1が出土。図示するものは1点。**102**は鋤形を呈す甕口縁部小片。

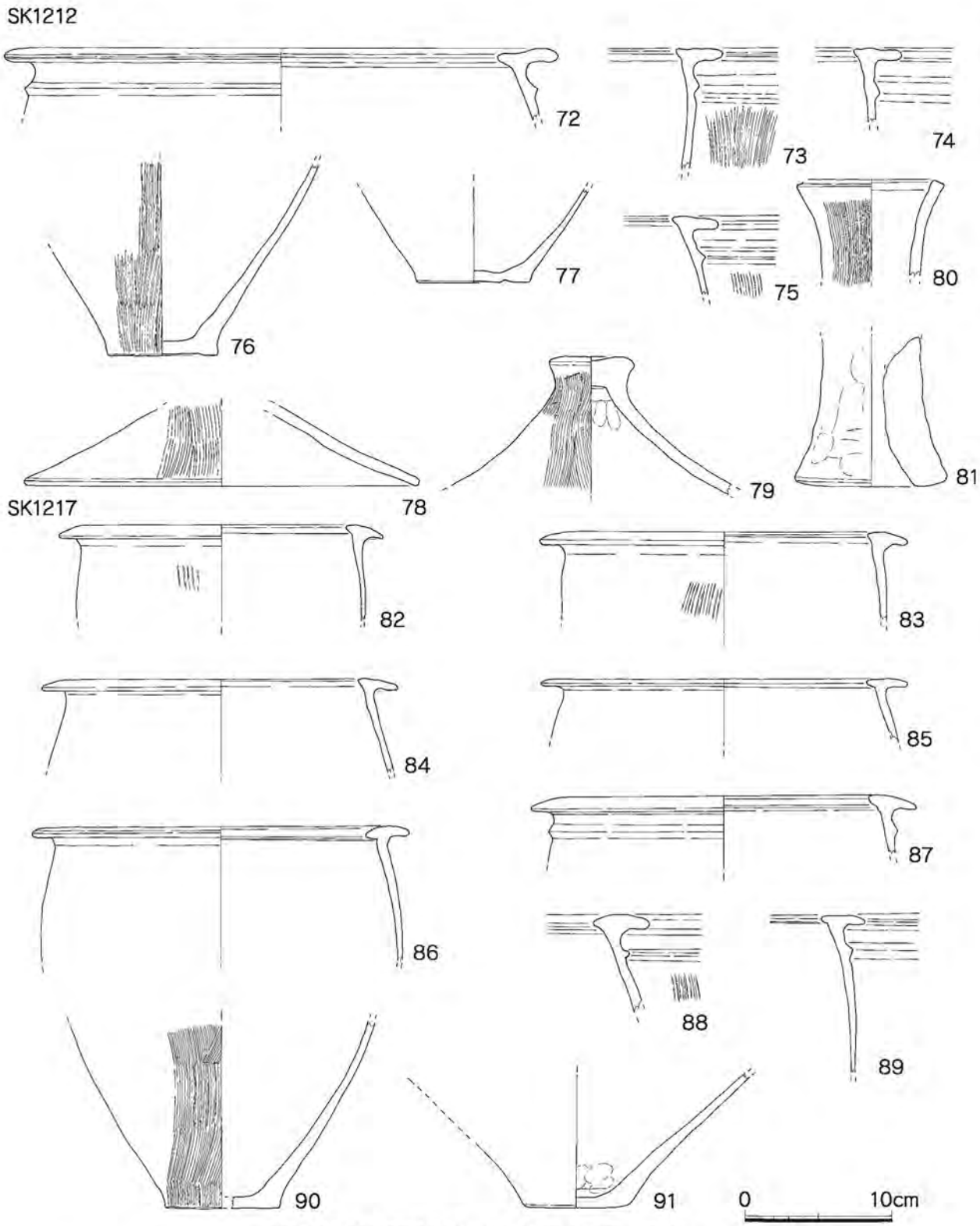
SK1234（第5-15図）

第1面C9区で検出した平面不整円形を呈す土坑。南側は試掘トレンチで消滅。規模は長軸長1.57m、短軸幅1.15m、深さ0.18mを測る。底面は楕円形状に一段下がる。埋土は暗褐色粘質土で、下層は鈍い黄褐色粘質土が混じる。

出土遺物　弥生土器が少量出土したが、細片で図示出来ない。

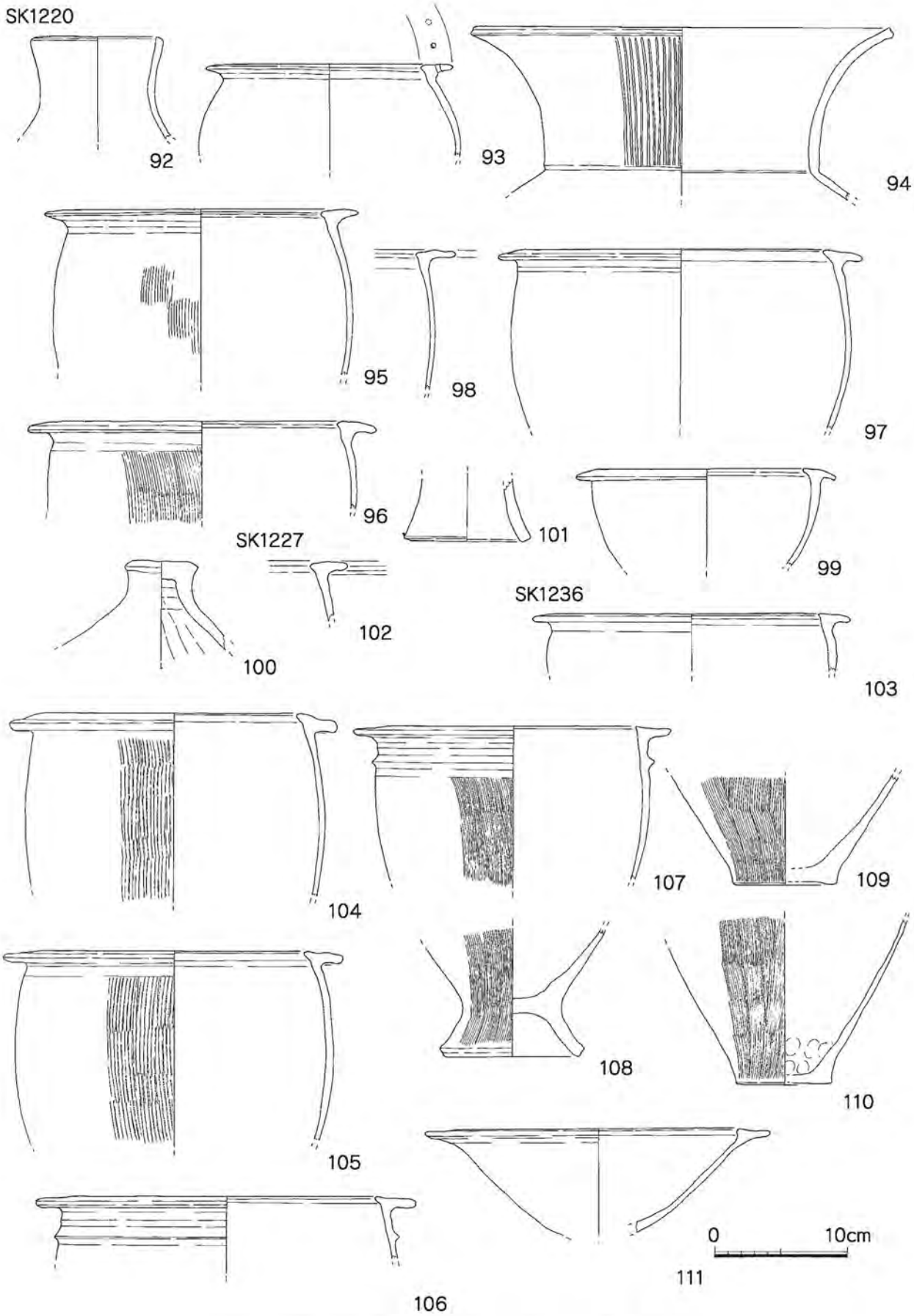
SK1236（第5-15・18図、図版5-10-7）

第1面D9区で検出した平面形が細長い溝状を呈す土坑。規模は長軸長3.67m、短軸幅0.55m、深さ0.38mを測る。底面は東西から段状に深くなる。東側は浅い落ち込み状の遺構を下げた段階で全体を検出した。壁面はほぼ直立する。埋土は黒褐色粘質土が主体で下ほど粘性が強い。中央部から東側で土器が多く出土し、廃棄土坑と思われる。



第5-17図　SK1212・1217出土遺物（1/4）

出土遺物　弥生時代中期須玖Ⅰ式頃の土器が出土。**103**～**107**は甕口縁部。口縁はやや下がるか水平である。**103**は1/6片、**104**はほぼ全周、**105**は1/4片、**106**は1/6片、**107**は1/2片。口径はそれぞれ24.0㎝・24.6㎝・25.6㎝・28.6㎝・24.0㎝を測る。**106**・**107**は頸部に1条の三角突帯を巡らし、**106**の口縁部は黒ずみ、**107**は口縁部にススが付着。調整は胴部外面タテハケ目、口縁部ヨコナデ、内面ナデ。**108**は脚台で底径10.6㎝を測る。**107**と同一個体と思われる。調整は外面細かいタテハケ目で、内底にはススが付着する。**109**・**110**は甕底部、**109**は1/2片。底径7.8㎝・7.2㎝を測る。調整は外面タテハケ目で、**109**は粗く、**110**は細かい。内面はナデで黒ずむが、**110**は指押え痕が残る。**111**は高坏坏部1/2片。口径26.0㎝を測る。器壁は摩滅するがナデ調整か。口縁部一部に黒斑がある。



第5-18図　SK1220・1227・1236出土遺物（1/4）

SK1255出土遺物（第５-21・24図）

第1面Ｂ6区で検出した平面形が長方形状の土坑。**112**は鋤形口縁甕の小片。**151**・**152**は磨石。**151**は不整円形の扁平な形態。下端に使用擦痕が残る。長さ9.6㎝、幅8.7㎝、厚さ5.1㎝を測る。**152**は卵形の磨石。8.1×7.0㎝、厚さ5.3㎝を測る。全面使用で摩滅し滑らか。石材は**151**は角閃石、**152**は不明。

SK1315出土遺物（第５-21図）

第1面Ｂ6区で検出した平面形が不整楕円形状の土坑。**113**・**114**は須玖Ⅰ式期頃の甕口縁部細片。

SK1334（第５-19・21図）

第1面Ａ6区で検出した平面形が楕円形状の土坑。規模は長軸長1.02ｍ、短軸幅0.72ｍ、深さ0.46ｍを測る。埋土は黒褐色土である。

出土遺物　弥生時代中期頃の土器、黒曜石剥片などが出土。**115**は甕口縁部。口縁は内傾し、調整はヨコナデ。**116**は甕底部。外面粗いタテハケ目。**117**は壺底部1/3片。底径6.2㎝を測る。

SK1363（第５-19・21・24図、図版５-11-1）

第1面Ｃ6区で検出した平面形が不整楕円形状の土坑。数基のピットと重複する。規模は長軸長2.05ｍ以上、短軸幅0.96ｍ、深さ0.15ｍを測る。埋土は黒褐色粘質土で暗灰黄色砂質土混入する。床面より浮いた面で土器や炭化物が出土。

出土遺物　弥生時代前期末頃の土器が出土。**118**・**119**は壺底部。**118**は底径9.2㎝を測る。器壁は火を受けて赤変し、剥落が著しい。内面ススが付着する。**119**は胴部との境に段が付く底部。底径は10.4㎝を測る。胴部外面はハケ目後ヘラミガキ、内面はナデで黒ずむ。**153**は扁平片刃石斧片。残存長6.3㎝、幅2.2㎝、厚さ1.1㎝を測る。研磨仕上げである。石材は頁岩。

SK1475出土遺物（第５-21図）

第1面Ｂ7区で検出した平面形が不整方形状の土坑。埋土は暗褐色粘質土。**120**は須玖Ⅱ式の甕口縁部1/6片。口径24.6㎝を測る。胴部外面はタテハケ目、内面はナデ。

SK1591（第５-19・21・24図）

第1面Ａ6区で検出したSC1211を切る、平面形が方形を呈す土坑。規模は長軸長2.00ｍ、短軸幅1.87ｍ、深さ0.33ｍを測る。底面はほぼ水平を呈す。埋土は黒褐色粘質土が主体である。

出土遺物　弥生時代中期須玖Ⅱ式期の土器と敲石が出土。**121**～**123**は甕口縁部。**121**は鋤形の甕口縁部1/5片。口径23.8㎝を測る。調整は器壁はやや摩滅するが、口縁部ヨコナデ。**122**は突帯が付く。**123**は内傾する口縁部小片。**124**は高坏坏部1/2片。口径26.2㎝を測る。器壁は摩滅するが、赤色顔料が残る。内面はヘラミガキでススが付着。**125**は器台底部。底径9.3㎝を測る。**154**は球形の石弾か敲石。6.6×5.7㎝を測る。粗割の石材表面に敲打痕が残る。石材は玄武岩。**123**・**124**は底面出土。

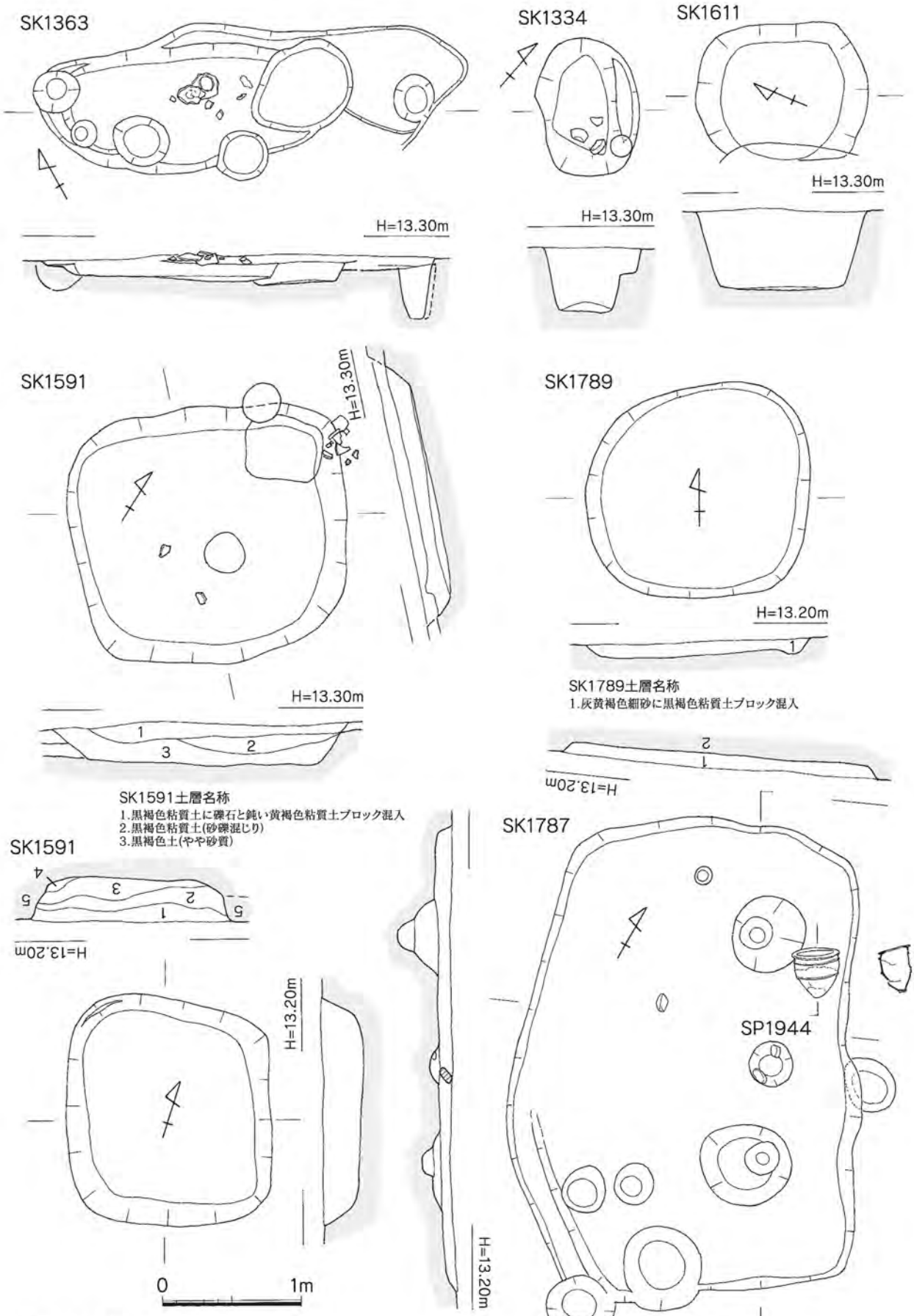
SK1611（第５-19・21図、図版５-14-5）

第1面Ｂ5区で検出した平面形が不整楕円形を呈す土坑。SE1111に切られる。規模は長軸長1.23ｍ、短軸幅1ｍ以上、深さ0.63ｍを測る。埋土は黒褐色土。

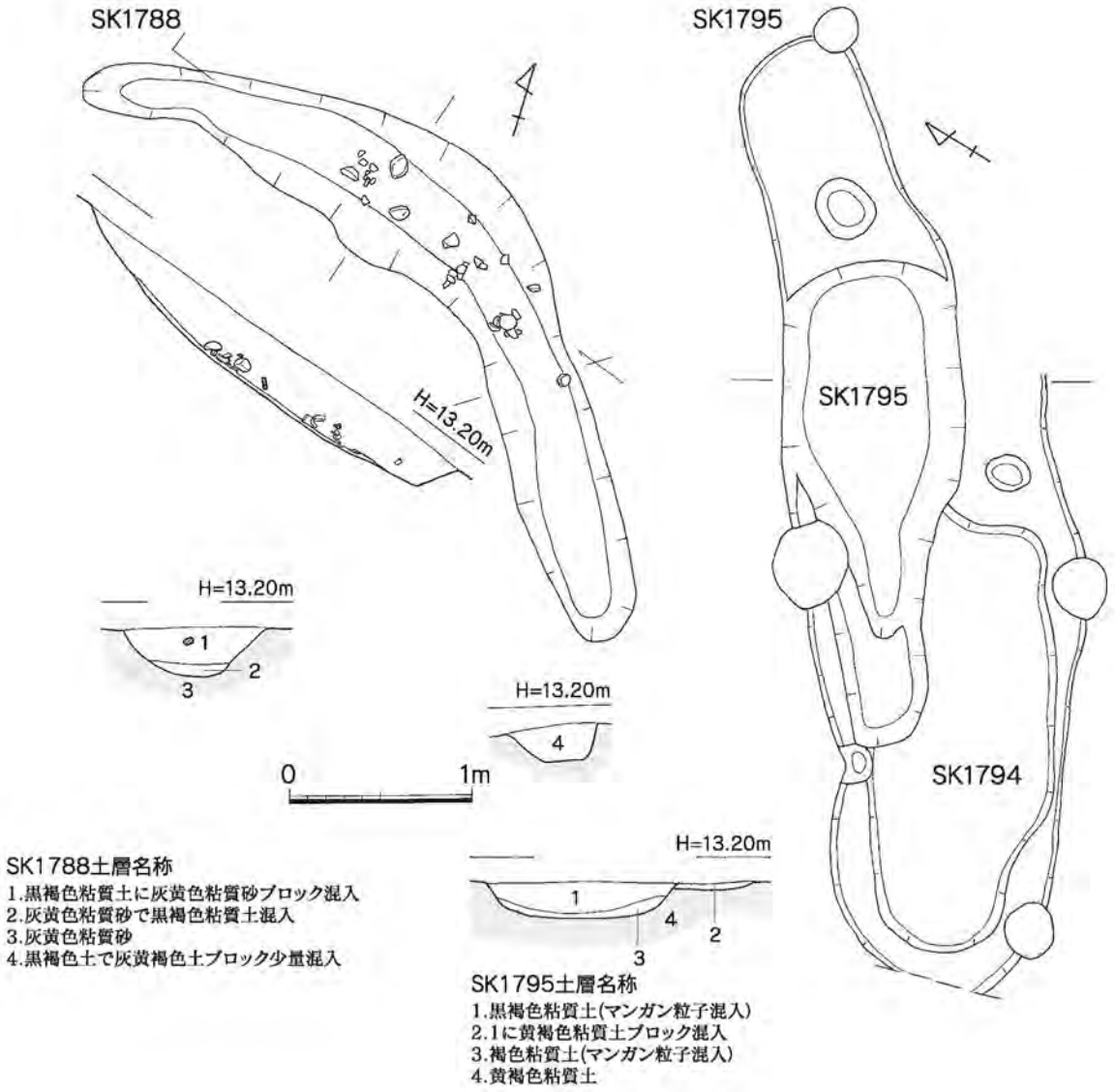
出土遺物　弥生時代から古代の土師器を少量含む。**126**は甕の口縁部小片。口縁端部にヘラによる刻目が付く。弥生時代中期初頭か。上層出土。**127**は古代の坏か皿。1/6片。口径14.2㎝。器高2.4㎝を測る。器壁は摩滅するが、内面丁寧なナデ。出土遺物から古代の可能性あり。

SK1731出土遺物（第５-21図、図版５-11-2）

第1面Ｂ6区で検出した平面形が不整円形を呈す土坑。規模は長軸長0.70ｍ、短軸幅0.63ｍ、深さ0.26ｍを測る。二段掘りである。埋土は黒褐色土で柱穴の可能性がある。上面で土器が出土。**128**・



第5-19図　各土坑2（1/40）



第5-20図　SK1788・1795（1/40）

129は甕口縁部。**128**は1/6片。口径25.6cmを測る。調整はいずれも外面タテハケ目、口縁部ヨコナデ、内面ナデ。**130**は高坏脚部。外面タテハケ目、内面はナデでシボリ痕残る。**131**は鉢口縁部1/3片で、口径16.0cmを測る。内外面丹塗りでヘラミガキ。

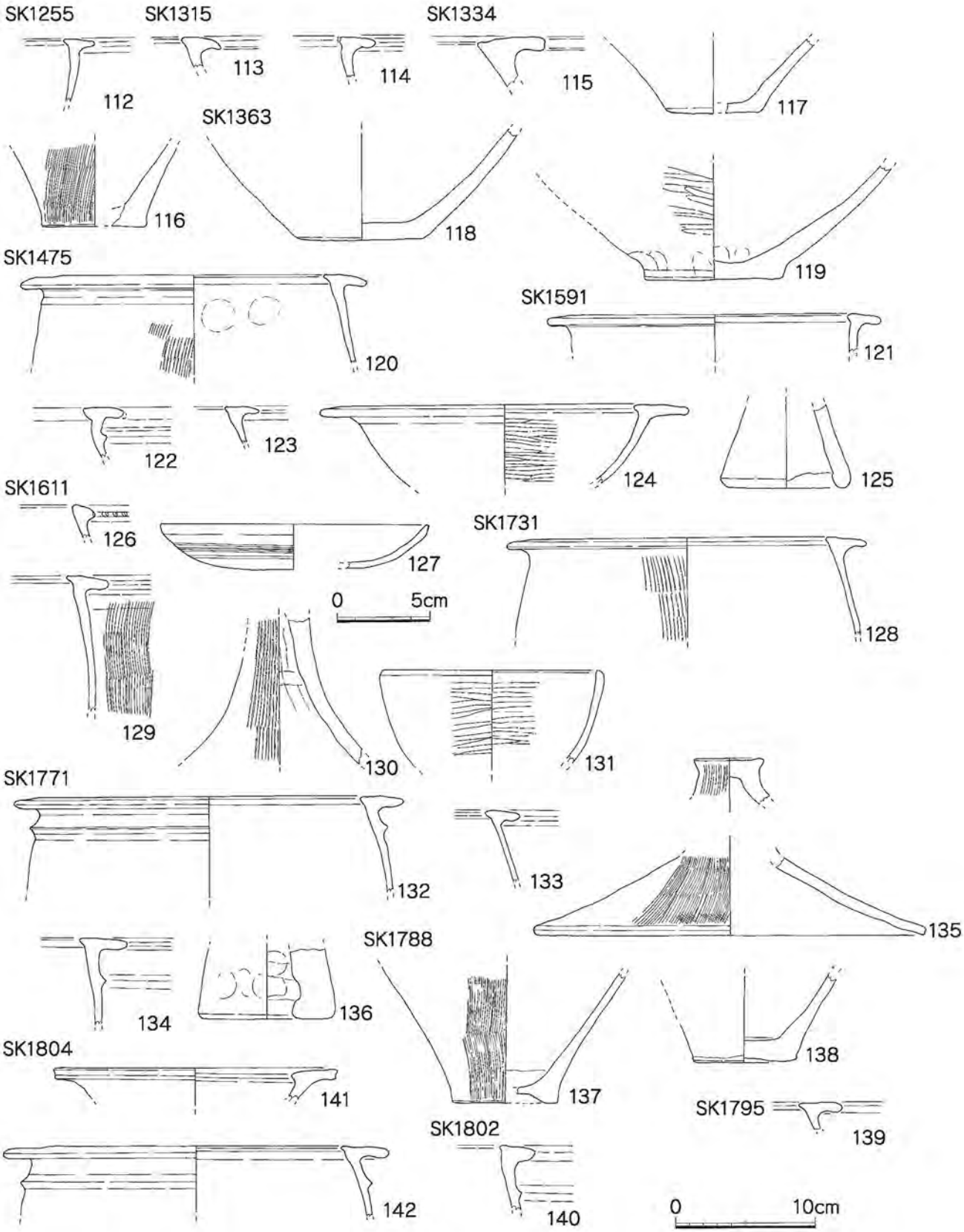
SK1771（第5-21図）

第1面B7区で検出したSK1212に切られる平面形状が不定形を呈す土坑。規模は長軸長1.35m、短軸幅1.00m、深さ0.27mを測る。埋土は黒褐色粘質土。底面で小ピット2基確認。

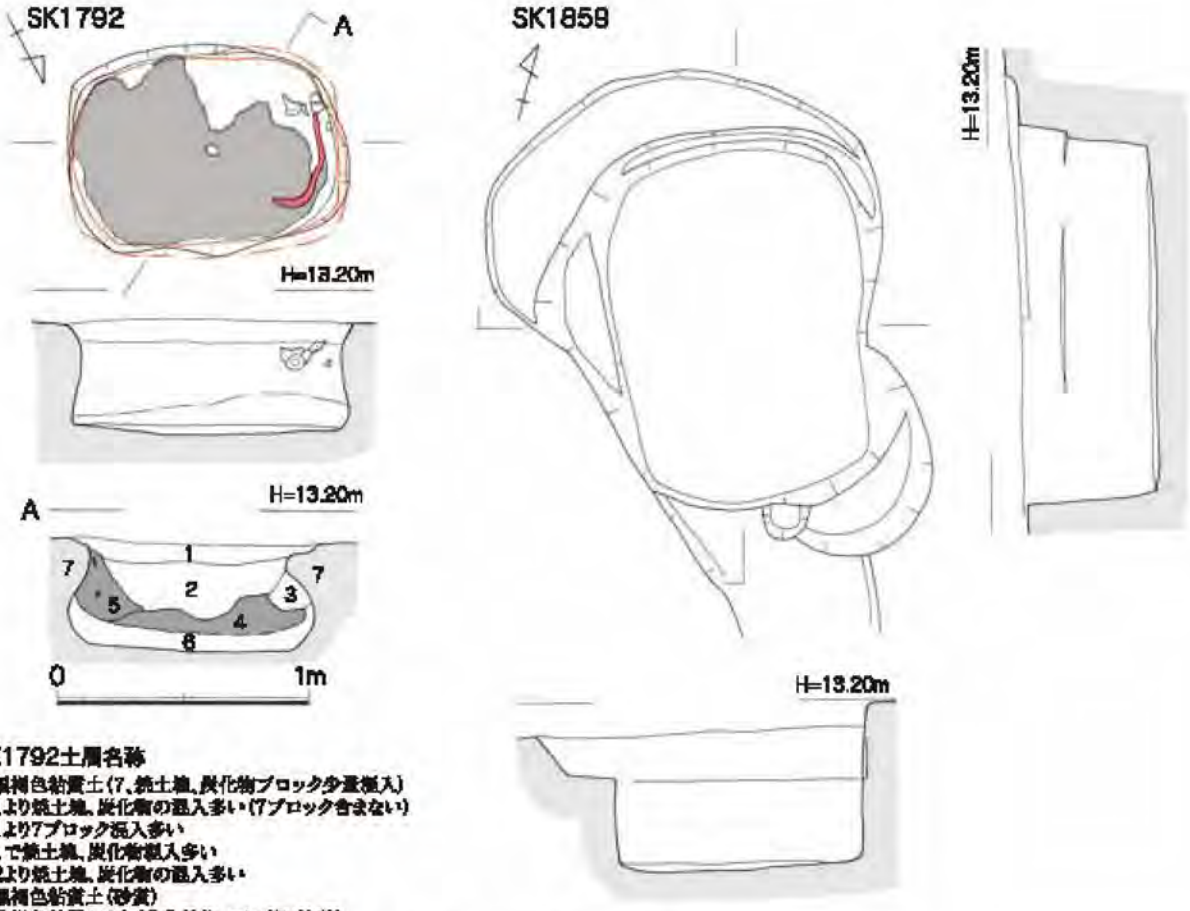
出土遺物　弥生時代中期須玖II式(古)頃の土器や黒曜石片などが出土。**132**～**134**は甕口縁部。**132**は1/5片。口径27.6cmを測る。**133**・**134**は小片。**134**は突帯が付く。調整はいずれもナデと口縁部ヨコナデ。**135**は蓋。天井部の摘みと口縁部1/8片。口径28.0cmを測る。調整は外面粗いタテハケ目、内面ナデ。**136**は支脚底部1/4片。底径9.8cmを測る。調整はナデで指押え痕残る。

SK1787（第5-19・23・24図、図版5-9-1・2、5-16）

第2面B7区で検出した平面形が不整長方形状を呈す大型土坑。規模は長軸長3.50m、短軸幅2.25m、深さ0.10mを測る。底面はほぼ水平。丹塗り甕**143**は第1面で一部見えていたもので、第2面の調査で掘り下げ、底面より少し浮いて斜めの状態で検出した。埋土は暗褐色細砂質土。底面には2基の相対するピットとその間に敲石2個が入った小ピット（SP1944）があった。出土遺物は少ないが、作業場的な建物の可能性を考える。



第5-21図　各土坑出土遺物（1/4、1/3）



SK1792土層名称
1.黒褐色粘質土(7、焼土塊、炭化物ブロック少量混入)
2.1より焼土塊、炭化物の混入多い(7ブロック含まない)
3.1より7ブロック混入多い
4.1で焼土塊、炭化物混入多い
5.2より焼土塊、炭化物の混入多い
6.黒褐色粘質土(砂質)
7.黄褐色粘質シルト(酸化鉄分・マンガン沈着)

第5-22図　SK1792・1859（1/30）

出土遺物　弥生時代中期須玖Ⅱ式(古)の完形の甕以外、土器と敲石が少量出土。143はほぼ完存の丹塗りの甕。口径28.9cm、器高31.8cmを測る。頸部と胴部に1条の断面M字形突帯が巡る。口唇部ヘラによる刻目、内外面丹塗りで、内面は赤色顔料を塗った工具痕が残る。胎土は精良、焼成は良好。155・156は楕円形を呈す敲石。155は長さ13.3cm、幅9.4cm、厚さ6.1cmを測る。表面は擦られて滑らかで、上下端部は使用敲打痕や欠損がある。側面にも使用痕が残る。156は上面と下面中央が窪む。長さ11.1cm、幅8.5cm、厚さ3.3cmを測る。下端部にも使用痕が残る。表面は敲打調整後軽い擦りを加えている。石材は155が砂岩、156が玄武岩。

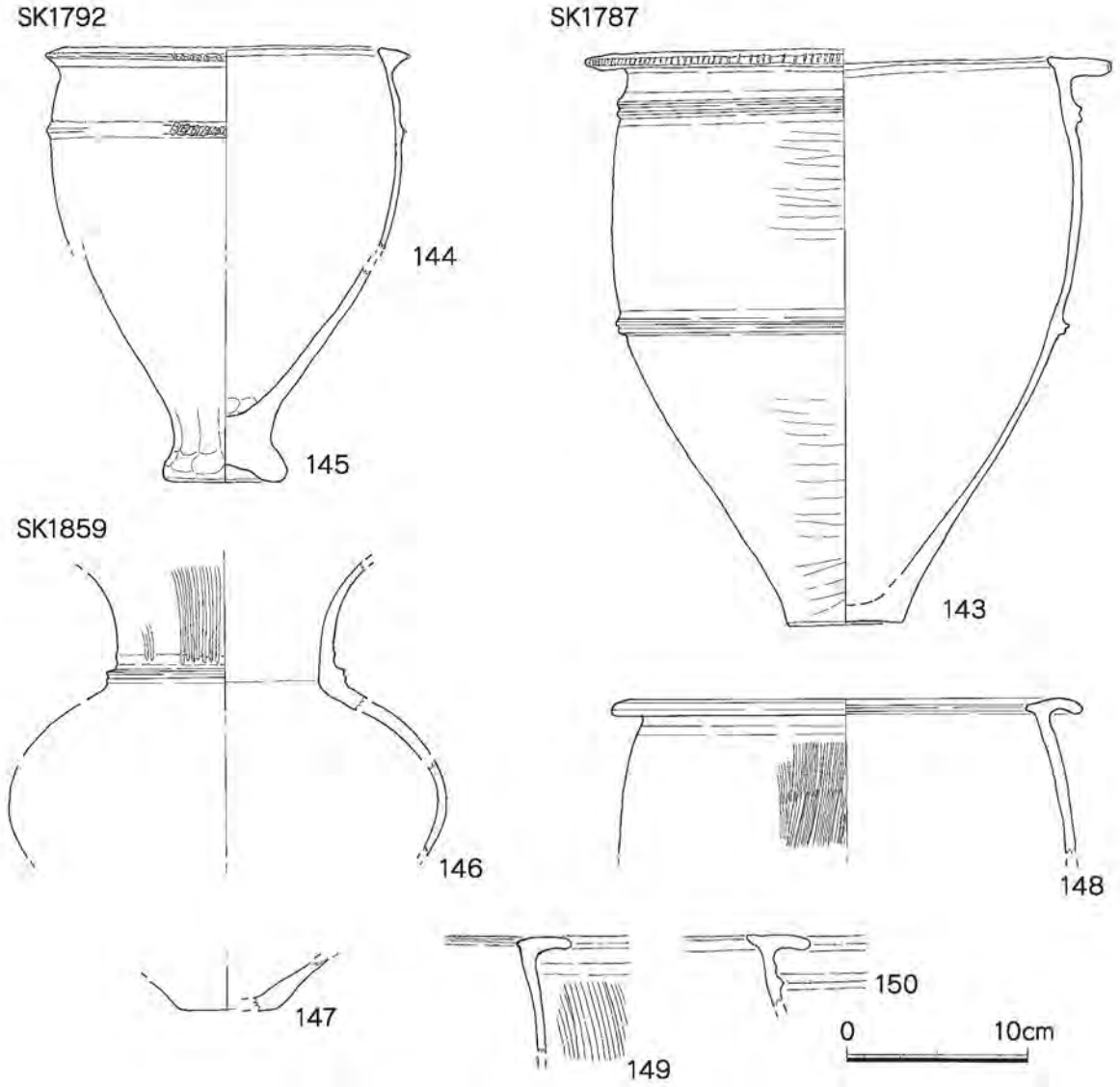
SK1788（第5-20・21図、図版5-11-4）

第2面C6区で検出した平面形が弧状を呈す土坑。規模は長軸長4.22m、短軸幅0.80m、深さ0.27mを測る。土坑断面は船底形を呈す。埋土は黒褐色細砂質土で灰黄色粘質砂ブロック混入。中央部から土器が出土した。

出土遺物　弥生時代中期の土器が出土。細片が多く図示出来るものは少ない。137・138は甕底部。137は1/2片。底径は7.5cm・7.3cmを測る。調整は、137は外面タテハケ目、内面はナデ。内底にススが薄く付着、138の器壁は摩滅するがナデ。

SK1789（第5-19図）

第2面C7区で検出した平面形が不整円形を呈す土坑。規模は長軸長1.60m、短軸幅1.55m、深さ0.10mを測る。埋土は灰黄褐色細砂。出土遺物は弥生土器片が少量出土。細片で図示出来ない。



第５-23図　SK1787・1792・1859出土遺物（1/4）

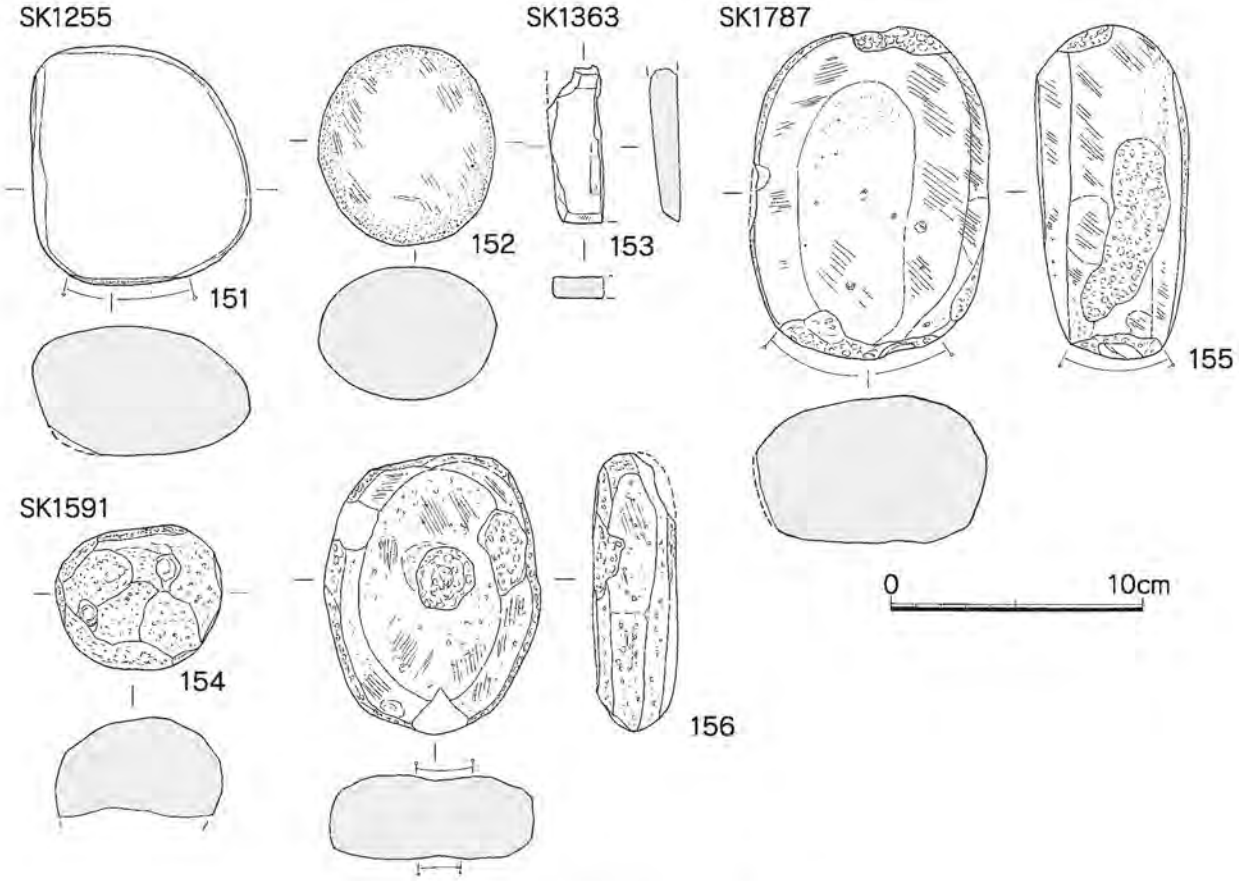
SK1792（第５-22・23図、図版５-9-5）

第２面Ｃ5区で検出した平面形が長方形を呈す土坑。壁面は袋状を呈し、内部底面には硬くしまった焼土面と炭化物層が厚く堆積し、貯蔵穴か屋外炉の可能性がある。規模は長軸長1.10ｍ、短軸幅0.93ｍ、深さ0.45ｍを測る。埋土は上層が黒褐色粘質土で、下層に炭化物・焼土ブロックなどを多く含む。炭化物混じり土からイチイガシ、イネなどの炭化物が検出された。

出土遺物　弥生時代中期初頭の土器が少量出土。**144**は甕口縁部1/6片。口径20.0㎝を測る。口縁部断面は三角形で刻目が付く。胴部上半に緩い三角突帯が巡り、貝殻腹縁による刻目が付く。調整は丁寧なナデで、口縁部ヨコナデ。外面ススが付着。**145**は胴部からくびれて開く上げ底の底部。底径6.2㎝を測る。**144**と同一個体と思われるが、歪むのか少し径が合わない。底部はナデで外面には指押さえ痕が残る。内面ススが付着する。

SK1795（第５-20・21図）

第２面Ｄ7区で検出した平面形が溝状を呈す土坑。両側がテラス状を呈す。規模は長軸長3.90ｍ、短軸幅1.00ｍ、深さ0.20ｍを測る。埋土は黒褐色粘質土が主体。



第５-24図　各土坑出土石器（1/3）

出土遺物　弥生時代中期の土器が少量出土。**139**は甕の鋤形口縁部小片。調整はヨコナデ。

SK1802（第５-21図）

第２面Ｄ8区で検出した平面形が長方形状を呈す土坑。規模は長軸長1.55m、短軸幅0.67m、深さ0.28mを測る。上部からピット1基が切り込む。埋土は黒褐色粘土。

出土遺物　弥生時代中期の土器が少量出土。**140**は須玖Ｉ式期頃に近い甕口縁部小片。調整は不明。

SK1804（第５-21図）

第２面Ｄ7区で検出した平面形が半円形を呈す土坑。SX1991上面で確認した。規模は長軸長2.68m、深さ0.30m弱を測る。埋土は暗褐色粘質土で下層はやや暗い。

出土遺物　弥生時代中期の土器が少量出土。**141**は壺口縁部1/4片。口径20.2cmを測る。鋤形口縁で、調整はヨコナデ。**142**は甕口縁部1/8片で、口径27.6cmを測る。二次的に火を受けたのか赤変する。

SK1822（第５-19図、図版5-11-3）

第２面Ｂ5区で検出した、SD1823を切る平面形が方形の土坑。規模は長軸長1.60m、短軸幅1.48m、深さ0.30mを測る。底面はほぼ水平を呈す。埋土は灰黄色粘質土で黒褐色粘質土などを含む。

出土遺物　弥生時代中期頃の土器や黒曜石剥片などが小量出土。図示出来るものは無かった。

SK1859（第５-22・23図、図版５-9-3・4）

第２面Ｂ7区で検出した土坑。当初他遺構と切り合い、全容を確認出来なかったが、内部から土器片が多く出土し、それを撤去し掘り下げた段階で、平面長方形の壁が直立する土坑を確認した。規模は長軸長1.52m、短軸幅1.36m、深さ0.53mを測る。埋土は暗褐色粘質土と灰黄褐色砂質土の混合。

貯蔵穴の可能性があるが、土器片が雑に入り込んでおり、廃棄土坑となったと思われる。

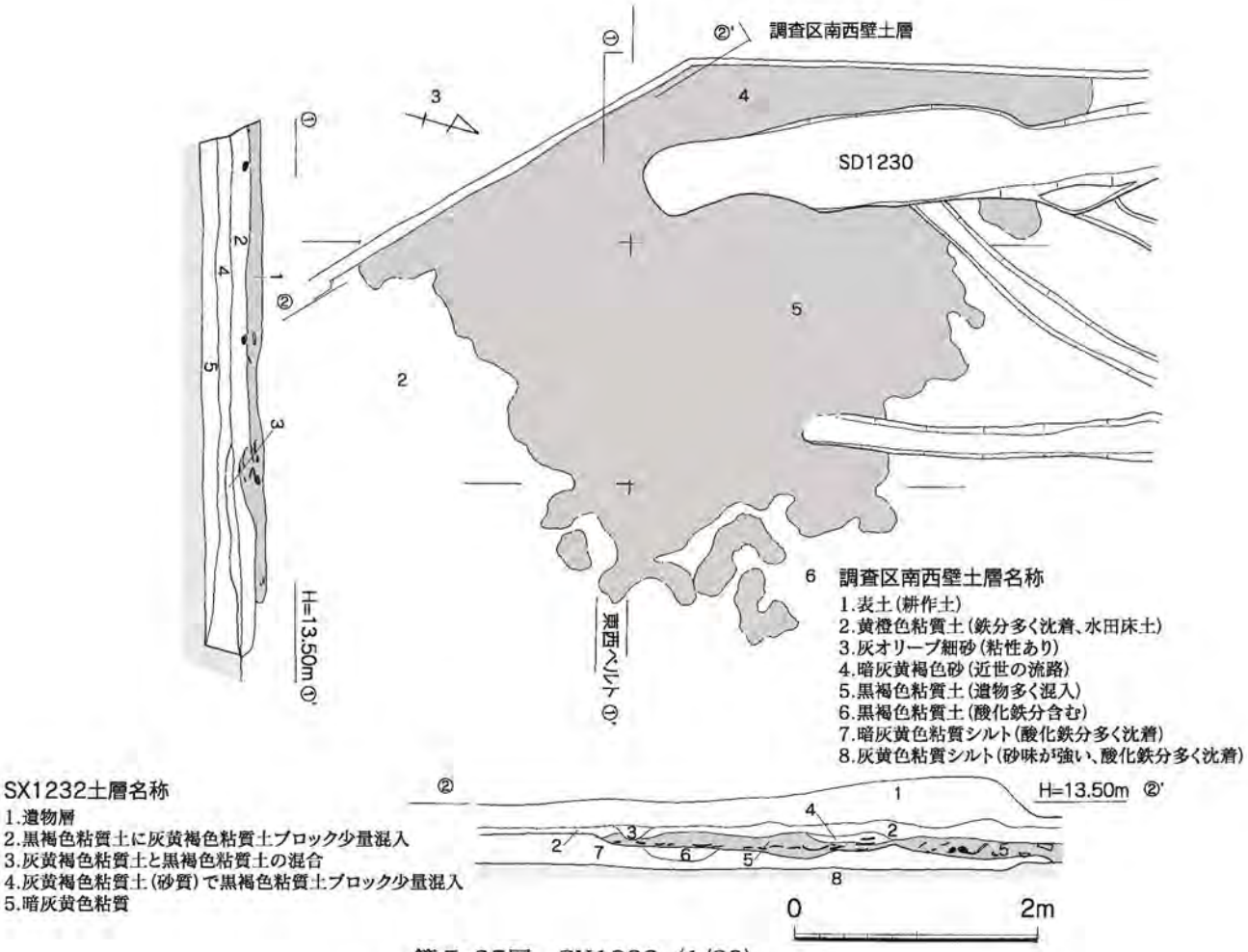
出土遺物　弥生時代中期須玖Ⅰ～Ⅱ式(古)期頃の土器（甕・壺外）片が多量出土。丹塗り土器も含む。**146**は丹塗りの広口壺胴頸部。胴部境界にM字突帯が巡る。外面ヘラミガキで丹塗り、頸部外面はタテのヘラ暗文、頸部内面まで丹塗り。胴部内面は丁寧なナデ。胎土精良、焼成も良好。**147**は底部。底径5.6cmを測る。外面ヘラミガキで丹塗り。内面ナデ。**148**～**150**は鋤形口縁甕口縁部。**148**は1/5片で口径25.8cmを測る。調整は胴部外面細かいタテハケ目、口縁部ヨコナデ、内面丁寧なナデ。**149**は外面タテハケ目、**150**は頸部に突帯が巡る。いずれも胎土は比較的精良、焼成も良好。

⑤　その他の遺構

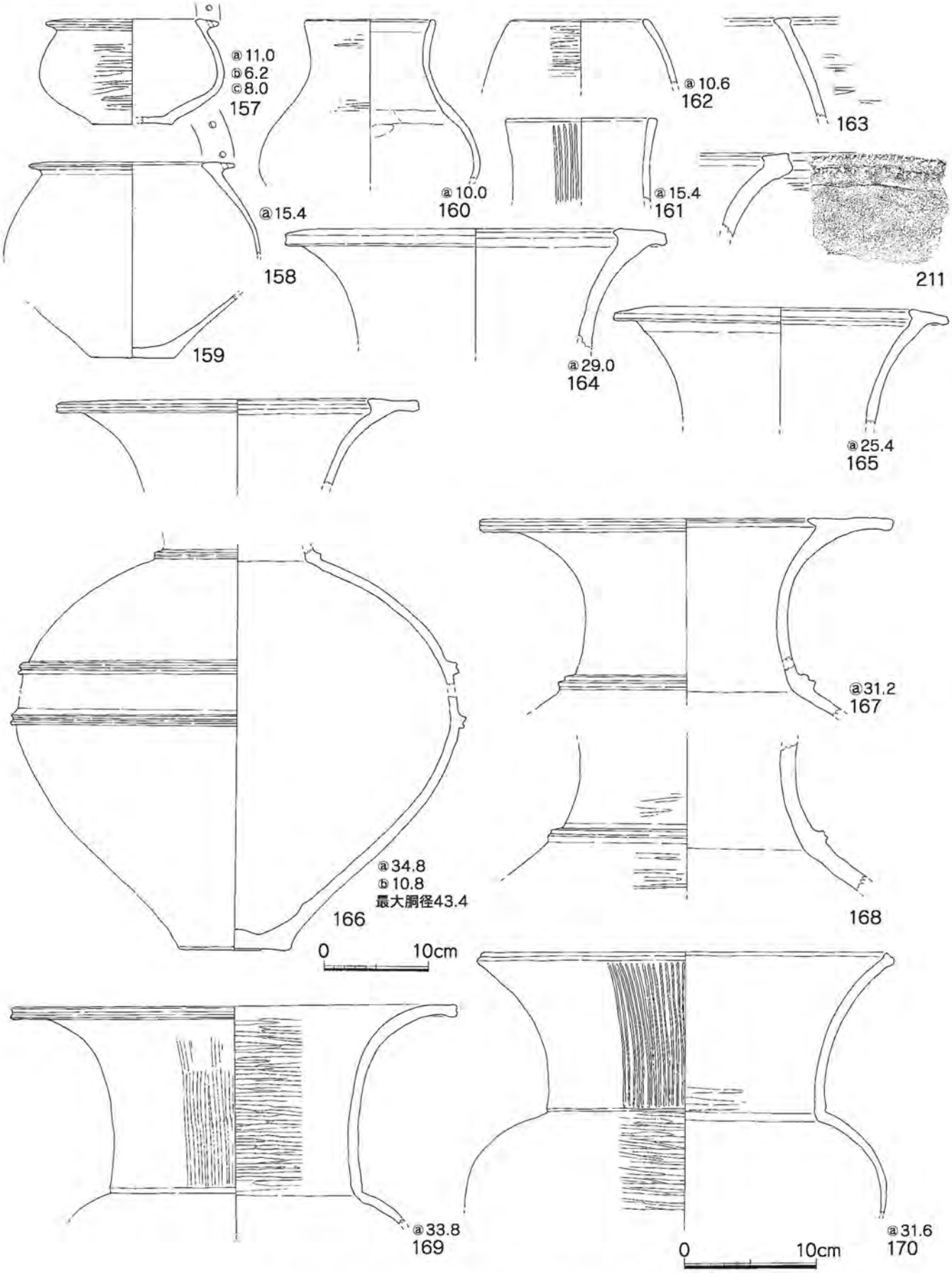
SX1232（第5-25～31図、図版5-12、5-16、5-17）

第1面A・B9・10区で検出した土器溜り。検出範囲は東西約5m、南北6mの範囲で土器片が密集して出土。土器片は10～15cm程の厚さで水平に堆積していた。上面には中世から近世の水田水路が流れる。土器層の下は黒褐色粘質土で、その下が灰黄褐色粘質土の遺構面となる。土器層の下の黒褐色粘質土は浅く窪むが、明確な遺構の掘り込みとして把握出来なかった。この土器群は道路を挟んだ西側調査区でも一部確認されている。完形品はなく、丹塗り土器などもあるが、祭祀遺構の可能性は少ない。後世の水田化によって水平に削平されているが、本来はわずかな地形の起伏があり、土器群はその浅い谷部に廃棄された土器溜りと考える。

出土遺物　中型パンコンテナ24箱に及ぶ多量の土器と石器類が出土。土器は弥生時代中期須玖Ⅰ～

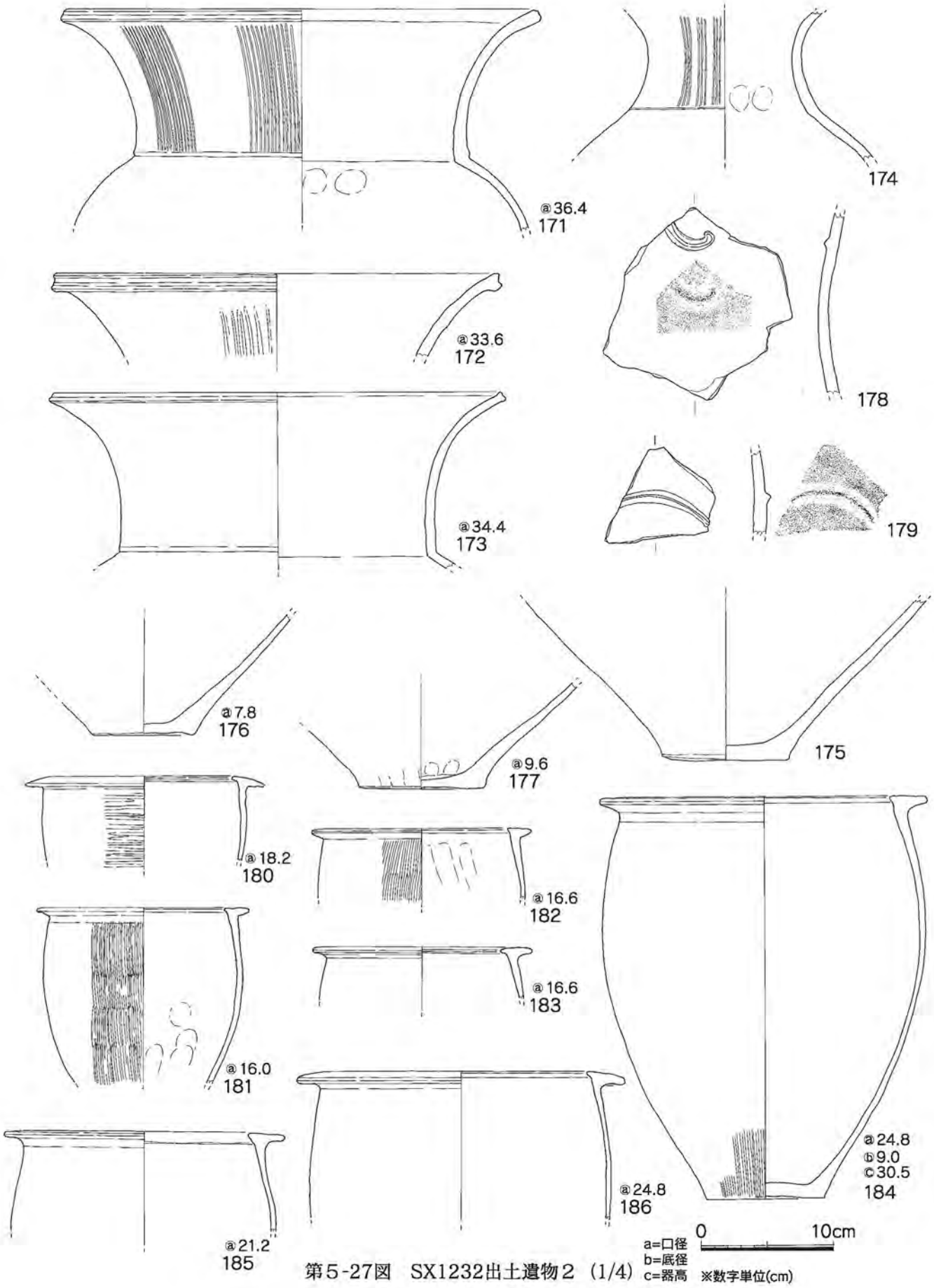


第5-25図　SX1232（1/60）

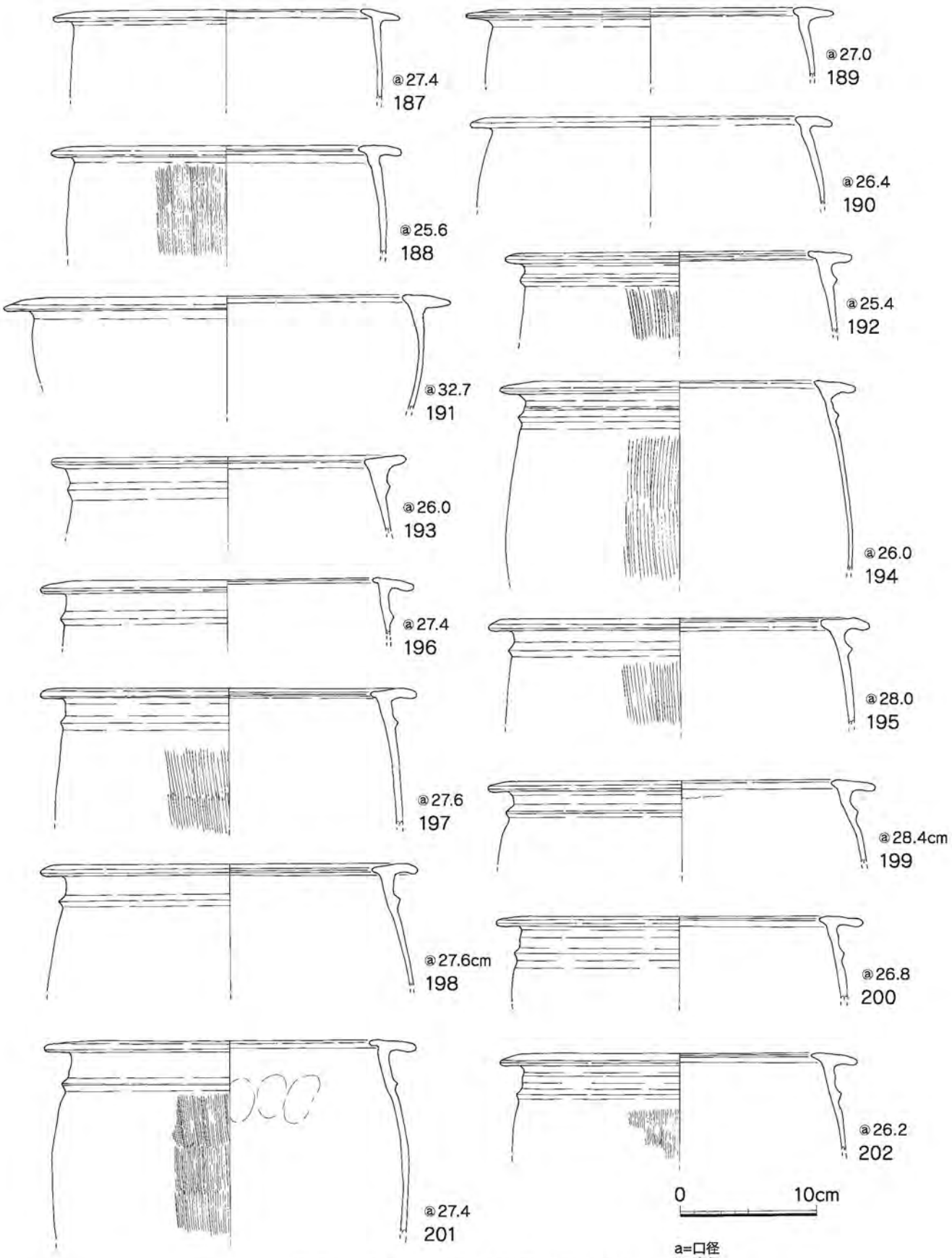


第5-26図　SX1232出土遺物 1（1/4、1/5）

a=口径
b=底径
c=器高　※数字単位(cm)



第5-27図　SX1232出土遺物2　(1/4)

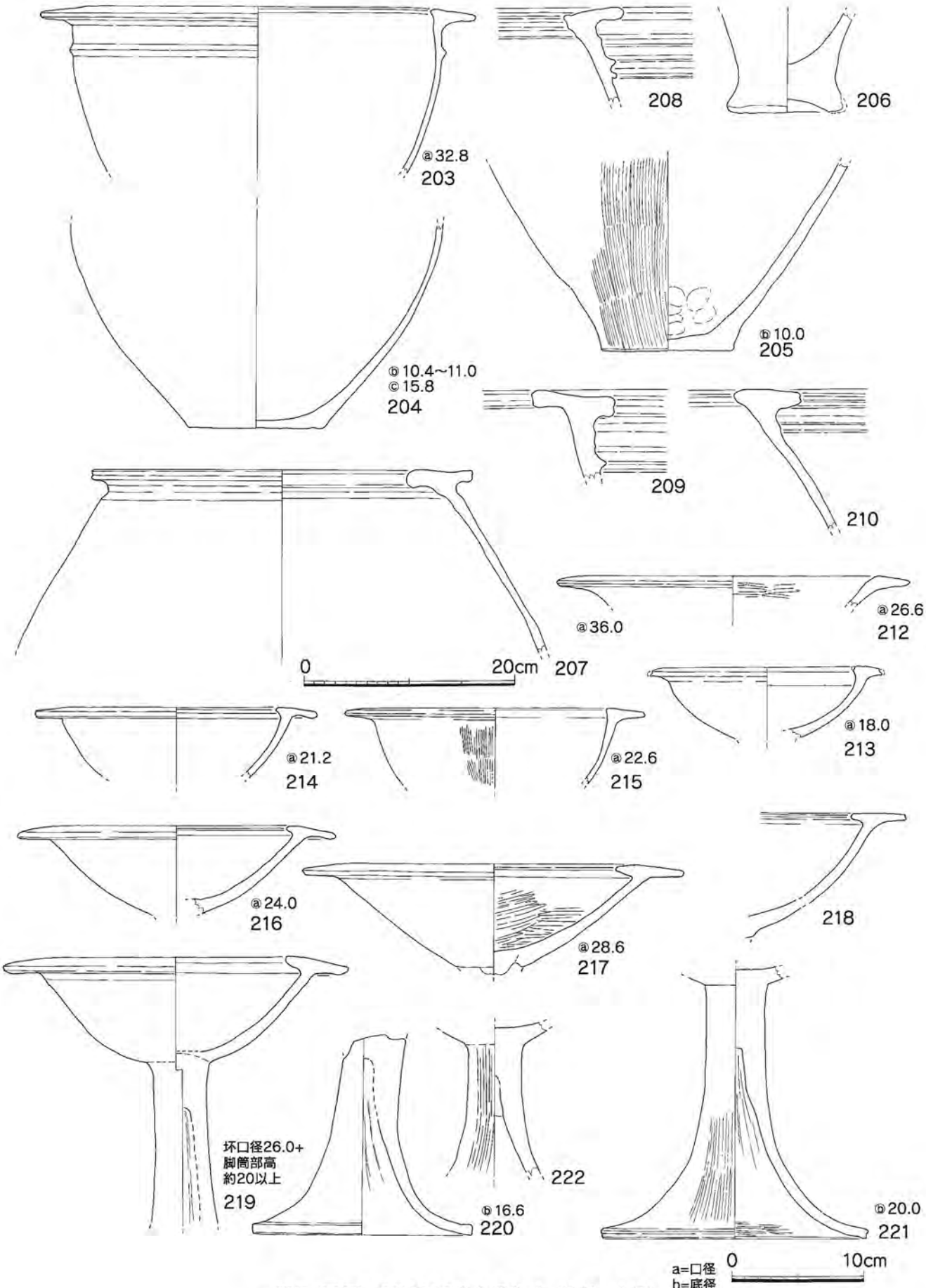


a=口径
b=底径
c=器高　※数字単位(cm)

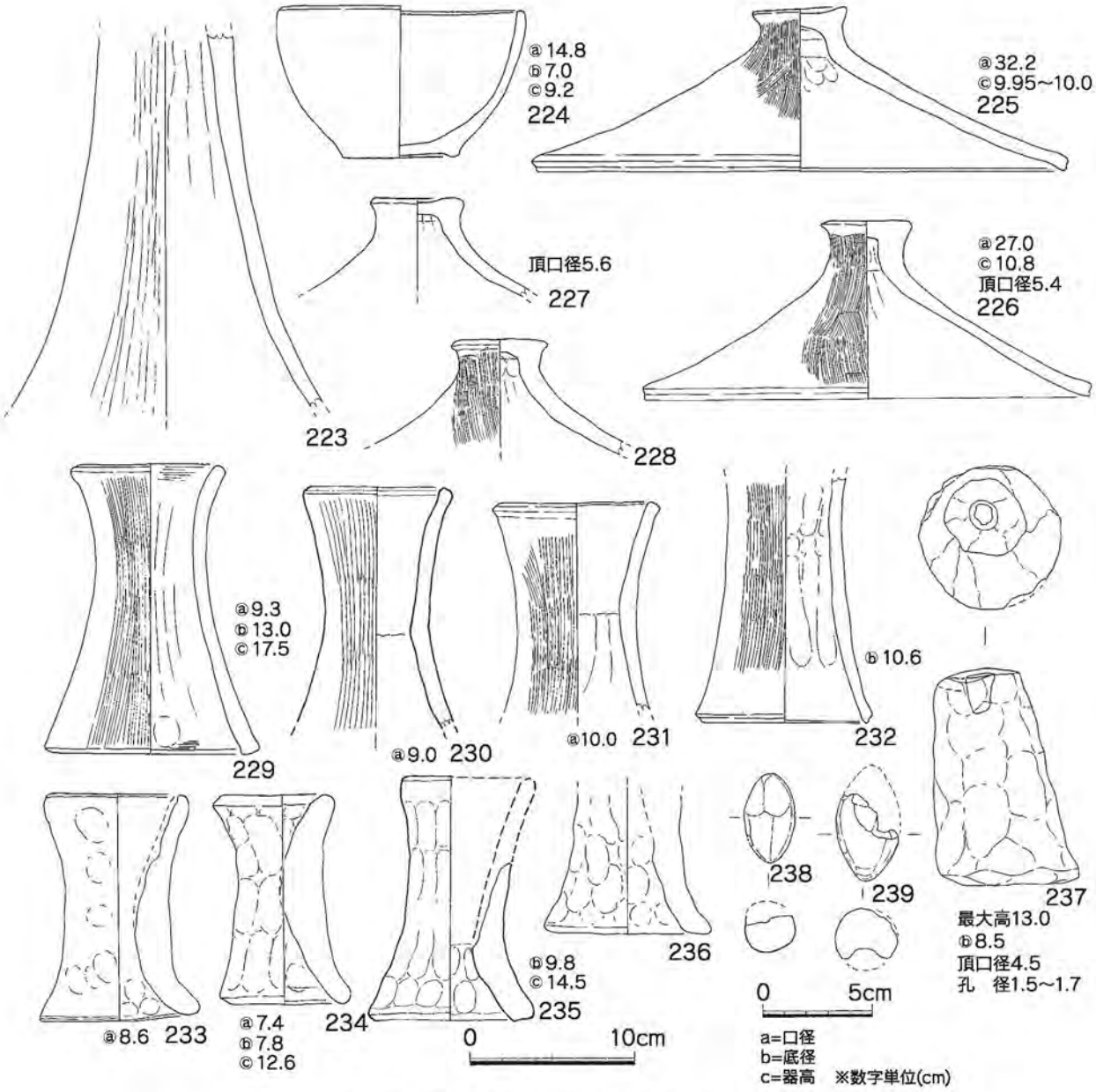
第5-28図　SX1232出土遺物3（1/4）

II(古)のもの。遺物は小区を設定して取り上げたが、器種毎に報告する。法量は図右側に記す。

157～**179**は壺。**157**・**158**は小型の無頸壺。口縁部に2個1対の孔がある。**157**は1/3片。**158**は口縁部片。いずれも外面丹塗りで、**157**の調整は外面タヨコヘラミガキ、内面ナデ。**159**は同形態の底部。**158**・**159**は調整は不明。**160**・**161**は丹塗りの細頸の直口壺。**160**は口縁～胴部1/3片。口縁内面から外面は丹塗り。外面はヘラミガキ、胴部内面はナデ。**161**は1/3片。口頸部外面にヘラによるタテ暗文。全体に摩滅する。**162**・**163**は無頸壺。**162**はワイングラス形の無頸壺口縁部1/5片。器壁はやや摩滅するが、調整はヨコヘラミガキ。**163**は口縁部小片。調整は外面ヘラミガキ、内面はナデ。**162**・**163**の胎土は微砂を少し含むが精良。**164**～**167**は口縁部が鋤形口縁の大型壺。口径25.4～34.6cmを測る。**164**・**165**は1/4片、**167**は1/3片。**166**は口頸部から胴底部の各破片から復元した。器高は推定で約54cmを測る。胴部には断面M字の突帯が二条巡る。**168**は頸胴部片で頸部に断面M字突帯が１条巡る。調整は外面ヘラミガキかナデ、内面はナデ。全体に丁寧な作り。**169**～**173**は広口壺。いずれも丹塗り。**169**は1/2片、**170**・**171**・**173**は1/3片、**172**は1/4片で、口径31.2～36.4cmを測る。口端部は浅く中窪み、**172**・**173**の口端部は膨らみ口唇部下に段を有す。調整は外面ヘラミガキで、頸部は、**169**はタテハケ目、**170**～**172**はヘラによる暗文が入る。内面は、**169**・**170**口頸部はヘラミガキ、胴部ナデ、**171**は口頸部丁寧なナデかミガキ、胴部ナデ、**172**はナデ、**173**は摩滅で調整不明。**174**は頸部片。外面と頸部内面に丹塗りで頸部外面にはヘラによるタテ暗文が入る。内面調整はヨコナデとナデ。**175**～**177**は底部片。**175**は1/2片。**176**・**177**は僅かに上げ底。調整は内外面ナデで、**176**外面は丁寧なナデ。**175**内面は黒くすすけている。**178**・**179**は鈎形・弧状の貼付け浮文の胴部片。**178**は摩滅し調整不明、**179**は丁寧なナデ。**180**～**210**は甕。**180**～**183**は小型甕。**180**は1/4片、**182**は1/4弱片、**181**・**183**は1/6片で、口径は16.0～18.2cmを測る。**180**は外面ヨコヘラミガキ、内面丁寧なナデ。胎土は精良。**181**は外面細かいタテハケ目、内面ナデで指押え痕が残る。外面には黒斑がある。**182**の調整は外面タテハケ目、内面ナデ。**183**は摩滅で調整不明。内外面ススが付着。**184**～**203**は中型甕口縁部。突帯の有無で二種類に分かれる。**184**～**191**は突帯がない。**184**は1/3片。外面胴部下半にハケ目がかすかに残り、口縁部ヨコナデ、内面はナデ。**185**・**187**～**189**は1/3片、**186**は1/5片、**190**・**191**は2/3片。口径21.2～32.7cmを測る。**191**は外面赤色顔料が残り丹塗り土器である。調整は器壁が摩滅し不明（**186**・**187**・**189**・**190**）以外、外面調整はタテハケ目かナデ、口頸部ヨコナデ、内面ナデ。**189**の口縁部はススが付着、**188**・**191**は外面に黒斑がある。**192**～**203**は三角突帯が付く。口縁直下**192**・**193**・**195**・**197**・**199**と頸部に付くに分かれる。**192**・**202**は1/4片、**193**・**203**は1/3片、**194**・**201**は1/4弱片、**195**は全周、**196**・**200**は1/3弱片、**197**は1/5強片、**198**は1/5片、**199**は2/3片。口径は25.4～32.8cmを測る。調整は外面がタテハケ目かナデ、口頸部ヨコナデ、内面はナデで、**193**・**196**は調整不明。**203**は外面不明で内面はナデ。**204**～**206**は胴底部。**204**は1/3片。底径10.4cm、ナデで内面は丁寧なナデ。**205**は底径10.0cmを測る。調整は外面タテハケ目、内面はナデ。**206**は底部。中期初頭のもの。ナデ調整で内面ススが付着。**207**～**211**は甕棺の破片。**207**は口が窄まる甕口縁部1/4片。口径36.0cmを測る。器壁は摩滅するが丁寧なナデか。ＫII期か。**208**～**211**は小片。**208**は頸部に１条のM字突帯が巡る。**209**は口縁部が外傾し、端部が内面に張り出す。**210**は口縁が窄まる。調整はいずれもヨコナデ。**211**はＫＩ期の甕棺口縁部か。口唇部両側にヘラによる刻目が付く。外面ヘラミガキとナデ、内面はナデ。**212**～**223**は高坏。**212**は口縁部が外折する形態。壺の可能性もある。1/8片で口径26.6cmを測る。丹塗りで内外面丁寧なヘラミガキ。胎土は精良で焼成は良好。**213**～**219**は鋤形口縁又は逆Ｌ字形口縁坏部片。**213**は1/3片、**214**・**216**は1/4片、**215**は1/3片、**217**は1/6片、**218**は小片、**219**は脚底部を欠損。口径は18.0～28.6cmを測る。**213**・**214**・**217**・**219**

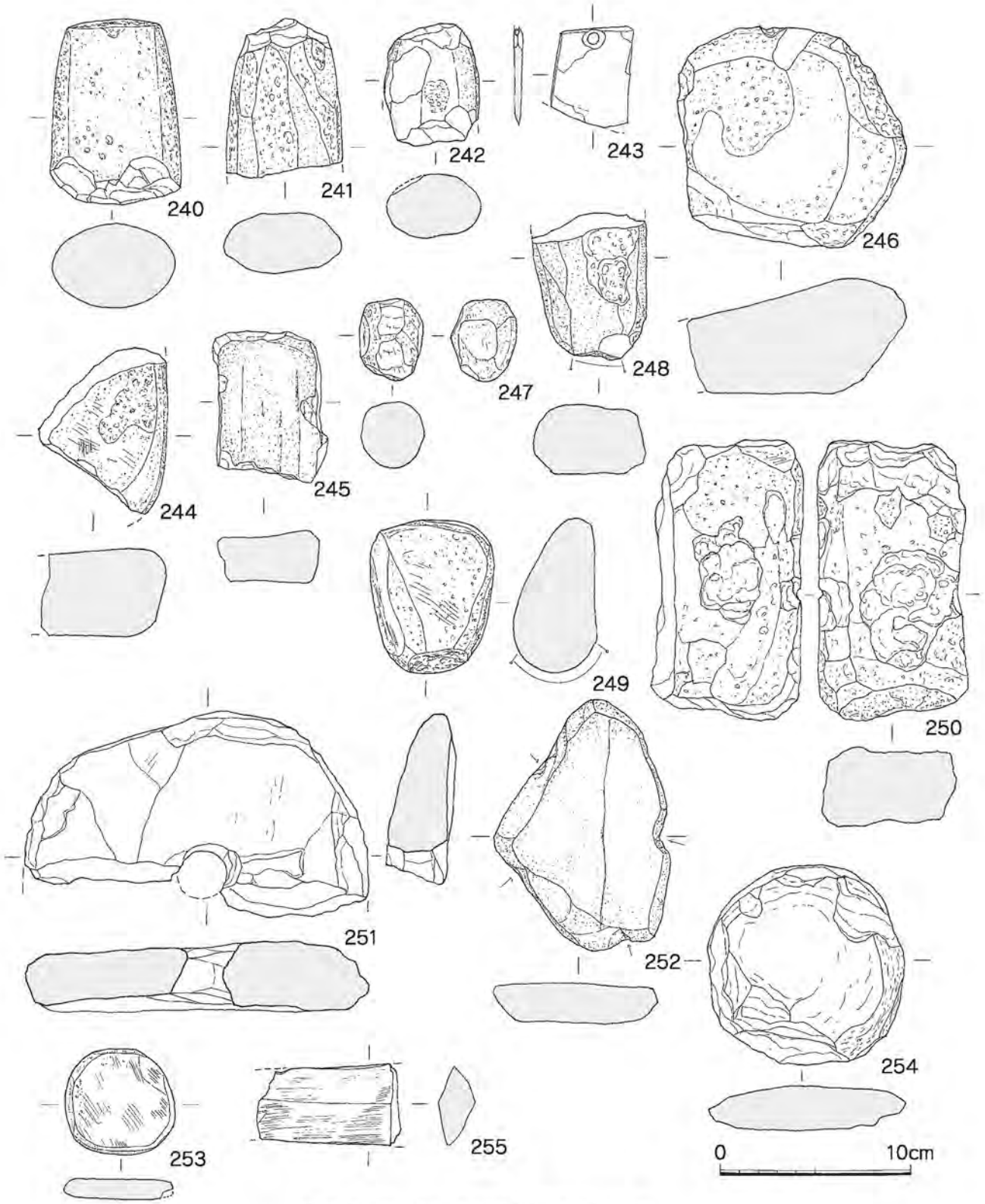


第5-29図　SX1232出土遺物4（1/4、1/5）



第5-30図 SX1232出土遺物5 (1/4、1/3)

は丹塗り。調整は、**213**は摩滅し不明、**214**は外面不明、内面ナデ、**215**は外面タテハケ目、内面ナデ、**216**は内面ナデ、**217**は内面ヘラミガキ、**218**は内外面ヘラミガキ、**219**の坏部はヘラミガキ、脚部は摩滅し調整不明、内面シボリ痕が残る。**214**は焼成やや不良。**220**～**222**は脚部片。**222**は脚筒部。**220**・**221**の底径は16.6cm・20.0cmを測る。調整は**220**の器壁は摩滅し不明。**221**は外面上半がタテヘラミガキ、裾部はハケ目、内面はヨコハケ目とナデ。**222**は外面ヘラミガキ、内面ナデ、いずれも内側にシボリ痕が残る。**221**は外面赤色顔料が残り丹塗りか。**223**は祭祀用の大型器台脚部。外面ヘラミガキ、内面ヨコナデ。**224**は素口縁の鉢。復元完形。器壁は摩滅するが調整はナデ。口縁部外面黒斑がある。**225**～**228**は蓋。天井部に摘みを持つ。**225**・**227**の天井部は窪む、**226**・**228**は平坦。**225**は1/3片、**226**は1/6片。口径32.2cm・27.0cmを測る。調整は**227**が摩滅で不明の外は、外面タテハケ目、内面ナデでシボリ痕が残る。**225**の外面黒斑が1か所あり、**226**は内面黒化する。**229**～**233**は筒形の器台。**229**～**233**は縊れが胴部上半にある。**229**は1/2片。**230**は口縁部1/3片、**231**は口縁部2/3片、



第5-31図　SX1232出土遺物6（1/3）

232は底部1/3片。**230**・**231**は口径9.0～10.0㎝を測る。調整は外面タテハケ目、内面は指ナデ。**229**の内面口縁と底部はヨコハケ目。**233**は1/2片で手捏。口径8.6㎝を測る。器壁は厚手で、内外面指押え痕が残る。**234**～**236**は手捏の器台又は支脚。**234**はほぼ完形。**235**は口縁から底部片。**236**は底部片。

全体に厚手で指押え痕が残る。**237**は裁頭円錐形の支脚。粘土塊を手捏で仕上げる。頂部に径1.5×1.7cmの円孔が空く。表面は部分的に欠損。胎土は粗砂礫を多く含み重い。**238**・**239**は投弾1/2片・1/2弱片。断面は円形、**238**は長さ4.0cm、**239**は残存長3.9cm、最大径2.4cm・2.8cmを測る。調整は丁寧なナデ。

240～**242**は磨製石斧。いずれも欠損品。石材は**240**・**241**が玄武岩、**242**は玄武岩か安山岩。**240**は残存長9.9cm、**241**は8.5cm、**242**は6.5cmを測る。表面は研磨するが敲打調整痕が残る。**240**は欠損の状況から敲石に転用した可能性がある。**243**は石庖丁。5.2×4.3cmで紐孔が残る。石材は泥岩か。**244**・**245**は砥石。欠損品で石材は砂岩。**244**は8.8×6.7cmで、最大厚4.5cmを測る。上下、右側面が使用面。**245**は小型砥石。残存長8.0cm、幅6.1cmを測る。上下両面が使用により摩耗する。**246**は石皿か砥石片を敲石に転用したもの。上下両面は擦り。使用面で、一部敲打痕が、左側面上部には敲打使用痕が残る。石材は花崗岩。**247**は石弾か石球。不整円形で径4.3×3.2cmを測る。粗割した素材に敲打調整を加え、一部使用後の剥離面が残る。石材は緑泥片岩。**248**～**250**は敲石。**248**は欠損品。残存長7.7cmを測る。下端部に使用痕がある。石材は砂岩。**249**は敲石兼磨石。8.2×6.4cmを測る。石材は火成岩。表面は擦られているが、左右側面、下木口面に敲打使用痕が残る。**250**は長方形状の敲石。長さ14.7cm、幅7.7cm、厚さ4.2cmを測る。各面に敲打使用痕が残る。石材は火成岩系。火を受けたのか表面は桃色を呈す。**251**・**252**は石錘。**251**は大型の環状石錘1/2片。直径18.0cm、厚さ3.7cm、孔径2.5cm、重さ835ｇを測る。粗いケズリと研磨仕上げ。側面一部敲打痕が残る。石材は滑石片岩。**252**は礫錘。扁平な自然石の4カ所打ち欠き、紐掛けのノッチを作り出している。長さ13.2cm、幅9.3cm、厚さ2.3cm、重さ348ｇを測る。石材は火成岩（花崗岩系か）。**253**・**254**は円板。**253**は磨製の円板。ほぼ円形で直径5.8cm、厚さ1.1cmを測る。全面を丁寧に研磨。石材は砂岩。**254**は径10.5×10.4cm、厚さ2.2cmを測る。縁辺は雑な打ち割り。石材は火成岩系。**255**は磨製石剣片。断面菱形を呈す。残存長7.6cm、最大幅4.4cm、厚さ1.9cmを測る。石材は泥岩か。研磨仕上げで擦痕が残る。

4）中世以降の遺構

①　掘立柱建物

SB1604（第5-32図、図版5-13-2）

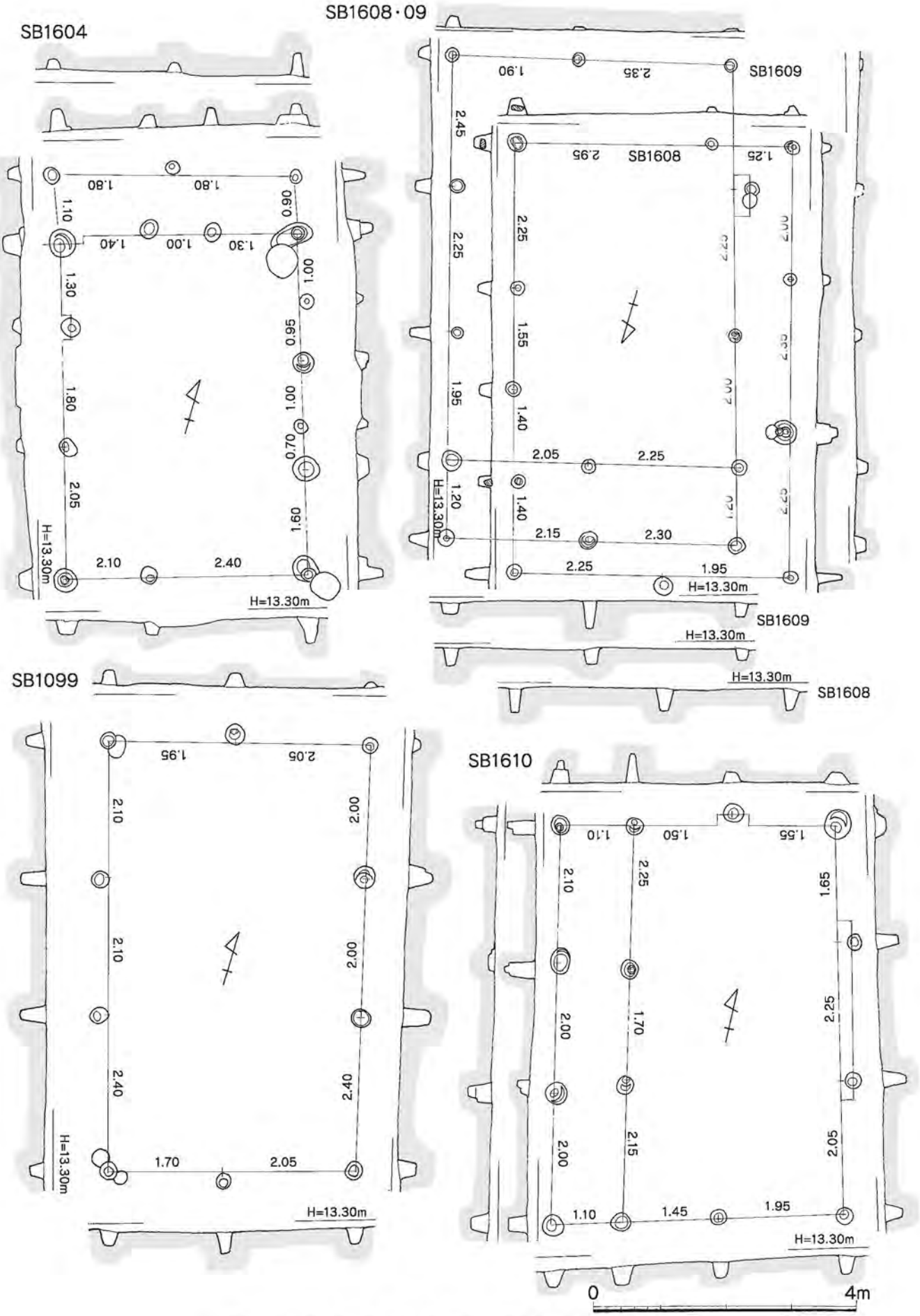
第1面北西C8区で検出した2×3間の主軸をN-17°30′-Wに取る建物。北側は0.87～1.10mで張り出した庇が付く。規模は庇部も含めて梁間3.55～3.70m、桁行6.12～6.25mを測る。柱穴平面形は円形又は楕円形。規模は長軸径で0.20～0.65m、深さ0.15～0.40mを測る。埋土は灰黄褐色粘質土や暗褐色粘質土が主体。一部柱穴底に柱痕が残る。

出土遺物　5基の柱穴から実測不可の弥生土器片が少量出土したが、建物形態や方向、柱穴規模、埋土の状況から中世とする。

SB1608（第5-32・33図、図版5-13-3）

第1面南側6・7区で検出した2×3間の主軸をN-16°-Wに取る建物で、SB1609と重複する。規模は梁間4.20m、桁行6.60mを測る。桁側の柱間は東側が4間となる。柱穴平面形は不整円形。規模は長軸径で0.20～0.30m、深さ0.07～0.40mを測る。埋土は暗灰褐色や暗褐色土粘質土。南東隅柱には根石が水平に据えられていた。

出土遺物　7基の柱穴から弥生土器などの細片や中国産白磁細片が少量出土。**256**は中国産白磁碗玉縁口縁部細片。灰白色の不透明釉がかかる。釉の発色は悪い。



第5-32図　SB1604・1608～1610・1099（1/80）

SB1609（第５-32・33図、図版５-13-3）

第１面南側6・7区で検出した2×3間の主軸をN-12°-Wに取る建物で、SB1608と重複する。北側は1.20～1.40m張り出した庇が付く。規模は庇部も含め、梁間4.25～4.45m、桁行7.35mを測る。柱穴平面形は不整円形。規模は長軸径で0.18～0.32m、深さ0.03～0.33mを測る。埋土は暗灰褐色や暗褐色土粘質土。

出土遺物　8基の柱穴から弥生土器～中世の遺物が出土。**257**・**258**は土師器。**257**は皿か坏1/5片。口径14.2cm、器高1.9cmを測る。器壁は摩滅するが、外底はヘラ切りか。胎土精良。**258**は椀底部1/4片。調整は器壁が摩滅し不明。

SB1610（第５-32・33図、図版５-13-4）

第１面南側Ｂ5区で検出した2×3間の主軸をN-13°30′-Wに取る建物で、SB1099と重複する。西側に1.10m張り出した庇が付く。規模は庇部も含め、梁間4.15～4.50m、桁行5.95～6.10mを測る。柱穴平面形は円形か楕円形。規模は長軸径で0.23～0.35m、深さ0.10～0.35mを測る。埋土は黒褐色、暗灰褐色や暗褐色土粘質土である。

出土遺物　各柱穴から弥生土器～中世の土器が出土。**259**・**260**は土師器。**259**は小皿1/6片。口径8.8cm、器高1.3cmを測る。器壁は摩滅するが、外底はヘラ切りか。**260**は坏か椀口縁部1/6片。口径13.8cmを測る。調整は器壁がやや摩滅するがナデ。**261**は瓦器椀口縁部細片。

SB1099（第５-32・33図）

第1面南側Ｂ5区で検出した2×3間の主軸をN-21°-Wに取る建物で、SB1610と重複する。梁間3.75～4.00m、桁行6.50～6.60mを測る。柱穴平面形は円形か楕円形。規模は長軸径で0.23～0.45m、深さ0.10～0.43mを測る。埋土は暗灰褐色や暗褐色土粘質土などである。

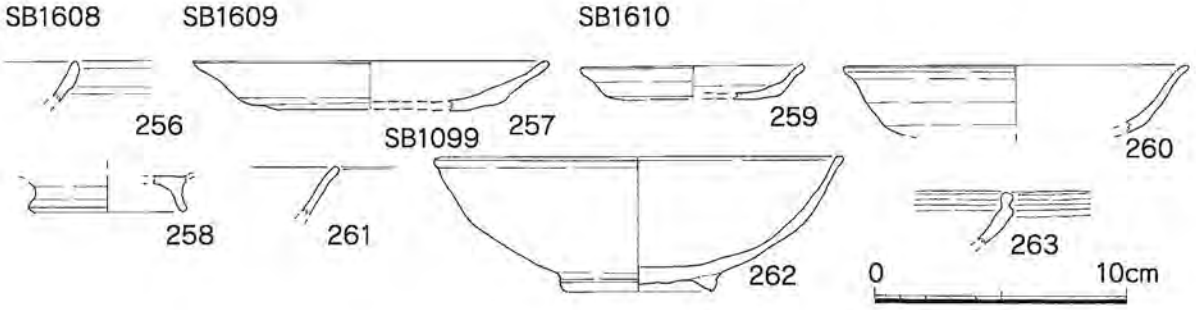
出土遺物　7基の柱穴から弥生土器～中世の土器が出土。**262**は土師器椀口縁～底部1/8片。口径16.2cm、器高5.4cmを測る。器壁は摩滅がひどく不明。内面と高台内一部黒化する。胎土は精良。**263**は縄文時代晩期の浅鉢口縁部部細片。混入品。

② 溝状遺構

SD1110（第５-34図）

第１面東側6区で検出した略南北に延びる小溝。最大幅0.2m、深さ4～10cmで断続的に続く。埋土は灰色～青灰色細砂質土。近世の水田など農地に伴う水路で、西側に並行する南北2条の溝、直交するSD1215も同時期である。

出土遺物　**264**は黒色土器B椀口縁部1/10片。口径13.6cmを測る。器壁の調整は不明。混入品。



第５-33図　各建物出土遺物（1/3）

SD1113出土遺物（第５-34図）

第１面6区主軸をN-25°-W方向に蛇行して延びる小溝。幅0.3～0.5m、深さ10cm前後である。近世溝SD1110と方位が異なる。この溝は北側1Ｃ区に続く。**275**は黒曜石石鏃。完存で長さ3.2cm、幅1.5cm、厚さ0.3cmを測る。表面は風化が進むが、二次調整で側縁を成形する。

SD1230（第５-34図、図版５-14-6、５-17）

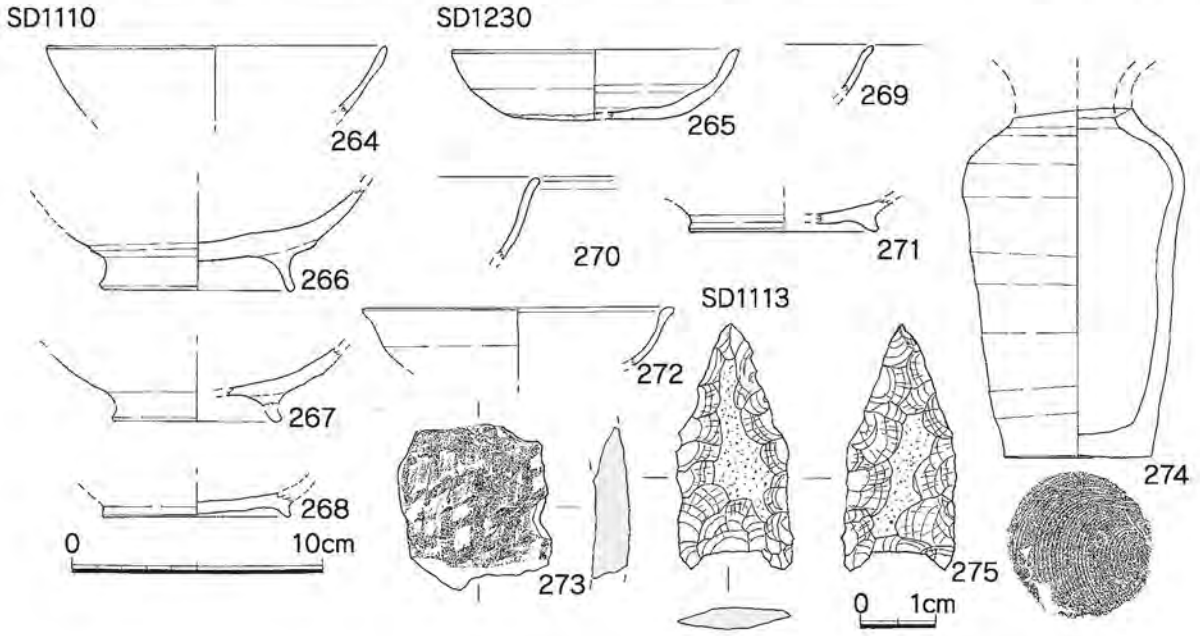
第1面西壁際で検出した主軸をN-19°-W（磁北）に取る南北溝。北側は近代水路で消滅する。確認長は9m程、最大幅0.8m、深さ3～10cm程である。埋土は暗灰黄褐色シルト質土（粘性）。怡土地区の条里方向（真北N-20°-W）に沿う溝である。

出土遺物　弥生土器～中世土器、黒曜石剥片などが出土。**265**～**268**は土師器。**265**は坏1/4片。口径11.4cm、器高2.8cmを測る。調整はヨコナデで外底部は糸切りでケズリを加える。**266**～**268**は椀底部で高台が付く。**267**・**268**は1/3片。高台径7.6cm・6.8cm・7.5cmを測る。調整はナデ。**268**は摩滅し不明。**266**内底は黒化する。胎土はいずれも精良。**269**～**271**は黒色土器椀。**269**・**270**は口縁部小片。**269**は両面黒のB類、**270**は内面黒のA類。器壁はやや摩滅するがヘラミガキ。**271**はB類の底部1/4片。高台径7.6cmを測る。調整はナデ。体部から内底ヘラミガキ。胎土はいずれも精良。**272**は丹塗り痕が残る鉢口縁部1/12片。器壁は摩滅するがヨコヘラミガキ。胎土は精良。**273**は土師器甕胴部細片。外面タタキ痕が残り、内面は粗いナデ。胎土は3mm内石英など砂粒を多く含み粗い。外面は黒い。**274**は東播系と思われる中世須恵器壺。口頸部は意図的な打ち欠きか。残存高13.8cm、底径5.8cmを測る。体部はヨコナデ、外底部近くは工具によるケズリ後ナデ。外底部は糸切り離し。

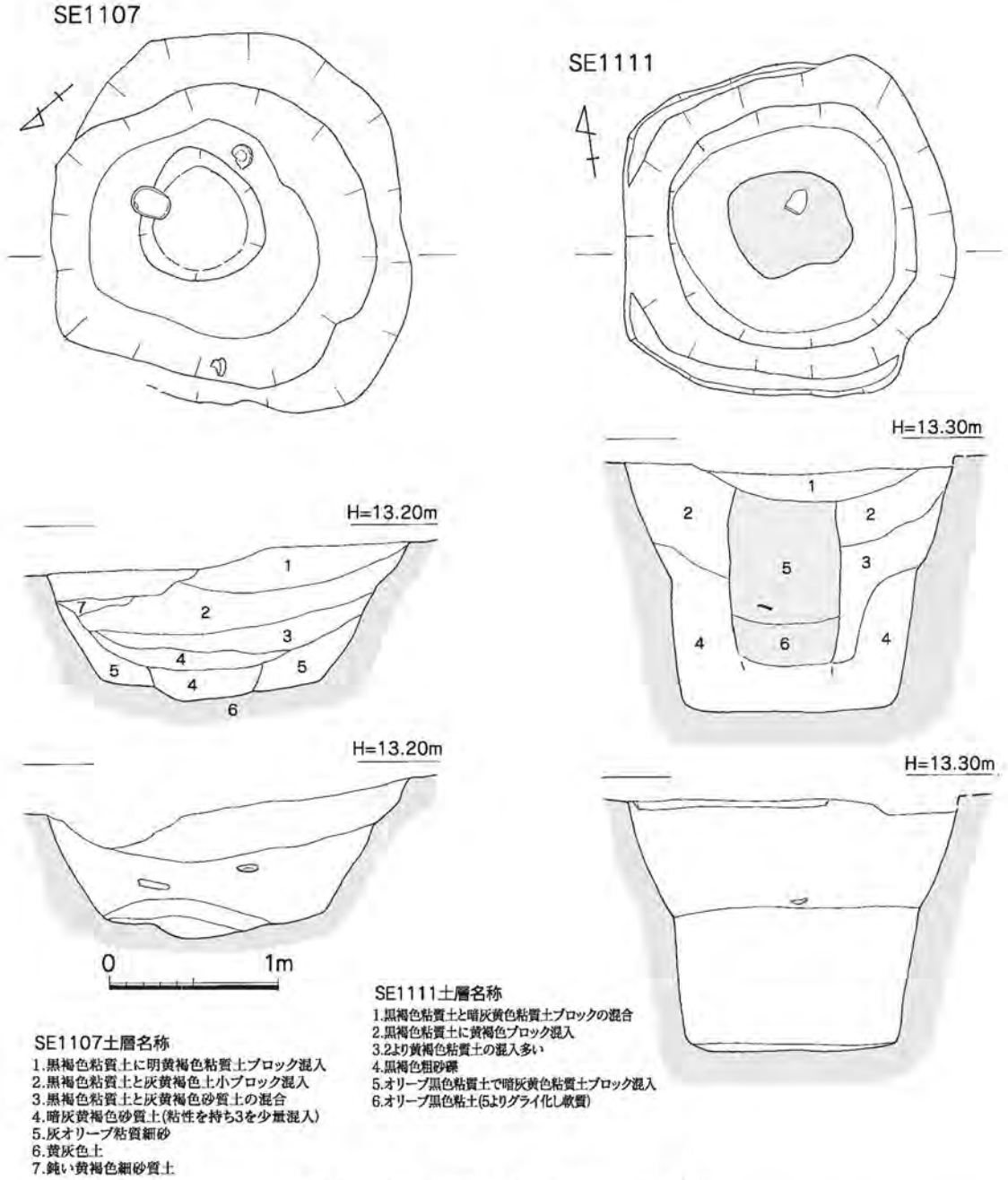
③　井戸

SE1107（第５-35～37図、図版５-14-1・2、５-17）

第１面Ｂ4区調査区の段落ちで検出した井戸。掘方平面形は不整円形を呈す。規模は上面で長軸長2.40m、短軸幅2.25m、最大深0.93mを測る。井戸は砂礫層まで掘り込む。埋土は上層が黒褐色粘質土、中層が黒褐色粘質土と暗灰黄褐色の粘性を持った砂質土、下層は灰オリーブ色粘質細砂となる。下層上面で直径約0.7mの丸みを持った平面三角形状の落ち込みを確認した。土層では深さ0.2m



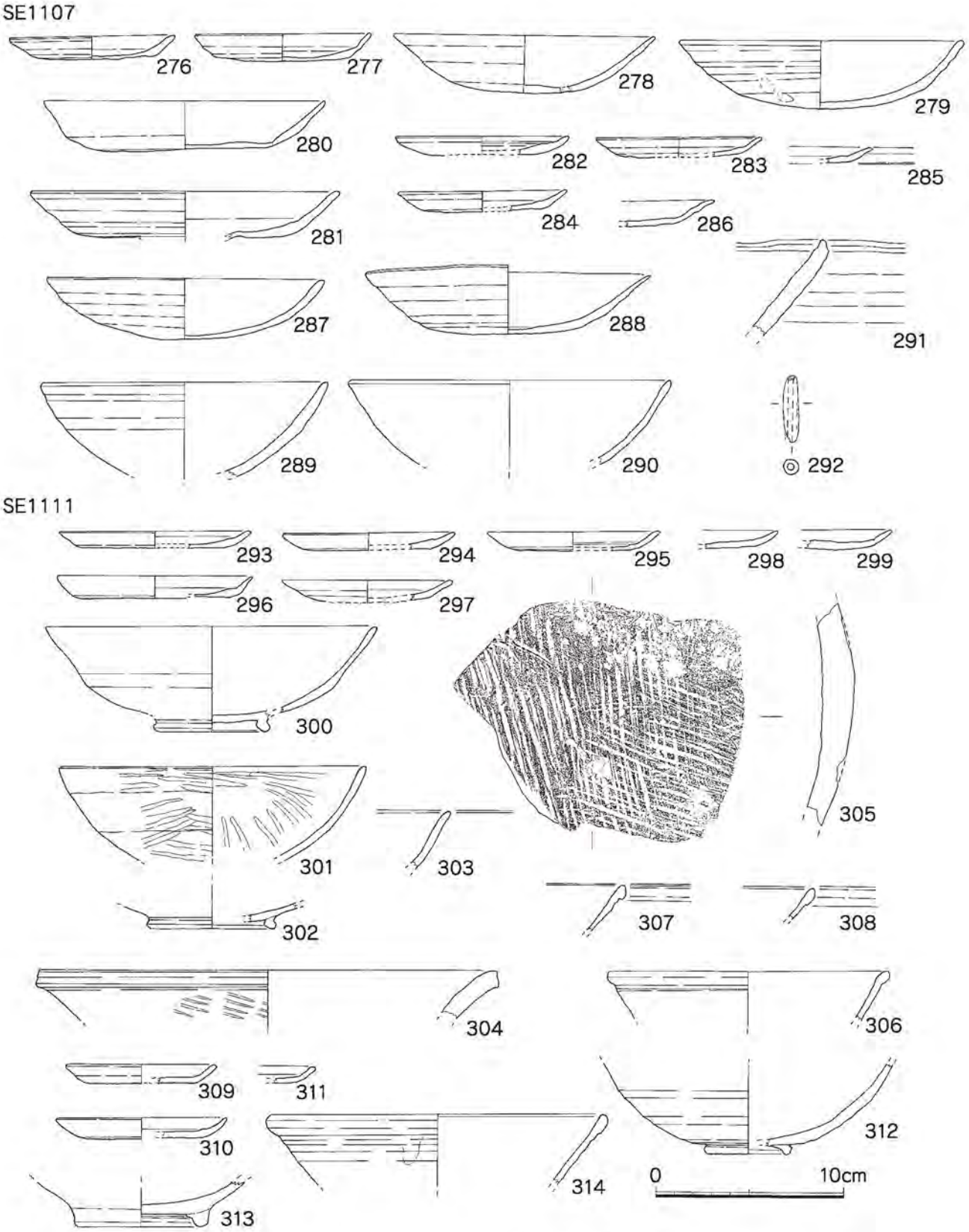
第５-34図　SD1110・1113・1230出土遺物（1/3、1/1）



第5-35図　SE1107・1111（1/40）

を測る。この部分が井戸底に残った井筒痕跡と思われる。上部堆積は自然であり、井筒は底にしかなかったのかも知れない。時期は出土遺物から11世紀中頃から12世紀前半頃である。

出土遺物　井筒内や掘方から中世前期の遺物が出土。**276～281**は井筒内出土の土師器。**276・277**は小皿。**276**はほぼ完存、**277**は一部欠損。口径8.8cm・9.6cm、器高1.3cm・1.6cmを測る。**277**は底部ヘラ切り後ナデ、体部はヨコナデ、内面はナデ。**278～280**は坏。**278**は1/3片、**279**は口縁一部欠、**280**はほぼ完存。口径14.1cm・15.1cm・15.0cm・器高3.1cm・3.8cm・2.7cmを測る。**278・279**は丸底坏。**281**は皿か坏で脚付の可能性あり。1/5片で口径16.6cmを測る。**278～281**の調整は、外底部ケズリ後ナデ、体部はヨコナデ、内底はナデ。胎土はいずれも精良。**282～292**は掘方出土。**282～285**は小皿。**282・283**は1/4片、**284**は1/6片、**285**は小片。**282～284**の口径は9.2cm・8.8cm・9.0cm、



第5-36図　SE1107・1111出土遺物（1/3）

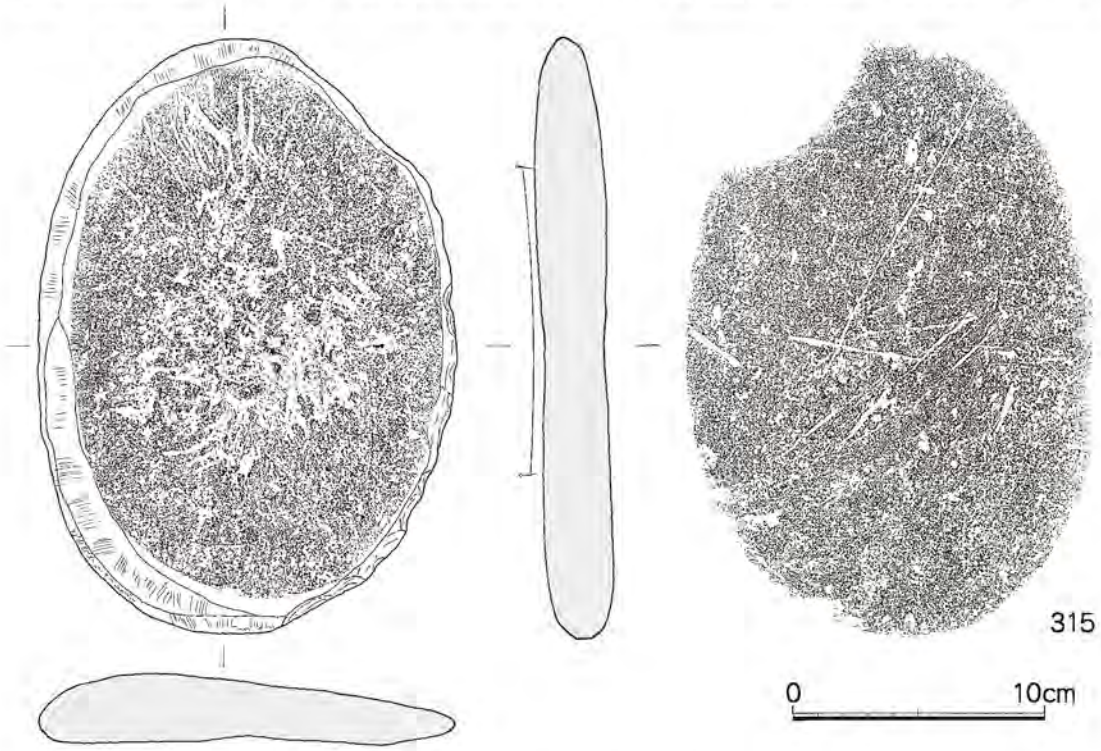
器高1.0cm・1.1cm・1.1cmを測る。3点の調整は不明だが、本来はナデと思われる。**284**は外底ヘラ切り、体部は回転ヨコナデ。**286**は皿の小片で調整は不明。**287**・**288**は丸底気味底部の坏2/3片。口径

14.8cm・15.1cm、器高3.3cm・3.7cmを測る。摩滅が進むが、外底部回転ヘラ切り、体部から内面はナデと思われる。**287**は胎土精良。**289**は椀か坏1/7片。口径15.3cmを測る。調整は体部外面ヨコナデ、内面丁寧なナデで平滑である。胎土は精良。**290**は瓦器椀口縁部小片。口径は約17cm。内外面にススが付着。胎土は精良、焼成は不良。**291**は中世須恵器の鉢口縁部小片。口縁部が黒ずみ、体部調整はヨコナデ。東播系か。**292**は管状土錘。下端欠損。長さ3.5cm、直径0.8cm、孔径0.3cmを測る。**315**は楕円形を呈す扁平な作業台石。径23.7×17.4cm、厚さ2.7cmを測る。上面や側面は敲き使用痕や擦り痕、下面には細い溝状の使用痕が多数残る。石材は圧力変成岩。**315**は井筒内出土。**282**・**285**・**288**～**291**は上層、**283**・**284**・**292**は下層出土。

SE1111（第5-35・36図、図版5-14-3・4、5-18）

第1面B5区で検出した隅丸方形を呈す井戸。掘方規模は長軸長2.00m、短軸幅1.83m、深さ1.50mを測る。砂礫層まで掘り込む。埋土は黒褐色粘質土、下層は粗砂礫となる。上面から0.25m下の面で井筒の掘り込みがある。井筒平面形は不整円形、おそらく桶などを積み上げた井筒と思われる。井筒内は黒色の粘土で下ほど軟質。時期は出土遺物から11世紀中頃から12世紀前半頃である。

出土遺物　井筒内・掘方から中世前期の遺物が出土。**293**～**306**は井筒内出土。**293**～**299**は土師器小皿。**296**は1/10片、**298**・**299**は小片、他は1/6片。口径は9.0～10.3cm、器高0.9～1.2cmを測る。**293**・**297**・**298**の外底部ヘラ切り後ナデ、体部ヨコナデ。**300**は椀口縁から底部。口径17.6cm、器高5.6cmを測る。体部ヘラミガキ、底部ナデ。胎土精良。**301**は瓦器椀口縁部1/5片。口径16.2cmを測る。内外面ナデ後粗いヘラミガキ。**302**は底部1/4片。底径6.8cmを測る。**303**は黒色土器A類椀小片。**304**・**305**は中世須恵器甕。**304**は口縁部1/5片。口径24.4cmを測る。ヨコナデ調整で、外面平行タタキ後ナデ。**305**は厚手の胴部。外面はナナメ・ヨコの粗いタタキでススが付着する。胎土精良。**306**～**308**は玉縁の白磁碗片。大宰府白磁分類Ⅳ類のもの。**306**は1/10片で口径15.0cmを測る。**293**・**296**・**303**・**305**は上層、他は下層出土。**309**～**313**は掘方出土。**309**～**311**は土師器小皿。**309**は1/5片、**310**は



第5-37図　SE1107出土石製品（1/3）

1/3片、**311**は小片。**309**・**310**は口径8.0㎝・9.2㎝、器高1.0㎝・1.1㎝を測る。**310**の外底部ヘラ切り。**312**・**313**は瓦器椀。**312**は1/6片。底径4.9㎝を測る。調整は外面ヨコナデ、内面は丁寧なミガキか。**313**は底部。底径7.2㎝を測る。調整はナデ。**313**は胎土精良。**314**は白磁碗口縁部1/10片、口径17.7㎝を測る。光沢のある乳白色釉が不均一にかかる。白磁碗Ⅳ類のもの。

④　土坑

SK1103（第5-38図、図版5-15-5）

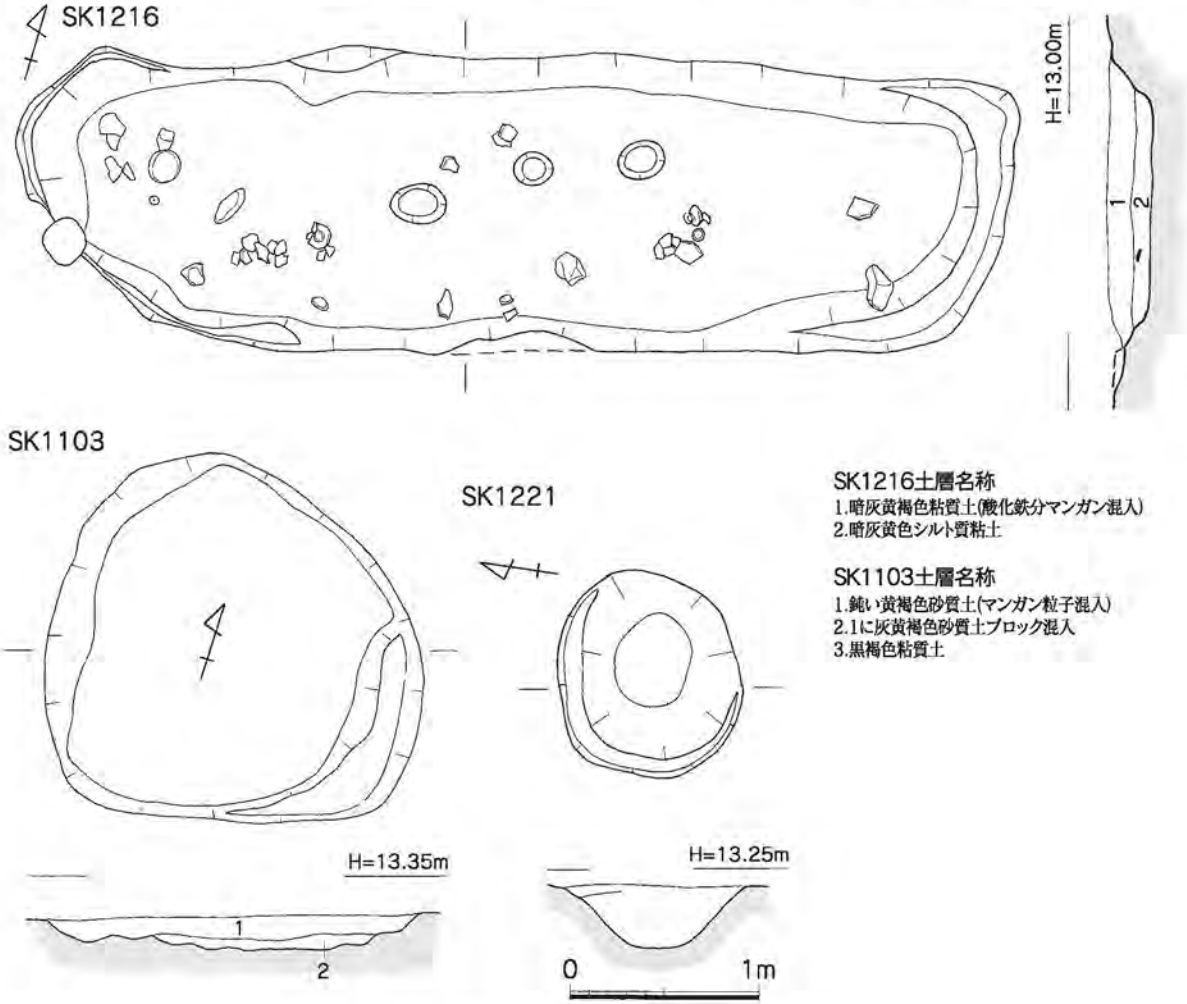
第1面C6区で検出した不整円形を呈す土坑。規模は東西長2.00m、南北長1.93m、深さ0.18mを測る。底面は凹凸がある。埋土は鈍い黄褐色粘質土。出土遺物から中世初期か。

出土遺物　弥生土器や黒色土器A類土器が少量出土。細片で図示出来ない。

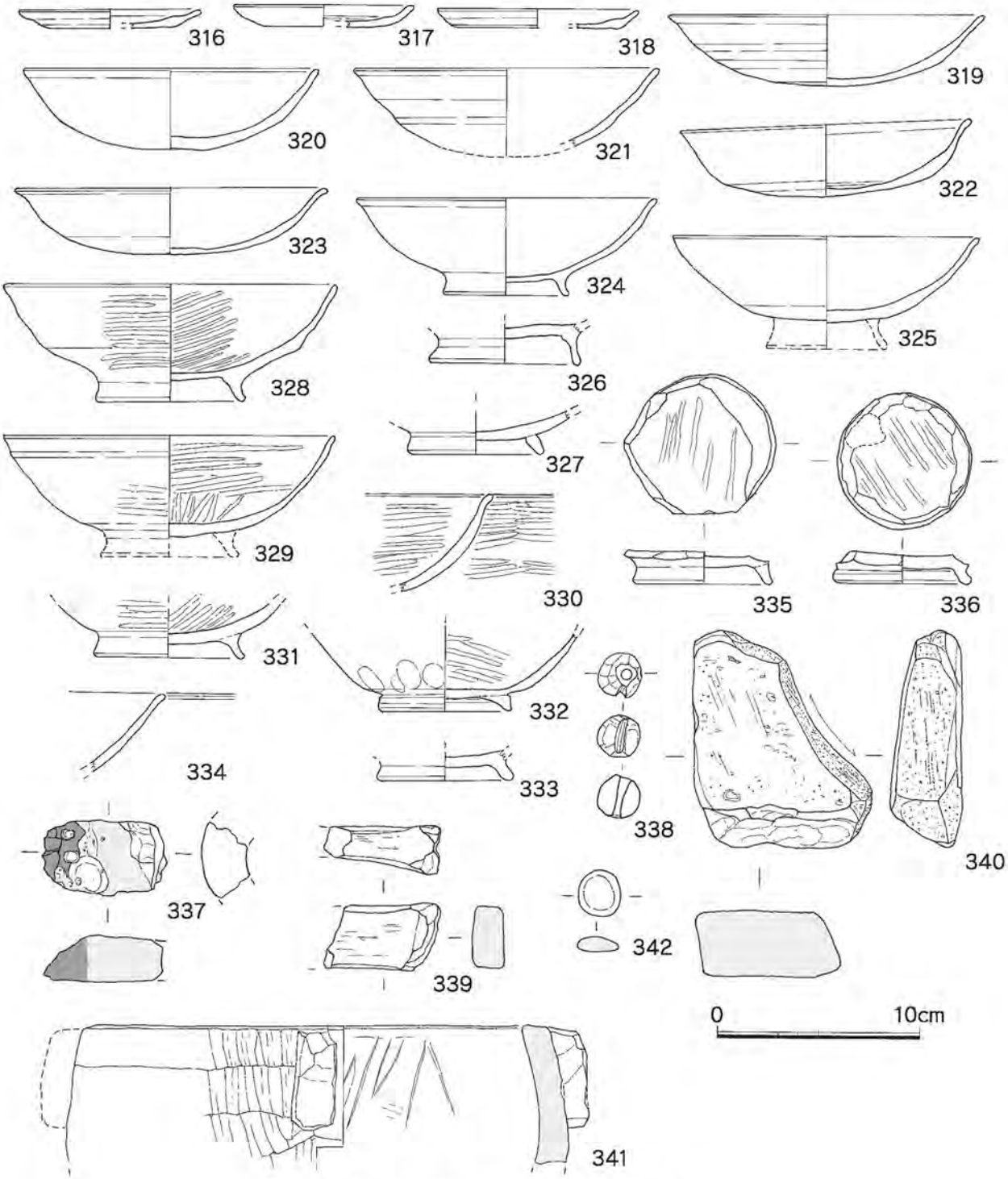
SK1216（第5-38・39図、図版5-15-1・2、5-18）

第1面C7区で検出した両端が丸味を持つ細長い土坑。規模は東西長5.25m、短軸幅1.58m、深さ0.23mを測る。東側にテラスを持つ。底面はほぼ水平で、短軸断面は逆台形を呈す。底面には古いピットを3基検出した。埋土は上層鈍い暗灰黄色粘質土、下層は暗灰黄色シルト質粘土である。底面から浮いた状況で、西側部分に遺物が出土した。

出土遺物　古代末から中世の土師器、黒色土器、青磁碗、鞴羽口、砥石、石鍋などと混入の弥生土器が出土。**316**～**327**は土師器。**316**～**318**は小皿。1/3～1/5片。口径9.0～10.0㎝、器高は0.9～



第5-38図　SK1103・1216・1221（1/40）



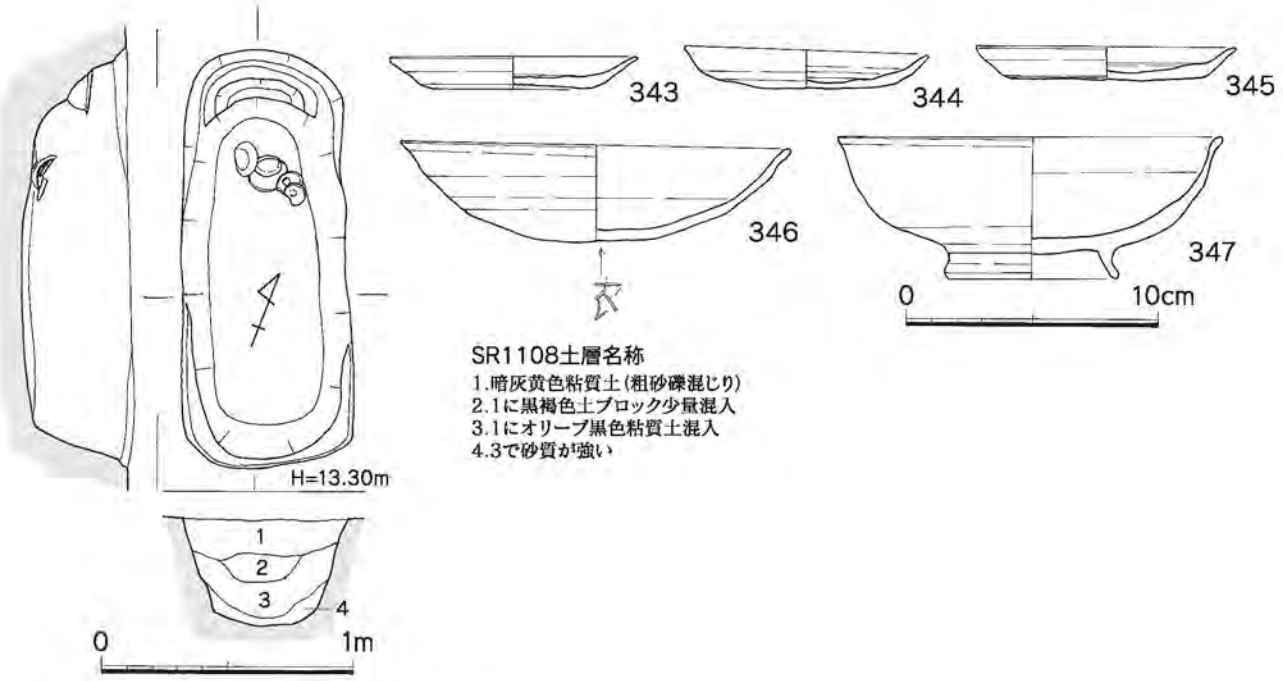
第5-39図　SK1216出土遺物（1/3）

1.0cmを測る。外底部は、**316**はヘラ切り後ナデ、**318**は板状厚痕残る。体部ヨコナデ、内底ナデ、胎土精良。**319**～**323**は丸底の坏。**319**・**323**は1/3片、**320**は1/10片、**321**は1/4片、**322**は完存。口径15.6cm・14.6cm・15.cm・14.3cm・15.4cm、器高3.5cm・4.0cm・推定4.4cm・3.8cm・3.3cmを測る。外底部は**319**・**322**がヘラ切り。体部調整は**320**が不明以外ヨコナデ、内底はナデ。**321**は口縁部外面被熱で赤変し、内面は黒化。**322**は内面黒化。**324**～**326**は椀。**324**は1/2片、**326**は底部。**324**・

325は口径14.8cm・15.0cmを測る。いずれも器壁は摩滅するが、**324**はナデかミガキ。**327**～**333**は黒色土器椀。**327**はA類底部。高台径6.7cmを測る。**328**～**332**はB類。**328**は1/4片、**329**は1/2弱片、**330**は口縁部小片、**331**は1/3片、**332**は1/2片、**333**は底部。**333**は瓦玉の可能性がある。口径は**328**・**329**は16.4cm、**328**の器高は5.8cm、底径は7.4cmを測る。底径は**331**は7.4cm、**332**は6.5cm、**333**は6.7cmを測る。調整は高台部ナデ、体部内外面へラミガキ、**330**は外面雑なミガキで指押さえ痕が残る。**328**は胎土精良。**334**は中国産青磁碗口縁部小片。**335**・**336**は黒色土器B椀底部を利用した瓦玉。**335**は直径7.6×6.8cm、**336**は6.7cmを測る。周縁は意図的に打ち欠く。上面はへラミガキ、高台面はナデ。いずれも胎土は精良。**337**は鞴羽口細片。残存長5.9cmを測り、直径は約7cmと推定する。使用により硬く締まっている。送風口部分は特に焼けガラス質が付着し黒化している。**338**は丸い土錘か。直径2.1cm、孔径0.4cmを測る。丁寧はナデ仕上げ。玉の可能性もあるが、孔の周りは少し欠け、側面にV字の刻みがあることから土錘とした。胎土・焼成良好。**339**・**340**は砥石。**339**は長方形の仕上げ砥石。残存長5.7cm、幅3.4cm、最大厚2.4cmを測る。使用面は上下・左右側面。石材は細粒砂岩。**340**は不定形で、断面は長方形を呈す。長さ10.7cm、幅8.9cm、厚さ3.5cmを測る。上下両面と右側面が使用され摩滅する。石材は砂岩。**341**は滑石製石鍋口縁部1/8片。口径約23cmを測る。口縁部にタテの耳が1カ所残る。外面ノミによるケズリ、内面ケズリ後研磨。外面ススが付着。**342**は黒の碁石か。直径2.3×2.1cm、厚さ0.7cmを測る。石材は粘板岩で、丁寧な研磨仕上げ。

SK1221（第5-38図）

第1面D6区で検出した楕円形状の土坑。長軸長1.12m、短軸幅0.93m、深さ0.35mを測る。埋土は灰オリーブ色粘質土。弥生土器細片が少量出土したが、時期は不明、近世以前であろう。



第5-40図　SR1108と出土遺物（1/30、1/3）

⑤　土壙墓

SR1108（第５-40図、図版５-15-3・4、５-18）

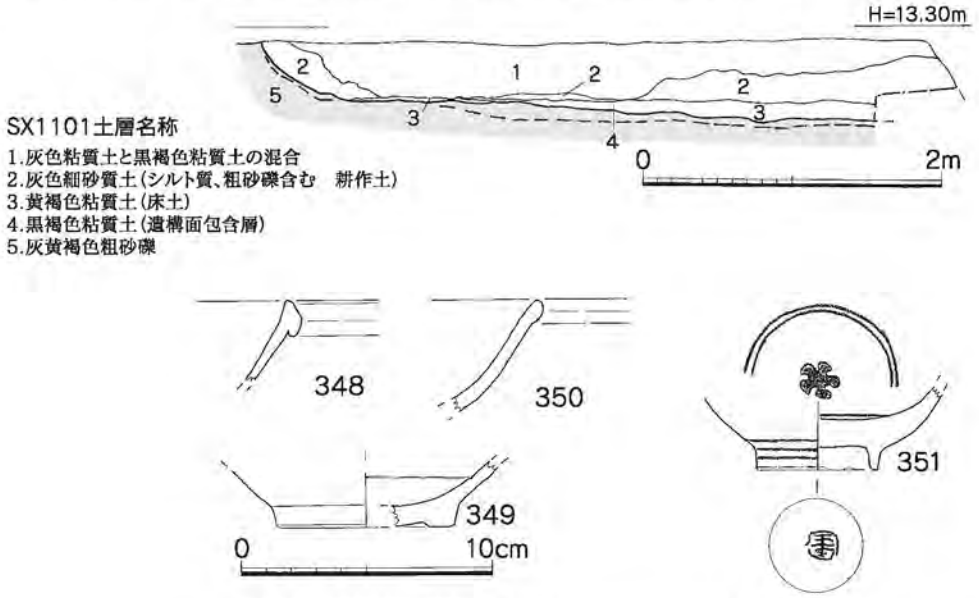
第１面Ｃ6区で検出した主軸をＮ-19°-Ｗに取る墓。平面形状は両端が丸い長方形を呈すが、南側が若干幅が広い。規模は上面で長軸長1.66ｍ、短軸幅は南側が広く0.68ｍ、北側が0.62ｍ、底面で長軸長1.23ｍ、幅は南側0.43ｍ、北側0.32ｍを測る。最大深さは0.43ｍである。北側に副葬品と思われる土師器類（小皿３、坏１、椀１）が床面よりやや浮いて、正位置でなく斜めや裏返しで出土した。埋土は上層が暗灰黄色粘質土、下層がオリーブ褐色粘質土混じりの暗灰黄色粘質土。釘などの出土はなく土層から見ても、木棺墓の可能性は少ない。ただ上面両小口部にテラス状の狭い段があり木蓋のあった可能性はある。また北枕とすれば、北側小口壁面に残る斜めの段は、埋葬時に人の頭を置く枕状施設の可能性がある。時期は大宰府土師器分類のⅫ期頃で、11世紀中～後半頃である。

出土遺物　副葬品以外、少量の弥生土器も混入する。**343**～**345**は小皿。**343**は1/3片、**344**は2/3片、**345**は完存。口径9.9・9.7・10.3㎝、器高1.3・1.8・1.3㎝を測る。調整は外底部ヘラ切り、体部ヨコナデ、内面ナデ。**346**は丸底の坏。完存で口径15.5㎝、器高4.1㎝を測る。調整は外底部ヘラ切り板状厚痕が残る。体部外面ヨコナデ、内面はナデ。外底にはヘラによる線彫りがある。字の可能性がある。**347**は完存の椀で、口径15.4㎝、器高5.7㎝、高台径6.8㎝を測る。調整は、体部は丁寧なナデかミガキ、高台部ナデ。口縁部は黒ずみ、黒色土器Ａ類の可能性もある。**343**・**345**は胎土精良。

⑥　段落ち出土遺物

SX1101（第５-41図）

第1面北東側際段落ち部、この部分は調査前まで同一の耕地として利用されていた。埋土は灰色粘質土と黒褐色粘質土ブロック混合土で、下層は灰色細砂質の水田土となる。耕地整理以前の水田地であろう。**出土遺物**にはガラス瓶など近代の遺物を含む。中世以降のものを図示する。**348**・**349**は白磁碗Ⅳ-1a類碗。**348**は玉縁口縁小片。光沢を持つ灰色釉がかかる。**349**は底部1/3片。底径7.1㎝を測る。底部は露胎で削り出し。**350**は中国産青磁碗口縁部小片。オリーブ灰色釉が厚めにかかり、細かい貫入が入る。15世紀明代のもの。**351**は肥前磁器染付碗底部2/3片。高台径4.8㎝を測る。見込みはコンニャク印判の五弁花、高台内に銘款が入る。18世紀後半。



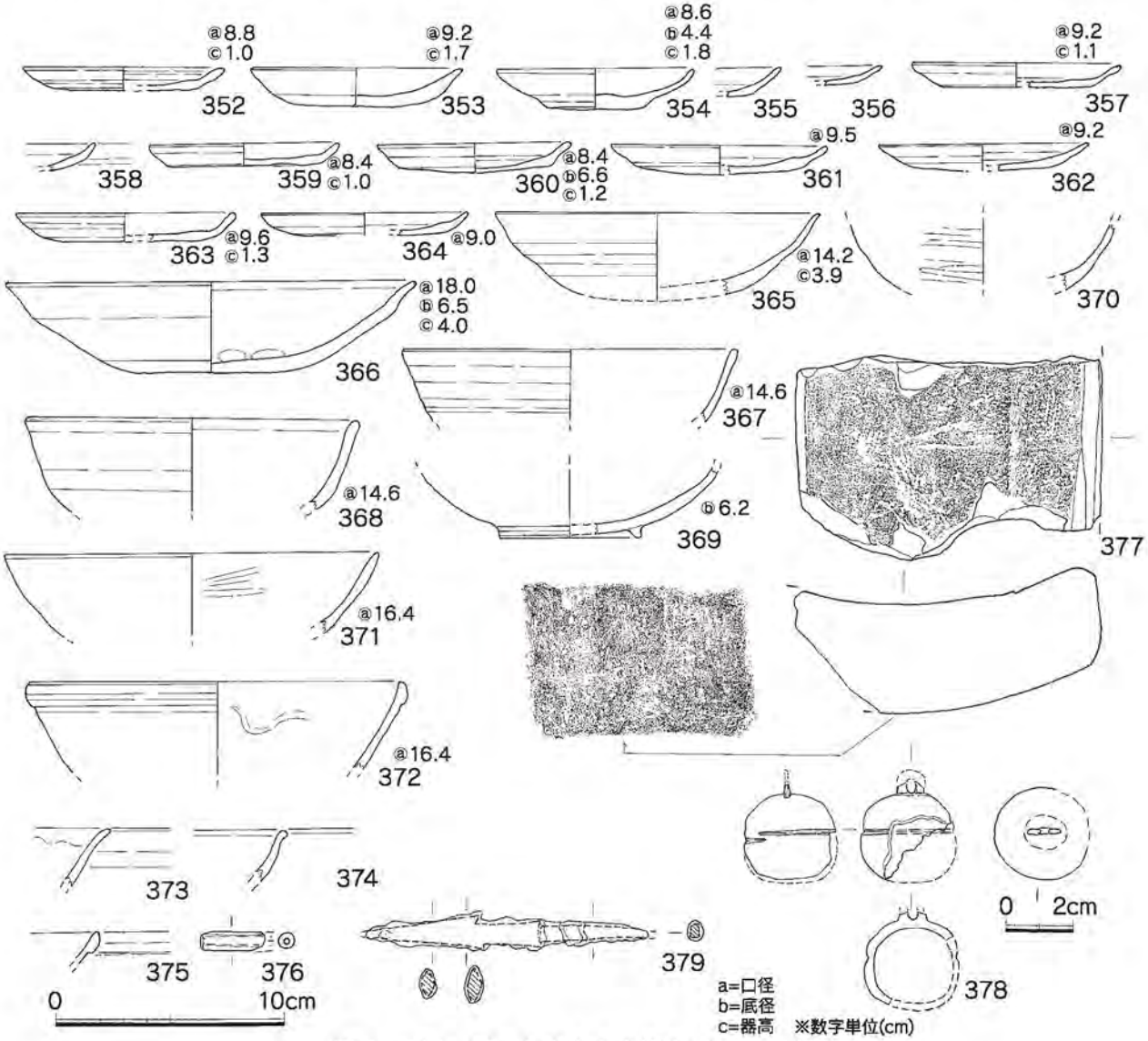
第５-41図　段落ちSX1101土層と出土遺物（1/50、1/3）

5）各時期ピット・遺構面出土遺物

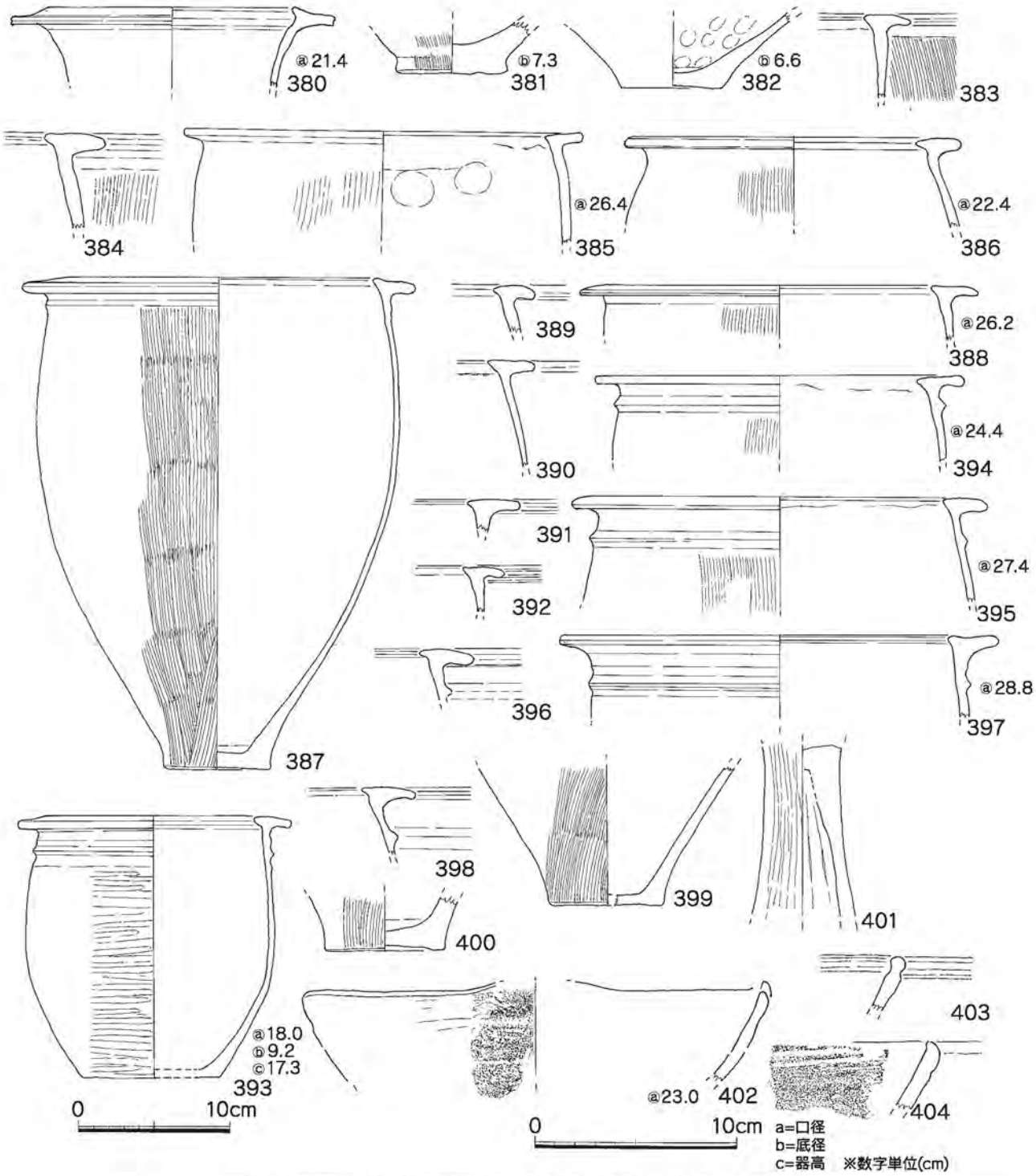
① ピット出土遺物（第5-42・43・45図、図版5-11-5・6、5-13-5、5-18）

各面で弥生時代から中世にかけての多数のピットを検出した。法量は図中に示す。

352～**379**は古代から中世前期のもの。**352**～**369**は土師器。**352**～**364**は小皿。**352**はSP1121出土。**353**は丸底気味。SP1144出土。**354**は口縁が開く形態。胎土精良。SP1182出土。**355**・**356**は口縁部小片。**352**～**356**は器壁の調整は不明。胎土精良。**355**はSP1187出土。**356**はSP1237出土。**357**は底部糸切りで板状圧痕残る。胎土精良。SP1244出土。**358**は小片。調整はナデ、胎土精良。SP1381出土。**359**・**360**は外底部板状圧痕が残る。**360**の胎土精良。**359**はSP1411出土。**360**はSP1455出土。**361**・**362**はやや丸底。**361**はヘラ切りで板状圧痕らしき痕跡残る。SP1480出土。**362**は器壁の調整不明。SP1547出土。**363**の器壁は摩滅するが、外底部ヘラ切りか。第2面SP1887出土。**364**は外底部ヘラ切り。体部から内底はヨコナデとナデ。第2面SP1953出土。**365**・**366**は坏。**365**の器壁はナデ調整か。胎土精良。SP1272出土。**366**は丸底の深い坏か大皿。外底部板状圧痕が残る。体部ナデ調整。SP1516出土。**367**～**369**は椀。**367**・**368**は口縁部片。**367**はSP1172出土。**368**はSP1545出土。**369**は底部片でSP1340出土。**368**・**369**はナデ調整。いずれも胎土精良。**370**は黒色土器B椀体部片。内外面ヘラミガキ。SP1157出土。**371**は瓦器椀。焼成は不良で摩滅がある



第5-42図 ピット出土中世遺物（1/3、1/2）

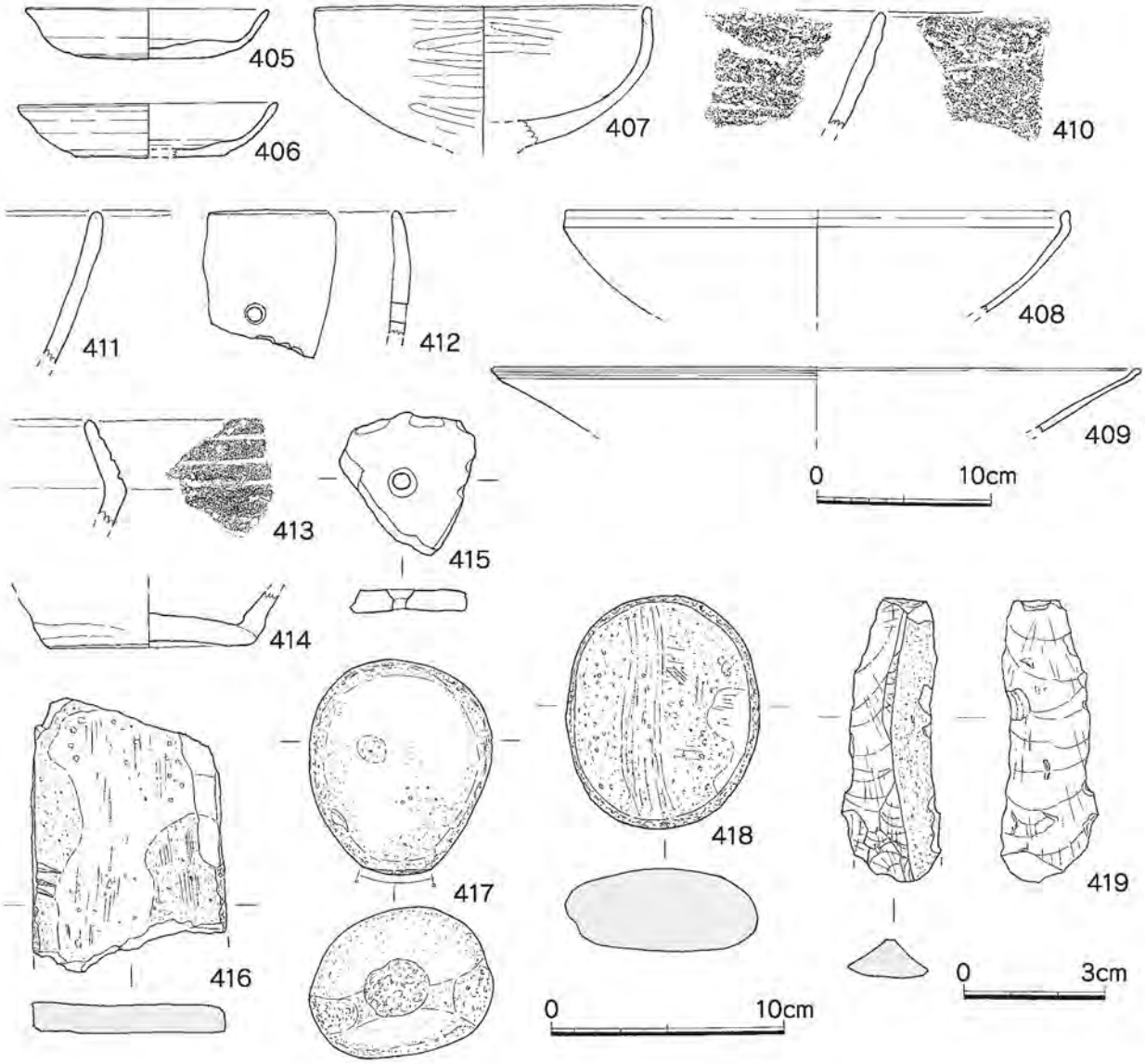


第5-43図　ピット出土縄文～弥生時代遺物（1/4、1/3）

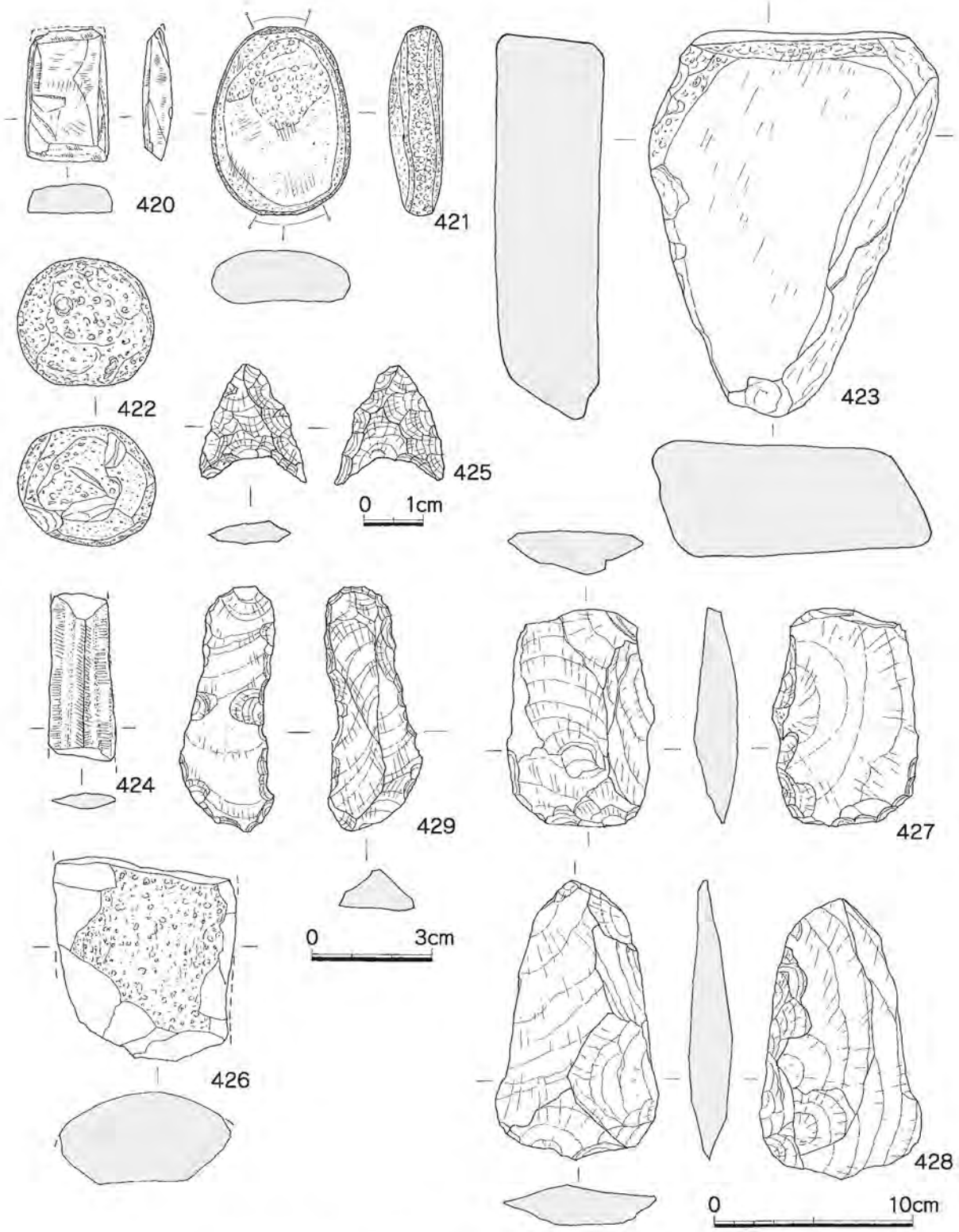
が、内面はヘラミガキか。胎土精良。SP1241出土。**372**～**375**は中国産白磁。**372**はⅣ類碗で光沢を持つ灰オリーブ釉が厚めにかかる。SP1281出土。**373**は皿か碗の小片。SP1514出土。**374**は二次的に火を受け釉がはじけ、表面は荒れる。SP1162出土。**375**は玉縁口縁で乳白色がかった透明釉がかかる。SP1132出土。**376**は管状土錘。断面は略円形で、残存長2.7㎝、長径0.8㎝、孔径は0.3㎝を測る。調整は不明。SP1341出土。**377**は土師質の瓦片。厚手で残存長8.9㎝、幅13.5㎝、厚さ4.7㎝を測る。凹面布目痕、凸面縄目叩き痕が残る。怡土城の瓦で、当地に持ち込まれ、柱穴根石替りに使用されたもの。胎土は粗砂を多く含み重い。第２面SP1949出土。**378**は銅製鈴。下部1/3を欠損。下膨れの丸い形態で、上部に鈕が付き、体部中央に1条の沈線が一周する。径は2.7㎝、残存高2.7㎝を測る。SP1773根石下から出土。地鎮具であろう。**379**は大型の鉄鏃か。両端は欠損し残存長12.4㎝

を測る。錆がひどく、X線写真で見る形状では二段の逆刺がつく。第２面SP1971出土。

380～**401**は弥生時代中期須玖Ⅰ～Ⅱ式期の土器。**380**～**382**は壺。**380**は鋤形口縁壺。色調は黒褐色を呈し、調整はナデ。SP1330出土。**381**・**382**は壺底部。**381**は厚手で、外面調整はハケ目、内面はナデ。SP1405出土。**382**は調整ナデで内面指押さえ痕が残る。SP1533出土。**383**～**400**は甕。**383**・**384**は口縁部小片で、外面タテハケ目、調整は口縁部ヨコナデ、内面ナデ。**383**はSP1261出土。**384**はSP1268出土。**385**～**388**の調整は外面ハケ目、口縁ヨコナデ、内面はナデ、口縁部ヨコナデ。**385**の内面は斜めナデで、焼成は不良。SP1469出土。**386**は内面粘土の継ぎ目が残る。SP1555出土。**387**は破片から全体を復元。SP1621出土。**388**はSP1727出土。**389**～**392**は口縁部小片。全体に摩滅するが、**389**はナデ調整、**391**は丹塗り痕残る。**389**・**390**はSP1656、**391**は第２面SP1837、**392**は第２面SP1799出土。**393**は精製の小型甕。胴部外面ヨコヘラミガキ、口頸部ヨコナデ、内面丁寧で平滑なナデ。胎土精良。SP1615出土。**394**～**398**は頸部に三角突帯が1条巡る。**394**



第５-44図　遺構面出土遺物（1/4、1/3、2/3）



第5-45図　ピット・遺構面出土遺物（1/3、2/3、1/1）

～398の器壁調整は、**394・395**が胴部外面タテハケ目以外ナデ、口縁部ヨコナデ、内面はナデ。**396～398**は調整不明。**394**はSP1470、**395**はSP1533、**396**はSP1433、**397**は第２面SP1887、**398**はSP1656出土。**399・400**は甕底部。**400**は上げ底。いずれも調整は外面ハケ目、内面ナデ。**399**は内底にススが付着する。**399**はSP1261、**400**は第２面SP1912出土。**401**は高坏脚筒部。外面摩滅が進むがタテヘラミガキ、内面ナデでしぼり痕が残る。SP1537出土。**402～404**は縄文時代晩期の鉢口縁部。**402**の口縁部は山形と思われる。調整は外面粗い条痕、内面ナデ。**403**は精製の鉢か。**404**の内面は条痕。**402**は第２面SP1100、**403**はSP1279、**404**はSP1622出土。

420は磨製の扁平片刃石斧。使用により一部欠損。長さ6.7㎝、幅4.0㎝、厚さ1.5㎝を測る。石材は頁岩。表面は擦痕が残る。第２面SP1902出土。**421**は楕円の扁平な磨石兼敲石。長さ9.5㎝、幅7.0㎝、厚さ2.7㎝を測る。両端部は敲き使用面、側面敲打調整痕残る。石材は玄武岩。第２面SP1887出土。**422**は石球。径6.9×6.4㎝、高さ6.0㎝を測る。表面敲打痕が残る。石材は安山岩。SP1478出土。**423**は根石。長さ19.3㎝、幅14.6㎝、最大厚5.9㎝を測る。上下両面粗い擦りで使用面。側面も軽く擦られている。作業台石を転用したものか。石材は花崗岩。SP1497出土。**424**は磨製石剣片。残存長8.4㎝、最大幅3.4㎝を測る。表面は擦痕が残る。石材は粘板岩。SP1579出土。**425**は黒曜石石鏃。凹基で長さ2.0㎝、幅1.8㎝、厚さ0.3㎝を測る。第２面SP1834出土。**429**は黒曜石の縦長剥片。長さ6.1㎝、幅2.3㎝、厚さ1.0㎝を測る。側面と端部は二次調整を施す。第２面SP1986出土。

② 遺構面出土遺物（第５-44・45図、図版５-18、５-22）

405・406は第２面Ｂ5区出土。土師器小皿4/5片・1/4片。口径10.4㎝・11.2㎝、器高2.2㎝・2.3㎝を測る。外底部ヘラ切り後ナデ、体部ヨコナデ。胎土精良。**407**は第1面Ｂ6区。内外面丹塗りの鉢1/4片。口径14.4㎝を測る。体部から内面はヘラミガキ。胎土精良。**408～412**は縄文晩期の土器。**408・409**は精製浅鉢。**408**は第１面Ａ5区出土。1/8片で口径28.8㎝を測る。**409**は第２面Ｂ6区出土。1/12片で口径37.0㎝を測る。**408・409**の調整は不明。**410～412**は縄文時代晩期深鉢口縁。**410**は１Ａ・1C区の境界で出土。**411**は第２面Ｂ6区遺構面出土。精製の鉢。**412**は第２面B6区遺構面出土。補修孔のある口縁部。粗い条痕が残る。**413**は縄文グリッド２区出土の御領式土器の精製浅鉢口縁で、外面に三条の沈線が巡る。**414**は第２面Ｂ８区出土。縄文土器底部。底径9.2㎝を測る。**415**は第２面Ａ8区遺構面出土。補修孔のある縄文土器片。**416**は板状の仕上げ砥石片。石材は粘板岩。残存長11.7㎝、幅8.3㎝、厚さ1.3㎝を測る。右側面は粗割面と上端部が敲打調整面、下端部の欠損面以外使用面。**417**は卵形の敲石。長さ9.2㎝、幅7.9㎝、厚さ6.3㎝を測る。表面は使用で滑らか、下端は敲打使用で潰れ、側面に敲打痕が残る。石材は火成岩(花崗岩系か)。**416・417**は第１面Ｃ6区遺構面出土。**418**は楕円形状の扁平な磨石兼敲石。長さ10.0㎝、幅8.3㎝、最大厚3.6㎝を測る。両面は擦りで側面は敲打調整痕が残る。石材は砂岩。第１面Ｂ6区遺構面出土。**426**は磨製石斧欠損品。残存長10.3㎝、幅9.2㎝、厚さ4.6㎝を測る。表面は敲打調整痕が残る。石材は玄武岩。第1面Ｂ9区遺構面下出土。**427・428**は打製石斧。**427**は玄武岩剥片を利用した短冊形で、長さ11.0㎝、幅7.1㎝、最大厚2.2㎝を測る。刃部は両面の二次調整で作り出す。**428**は撥形で長さ14.0㎝、幅8.3㎝、厚さ2.1㎝を測る。玄武岩の粗割した剥片に雑な二次調整を加えている。**427・428**は第２面Ｃ6区遺構面出土。**419**は黒曜石の縦長剥片か削器。長さ6.1㎝、幅2.2㎝、厚さ0.7㎝を測る。

3. まとめ

1A区で検出した遺構の主な時期は４時期にまとめることが出来る。

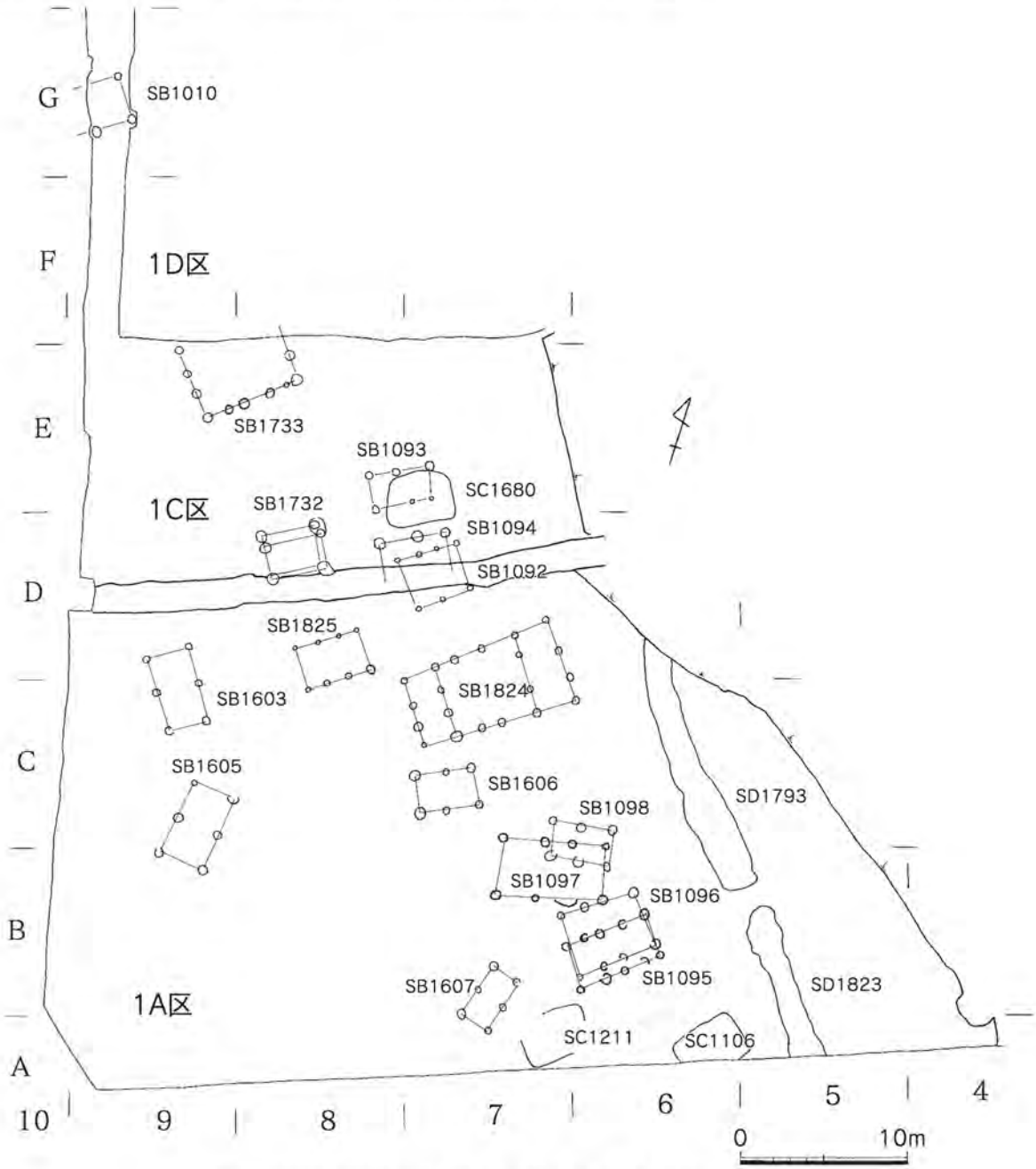
Ⅰ期は縄文時代晩期前半頃の時期。遺構は竪穴住居SC1990と埋甕SX1235で、遺構の数は少ない。同時期の遺構・遺物は周辺の周船寺遺跡などでも確認されている。

Ⅱ期は弥生時代中期前半から後半の須玖Ⅰ式からⅡ式頃の時期。遺構としては竪穴住居SC1106・1211、建物SB1603・1605～1607・1824・1825・1095～1098、溝SD1793・1823と多数の土坑群、ピット、土器溜りSX1232など数多く検出されている。

Ⅲ期は古墳時代前期後半。遺構は竪穴住居SC1826１棟で少ない。

Ⅳ期は中世初め、11世紀後半から12世紀前半。建物SB1604・1608～1610・1099と井戸SE1107・1111、溝SD1230、土坑SK1103・1216、土壙墓SR1108である。５棟の建物の主軸はSD1230に一致する。

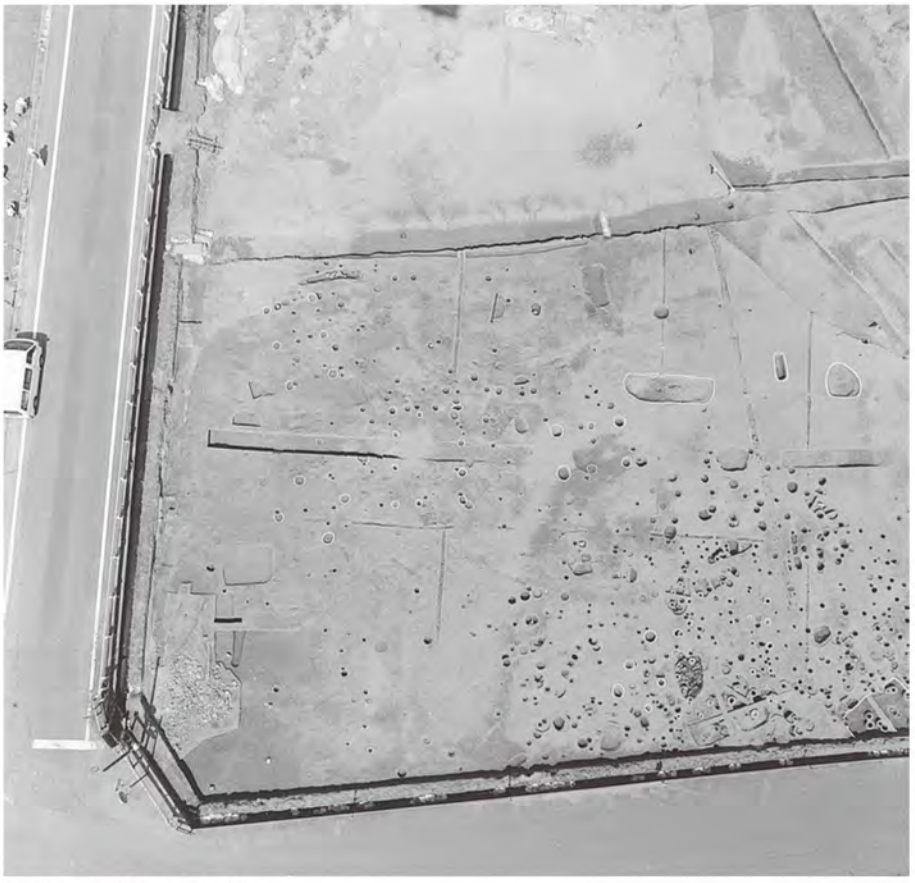
最期に特筆すべきこととして第５-46図に示したように弥生時代中期集落の状況である。南北に延びる微高地上に立地する掘立柱建物が主体の集落であり、集落の東側に南北に延びる溝が二条ある。溝は間をあけて続き、空いた部分が集落の入口と思われる。入口部分の正面には建物があり、入口を押える施設の可能性がある。恐らく周船寺川方面から進入を意識したものであろう。柱穴は各面で多数検出し、建物としては充分に復元出来なかったが、復元出来た建物では、主軸方向が溝の方向に一致するもの、しないもので、4時期に分類出来る。土器溜りSX1235の土器は須玖Ⅰ式～Ⅱ式期と時期幅があり、建物群の時期幅を反映するものと考える。



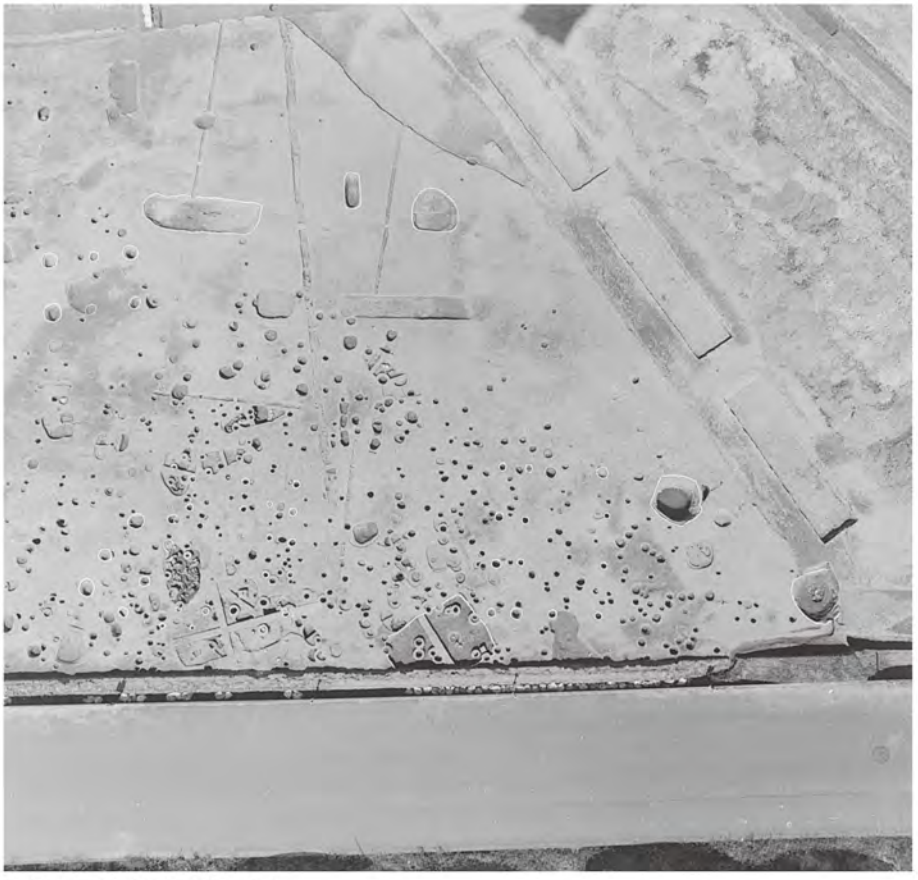
第５-46図　弥生時代集落（建物・溝）配置図（1/400）

1.1A区第1面全景（上から）

2.1A・1C区第1面全景（上から）



1.第１面西側（上から）

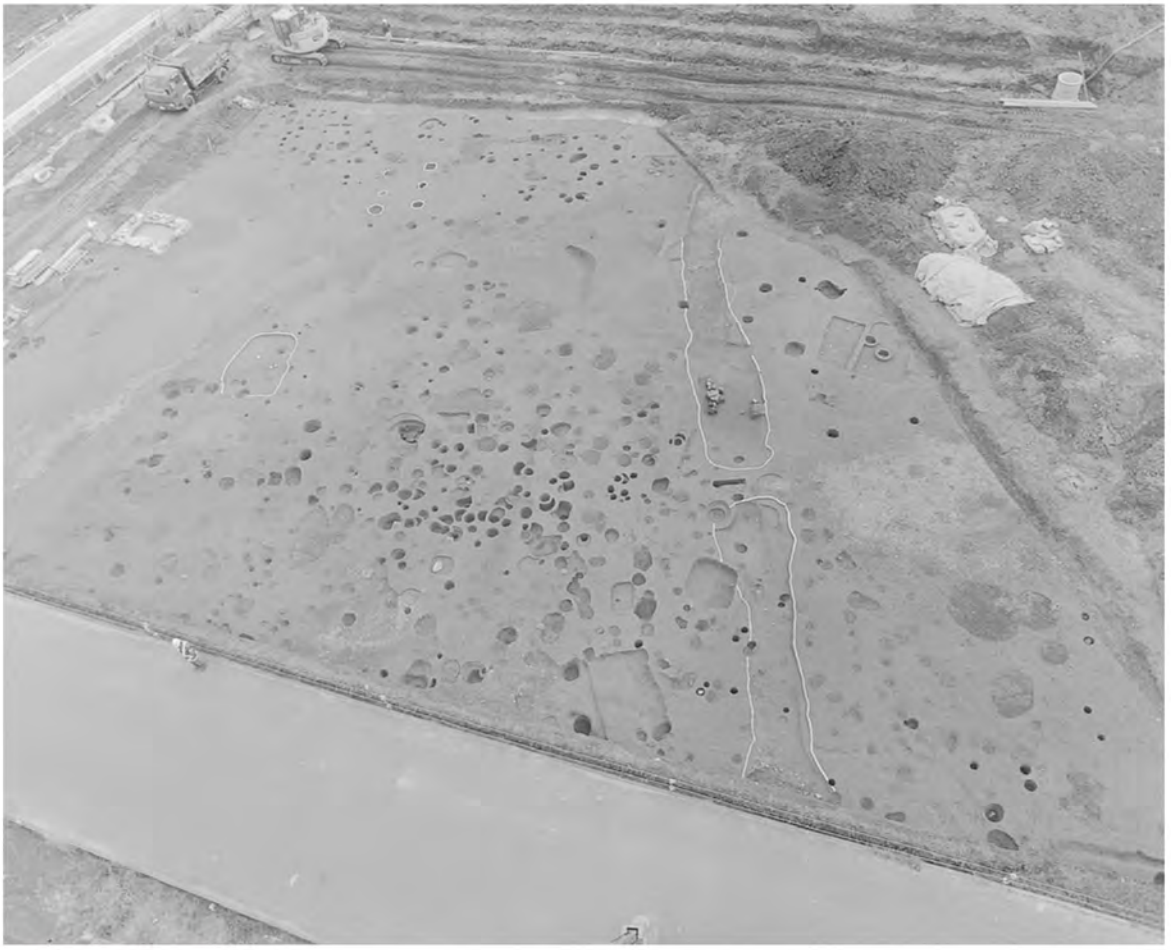


2.第１面南東側（上から）

1.第１面中央部遺構検出状況（上から）

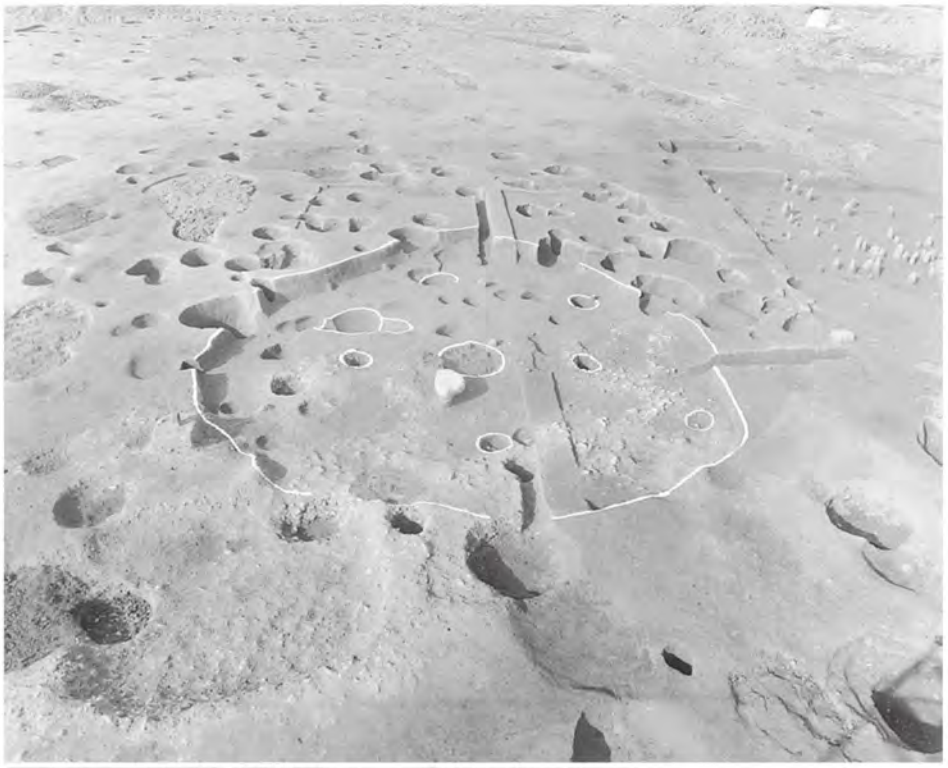
2.第２面全景（西から）

図版5-4



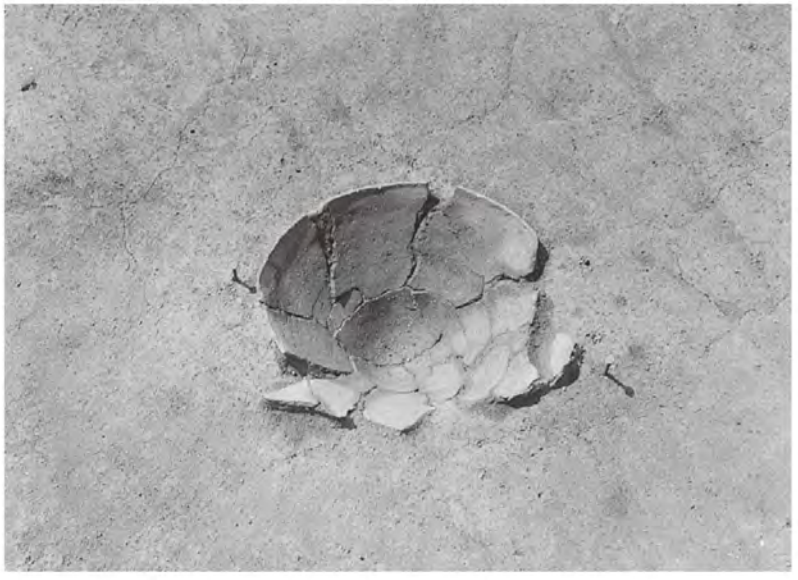
1.第２面全景（南西から）

2.同　北側遺構検出状況（西から）



1.SC1990（南から）

2.同　炉跡（東から）

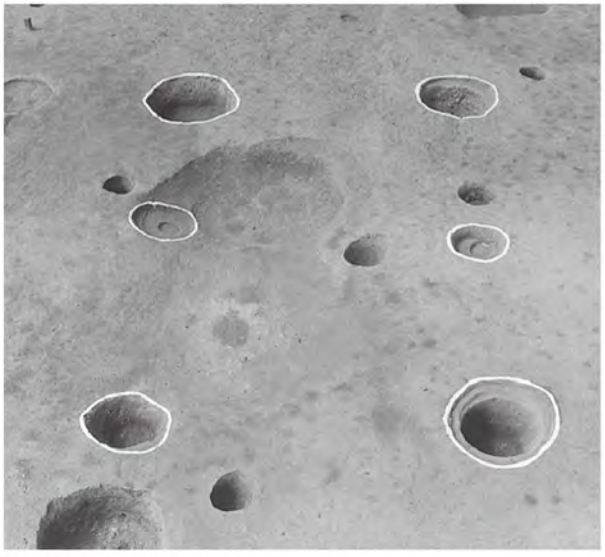


3.埋甕SX1235

図版5-6

1.SB1603（東から）

2.SB1605（南から）



3.SB1606（東から）

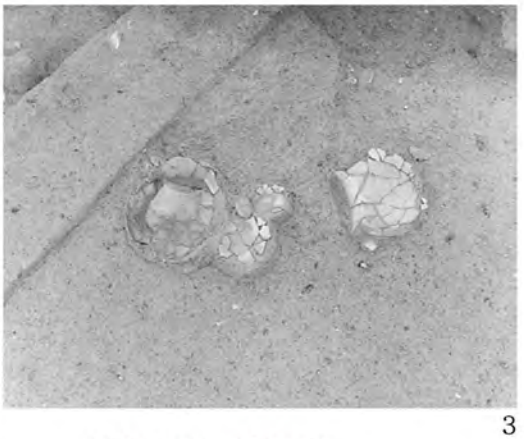
4.SB1607（西から）

5.SB1825（南から）

6.SB1096（南東から）

1

2



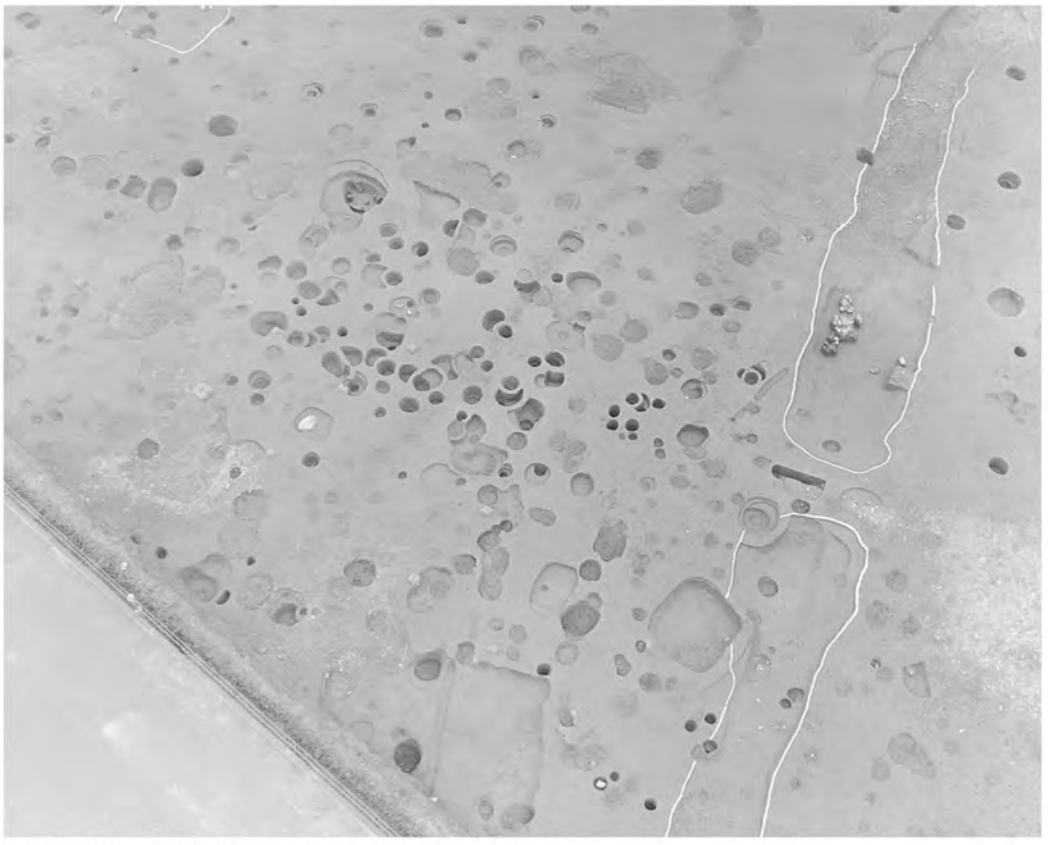
3

1.SC1106（北西から）
2.SC1211（北西から）
3.同 遺物出土状況（南西から）
4.SC1826（西から）
5.同 遺物出土状況（南西から）

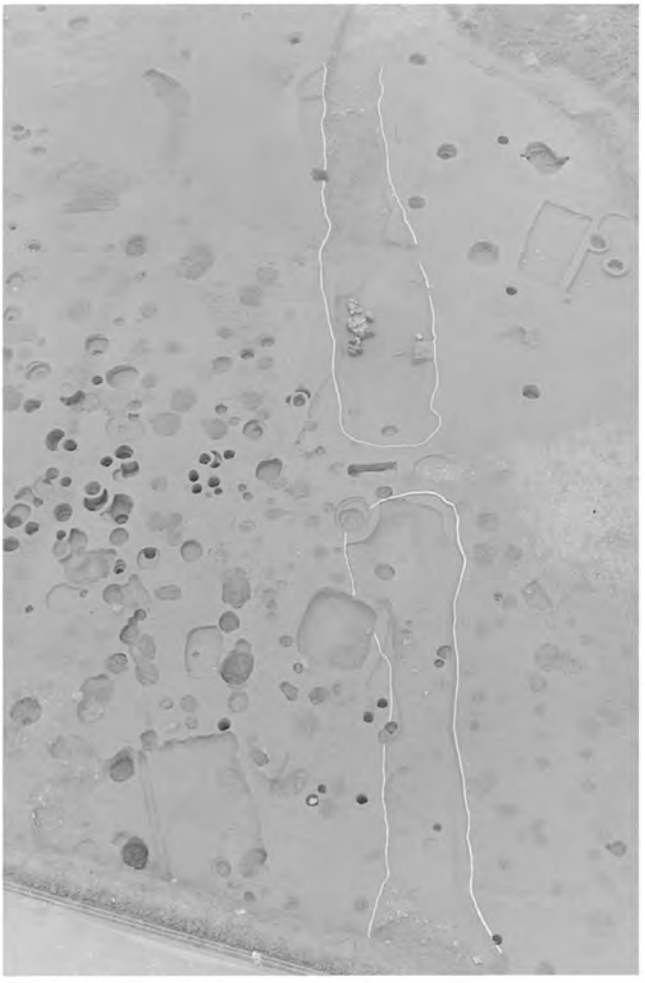
4

5

図版5-8

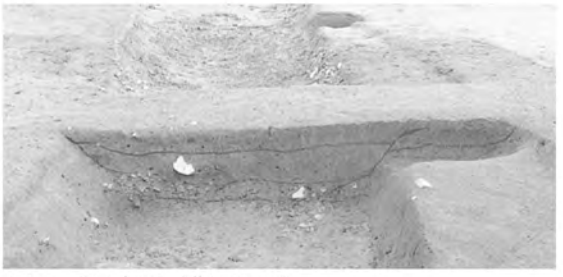


1.SD1793・1823と西側柱穴群（南から）



2.SD1793・1823（南から）

3.SD1793遺物出土状況



4.同　1号土層（北西から）

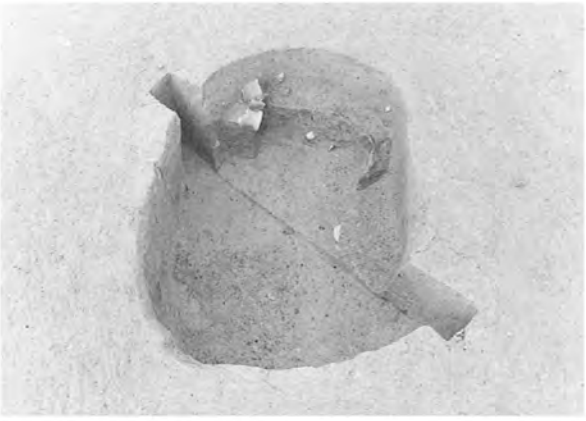
5. SD1823土層（北から）

1.SK1787（南から）

2.同　遺物出土状況（東から）

3.SK1859遺物出土状況（北から）

4.SK1859完掘（南から）



5.SK1792（南東から）

図版5-10

1

2

3

4

5

6

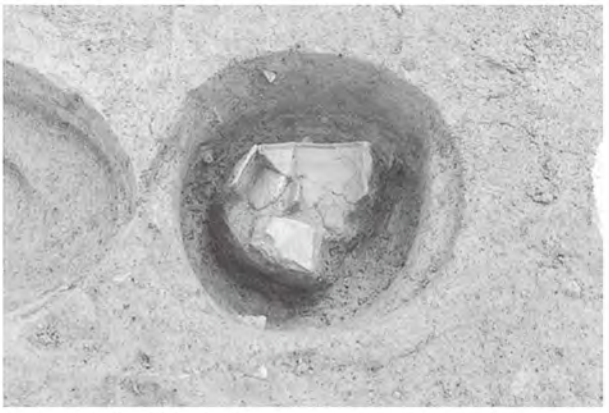
7

1.SD1587（北から）
2.SK1112（南東から）
3.SK1212遺物出土状況（南から）
4.SK1212（東から）
5.同　完掘（東から）
6.SK1220（東から）
7.SK1236（東から）

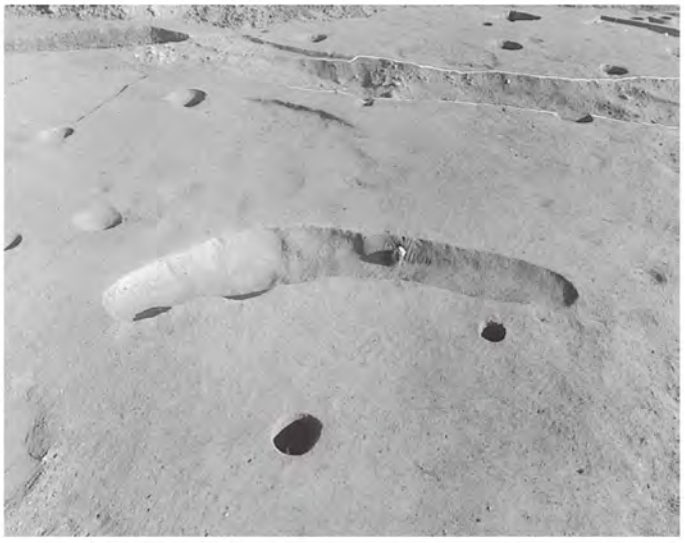
1.SK1363（北東から）

2.SK1731・SP1258（東から）

3.SK1822（西から）



5.SP1615（北西から）



4.SK1788（西から）

6.SP1537（東から）

図版5-12

1

2

3

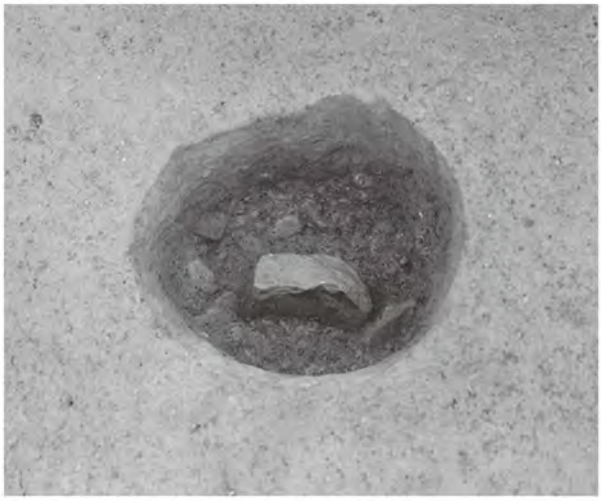
1.SX1232（北東から）
2.同　西側（北から）
3.同　東西断面（南から）

1.縄文グリッド遺物出土状況（南から）

2.SB1604（北から）

3.SB1608・1609（北から）

4.SB1610（北から）



5.SP1949怡土城瓦出土状況（北から）

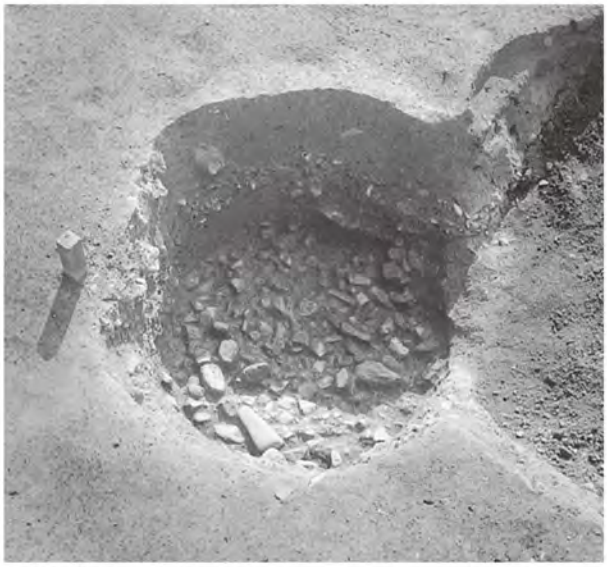
図版5-14

1.SE1107遺物出土状況（北から）

2.SE1107（北から）

3.SE1111井筒状況（東から）

4.SE1111完掘状況（南から）



5.SK1611（北から）

6.SD1230遺物出土状況（東から）

1.SK1216（西から）

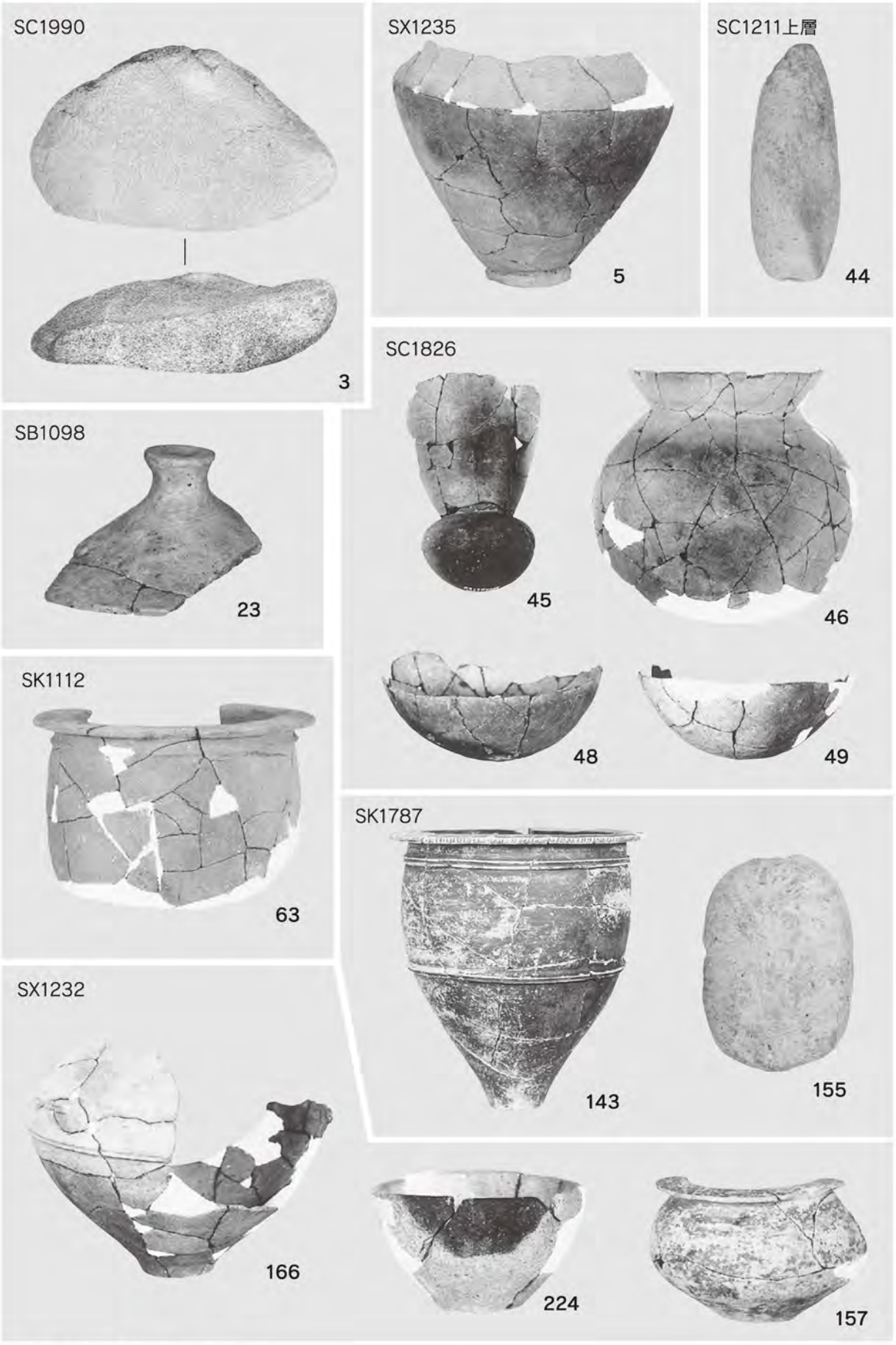
2.同　遺物出土状況（北から）

3.SR1108（南から）

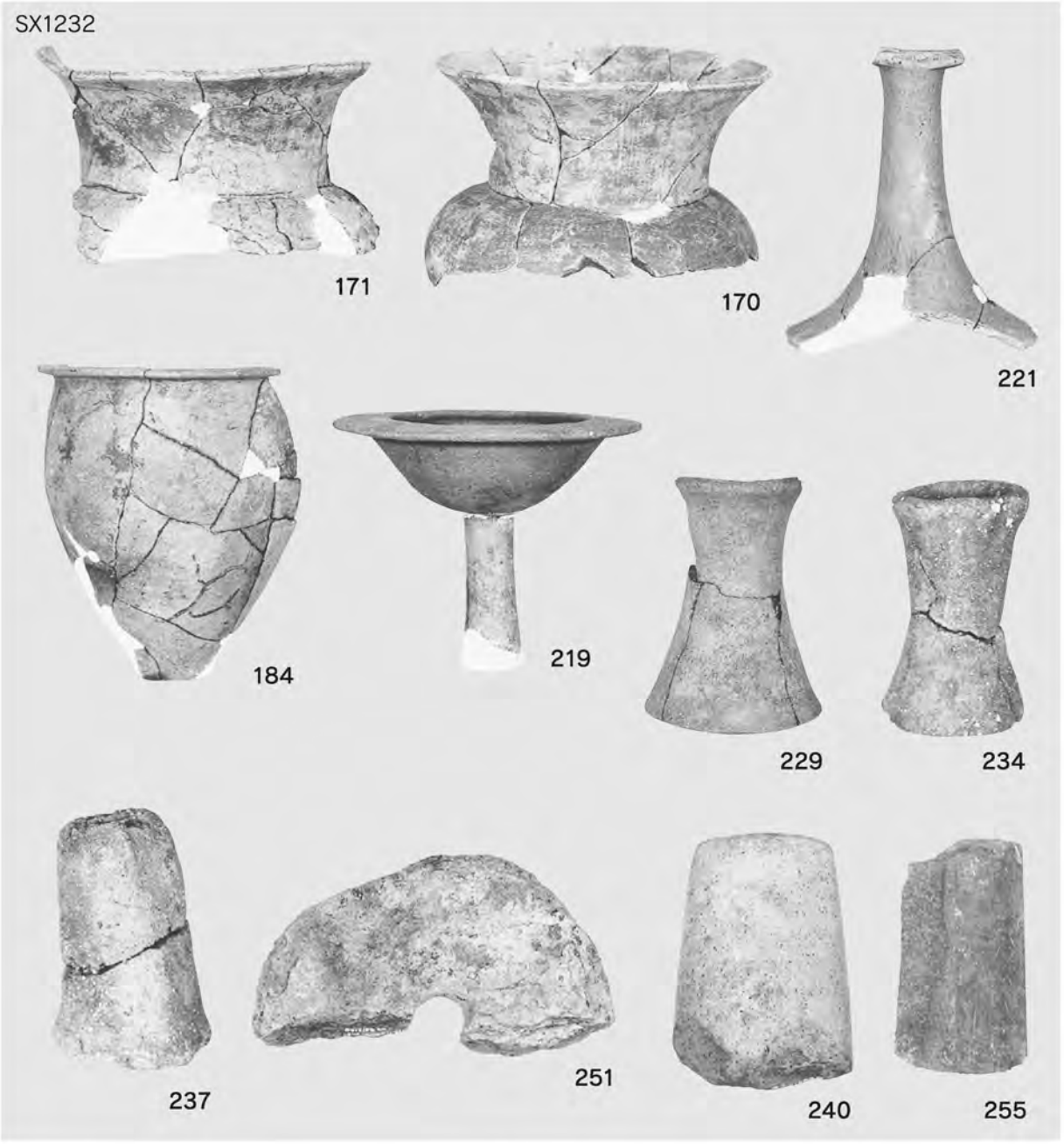
4.同　遺物出土状況（南から）

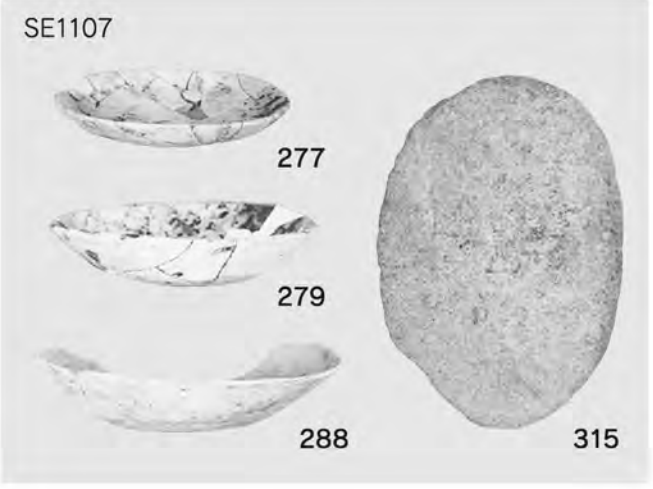
5.SK1103（北から）

図版5-16



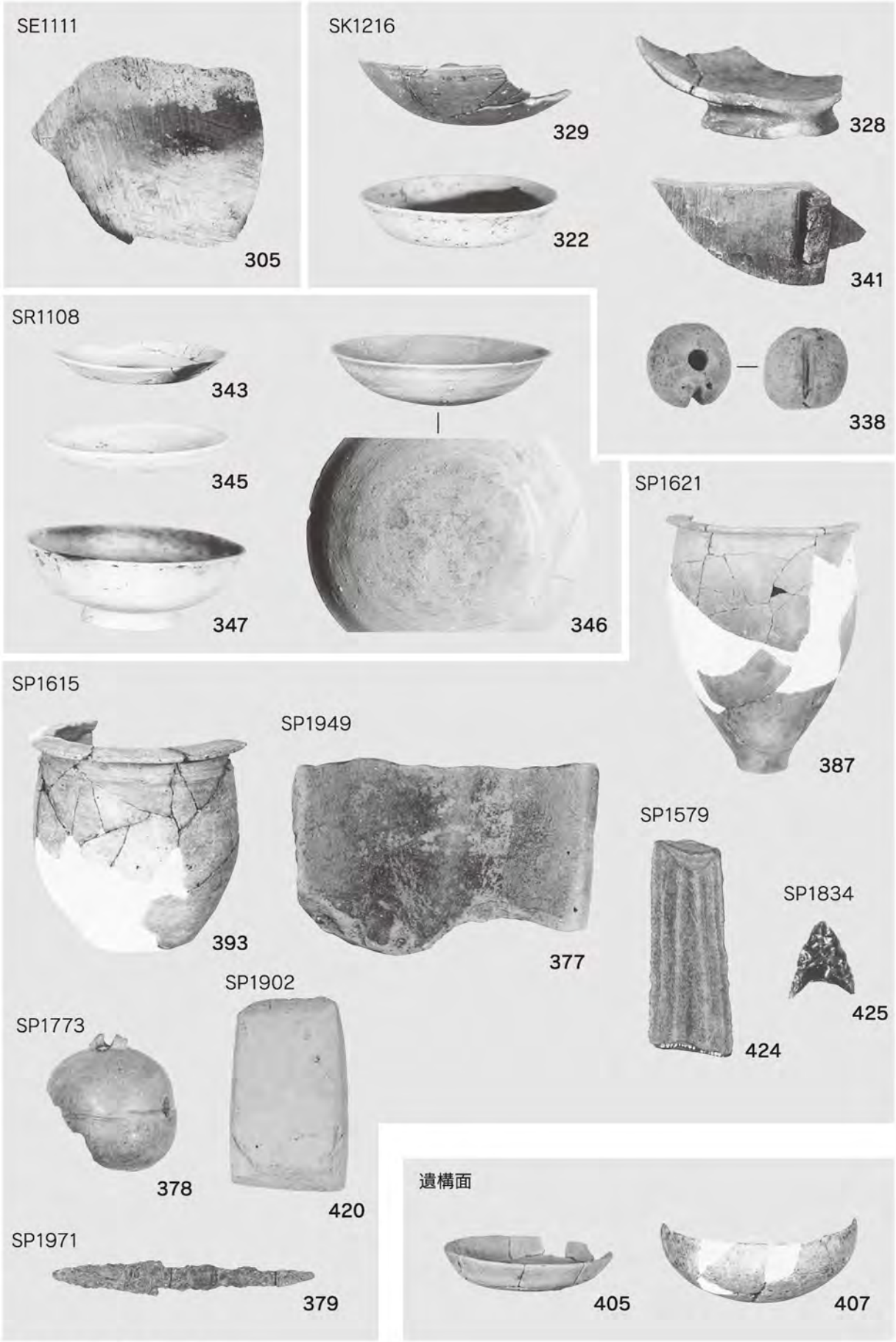
各遺構出土遺物1（縮尺不統一）





各遺構出土遺物2（縮尺不統一）

図版5-18



各遺構出土遺物3（縮尺不統一）

第２節　１C区の調査

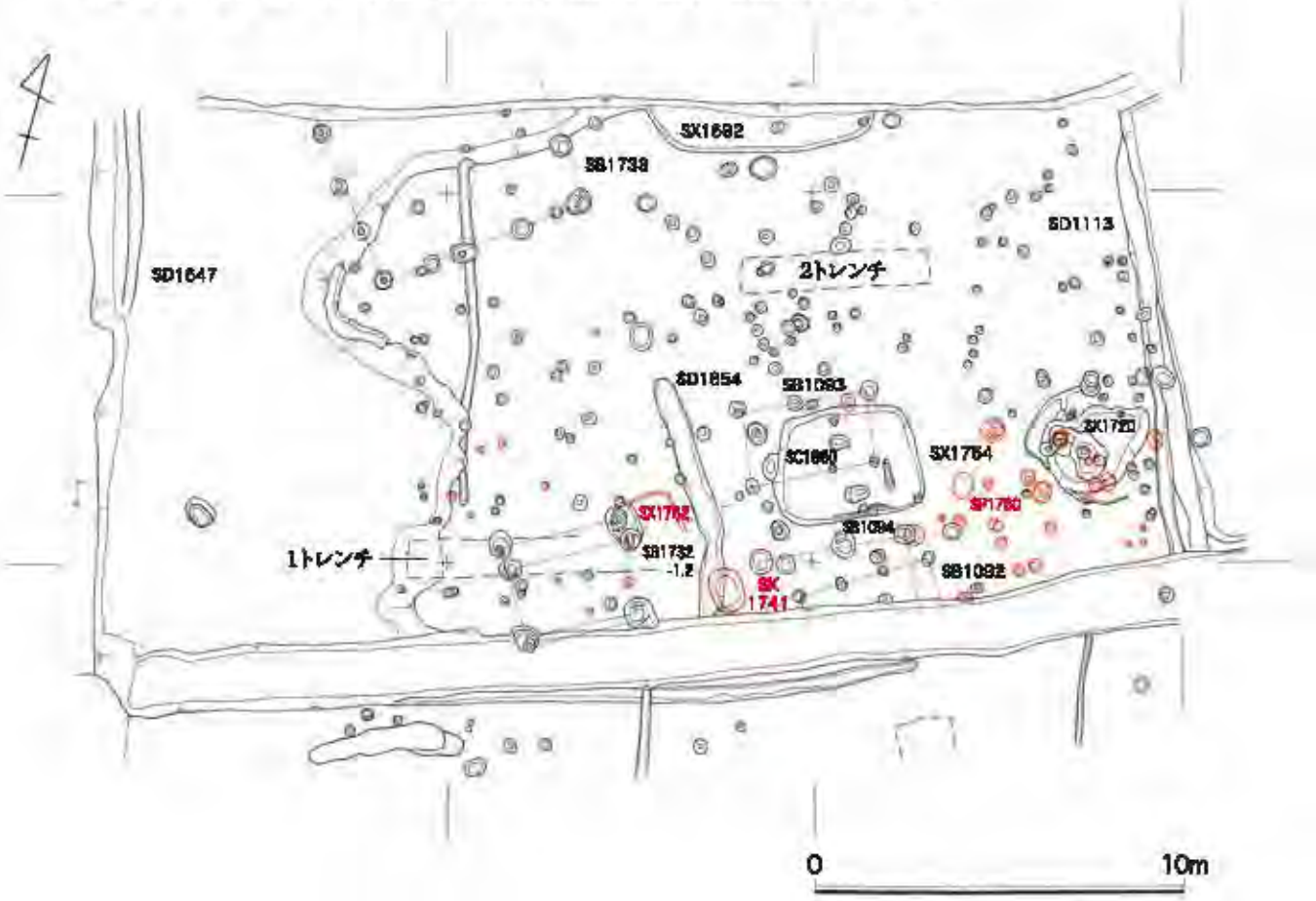
１．調査の概要（第５-47・48図、図版５-19-1・2）

区画整理地東側、東西新設道路部分の調査区。北側に１Ｄ区、南側が１Ａ区、東側が１Ｂ区となる。調査区の現況は畑地であった。１Ａ区と同じ微高地の縁きで、両区の境は東西方向の水路があったので、それを区境としている。１Ａ区の調査と並行して行ったが、工事側との打合せで、道路部分工事を先行したいということから、途中から本区の調査を先行した。調査面積は419.5㎡である。1C区の東側は一段低くなり、浅い谷部となる。この部分が１Ｂ区である。調査区の基本層序は北壁で、上から客土、水田鋤作土（二時期の水田鋤作土）、暗褐色粘質土（包含層）、遺構面の黄褐色粘質土に暗褐色粘質土ブロックが混じった層となる。遺構はこの面で検出したが、包含層が残り明確に遺構を確認出来ない部分があったので、その下の黄褐色粘質土からオリーブ褐色粘質土の面まで掘り下げ、最終的に遺構を確認した。また調査区の西側は後世の水田開発で遺構面が地下げされ、検出遺構は少ない。検出遺構は掘立柱建物6棟、溝状遺構3条、土坑2基などである。遺構面から縄文土器片がわずかに確認できたため、部分的に掘り下げ遺構・包含状況を確認したが、明瞭な遺構・包含層は確認出来なかった。

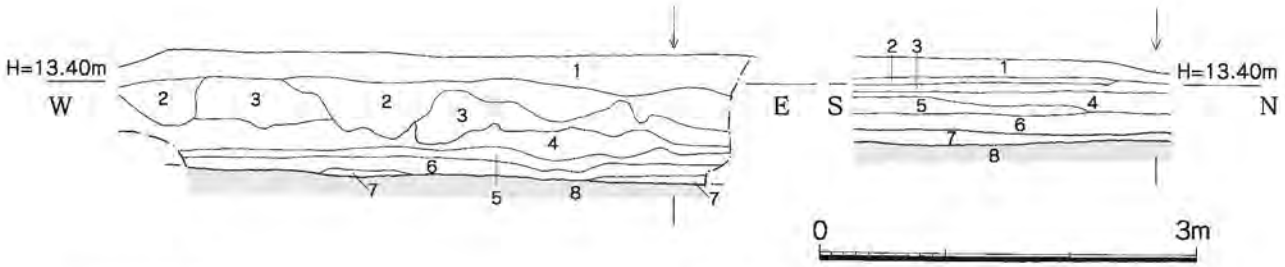
２．遺構と遺物

①　掘立柱建物

6棟検出した。調査中に検出したものは2棟、それ以外は図上復元である。



第５-47図　１C区遺構全体図（1/200）



1C区西壁土層
1.客土
2.暗灰黄色細砂(粗砂と互層)水田耕作土
3.暗灰黄色細砂質土　水田耕作土
4.黄褐色粘質シルト土と灰黄色粘質シルトブロック混合
5.黄褐色粘質土(粗砂混じり)
6.暗褐色粘質土(マンガン粒子少量混入、包含層か)
7.黄褐色粘質土に6ブロック混入
8.黄褐色粘質土(シルト質)～オリーブ褐色粘質土

1C区北壁土層
1.鈍い黄褐色土
2.花崗岩真砂土(客土)
3.オリーブ褐色土に黒褐色土ブロック混入(客土)
4.暗灰黄色土(やや砂質、水田耕作土)
5.暗灰黄色に酸化鉄分多量混入(水田床土)
6.暗灰黄色シルト質細砂(酸化鉄分少量混入、自然流路か)
7.暗褐色土(酸化鉄分層)
8.鈍い黄褐色シルト質粘質土又は砂礫

第5-48図　調査区西壁・北壁土層図（1/60）

SB1732-1・2（第5-49図、図版5-20-1）

調査区南側D8区で検出した1×1間の主軸をN－59°－Eに取る2棟の建物。建替で柱穴が重複し、SB1732-1(古)、SB1732-2(新)とする。それぞれの建物規模は(古)は梁間2.25m、桁行3.40m、(新)が梁間2.65m、桁行3.22mを測る。柱穴平面形は円形または方形で、柱穴径は長軸径で0.65～0.75m、深さは最大0.65mを測り、比較的大きく深い。一部の柱穴底には柱痕跡が残る。埋土は黒褐色粘質土。

出土遺物　各柱穴から弥生土器片が出土している。**1**は鋤形口縁の甕口縁部片。**2**・**3**は甕の底部。底径は6.8cm、7.4cmを測る。2は少し上げ底気味。外面細かいハケ目で、黒斑がある。**1**・**2**はSB1732-1(古)、**3**はSB1732-2(新)の柱穴出土である。いずれも須玖Ⅰ式期のものか。

SB1733（第5-49図、図版5-20-2）

調査区北西部で検出した建物。北側が調査区外にかかり、全容は不明。主軸をN－52°30′－Eに取り、規模は東西長6.00m、南北長4.5m＋αを測る。柱穴平面形は略円形が多い。柱穴径は長軸径で最大0.75m、深さ0.35～0.50mを測る。一部の柱穴には柱痕跡が残り、柱径は最大で0.2m程である。柱穴埋土の主体は黒褐色粘質土である。

出土遺物　各柱穴から弥生土器片が少量出土し、また鉄器片も1点出土している。図示出来たものは1点のみ。**4**は口縁部細片。器壁の調整は摩滅し不明。

SB1094（第5-49図）

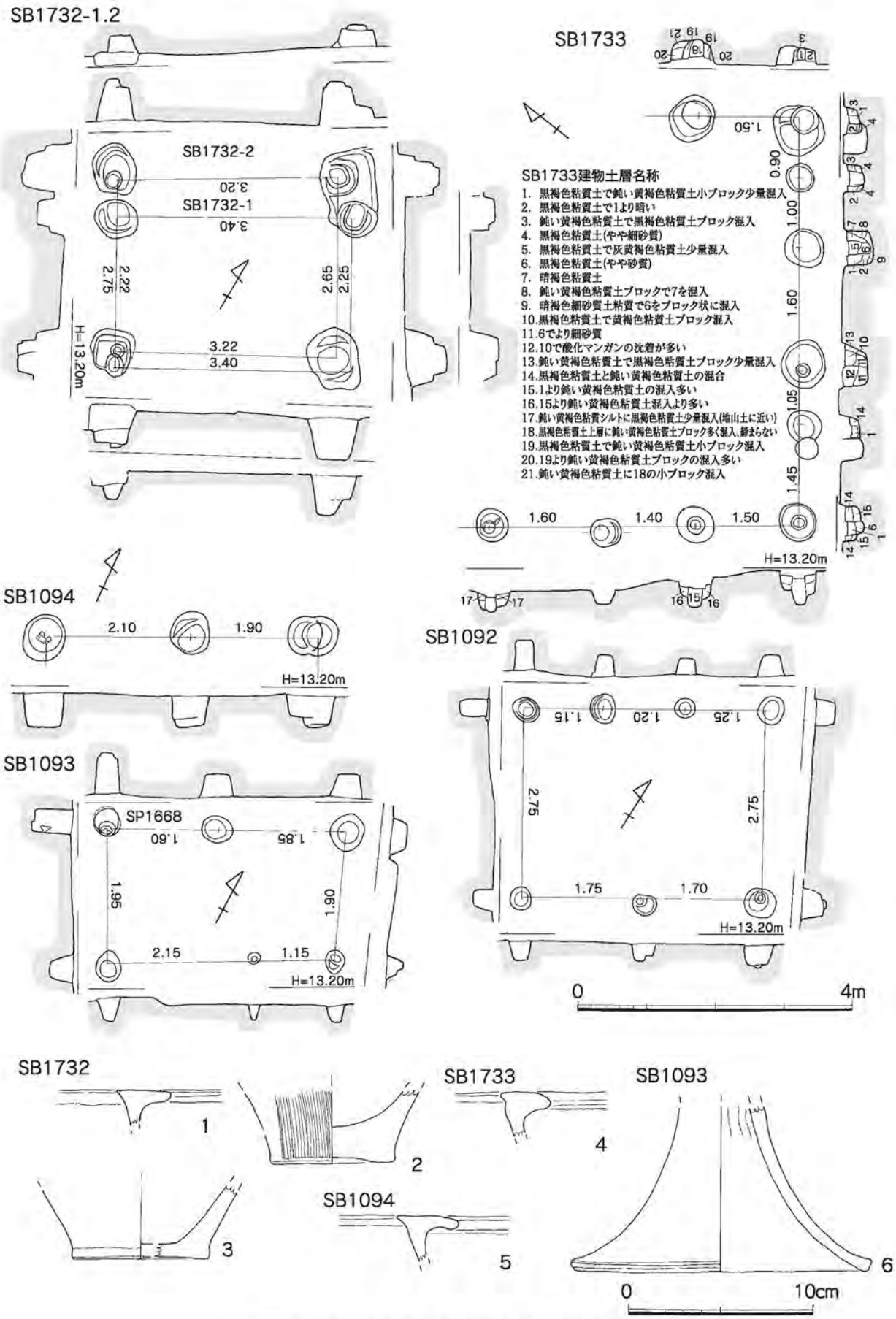
調査区南側、水路にかかる建物。検出した柱穴は北側桁側の3基で、南側は排水路で消滅していると思われる。規模は4.0mを測る。柱穴平面形は略円形が多い。柱穴規模は長軸径で0.57～0.70m、深さは0.4～0.5mを測る。埋土は黒褐色粘質土が主体である。

出土遺物　各柱穴から弥生土器片と黒曜石剥片などが少量出土。**5**は須玖Ⅱ式(古)頃の甕口縁部片。

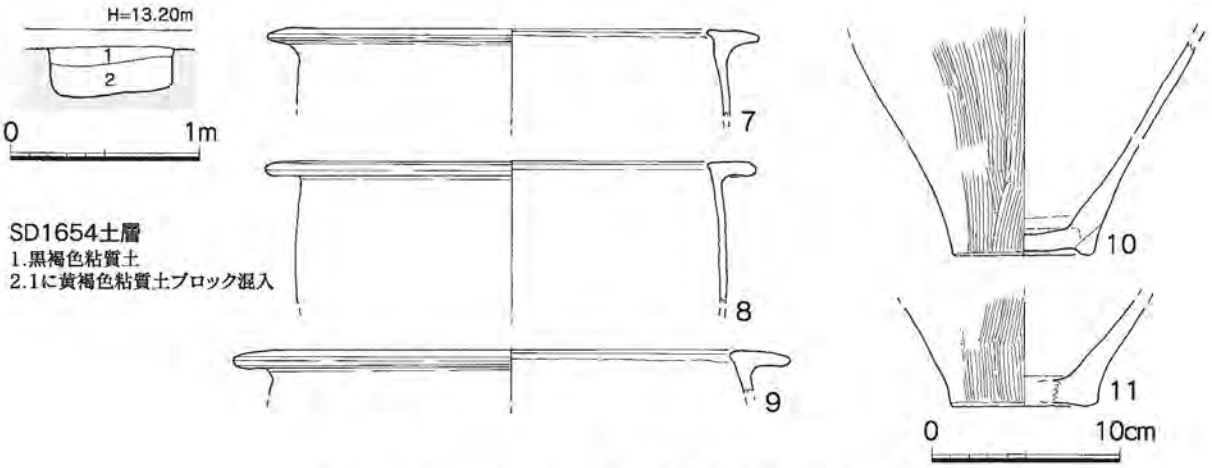
SB1093（第5-49図、図版5-21-4、5-22-1）

調査区中央部で検出した1×2間の主軸方位をN－65°－Eに取る建物。SC1680と重複し、SC1680床面から柱穴を検出した。建物規模は梁間1.90～1.95m、桁行3.30～3.45mを測る。柱穴平面形は略円形から楕円形を呈す。柱穴径は長軸径で0.45～0.55m、深さ0.35～0.60mを測る。SC1680内で確認した柱穴は規模が小さい。埋土は黒褐色粘質土が主体である。

出土遺物　各柱穴から弥生土器片が出土。量は少ない。**6**は弥生土器の高坏脚部。底径16.4cmを測る。器壁は摩滅し調整は不明、外面丹塗り。柱の根締めに再利用されたものか。SP1668出土。



第5-49図　掘立柱建物と出土遺物（1/80、1/3）



第5-50図　SD1654土層と出土遺物（1/40、1/4）

SB1092（第5-49図）

調査区南側、1A区に南側がかかる1×2間の主軸方位はN－57°－Eに取る建物。建物規模は梁間2.75m、桁行北側3.60m、南側3.45mを測る。柱穴平面形は略円形から楕円形を呈す。規模は長軸径で0.30～0.45m、深さは0.30～0.45mを測る。埋土は黒褐色粘質土が主体である。

出土遺物　各柱穴から弥生土器片が出土。量は少なく図示出来るものもない。

② 竪穴住居

SC1680（第5-51図、図版5-21-1）

調査区中央部で検出した平面形がやや不整な隅丸長方形状を呈す。当初土坑と考えたが、規模や床面に炉跡はないが、柱穴らしきピットが2基あることから、住居とする。規模は東西長軸長で3.92m、南北短軸幅3.15m、床面までの深さ0.15mを測る。埋土は黒褐色粘質土で、床面近くは鈍い黄褐色粘土小ブロックを含む。床面はほぼ水平で、南壁沿いには一部壁溝がある。主柱は2基で、中央部南北の1対である。楕円形の形状で、長軸径は0.58～0.65m、深さ0.16～0.22mを測る。柱穴は床面より掘り込まれたもので、埋土は鈍い黄褐色粘質シルトと黒褐色粘質土で、炭化物少量含む。柱穴間距離は1.5mを測る。これらの柱穴では屋根を支えることは出来ず、竪穴外にも何らかの屋根を支える施設の存在を推定する。出土遺物が少ないことから、日常的な住居ではなく、作業場などの小屋的施設と考える。

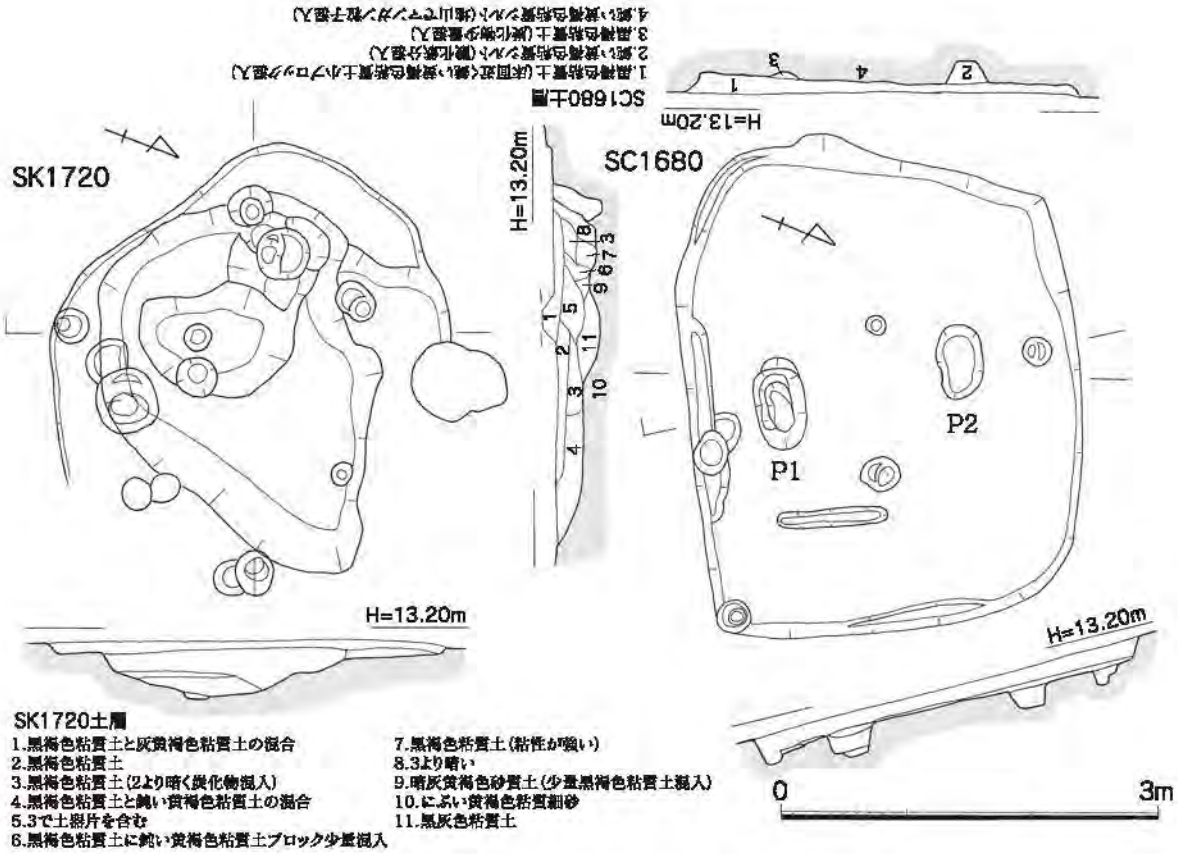
出土遺物　弥生土器や石器、不明鉄器などが少量出土した。図示できるものは少ない。**31**は砂岩製の石皿か砥石片。残存長20.7cm、幅17.2cmを測る。使用により上下両面中央部に近いほど磨り減っている。石皿とすれば縄文時代からの混入の可能性がある。

③ 溝状遺構

SD1113　調査区東端で検出した溝。1A区から続く溝で、SD1113-4区とした。弥生土器片が少量出土したが、近世遺構の時期の溝である。

SD1654（第5-50図）

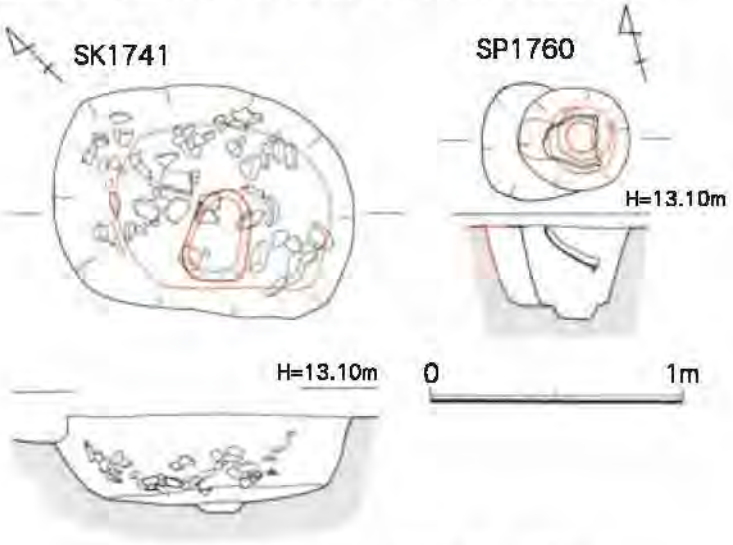
調査区南側中央で検出した南北方向の溝。南側は排水路で消滅する。確認規模は全長7mを測る。溝幅は0.6m、深さ0.2～0.3mほどで浅い。断面は箱堀から逆台形状を呈す。埋土は黒褐色粘質土で



第5-51図　SC1680とSK1720（1/60）

下層に黄褐色粘質土ブロックを混入する。

出土遺物　弥生時代中期頃の土器や黒曜石剥片少量出土した。7～11は弥生時代中期後半須玖Ⅱ式の甕。7～9は口縁が水平に近い鋤形口縁。口径は7・8が26.0cm、9が29.4cmを測る。調整は、7・9は摩滅がひどく不明であるが、8はナデ。10・11は甕の底部1/3片で底径7.4cm・8.0cmを測る。いずれも底部は少し上げ底。調整は外面タテハケ目、内面ナデ。

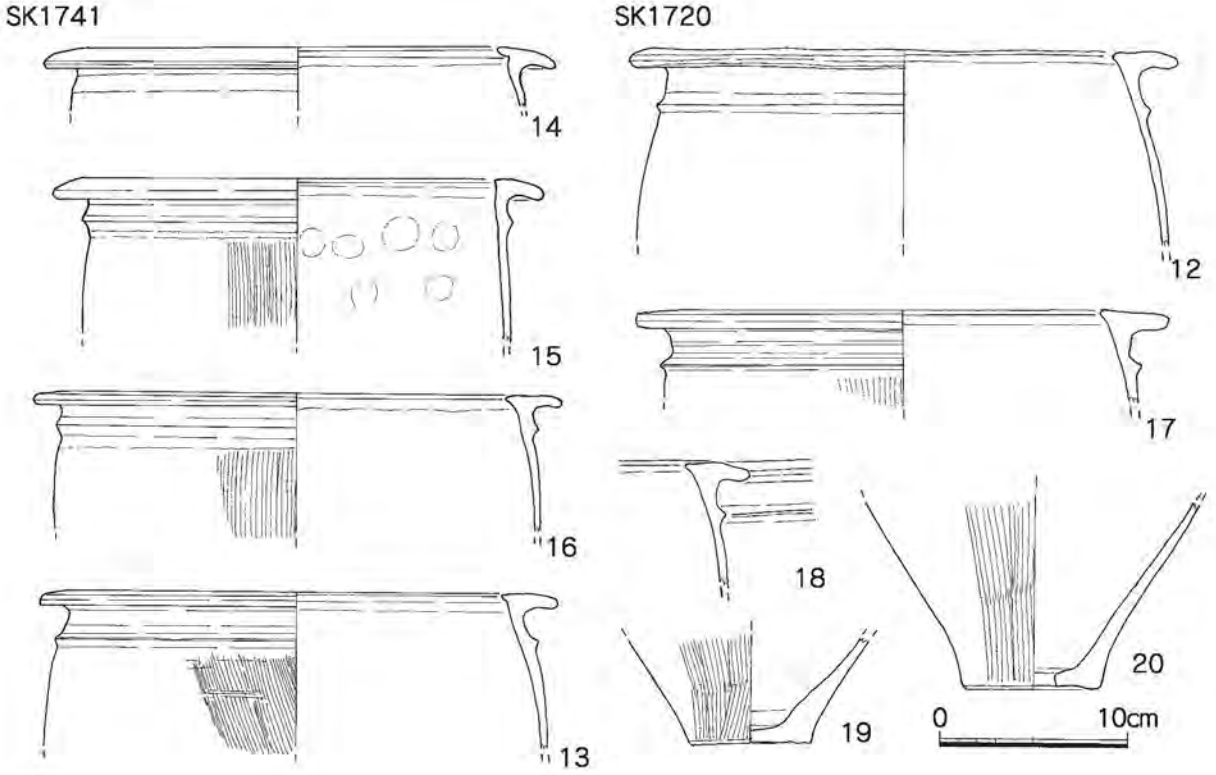


第5-52図　SK1741とSP1760（1/30）

④　土坑

SK1720（第5-51・53図、図版5-21-2）

調査区東側で検出した平面不定形の大型土坑。遺構面を5cm程下げた面で検出した。規模は長軸長3.15m、短軸幅2.18m、深さ0.45mを測る。西側はピットが切り込み、底面中央部は一段深くなり、ピットがある。埋土は複雑で上層～下層まで黒褐色粘質土主体で、鈍い黄褐色粘質土や炭化物を含む。



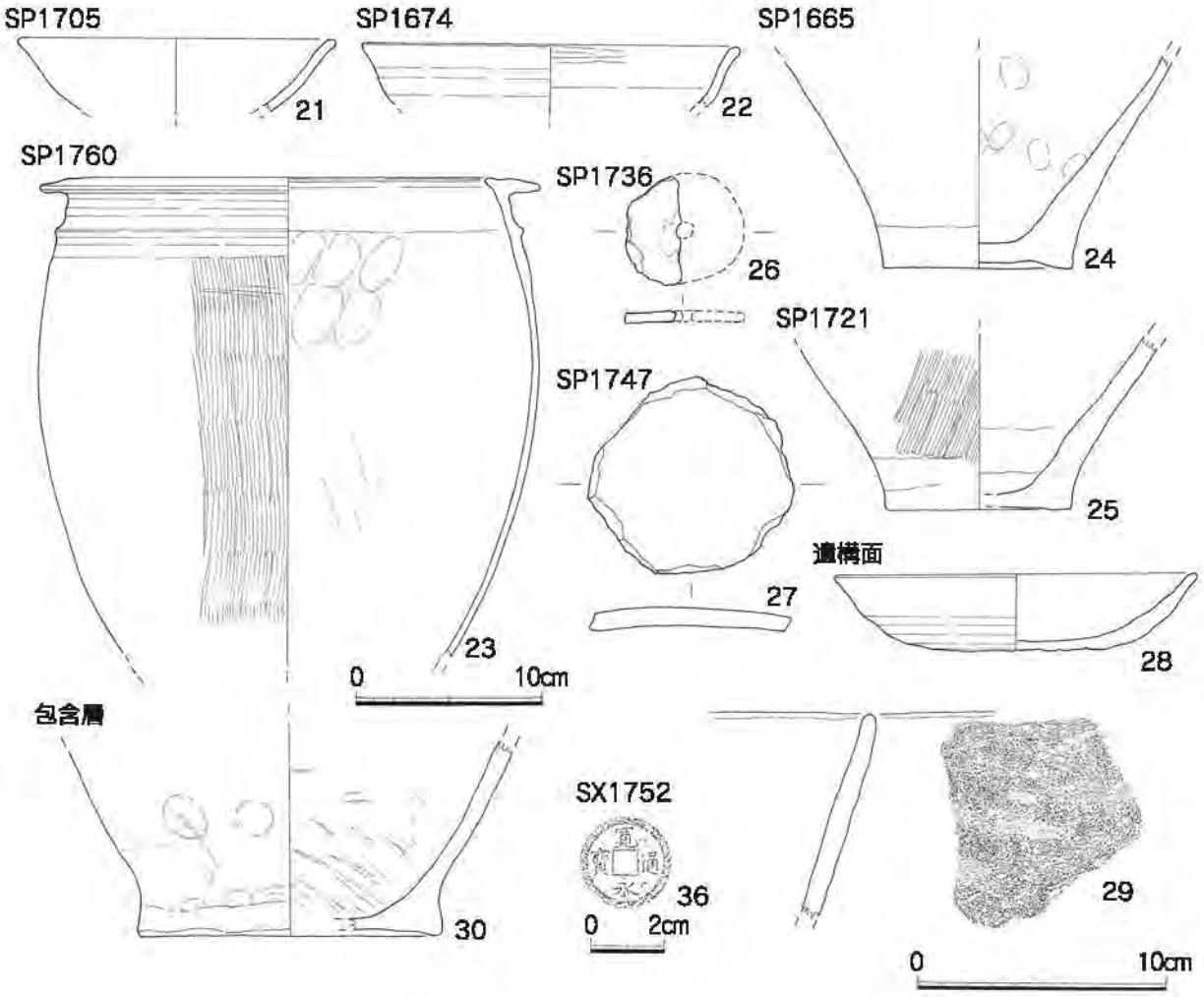
第5-53図　SK1720・1741出土遺物（1/4）

出土遺物　弥生時代中期後半の須玖II式頃の土器片や黒曜石剥片などが少量出土したが、図示出来たものは少ない。**12**・**13**は鋤形口縁の甕口縁部で、いずれも頸部に三角突帯が付く。**12**は1/2片で、口縁は歪みが大きいが、口径約29cmを測る。器壁は摩滅するが一部ナデか。**13**は1/5片で口径27.4cmを測る。調整は外面ナナメハケ目とヨコナデ、内面は平滑に丁寧にナデる。胎土精良。

SK1741（第5-52・53図、図版5-21-3）

調査区中央南側で検出した平面形が楕円形状を呈す土坑。SD1654に切られる。規模は長軸長1.2m、短軸幅0.9m、深さ0.35mを測る。底面はほぼ水平。埋土は上下同一で、黒褐色粘質シルトで鈍い黄色粘質土ブロックを混入。底面には浅いピットが1基ある。古い時期のものであろう。弥生時代中期の土器片が多数出土。廃棄土坑と思われる。

出土遺物　弥生時代中期後半の須玖II式頃の土器や黒曜石剥片などが出土。**14**～**20**は甕。**14**～**18**は鋤形口縁部。頸部に三角突帯が付く**15**～**18**と付かない**14**に大別出来る。突帯の付くものは、口縁直下**15**・**16**と少し離れる**17**・**18**に分かれる。調整はいずれも外面はタテハケ目とナデ、内面はナデ。**14**は1/3片で口径27.2cmを測る。焼成やや不良。**15**は1/5片で、口径26.0cmを測る。胴部内面に指押さえ痕が残る。**16**は1/4片で口径28.0cmを測る。器壁は摩滅するが、口縁内面には粘土帯接合痕が残る。**17**は1/6片で口径28.2cmを測る。**18**は小片で口縁がやや内傾する。器壁は摩滅し調整は不明。**19**・**20**は僅かに上げ底気味の底部。**19**は1/3片で底径6.4cmを測る。**20**は1/3片で底径7.2cmを測る。底部には穿孔があり、甑の可能性がある。調整はいずれも外面粗いタテハケ目、内面はナデ。**20**は胎土が比較的精良。

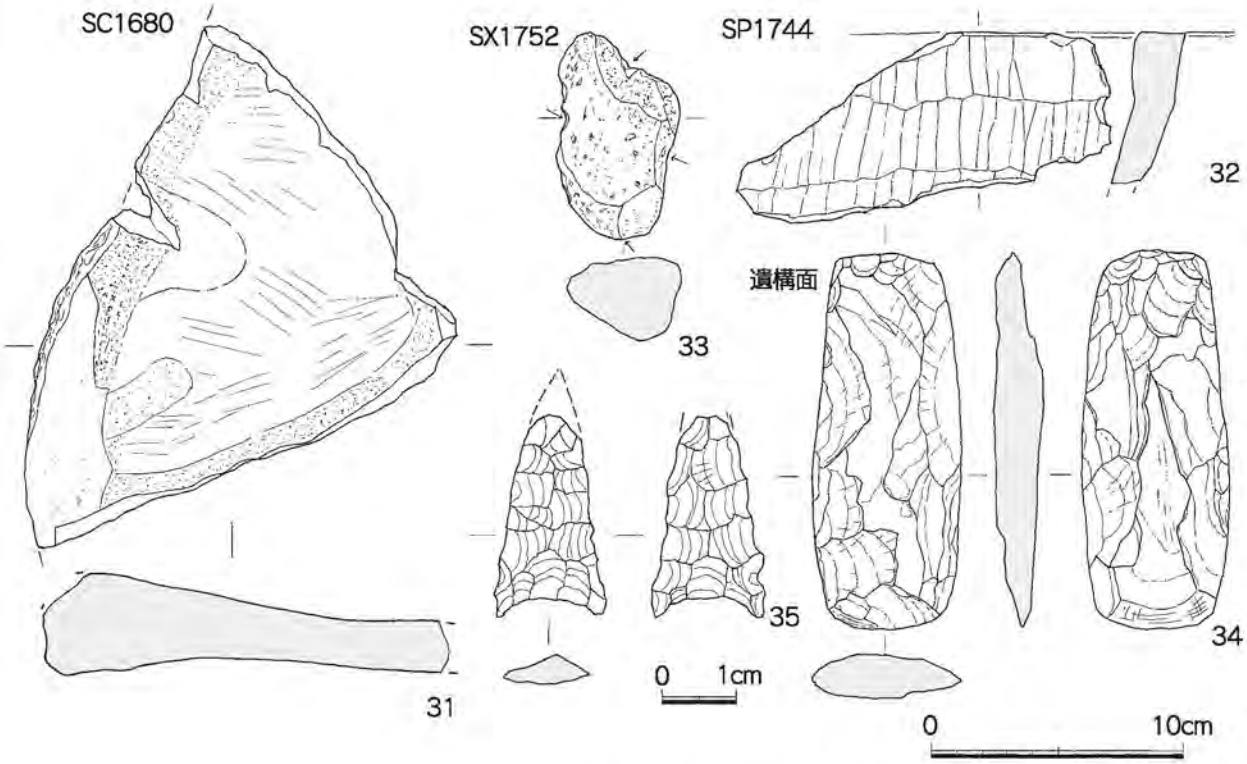


第5-54図　ピット・遺構面出土遺物（1/3、1/4、1/2）

⑤　ピット出土遺物（第5-52・54・55図、図版5-21-4、5-22-1）

ピットの時期は弥生時代と中世が主な時期である。図化出来たものを報告する。

21はSP1705出土の土師器の椀口縁部1/6片。口径12.8cmを測る。器壁は摩滅し調整不明。胎土は精良。**22**はSP1674出土の黒色土器椀口縁部。口径15.4cmを測る。器壁は摩滅するが、調整はヘラミガキか。胎土は精良。**23**はSP1760出土の弥生時代中期の甕。口径27.0cmを測る。鋤形口縁で、頸部に三角突帯が一条巡る。調整は胴部外面が比較的粗いタテハケ目で口縁部はヨコナデ、内面は平滑なナデ。焼成は良好。SP1760は第5-52図で示したように甕1/4程の破片の内面を上向き口縁部を下側にして斜めにピットの上部から出土した。ピット底面には柱痕跡のような窪みがあり、柱を抜いたあと、**23**が入れ込まれたものと思われる。**24**・**25**は僅かに上げ底の弥生時代中期の甕底部。**24**はSP1665出土の1/2片で、底径7.6cmを測る。器壁は外面摩滅するが、内面はナデで指押え痕が残る。**25**はSP1721出土の1/3片で底径7.6cmを測る。調整は外面ハケ目であるが、内面は摩滅がすすむがナデ。**26**はSP1736出土の土器片利用の紡錘車1/2片。残存径4.5cm、厚み0.4cmを測る。中央部には径0.6cmの円孔がある。調整は内外面ナデ。胎土は精良。**27**はSP1747出土の土製円板。土器片を利用したものである。直径は8.2×7.9cm、最大厚0.7cmを測る。器壁は摩滅し調整は不明。**32**はSP1744出土の滑石製石鍋の口縁部片。残存幅14.9cmを測る。外面ノミによるケズリ、内面はミガキ。



第５-55図　各遺構出土石器（1/3、1/1）

⑥　遺構面・包含層出土遺物（第５-54図、図版５-22-1）

28・**29**は遺構面出土。**28**は中世初めの土師器の丸底坏1/4片。口径14.6cm、器高3.1cmを測る。器壁は摩滅があるが、外底部は回転ヘラ切り。胎土は金雲母微粒を含むが精良。**29**は縄文時代晩期前半の粗製の深鉢口縁部片。外面は粗い条痕、内面はナデ。胎土は5mm内外の粗砂粒を多く混入。**30**は包含層出土の縄文土器鉢底部。底径12.4cmを測る。底部の裾が広がる形態。器壁の調整は胴部内外面工具によるヨコ・ナナメのナデ。焼成は良好。**34**・**35**は遺構面出土。**34**は打製石斧。剥片に粗い調整を加え成形した石斧。刃部は研磨を加えて刃となしている。長さ15.0cm、最大幅5.9cm、厚み1.9cmを測る。石材は玄武岩か。**35**は黒曜石の石鏃。先端を欠損する。長さ2.7cm、幅1.5cm、厚さ0.3cmを測る。剥片に二次調整を加え成形している。**33**・**36**は遺構面の落ち込みSX1752出土。**33**は軽石製の浮子。長さ8.4cm、幅5.0cm、重さ29.3ｇを測る。矢印の4カ所に紐かけのための窪みが残る。**36**は寛永通宝。混入品か。

3．まとめ

以上が調査の成果であるが、これらについて若干のまとめを行う。

１．調査で確認した主な遺構の時期は大きく二時期に分かれる。一期は弥生時代中期頃と、一期は中世前期の時期である。これは南側の１Ａ区の時期と同じである。１Ａ区で検出した集落の範囲に１Ｃ区が含まれるのであろう。この集落の範囲は北側１Ｄ区のSK1001あたりまで広がることが予想される。大型建物SB1733も遺物から弥生時代中期の建物である。

２．縄文時代晩期の土器が少量出土した。主に基盤砂礫間の粘土層から出土している。時期は少し古いが１Ｂ区では縄文時代後期後葉の三万田式土器が谷部に投棄された状況で出土している。

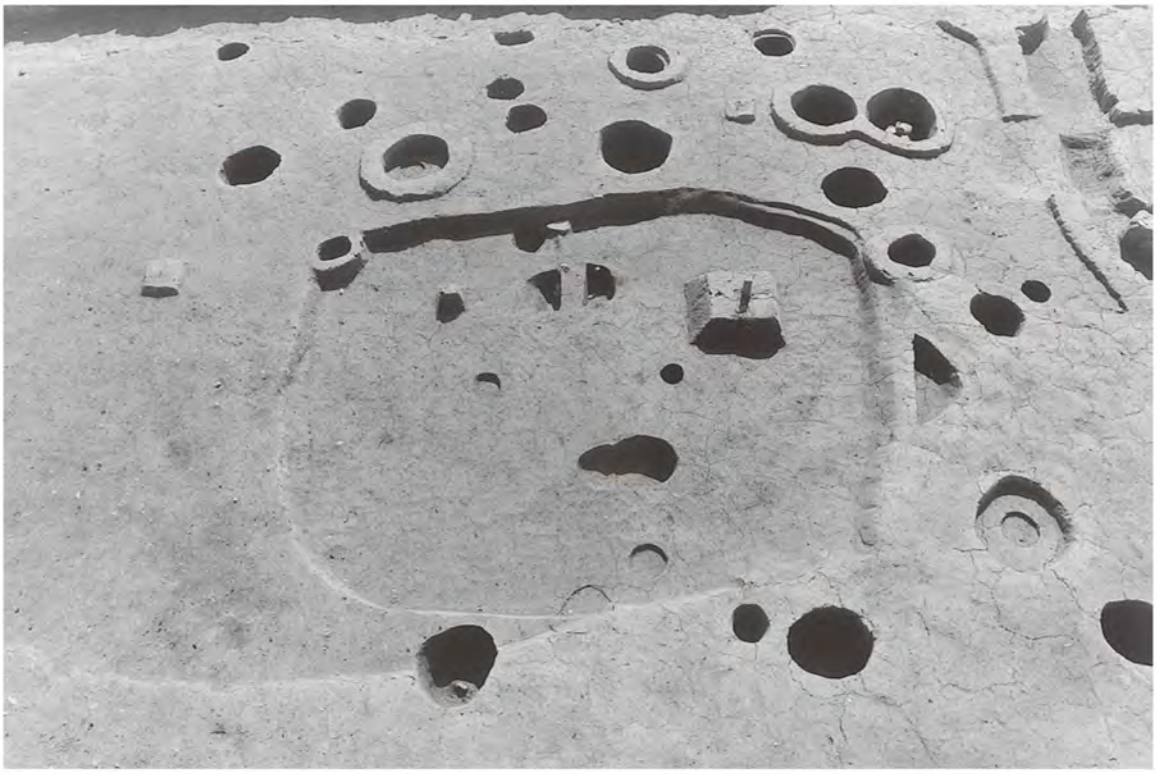
1.1C区全景（上から）

2.1C区東側下面遺構検出状況（南から）

図版5-20

1.SB1732（南東から）

2.SB1733（南東から）



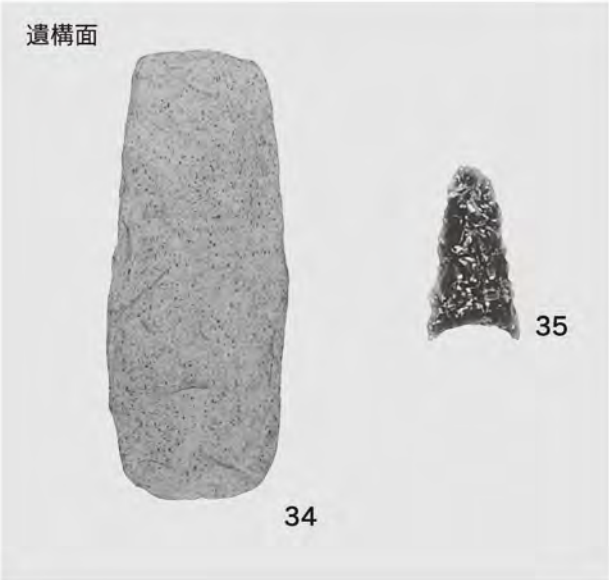
1.SC1680（北から）

2.SK1720（北西から）

3.SK1741（北西から）

4.SB1093のSP1668遺物検出状況

5.SP1760遺物出土状況（北から）



1.1C区各遺構出土遺物（縮尺不統一）

2.1A区包含層・遺構面出土遺物（縮尺不統一）

第３節　１D区の調査

１．調査の概要（第５-56・57図、図版５-23-1）

区画整理地東側、１A区の北側、南北に細長い調査区。１A区から北に延びる微高地の先端部にあたり、地形は北に下傾する。調査前の現況は水田または畑地である。地中埋設の水路と道路拡幅新設部分（全長75m、幅4m）の調査。調査面積は233.2㎡である。調査区は10m毎に南から北にF～Mの小区を設定した。遺構面迄の層序は南北で異なる。北側は地表から暗灰黄褐色土、黄褐色土（耕作土）15cmの下が、遺構面のオリーブ褐色粘質土。南側ではバラス・客土盛土0.3m、耕作土0.6m下で遺構面のオリーブ褐色粘質土となり、北側より一段高い。北側遺構面は耕作土直下で予想外に浅く、重機掘削時はよく分からず、明瞭な遺構を確認してから、遺構面の掘り過ぎに気づき、遺構を削平してしまった部分がある。ただ土層を見る限り、遺構の分布は少ないと思われる。またその分布は南側に偏る。検出遺構は掘立柱建物1棟、土坑1基である。また遺構面中に縄文土器片が認められたので6か所トレンチを設定し、縄文時代包含層・遺構の有無を確認したが、遺構は確認出来なかった。

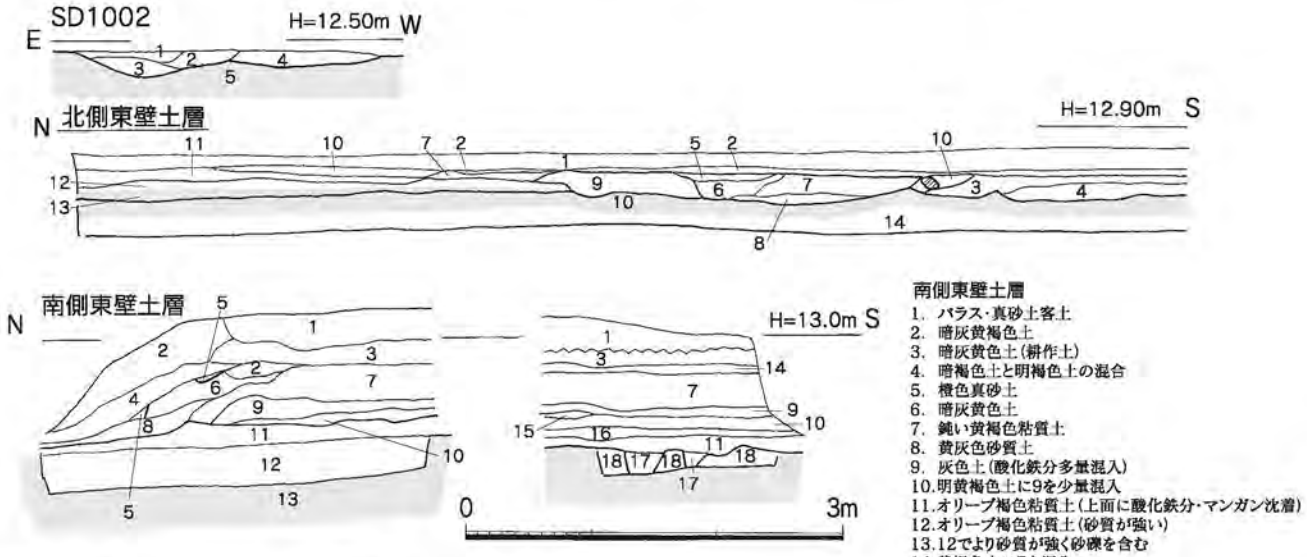
２．遺構と遺物

①　掘立柱建物

SB1010（第５-58・59図、図版５-24-1）

調査区南側G10区で検出した建物。1×2間の主軸をN-74°-Eに取る建物と思われるが、一部で全容は不明。確認した柱穴は3基。柱間は梁間2.77m、桁行2.20mを測る。柱穴径は長軸径0.40～0.65m、深さは最大で0.3mを測る。一部柱穴底には柱痕跡が残る。埋土は粘性のある黒褐色砂質シルト。

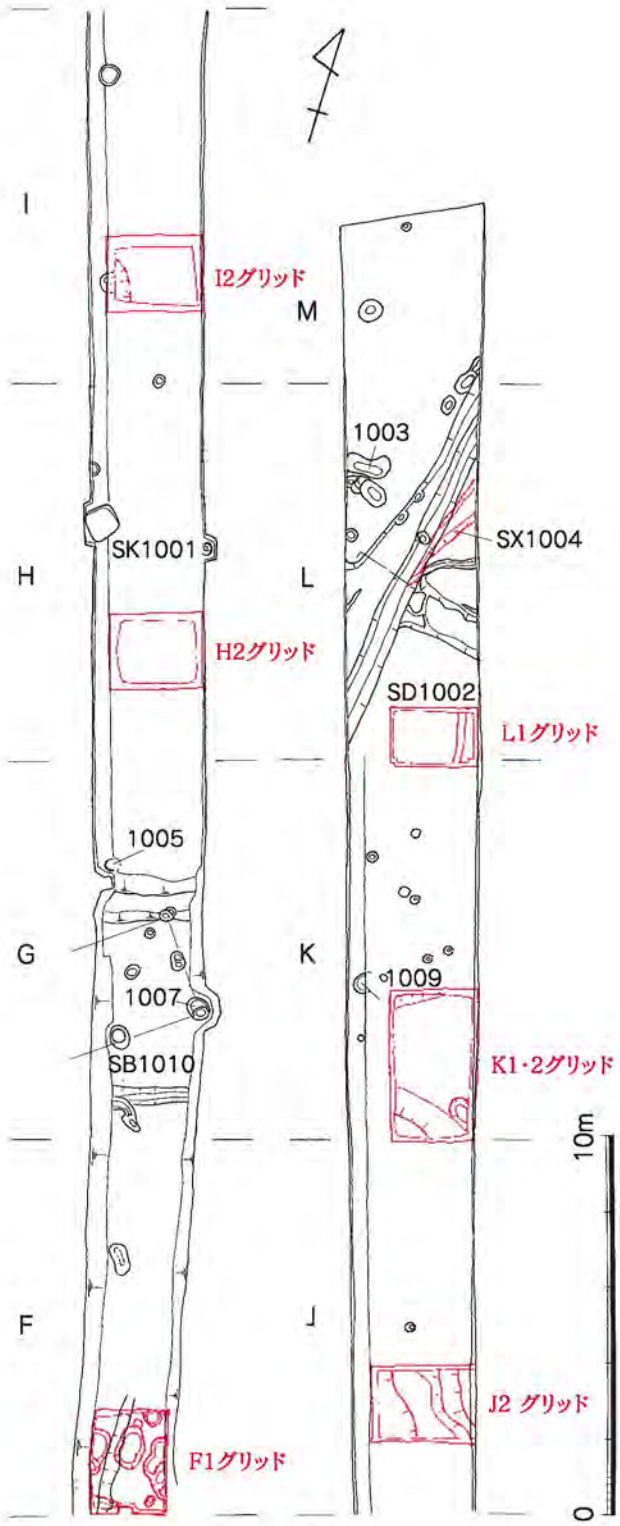
出土遺物　各柱穴から弥生土器片や黒曜石剥片などが出土している。**1**～**3**は弥生土器の須玖Ⅰ式頃である。**1**・**2**は壺。**1**は鋤形の口縁部1/5片で、口径17.0cmを測る。器壁はやや摩滅するが、ヨコナデ。



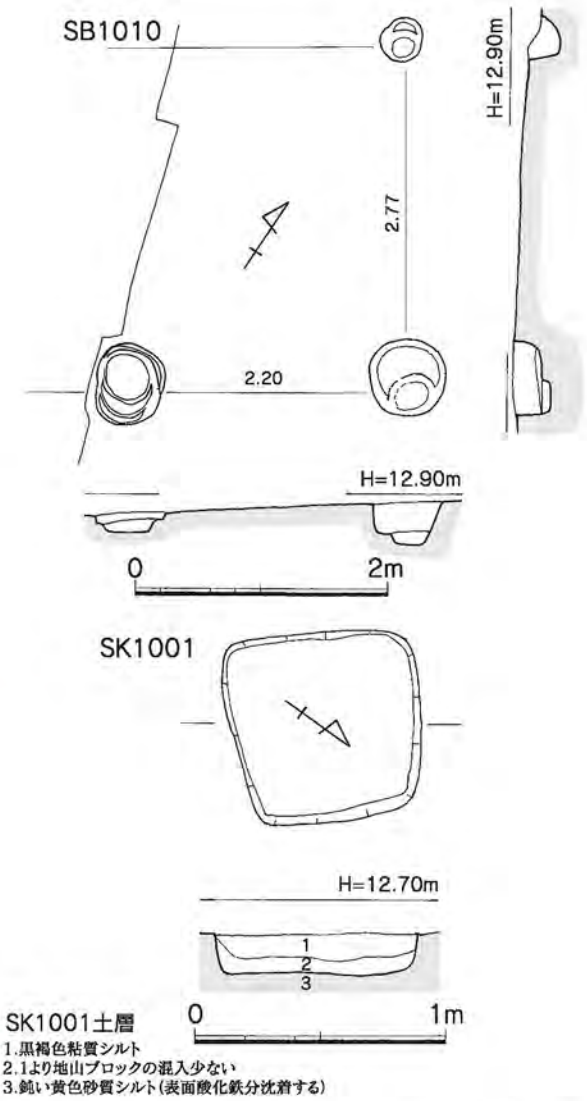
SD1002土層
1.暗灰色砂質粘土
2.灰オリーブ色細砂
3.暗灰黄色細砂質シルト
4.灰オリーブ細砂質シルト
5.鈍い黄褐色粘質シルト
(酸化鉄分・マンガン混じり、硬くしまる)

北側東壁土層
1.暗灰黄褐色土(水田耕作土)
2.明黄褐色土(水田床土)
3.鈍い黄褐色砂質土(シルト質)
4.3より明るく薄く酸化鉄分層を挟む
5.暗灰黄色土
6.灰黄褐色土(5より酸化鉄分含む)
7.5で酸化鉄分多く混入
8. 7で粗砂をブロック状に多く含む
9. 暗灰黄色砂質土(酸化鉄分多く含む)
10.鈍い黄褐色粗砂礫混じり土
11.灰黄褐色細砂質土(酸化鉄分を少量ブロック状に混入)
12.明黄褐色粘質土(鉄分層で床土)
13.灰黄褐色シルト質粘土(酸化鉄分少量混入)
14.オリーブ褐色粘質土(上面に酸化マンガン沈着)

第５-56図　調査区東壁・SD1002土層（1/60）



第5-57図　1D区遺構全体図（1/200）



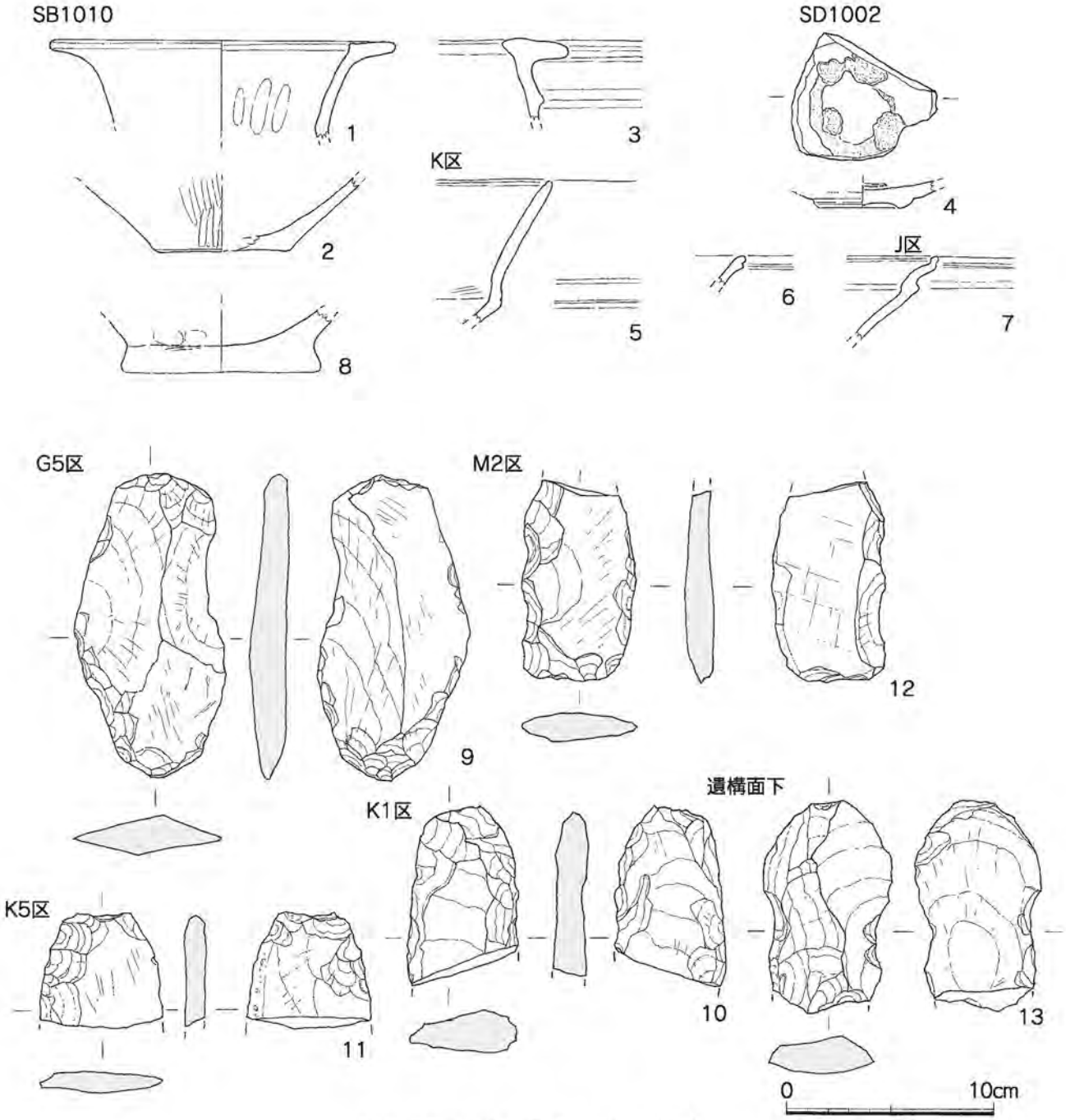
第5-58図　SB1010、SK1001（1/60、1/30）

2は丹塗りの壺底部1/2弱片。外面調整はヘラミガキ、内面ナデ。**3**は甕の口縁部小片。頸部に三角突帯が付く。

② 溝状遺構

SD1002（第5-56・59図、図版5-23-2）

調査区北側で検出した南北方向に流れる溝。2時期の溝が重複し、全体の溝幅は0.9～1.7mを測る。新期溝（SD1002－1）は幅0.57～0.75mを測る。溝の深さは浅く、0.1～0.2mで、埋土は暗灰色砂質粘土から灰オリーブ細砂、暗灰黄色細砂質シルト。古期溝（SD1002－2）は深さ0.1m前後で、埋土は灰オリーブ砂質シルトである。溝は北に向かって低くなり、新期溝内には小さな流木があった。溝周辺には粗砂が広がり、遺構面には酸化鉄分・マンガンが多く沈着する。この溝は水田に伴う水路であり、周辺に水田が広がっていたのであろう。



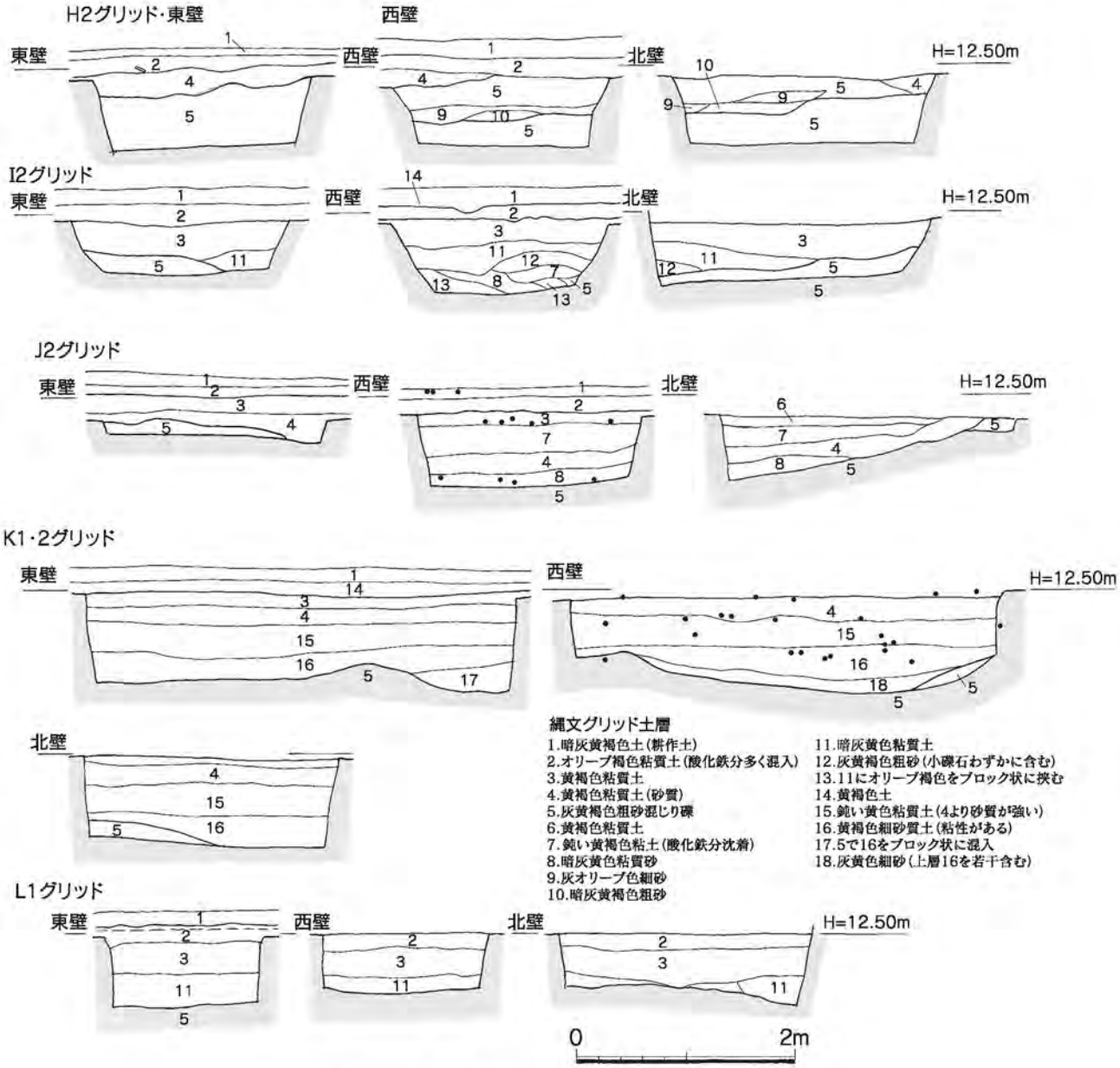
第５-59図　各遺構出土遺物（1/3）

出土遺物　近世陶磁器や瓦、ガラス製品などが少量出土。近世から近代にかけての水路であろう。**4**は朝鮮王朝の白磁皿底部。底径4.8cmを測る。灰オリーブ色釉がかかるが、高台部は露胎でケズリ出す。見込みに輪状の目跡痕と高台部にも目跡痕が残る。

③　土坑

SK1001（第５-58図、図版５-24-2）

調査区中央部H10区で検出した平面方形を呈す土坑。規模は東西長0.77m、南北長0.77m、深さ0.16mを測る。底面はほぼ水平。埋土は黒褐色粘質シルトで鈍い黄色粘質シルトブロックを混入し炭化物を含む。**出土遺物**は弥生土器の細片を少量出土したが、図示しうるものはなかった。



第５-60図　縄文グリッド土層図（1/60）

④　縄文時代包含層の調査（第５-59・60図、図版５-24-3～6）

調査区内Ｈ～Ｍ区にかけて基本が幅2～4ｍのグリッドを５か所設定し、縄文時代の遺構の有無、遺物の確認を行った。各グリッド砂礫層面まで掘り下げ、確認を行ったが明瞭な遺構と遺物は確認出来なかった。砂礫層までの深さは各グリッドで異なる。Ｈ～Ｉ区は浅く、Ｊ～Ｌ区は深く、砂礫の落込みがある。これは起伏のある自然地形を示しているのであろう。遺物は縄文土器の細片や石器が少量出土したのみで、遺構や良好な遺物を持った包含層は確認出来なかった。遺物はＪ・Ｋ区で多く、Ｈ・Ｉ・Ｌ区では出土しなかった。

5～8は縄文時代晩期初頭から前半頃のもの。**5・6**はＫ区グリッド出土。**5・6**は精製の鉢口縁部。**5**は口縁内面に浅い沈線が巡り、**6**は口縁外面に浅い沈線が巡る。**7・8**はＪ区グリッド出土。**7**は精製の浅鉢で広田式か。口縁内外面に沈線が巡る。器壁は摩滅があるが、調整はナデか。**8**は底部。底部が

広がる形態。調整はナデ。**9**～**13**まで打製石斧。**9**はＧ5区グリッド出土。安山岩剥片に二次調整を加え、石斧としている。刃部は両面から細かい調整を加える。使用によりやや摩滅する。長さ14.8㎝、幅7.3㎝を測る。**10**はＫ1区グリッド出土。基部片で残存長8.7㎝、幅5.4㎝を測る。各側縁に二次調整を加える。石材は玄武岩か。**11**はＫ５区グリッド出土。扁平な石斧基部片で、残存長5.5㎝を測る。表面に軽い研磨を加える。石材は玄武岩。**12**はM2区グリッド出土。扁平な短冊形の石斧か。残存長9.8㎝、幅5.5㎝を測る。両側から粗い二次調整を加えて刃部を作り出す。石材は玄武岩。**13**は遺構面下出土。両側縁中央部が縊れ分銅形を呈す形態。石錘の可能性もある。全長10.3㎝を測る。石材は玄武岩。剥片の片面に粗い二次調整を加える。

図版5-23

1.１D区全景（北から）

2.調査区北側とSD1002（北から）

図版5-24

1. SB1010（北東から）

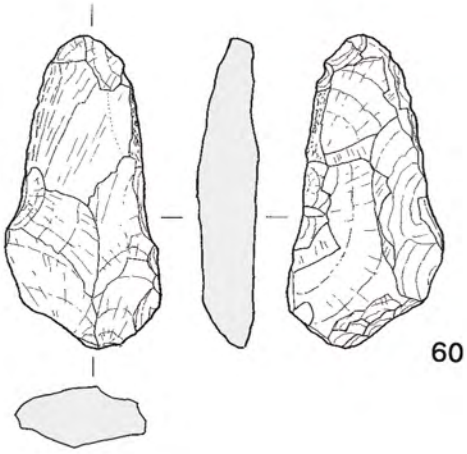
2. SK1001（東から）

3.打製石斧出土状況

4.縄文土器出土状況

5.K2グリッド遺物出土状況（東から）

6.J2グリッド出土遺物（縮尺不統一）



7.３区SK3018出土遺物（1/3）

第Ⅵ章　千里遺跡第1次調査1B区

第1節　調査の概要

1B区は、調査範囲の最も東側に設定した。西隣の1A区より約1m削平された現況であったため、まずはトレンチ調査によって遺構の有無を確認し、要調査範囲の全面発掘を行うかどうかを判断することとした。その結果、現代耕作土下で砂礫層が露出し、遺構面は完全に削平されていたため、流路と河成堆積層のトレンチ調査のみを行った。縄文時代後期後葉（三万田式土器期）の落ち込みSX1023と、11世紀後半～12世紀中頃の流路SD1020・1021・1022・1025を確認している。

第2節　遺構と遺物

1．縄文時代

SX1023（第6-1・2図、図版6-1）

調査区北西のトレンチ7で検出した落ち込みである。平面形は不定形で、径5.4～6.2m、擂鉢状に落ち込み、深さは最大64cmを測る。埋土は黄灰色シルトでマンガン・鉄分を含み、北東方向に遺物が集中して堆積している。人為的な掘り込みというよりは自然の落ち込みと考える。

SX1023出土遺物（第6-4図、図版6-4）

縄文土器片が比較的多く出土し、摩滅はさほどでないが、無文の胴部片が多く、あまり接合しない。薄型コンテナ１箱分が出土している。**1**は、小型鉢で1/2が残存し、復元口径11cm・底径6.6cm・器高7.6cmを測る。風化摩滅が著しく表面の詳細は不明であるが、全体にヨコユビナデで調整している。胎土は細～粗砂を多く含み、器面にアバタ状の小孔が目立ち、外面は橙色、内面はにぶい黄橙色～灰黄褐色を呈す。**2**は、三万田Ⅱ式の鉢で、山形口縁の頂部である。内・外面ともにミガキで丁寧に調整している。胎土は細砂を多く含み、器面にアバタ状の小孔が目立ち、灰黄褐色を呈す。**3**は、深鉢口縁部片で、内・外面ともに横位の貝殻条痕後、ユビナデで調整している。胎土は細～粗砂を多く含み、器面にアバタ状の小孔が目立ち、外面は橙色、内面はにぶい褐色を呈す。**4**は、深鉢口縁部片で、内・外面ともに横位の貝殻条痕で調整している。胎土は細砂を多く含み、器面にアバタ状の小孔が目立ち、外面は橙色、内面は灰黄褐色を呈す。**5**は、深鉢底部で、底部円盤が剥落しており、内面はヨコユビナデ、外面は縦位の貝殻条痕後、ナナメユビナデで調整している。胎土は細～粗砂を多く含み、器面にアバタ状の小孔が目立ち、橙色を呈す。**6**は、深鉢底部片で、内面はヨコナデ、外面は縦位の貝殻条痕後ヨコナデで調整している。胎土は細砂を多く含み、器面にアバタ状の小孔が目立ち、外面は橙色、内面は灰黄褐色を呈す。**7**は、深鉢底部で、1/3が残存し、わずかに上げ底で、復元底径9.8cmを測る。内・外面ともにナデで調整している。胎土は細砂を多く含み、器面にアバタ状の小孔が目立ち、外面は橙色、内面は浅黄橙色を呈す。**8**は、深鉢口縁部で、1/10が残存し、復元口径は33cmを測る。内・外面ともに横位の貝殻条痕後、内面は丁寧に、外面は粗くヨコナデで調整している。胎土は細砂を多く含み、器面にアバタ状の小孔が目立ち、外面はにぶい褐色、内面は橙色を呈す。**9**は、三万田 Ⅱ 式の鉢で、1/4が残存し、復元口径30.4cmを測る。内・外面ともにミガキで丁寧に調整している。胎土は細～粗砂を多く含み、アバタ状の小孔があまり目立たず、焼成は良好、にぶい黄橙色～橙色を呈す。**10**は、三万田Ⅱ式の鉢頸部で、1/8が残存し、復元頸径は25cmを測る。内・外面ともに細かいヨコミガキで丁寧に調整している。胎土は細砂を多く含み、器面にアバタ状の小孔が目立ち、灰黄褐色を呈す。**11**は、深鉢胴部下半で、1/8が残存し、内面はヨコ方向の貝殻条痕後ヨコナデ、外面はヨコ・ナナメ方向の貝殻条痕後、横位のナデで調整している。胎土は細砂を多く含み、器面にアバタ状の小孔が目立ち、外面は橙色、内面は灰褐色を呈す。**12**は、安山岩製の切削器で、長

さ5.2cm・幅4.05cm・厚さ1.09cm・重量26.2gを測る。主要剥離面は、礫面を打面として、剥離角は95°、バルブとバルバースカーの発達がみられる。背部にブランティング調整、刃部には調整と微細剥離が認められる。両側面は礫面と素材の埋没風化面を残す。風化は強くなく、刃先角は45°を測る。**13**は、玄武岩製打製石斧の基部で、残存長14.5cm・幅6.14cm・厚さ3.08cm・残存重量371.8gを測る。全体に風化が強く表面の詳細は不明である。大きい平坦剥離によって厚みを減らし、細かい平坦剥離によって、基部端は円形、胴部は短冊形に成形される。破損は、左側からの衝撃によるものと考えられる。**14**は、肌理の粗い花崗岩製の石皿片で、残存長軸長20cm・残存短軸長14.8cm・厚さ8cm・残存重量3.5kgを測る。鉱物の脱落が著しく、表面観察は困難だが、磨面は平面円形となる。

2. 中世

以下の陶磁器・土師器の時期記述には、下記文献を参照した。

宮崎亮一編（2000）『大宰府条坊跡XV：陶磁器分類編』（第49集）太宰府市教育委員会

山本信夫（1990）「統計上の土器」『九州上代文化論集』乙益重隆先生古稀記念論文集刊行会

SD1025（第6-1・2図、図版6-2・3）

トレンチ7で検出した北西方向の流路である。幅4m以上、深さ56cmを測る。下層にシルト・細砂、上層に小礫とマンガン・鉄分を含む暗褐色粘質土が堆積する。遺物は散漫に含まれる。

SD1025出土遺物（第6-5図、図版6-4）

15は、白磁碗V3a類で、C期（11世紀後半～12世紀前半）である。胎土は灰白色を呈し、ややオリーブ色がかった灰白色の薄い施釉である。**16**は、土師器小皿で、1/6が残存し、復元口径8.8cm・器高1.2cmを測る。底部外面に回転糸切り痕が残る。胎土は細～粗砂を含み、橙色を呈す。**17**は、土師器小皿片で、底部外面に回転糸切り痕と板状圧痕が残る。胎土は細～粗砂を含み、橙色を呈す。**18**は、白磁碗IV類で、C期（11世紀後半～12世紀前半）である。1/8が残存し、復元口径17cmを測る。胎土は淡灰色をなし、オリーブ色がかった灰白色透明の薄い施釉で、貫入はみられない。その他、土師器・弥生土器・白磁・須恵器・瓦器の摩滅した小片が出土している。

SD1021（第6-1・2図、図版6-2・3）

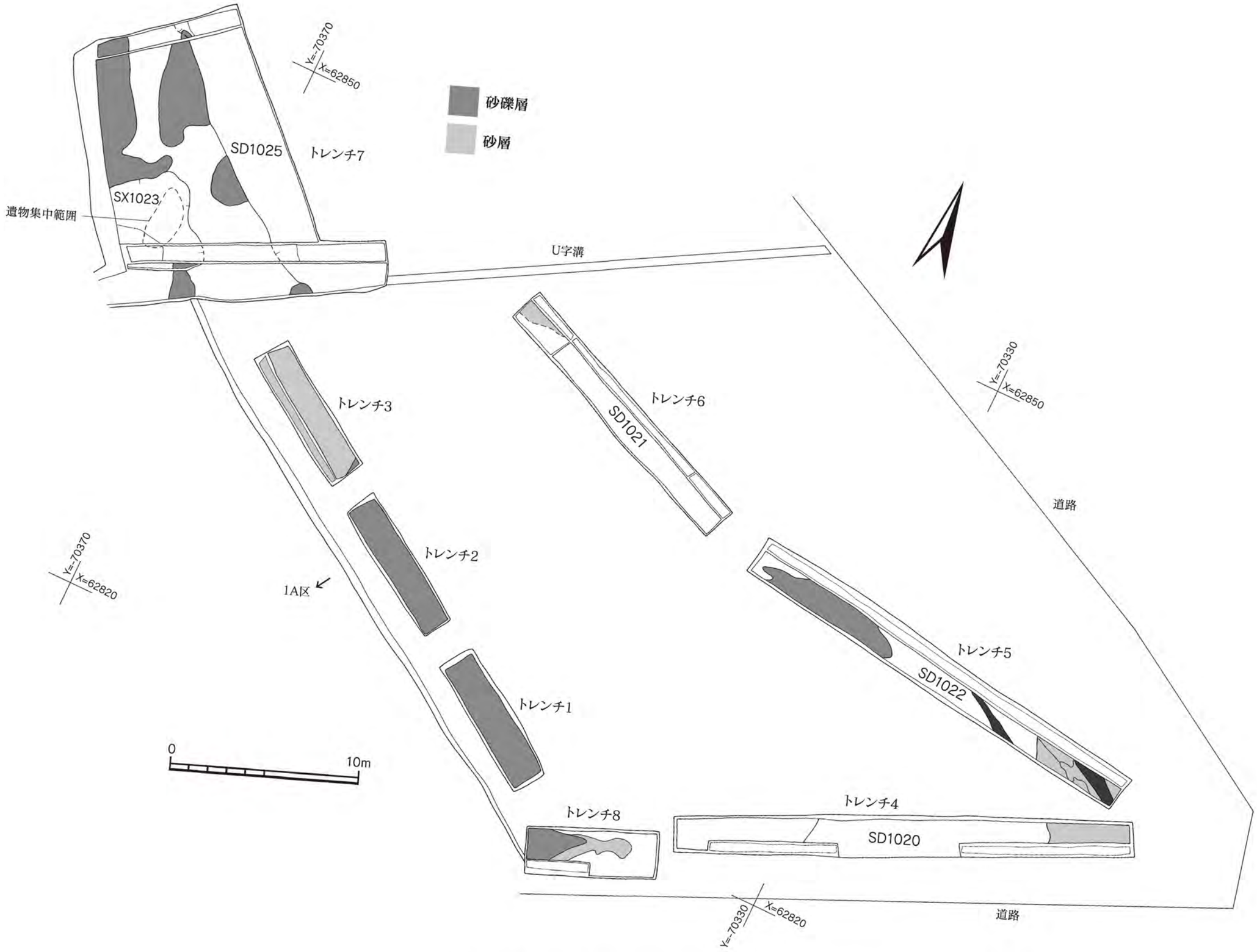
トレンチ6とトレンチ5西端で検出した東西方向に流れる流路である。幅10m、深さは48cm以上を測る。埋土は、暗褐色粘質シルトで径1～5cmの亜円礫やマンガンを含む。遺物が散漫に含まれる。SD1025と同一の流路である可能性が高い。

SD1021出土遺物（第6-5図、図版6-4）

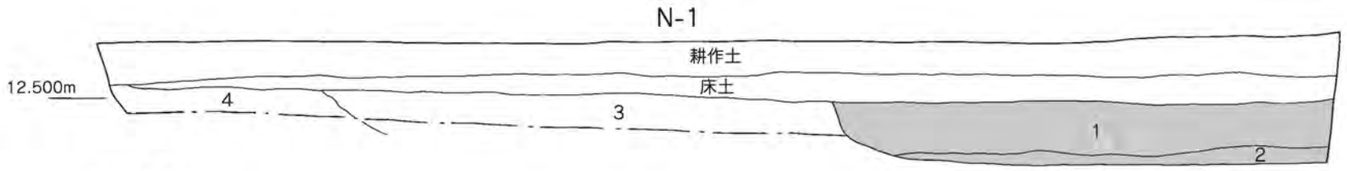
19は、白磁碗V3b類で、C期（11世紀後半～12世紀前半）である。外面に縦線文が描かれる。胎土は灰白色をなし、灰白色の薄い施釉で外面にピンホールが多数認められる。**20**は、白磁碗II類で、C期（11世紀後半～12世紀前半）である。玉縁口縁はわずかな肥厚である。胎土は灰白色をなし、ややオリーブ色がかった灰白色の薄い施釉で、外面にピンホールが認められる。胴部下半は露胎である。**21**は、土師器小皿片で、底部外面に糸切り痕が残る。胎土は石英細～粗砂をやや多く含み、にぶい黄橙色を呈す。その他土師器・弥生土器・白磁・青磁・陶器の小片、黒曜石片が出土している。

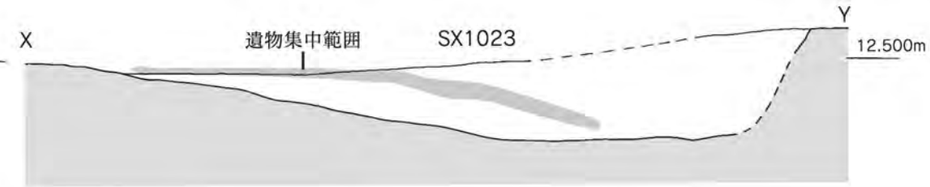
SD1022（第6-1・2図、図版6-2・3）

トレンチ5で検出した南北方向に流れる流路である。幅9m、深さは40cmを測る。下層に灰褐色細砂、上層に黄褐色～褐色粘質シルトが堆積する。遺物はあまり含まれない。

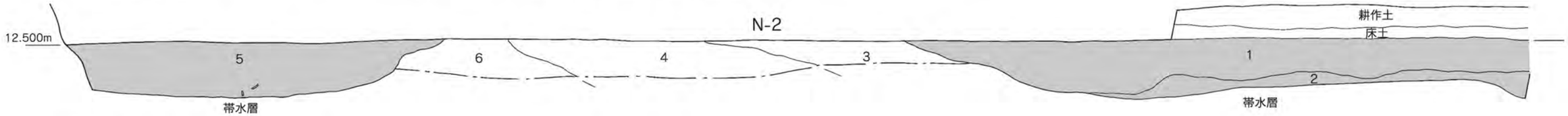


第6-1図　千里遺跡第1次調査1B区の全体図(S=1/200)

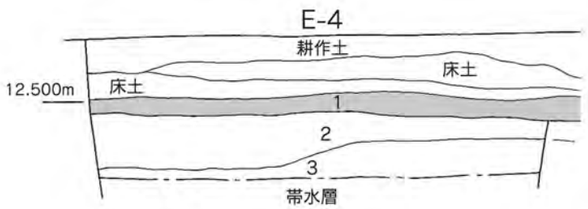


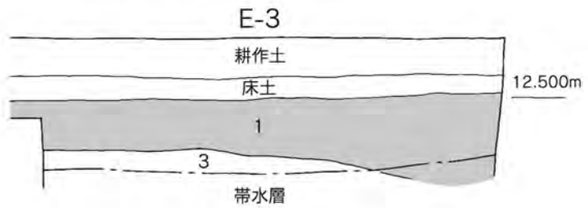


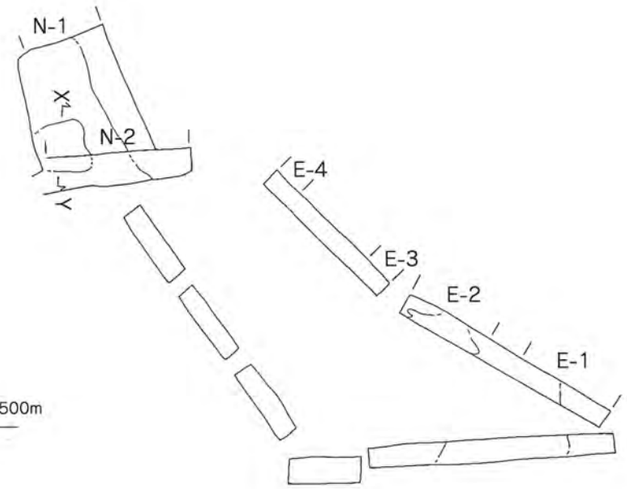
N-1土層
1. 暗褐色粘質土。径1～5cmの亜角礫を少なく含む。鉄分・マンガンを含む。SD1025
2. 暗褐色シルト。SD1025
3. 黄褐色シルト質粘土。径3cmの亜円礫を含む。上部にマンガンが沈着する。
4. 灰褐色砂礫。径1～10cmの亜円礫を主とする。



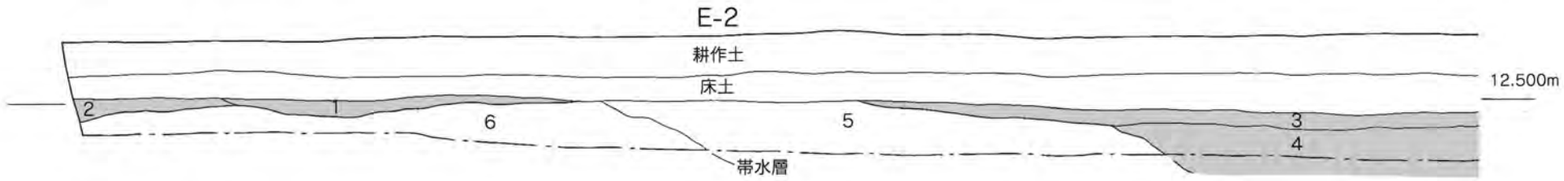
N-2土層
1. 暗褐色粘質土。径1～3cmの亜円礫・土器片を少なく含む。SD1025
2. 灰褐色細砂。SD1025
3. 黄褐色細砂。しまりが強い。
4. 灰褐色細砂。中砂をブロック状に含む。
5. 明黄褐色粘土。縄文土器を含む。鉄分が沈着する。SX1023
6. 灰色砂礫。粗砂と径5cmの亜円礫を主とする。



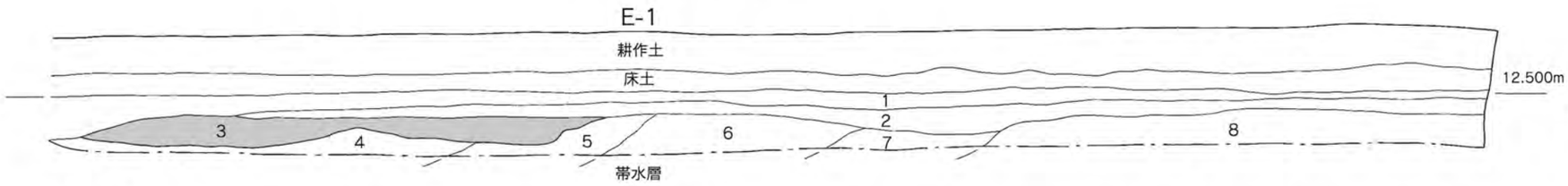




E-4・E-3土層
1. 暗褐色粘質シルト。土器小片を含む。SD1021
2. 灰褐色細砂。下部にマンガンが沈着する。
3. 灰褐色中砂。下部にマンガンが沈着する。

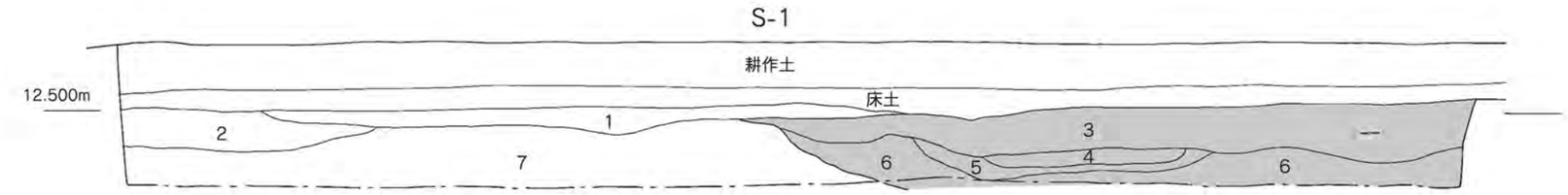


E-2土層
1. 暗灰褐色粘質土。SD1021
2. 暗褐色粘質シルト。マンガンが沈着する。SD1021
3. 黄褐色粘質シルト。SD1022
4. 灰褐色細砂。SD1022
5. 灰褐色砂礫。径1～4cmの亜円礫を主とする。
6. 灰褐色中砂

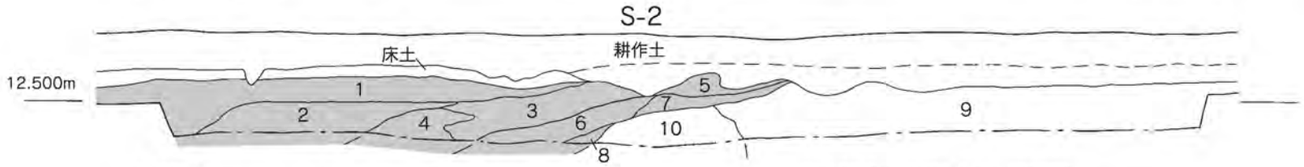


E-1土層
1. 灰黄褐色粘質シルト
2. 黄褐色粘質シルト。マンガンを含む。
3. 褐色粘質シルト。細砂・マンガンを含む。SD1022
4. 褐色細～中砂
5. 灰褐色細砂と白灰色中・粗砂との互層。
6. 灰褐色細～粗砂の互層。マンガンを含む。
7. 灰白色細砂。マンガン。鉄分を含む。
8. 灰褐色シルト・細砂。マンガンを多く含む。

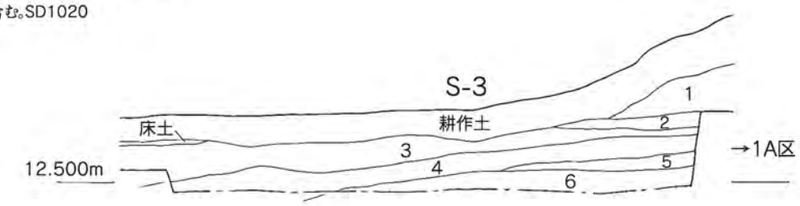
第6-2図　1B区土層実測図1 (S=1/40)



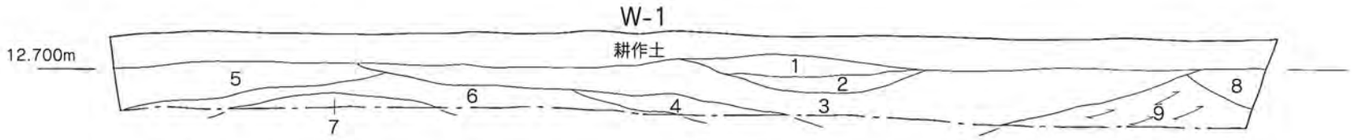
S-1土層
1. 灰黄褐色粘質シルト
2. 灰褐色細砂。鉄分・マンガンが沈着する。
3. 褐色粘質シルト。細砂・マンガンを含む。SD1020
4. 灰褐色中砂。SD1020
5. 褐色粘質シルト。マンガンをわずかに含む。SD1020
6. 褐色細～粗砂の互層。SD1020
7. 灰褐色細～粗砂の互層



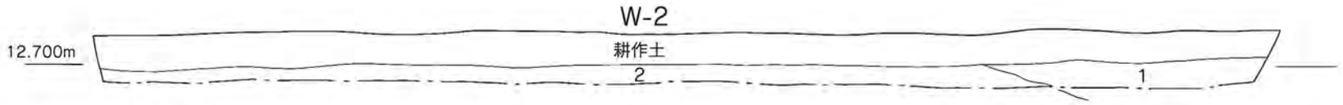
S-2土層
1. 褐色粘質シルト。SD1020
2. 1層と4層の混土。SD1020
3. 灰白色細砂。SD1020
4. 褐色細～粗砂の互層。SD1020
5. 黄褐色粘質シルト。SD1020
6. 3層と10層の混土。SD1020
7. 灰黄褐色シルト。砂礫を含む。SD1020
8. 10層と3層の混土。SD1020
9. 黄灰褐色粘質シルト。上部にマンガンが沈着する。
10. 灰褐色シルト・細砂。鉄分が沈着する。



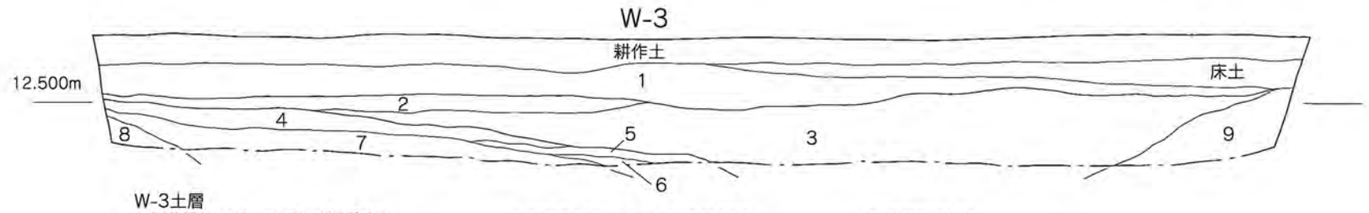
S-3土層
1. 暗褐色シルト質粘土。マンガンを多く含む。砂礫を含む。
2. 1層よりも黄色がかる。砂礫をあまり含まない。
3. 暗灰色粘質シルト。マンガンが沈着する。
4. 灰褐色粘質シルト。マンガンが沈着する。
5. 暗灰色砂質シルト
6. 暗灰色砂礫。径1～5cmの亜円礫を主とする。



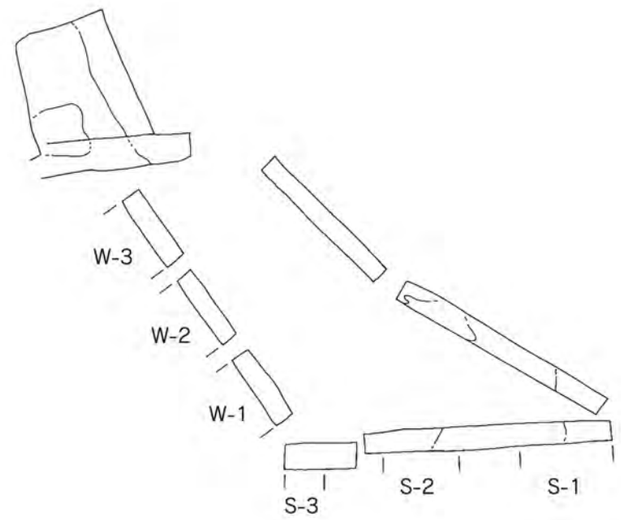
W-1土層
1. 灰褐色砂礫。径1cmの小礫を主とする。
2. 褐色細砂
3. 褐色砂礫。径5cmの礫を主とする。
4. 黒褐色粗砂
5. 褐色砂礫。径1cmの小礫を主とする。
6. 褐色細砂
7. 黒褐色砂礫
8. 黒褐色砂礫。径2cmの礫を主とする。
9. 褐色中・細砂の互層



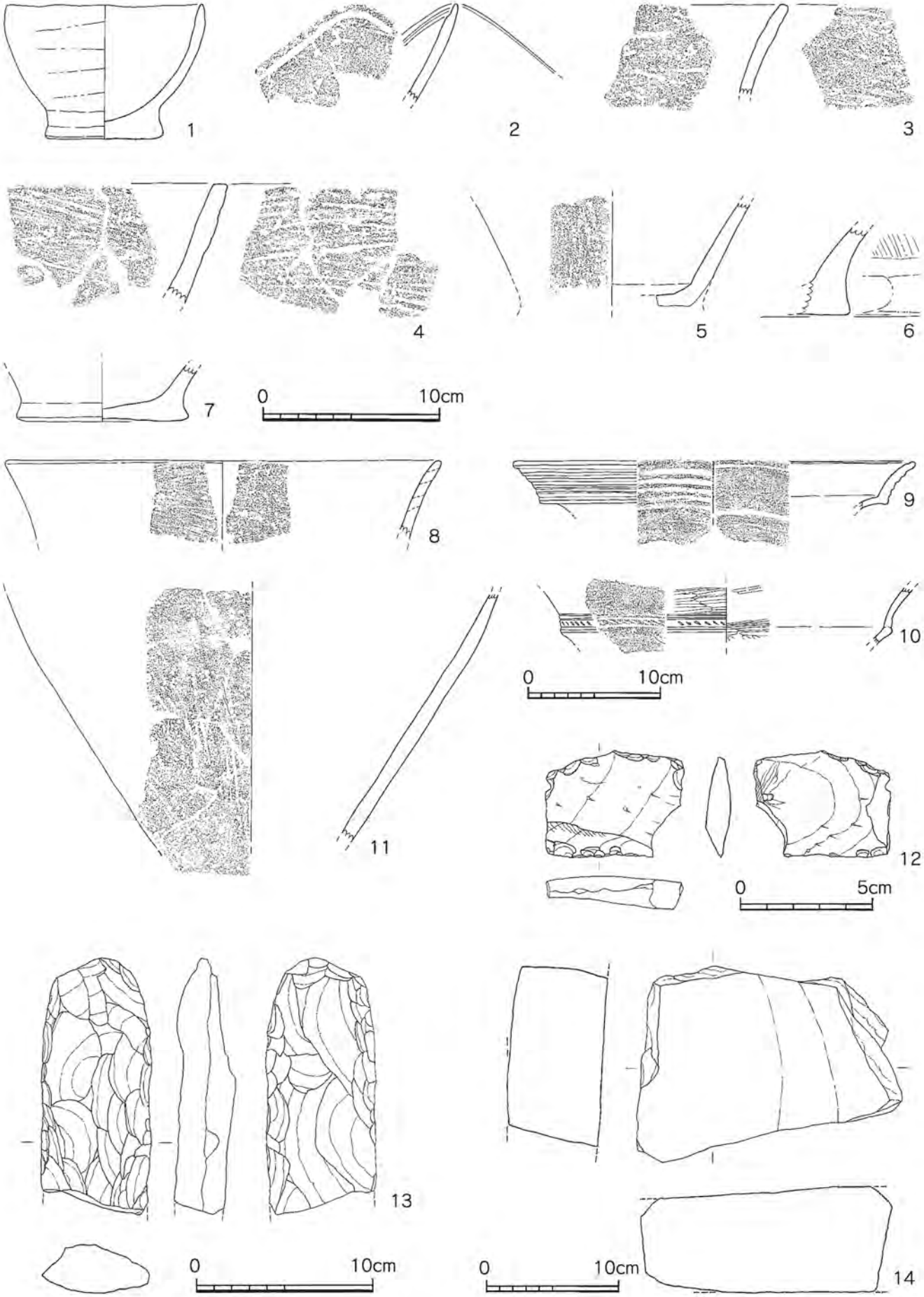
W-2土層
1. 褐色粘質シルト。マンガンを多く含む。
2. 褐色砂礫。径1～5cmの亜角礫を主とする



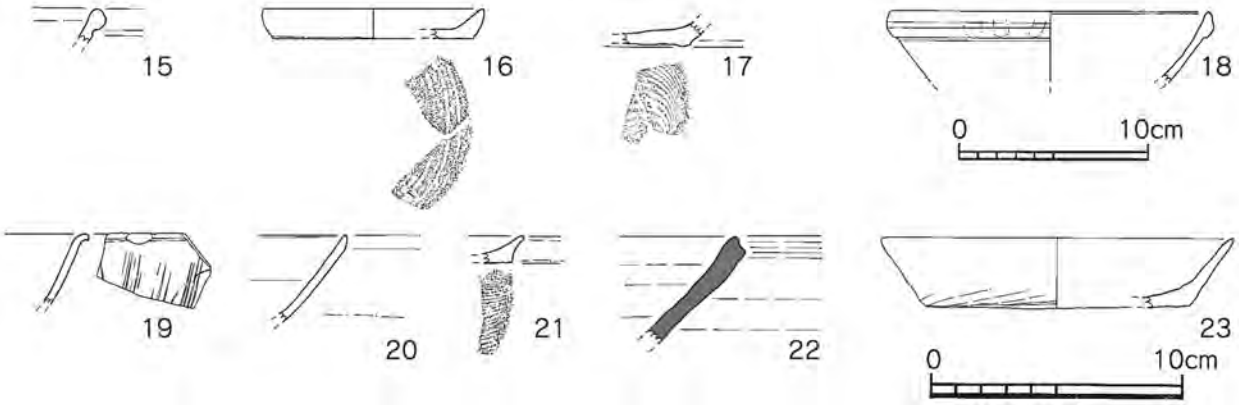
W-3土層
1. 灰黄褐色シルト。マンガンが沈着する。
2. 灰褐色粗砂
3. 灰褐色細砂
4. 灰褐色粗砂。径5cm小礫を多く含む。
5. 黄灰褐色細砂
6. 褐色粗砂
7. 灰黄褐色細砂
8. 褐色砂礫。径5cm礫を主とする。
9. 灰褐色中砂。小礫を含む。



第6-3図　1B区土層実測図2 (S=1/40)



第6-4図　SX1023 出土遺物実測図(8～11・14はS=1/4、12はS=1/2、他はS=1/3)



15～18　SD1025　19～21　SD1021　22　SD1022　23　SD1020
第6-5図　SD出土遺物実測図（18はS=1/4、他はS=1/3）

SD1022出土遺物（第6-5図、図版6-4）

22は、東播系須恵器の鉢口縁部片である。胎土は石英細～粗砂を含み、全体にやや青味がかった灰色を呈し、口縁部上端の幅1cmが灰黒色を呈す。時期は12世紀中頃であろう。その他土師器・弥生土器の摩滅した小片、黒曜石片2点が出土している。

SD1020（第6-1・3図、図版6-2・3）

トレンチ4で検出した南北方向の流路である。幅約12m、深さ56cm以上を測る。下層に褐色粗砂、上層に褐色粘質シルトが堆積する。遺物はあまり含まれない。SD1022と同一流路の可能性がある。

SD1020出土遺物（第6-5図、図版6-4）

23は、土師器坏で、1/4が残存し、復元口径14cm・器高2.7cmを測る。底外面に板状圧痕が残る。胎土は石英細～粗砂をやや多く含み、にぶい橙色を呈す。時期は12世紀中頃であろう。その他、土師器・黒色土器・弥生土器の小片、鉄滓1点が出土している。

その他

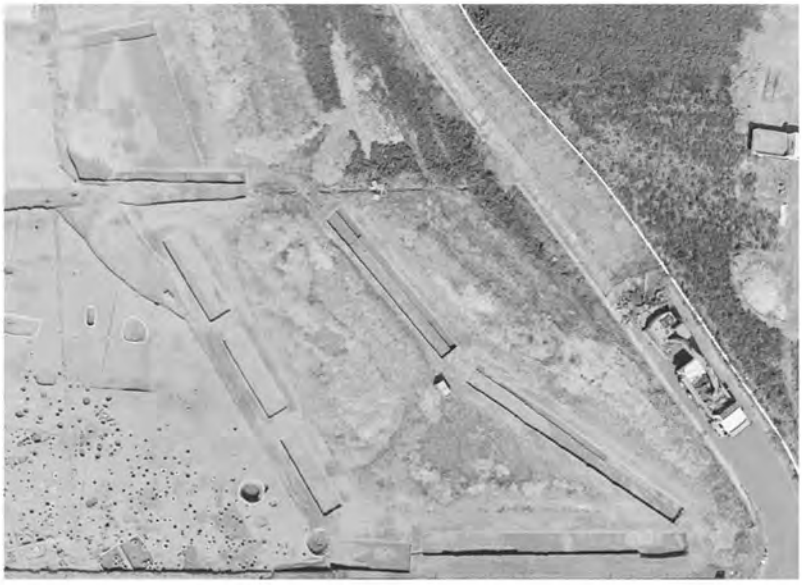
トレンチ1の砂礫層から縄文土器小片1点が出土した。トレンチ4のS-2土層9層から弥生土器小片1点、黒曜石剥片1点が出土した。トレンチ5では北西方向の近現代溝2条を検出した。

第3節　小結

落ち込み状のSX1023は、三万田 II 式土器をほぼ単純に含んでおり、調査地点周辺においては、比較的古い時期の遺物である。石器は、量は少ないが、土器による時期比定が可能な資料と言えよう。

中世の流路は、11世紀後半～12世紀中頃の遺物を主体的に含んでいる。SD1020・1021・1022・1025は近い時期に形成されており、それぞれが連結していた可能性も高い。流路が密であることからも、削平されている上層では、水田などの耕地利用がなされていた可能性も考えられる。

本調査地点の北側に位置する周船寺遺跡の調査では、遺跡範囲の東端で行われた6次調査の東部と14次調査において、遺構密度が低く、流路や河成堆積層が主体となるという成果が得られている。周船寺遺跡と千里遺跡の東端は、旧地形における微高地の東端に当たり、居住域としては安定していない東側河川の氾濫原に近い状態であったと考えられる。



1. 1B区全景（南から）

2. SX1023（南から）

3. SX1023 遺物集中範囲（南から）

図版6-2

4．N-1土層東側

5．N-2土層西側

6．E-3土層

7．E-1土層東側

8．S-2土層

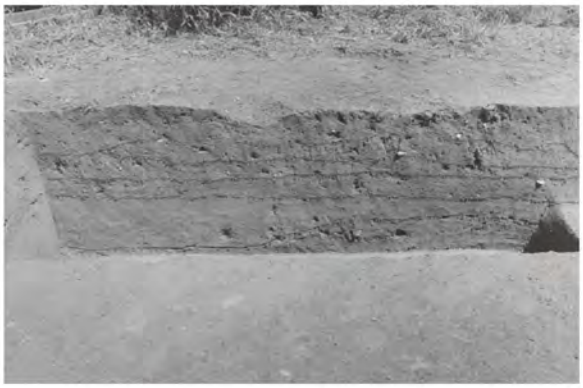
9．S-3土層

10．W-1土層

11．トレンチ7（北から）

12. N-1土層西側

13. N-2土層東側



14. E-4土層

15. E-2土層西側

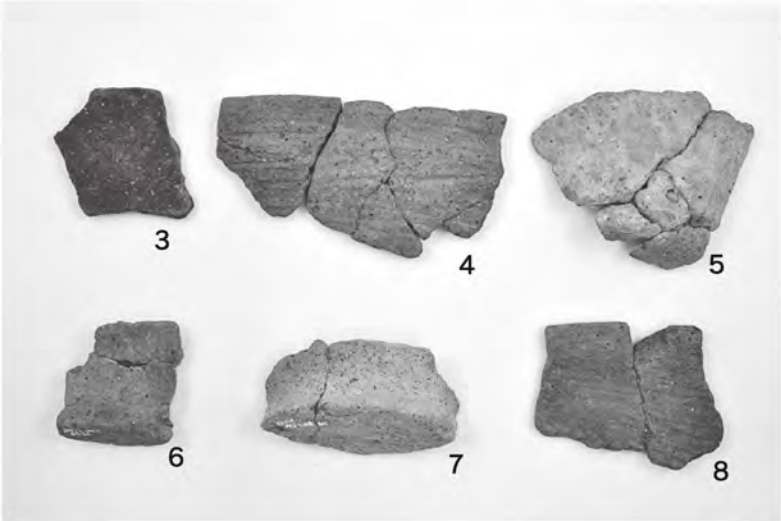
16. S-1土層西側

17. S-1土層東側

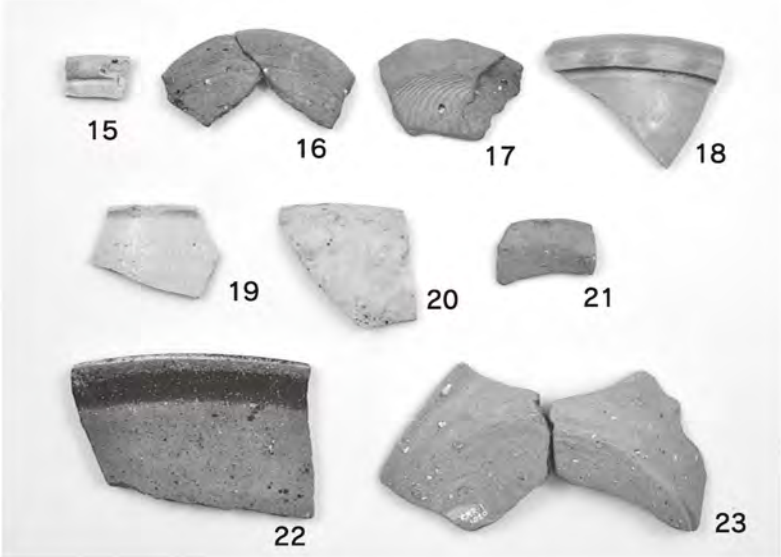
18. W-2土層

19. W-3土層

図版6-4



20. SX1023出土遺物



21. SD出土遺物

第VII章　千里遺跡第1次調査2区

第1節　調査の概要

全面が現代の耕地造成で平坦に削られていた。縄文時代晩期～弥生時代前期の河成堆積層を遺構検出面として、弥生時代中期後半の溝3条・土坑2基・土器溜まり、平安時代後期の掘立柱建物1棟、中世（12世紀代）の掘立柱建物7棟・土坑墓1基・土坑8基・ピット、14世紀代の区画溝1条、15世紀代の溝1条を確認している。

第2節　遺構と遺物

1．縄文時代～弥生時代

河成堆積層（遺物包含層）

2D区J-11区（第7-2図）　**出土遺物**（第7-8・10図、図版7-6・7）

2D区北端の遺物包含層で、黄褐色～灰褐色シルト質粘土が20～50cmの厚さで堆積する。

1～**4**は黒川式土器で、胎土は細砂を多く含む。**1**は浅鉢口縁部で、内外面を細かいヨコミガキで仕上げ、色調は灰黄褐色を呈す。**2**は浅鉢頸部で、内面は細かいヨコミガキ、色調は橙色を呈す。**3**は深鉢底部で1/4が残存し、復元底径7cmを測る。色調は橙色を呈す。**4**は深鉢底部で1/4が残存し、復元底径7cmを測る。色調は橙色を呈す。3と類似するが、胎土がわずかに異なる。**5**は須玖II式古段階の甕口縁部で、1/4が残存し、復元口径27.6cmを測る。胎土は細～粗砂を多く含み、色調は橙色を呈す。**63**は玄武岩製の打製石斧で、長さ12.8cm・刃部幅6.8cm・基部厚1.15cm・重量147.4gを測る。横長剥片を素材とする。

SX2099（第7-4図）　**出土遺物**（第7-8・11図、図版7-6～8）

2C区西部の遺物包含層で、小礫の混じる暗褐色シルト質粘土が20cmの厚さで堆積する。

第7-1図　千里遺跡第1次調査2区の遺構配置図（S=1/500）

6・7は板付式の甕で、胎土は細～粗砂を多く含み、色調は浅黄橙色～にぶい黄橙色を呈す。**6**は口縁部片、**7**は底部片である。**8～11**は黒川式土器で、いずれも胎土は細砂を多く含み、アバタ状の小孔がやや目立つ。調整は横位の貝殻条痕後ユビナデである。**8**は深鉢口縁部片で色調は橙色を呈す。**9**は深鉢胴部片で色調はにぶい赤褐色を呈す。**10**は深鉢胴部片で色調はにぶい黄褐色を呈す。**11**は鉢底部で1/3が残存し、復元底径7.5cmを測る。色調は橙色である。**65**は安山岩製の打製石鏃で、頭部・脚部が欠損し、残存長1.7cm・残存幅1.4cm・厚さ0.35cm・残存重量0.7gを測る。**66**は黒曜石製の石核を楔形石器として転用したもので、長さ3.3cm・幅2.15cm・厚さ2cm・重量16.3gを測る。上下端に潰れ痕と、それに伴う階段状剥離が認められる。**67**は玄武岩製の打製石斧もしくは横刃型石器で、残存長6.2cm・残存幅5.5cm・厚さ1.13cm・残存重量48.8gを測る。比較的大きな平坦剥離で成形しており、厚みも少ないため、横刃型石器の可能性が高い。**68**は玄武岩製の打製石斧で、基部が一部欠損し、残存長14.6cm・幅7.4cm・厚さ2.22cm・残存重量272.6gを測る。**69**は玄武岩の剥片で、残存長6.6cm・幅6.1cm・厚さ1.2cm・残存重量67.5gを測る。

トレンチ1第5層（第7-2・5図、図版7-2・5）　**出土遺物**（第7-8・10図、図版7-6・8）

2D区南の下層包含層で、土質は暗褐色粘質土、遺構検出面より約80cm下に20cmの厚さで堆積する。

12～14は板付式の甕で、胎土は細～粗砂を多く含み、色調は橙色を呈す。**12**は口縁部片である。**13**は底部で底径7cmを測る。**14**は底部で1/4が残存し、復元底径8cmを測る。内面にタテヘラナデが残る。**64**は玄武岩製の打製石斧で、長さ9.8cm・基部幅5.3cm・刃部幅5.9cm・基部厚1.56cm・重量139.4gを測る。全体は撥形で、刃部平面形は円刃、断面形は片刃、正面形はわずかに凹刃をなす。

SX2098（第7-2・5図、図版7-3）　**出土遺物**（第7-11図、図版7-7・8）

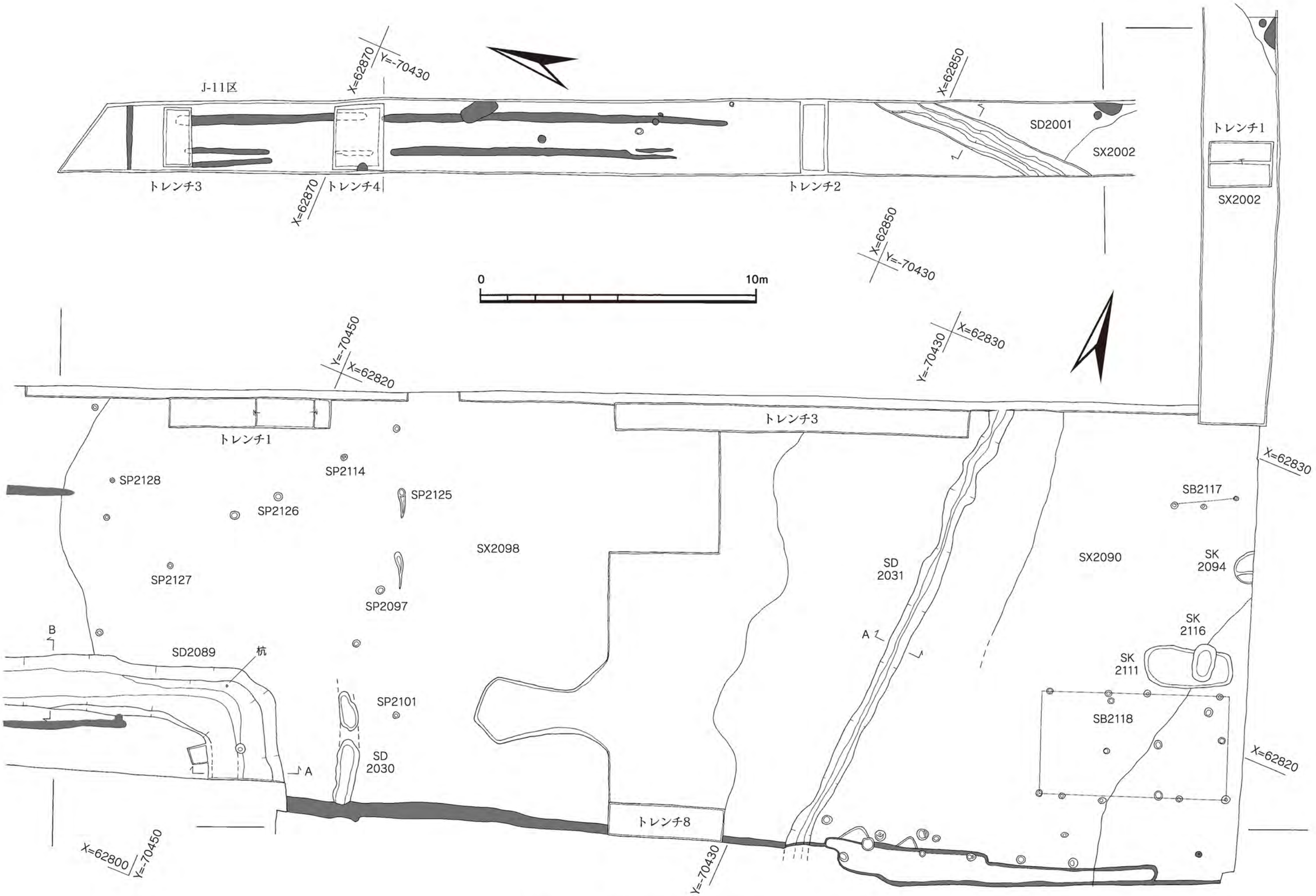
2B・C区の遺物包含層で、土質は茶褐色シルトでマンガンを多く含み、約30cmの厚さで堆積する。

図化に耐えないが弥生前期土器の小片が出土している。**70**は黒曜石製の剥片鏃未成品で、頭部が欠損し、残存長1.7cm・幅2cm・厚さ0.4cm・残存重量0.9gを測る。幅2cm以上の比較的長大な縦長剥片を素材とする。**71**は黒曜石製の打製石鏃で、長さ2.3cm・幅1.4cm・厚さ0.4cm・重量0.9gを測る。**72**は玄武岩製の打製石斧もしくは横刃型石器で、残存長7.5cm・幅4.8cm・厚さ1cm・残存重量55.6gを測る。打製石斧の基部としては厚みが少なく、横刃型石器としては刃部が明瞭でない。**73**は玄武岩製の打製石斧で、長さ13.8cm・基部幅4.5cm・基部厚2.4cm・刃部幅5.3cm・刃部厚1.2cm・重量238.2gを測る。**74**は玄武岩製の打製石斧で、長さ19.7cm・刃部幅7.4cm・基部厚2.67cm・重量495.7gを測る。大型の横長剥片を素材とする。刃部の摩耗は顕著ではなく、剥離面縁辺の鋭利さを残しているため、未成品・未使用品・刃部再加工品の可能性がある。その他、黒曜石片が少量出土している。

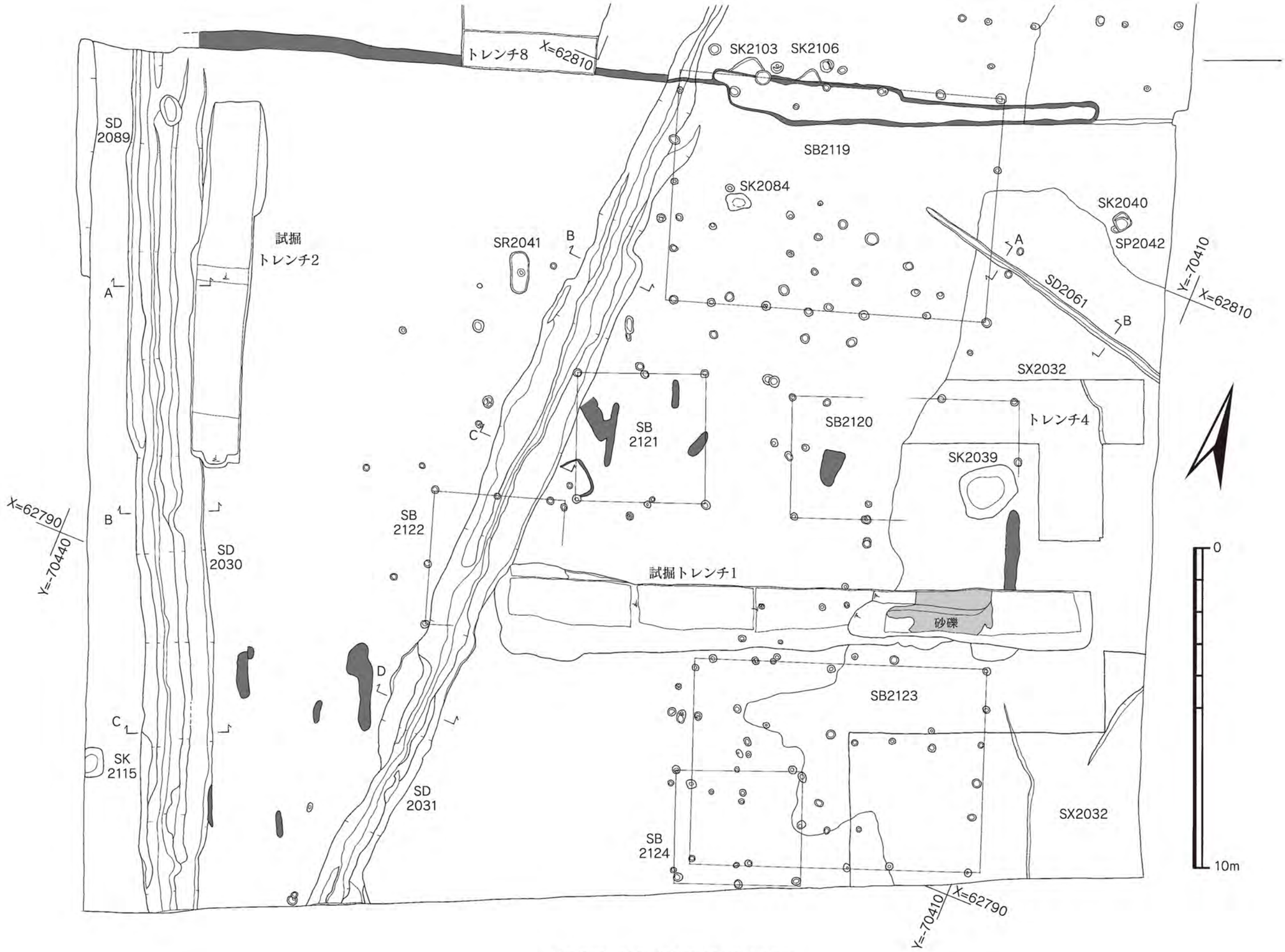
溝　SD2001・2031（第7-2・3・6図、図版7-1・4）　**出土遺物**（第7-8・10図、図版7-6・7）

2D・B・A区で確認した南北方向に流れる溝である。SD2001とSD2031は連結しないが、同一の溝と考えてよいであろう。幅は60cm～2.4m、断面形は中央が深い、角度の大きいV字状で、深さは12～20cmを測る。埋土は黄灰褐色シルト質粘土を主体とし、部分的ではあるが最下層に白色砂が堆積している。中世のピットに切られており、出土土器の大半は弥生土器小片である。ごく少量土師器片が混ざるが、これは溝上から掘り込まれた遺構の遺物を混入して取り上げた可能性が高い。

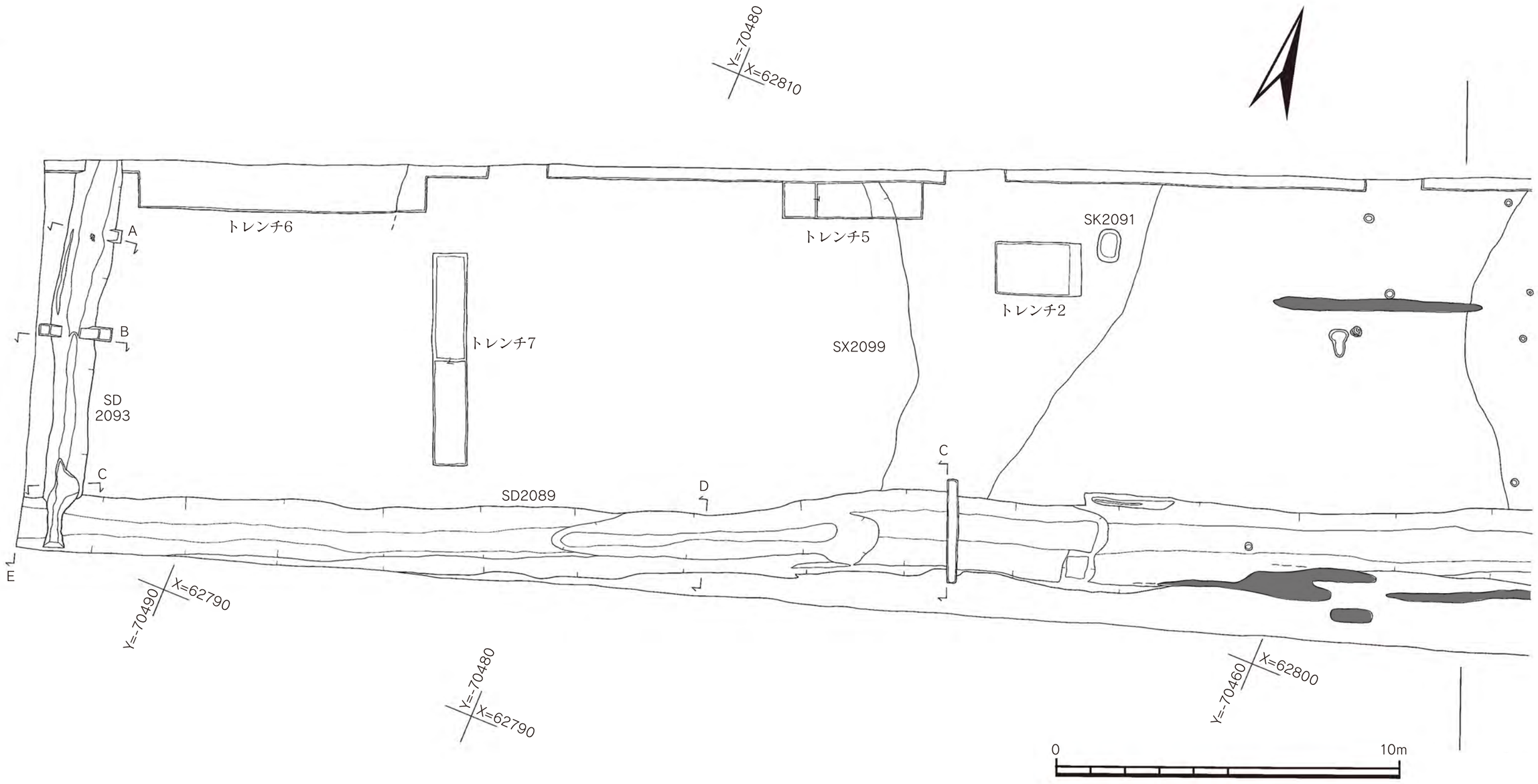
19は黒川式土器の深鉢胴部で、内外面を貝殻条痕後、ヨコナデで仕上げている。胎土は細砂を多く含み、色調は黒褐色を呈す。**20～22**は須玖式土器で、細～粗砂を多く含み、色調は橙色を呈す。**20**は甕底部で、**21・22**は器台上部片である。**23**は土師器小皿底部で1/3が残存し、復元底径6cmを測る。わずかに上げ底で、底部外面に板状圧痕が残る。混入資料であろう。**56**は黒曜石製の打製石鏃で、頭部が欠損しており、残存長2cm・幅2.7cm・厚さ0.6cm・残存重量1.5gを測る。**57**は黒曜石製の掻器状使用痕剥



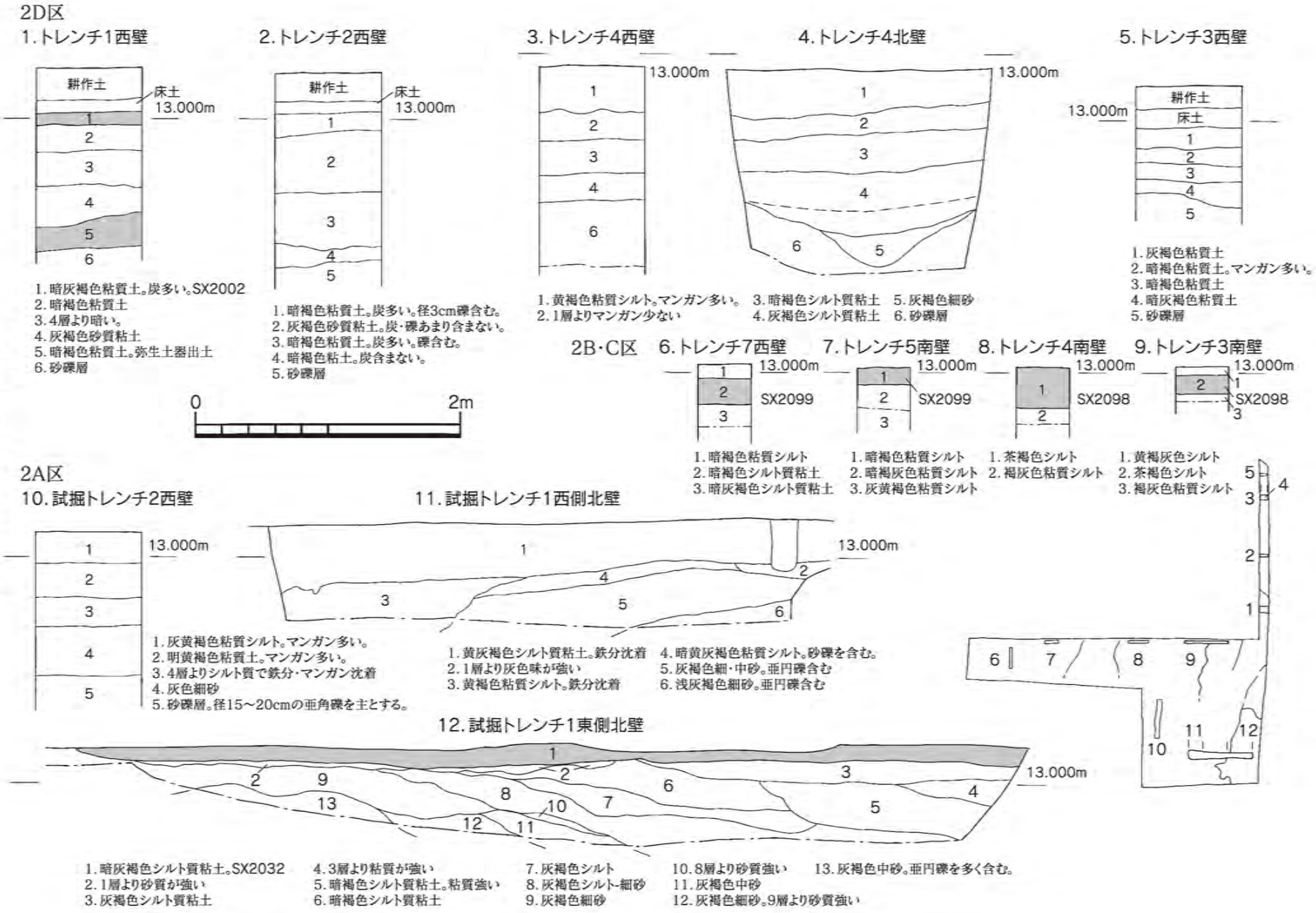
第7-2図　2B・D区遺構平面図（S=1/120）



第7-3図　2A区遺構平面図（S=1/120）



第7-4図　2C区遺構平面図（S=1/120）



第7-5図　2区土層実測図（S=1/40）

片石器で、長さ5.6cm・幅1.5cm・厚さ0.5cm・重量4gを測る。縦長剥片の両側辺に片面微細剥離が認められ、刃先角は左辺が45～50°、右辺が55～60°を測る。**58**は蛇紋岩～結晶片岩の乳棒状磨製石斧で、刃部が欠損し、残存長9.2cm・残存幅5.8cm・残存厚3.3cm・残存重量172gを測る。全面研磨で仕上げられ、面取はみられない。**59**は玄武岩製の打製石斧で、長さ13.4cm・刃部幅5.2cm・基部厚1cm・重量143.2gを測る。横長剥片を素材とする。刃部は摩滅して丸みを帯びており、使用によるものと考えられる。**60**は玄武岩製の打製石斧胴部片で、残存長5.2cm・幅5.1cm・厚さ1.8cm・残存重量73.6gを測る。その他、玄武岩の横長剥片と黒曜石片が出土している。

SD2093（第7-4・6図、図版7-2～4）　**出土遺物**（第7-8・10図、図版7-6・7）

2C区西端で検出した南北方向の溝である。幅は1.2～1.4m、断面形は北半が逆台形、南半がU字形で、深さは45～50cmを測る。埋土は、下層に細～粗砂の互層、上層に灰黄褐色粘質シルトが堆積する。下層からは主に縄文時代晩期～弥生時代前期の遺物が出土し、上層からは弥生時代中期後半の土器が出土するが、埋土の堆積は連続的であり、堆積の中断や掘り直しの痕跡は認められない。そのため、下層の土器は周辺包含層からの流れ込みで、溝の時期は弥生時代中期後半と考える。

24は須玖II式新段階の袋状口縁壺で、口径12.4cmを測る。胎土は細～粗砂を多く含み、色調は橙色を呈す。**25**は須玖II式新段階の丹塗り壺口縁部で、胎土は細～粗砂を多く含み、色調は橙色を呈す。口縁部上端から外面に丹が塗布される。**26**は板付Ⅰ式新段階の甕口縁部で、胎土は細～粗砂を多く含み、色調は橙色を呈す。**27～31**は御領式土器である。**27**は浅鉢口縁部で、胎土は細砂を含み、色調はにぶい黄橙色を呈す。**28**は深鉢の山形口縁頂部で、胎土は細砂をわずかに含み、色調は明黄褐色を呈す。器面にはアバタ状の小孔が目立つ。**29**は深鉢の口縁部片で、胎土は細～粗砂を多く含み、色調は灰黄褐色を呈す。山形口縁頂部に棒状工具による凹みがみられ、口縁部と頸部の粘土帯接ぎ目が内面では段をなし、外面では凹線が施される。**30**は深鉢の口縁部で、胎土は細～粗砂を多く含み、色調は灰黄褐色を呈す。**31**は深鉢口縁部で、胎土は細砂をわずかに含み、色調はにぶい黄橙色を呈す。器面にはアバタ状の小孔が目立つ。**61**は玄武岩製の今山型石斧未成品で、刃部が欠損し、残存長11.9cm・幅7.2cm・厚さ5.3cm・残存重量629.8gを測る。**62**は玄武岩製の打製石斧で、基部が欠損しており、残存長8.6cm・刃部幅7.7cm・厚さ1.5cm・残存重量114.8gを測る。その他、黒曜石剥片が多数出土している（第13-1表）。すべて角礫で、一部に打面調整・縦長剥片への指向が認められる。弥生時代の剥片群にわずかに縄文時代の剥片が混ざっていると考える。

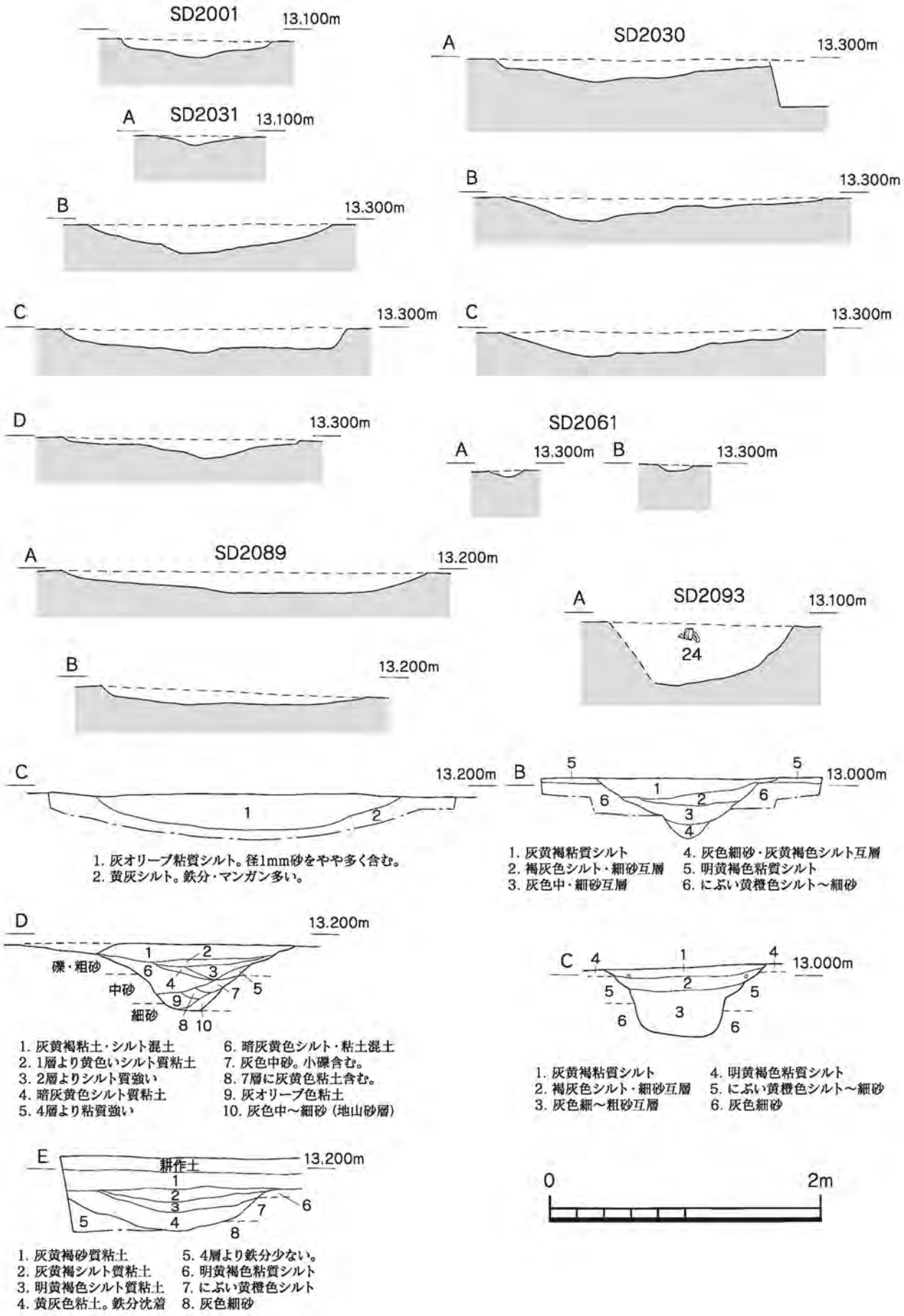
SD2061（第7-3・6図、図版7-1）　**出土遺物**（第7-8図、図版7-6）

2A区東側で検出した北西方向に延びる細い溝である。幅25～30cm、断面形はU字形で、深さは4～5cmである。埋土は灰色シルト質粘土で、摩滅が著しい弥生土器が少量出土している。土器型式は須玖I式を含むが、SX2032を切っているため、須玖II式古段階に近い時期である。

32は須玖I式の甕口縁部で、胎土は細～粗砂を多く含み、色調は橙色を呈す。摩滅が著しい。**33**は須玖式の蓋裾部で、胎土は細～粗砂をやや多く含み、色調は橙色を呈す。

土坑（第7-2・7図、図版7-1・5）

SK2094は、2B区東端で検出した東東北軸の土坑である。平面形は楕円形と考えられ、幅120cm、底面は平坦で、深さは12cmを測る。埋土は暗褐色粘質シルトで、図化に耐えない弥生土器小片が少量出土している。**SK2111**は、2B区東端で検出した東西軸の土坑である。平面形は楕円形で、最大長3.3m・最大幅1.5m、底面は平坦で、深さは9cmを測る。埋土は暗褐色粘質シルトで、遺物の出土はない。中世のSK2116に切られており、SK2094との形態・埋土の類似性から弥生時代の所産と考える。

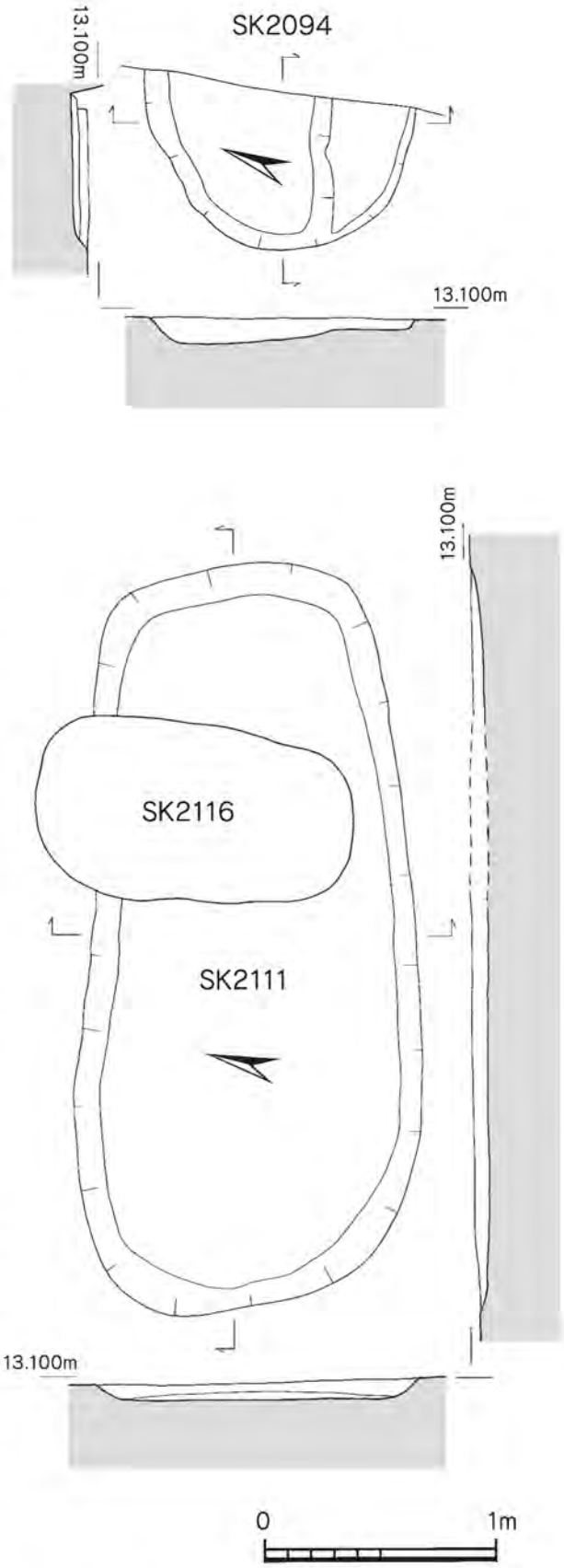


第7-6図　2区SD断面・土層実測図（S=1/40）

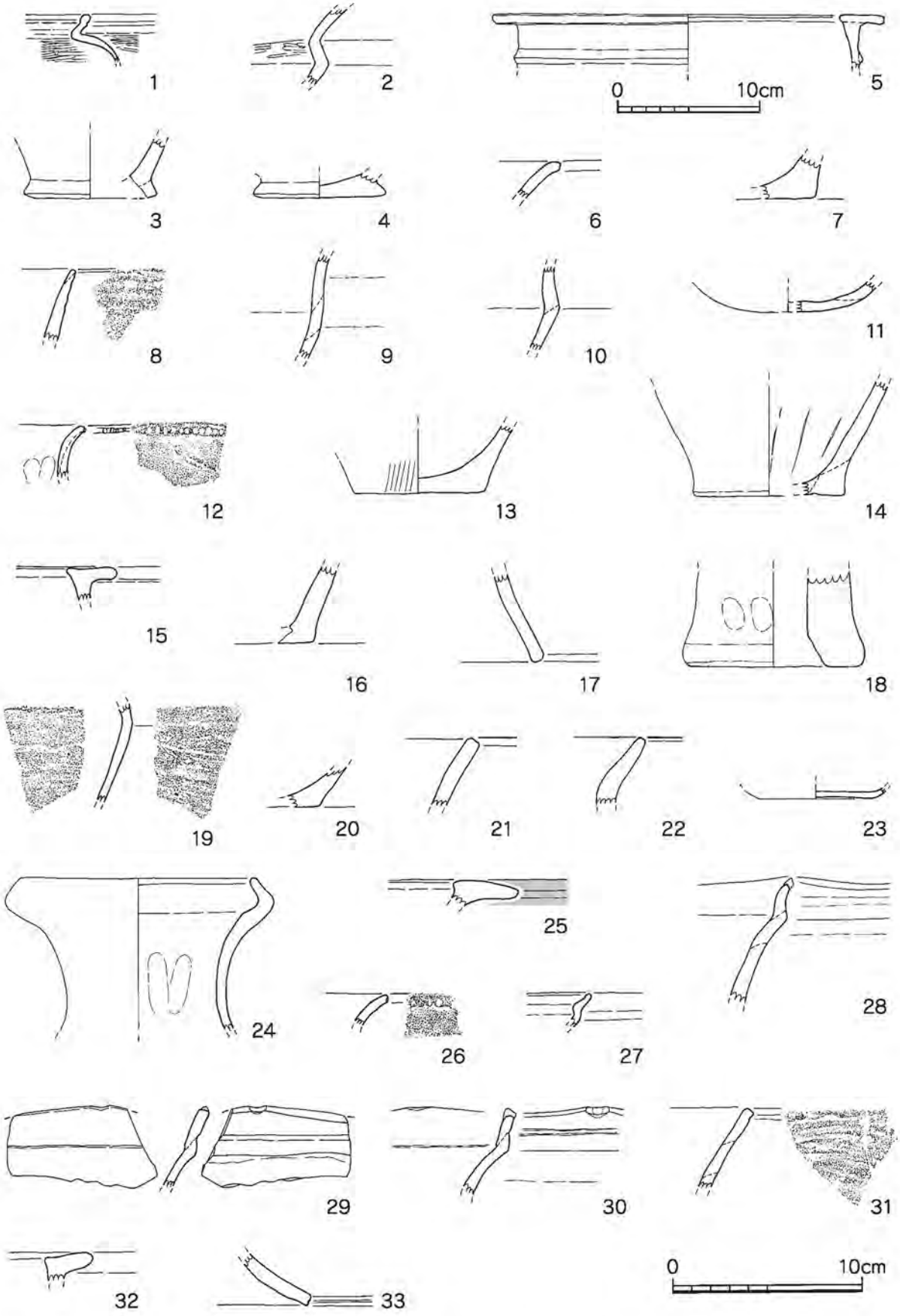
土器溜まり（第7-2・3・5図、図版7-2・5）
出土遺物（第7-8・9図、図版7-6～8）

SX2002は2D区、**SX2090**は2B区、**SX2032**は2A区で検出した土器溜まりである。SX2002とSX2032は、埋土が暗褐色シルト質粘土で下部に鉄分が沈着し、10～15cmの厚さで堆積する点が共通する。これに対し、SX2090は現代耕作土下に灰色シルト質粘土として確認した。3者はいずれも須玖II式古段階の土器を含む。A・D区に比べてB区の検出面が20～25cm下がっているため、埋土の異なるSX2090は上層の暗褐色粘質シルトが削平された状態と理解し、ここでは3者は一連の土器溜まりとする。

15～18、**34～55**は須玖II式古段階の土器で、 胎土は細～粗砂を多く含み、色調は橙色～にぶい橙色を呈す。**15**は甕口縁部片、**16**は甕底部片、**17**は器台下部片である。**18**は器台下部で、1/6が残存し、復元下部径9.6cmを測る。**34**は甕口縁部で、口縁部内面から上端の粘土が剥落している。色調は浅黄橙色を呈す。**35**は甕口縁部片、**36**は蓋裾部片、**37**は広口壺口縁部片である。**38**は底部で、底径7.8cmを測り、やや上げ底となる。**39**は器台上半部で、1/6が残存し、復元上部径9.8cmを測る。タテハケメ後に丁寧なヨコユビナデで仕上げる。**40**は甕口縁部片である。**41**は甕底部で1/4が残存し、復元底径7.2cmを測る。**42**は蓋裾部片、**43**は甕底部片である。**44**は高坏脚部片である。**45**は器台もしくは支脚の下部で、1/3が残存し、復元下部径9.6cmを測る。**46**は高坏脚部片で、外面にタテミガキが認められる。**47**は甕口縁部で1/4が残存し、復元口径25cmを測る。**48**は甕口縁部で1/6が残存し、復元口径27cmを測る。**49**は甕口縁部で1/8が残存し、復元口径26cmを測る。**50**は甕口縁部で1/8が残存し、復元口径23.8cmを測る。**51**は甕底部で1/4が残存し、復元底径8cmを測る。**52**は壺底部で底径6.6cmを測る。**53**は壺口縁部で1/6が残存し、復元口径21.6cmを測る。頸部上端外面に2条の沈線をめぐらす。**54**は無頸壺口縁部で1/8が残存し、復元口径16.4cmを測る。**55**は高坏脚部で残存高21cmを測る。**75**は玄武岩製の横刃型石器で、長さ8.4cm・幅5cm・厚さ0.9～1.7cm・重量73.8gを測る。**76**は砂岩製の磨石で、径8.2～8.4cm・厚さ

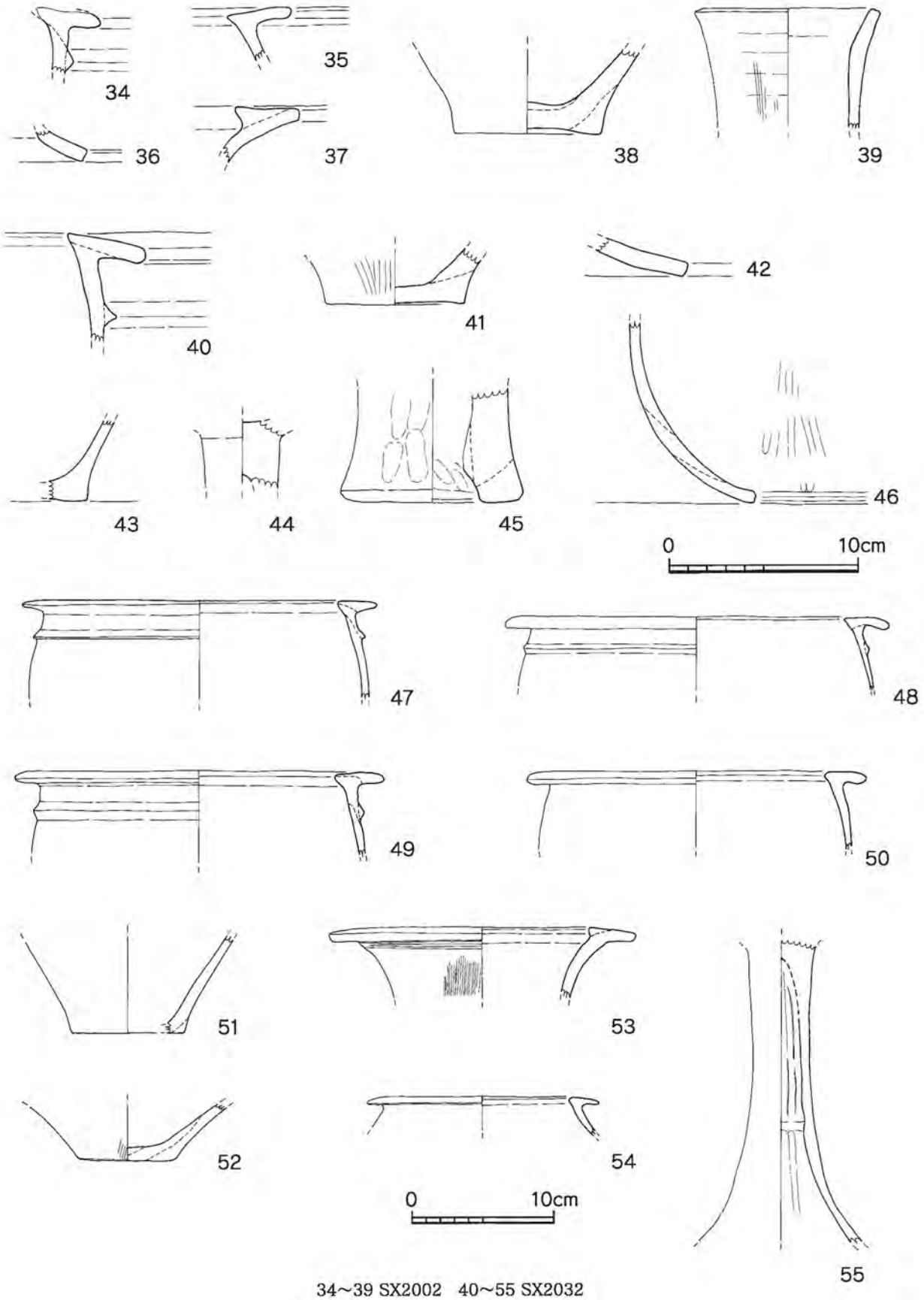


第7-7図　2区弥生時代SK実測図（S=1/30）



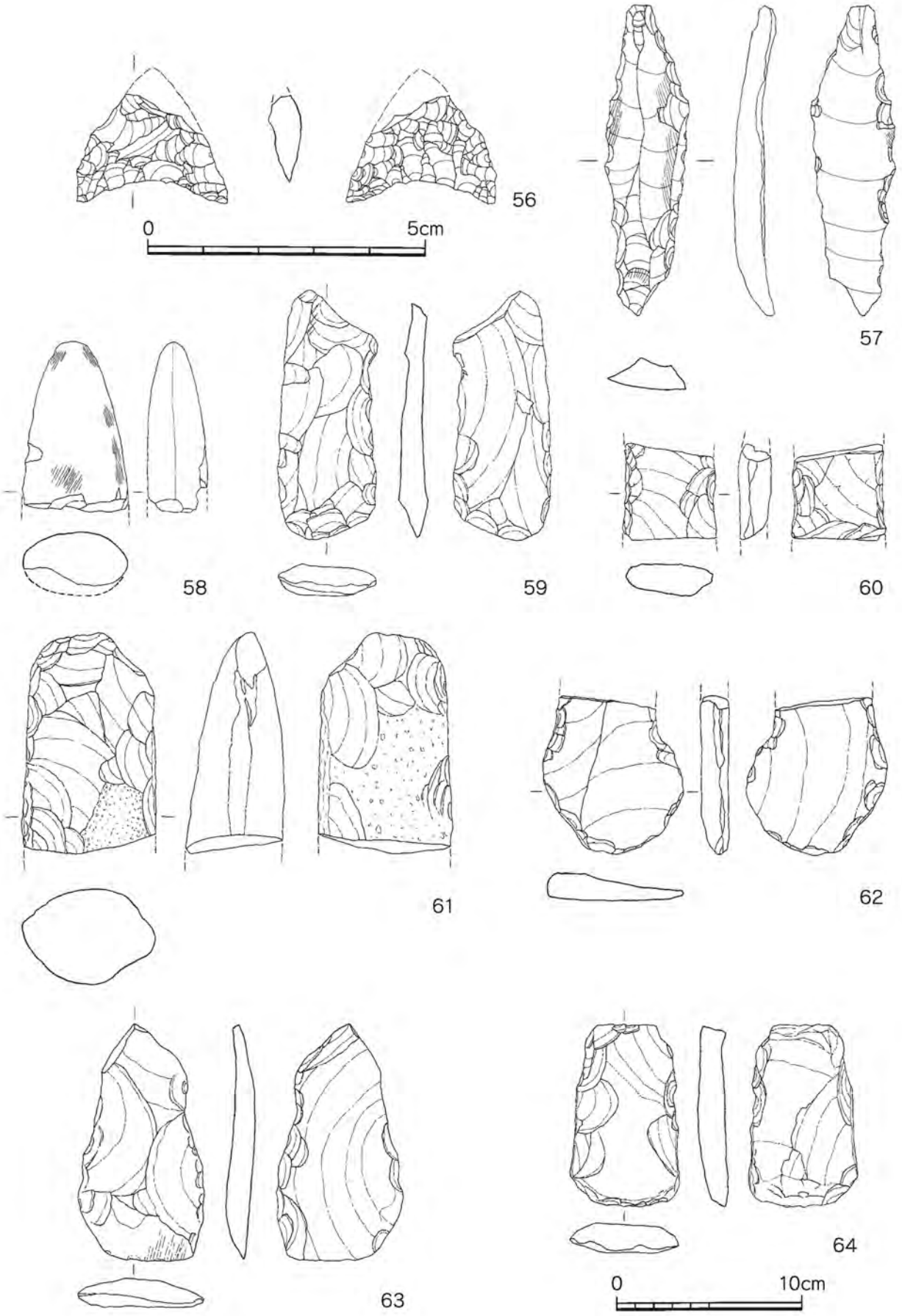
1～5 J-11区検出面　6～11 SX2099　12～14　2D区トレンチ1
15～18 SX2090　19～23 SD2031　24～31 SD2093　32・33 SD2061

第7-8図　2区縄文～弥生時代SX・SD出土土器実測図（5はS=1/4、他はS=1/3）



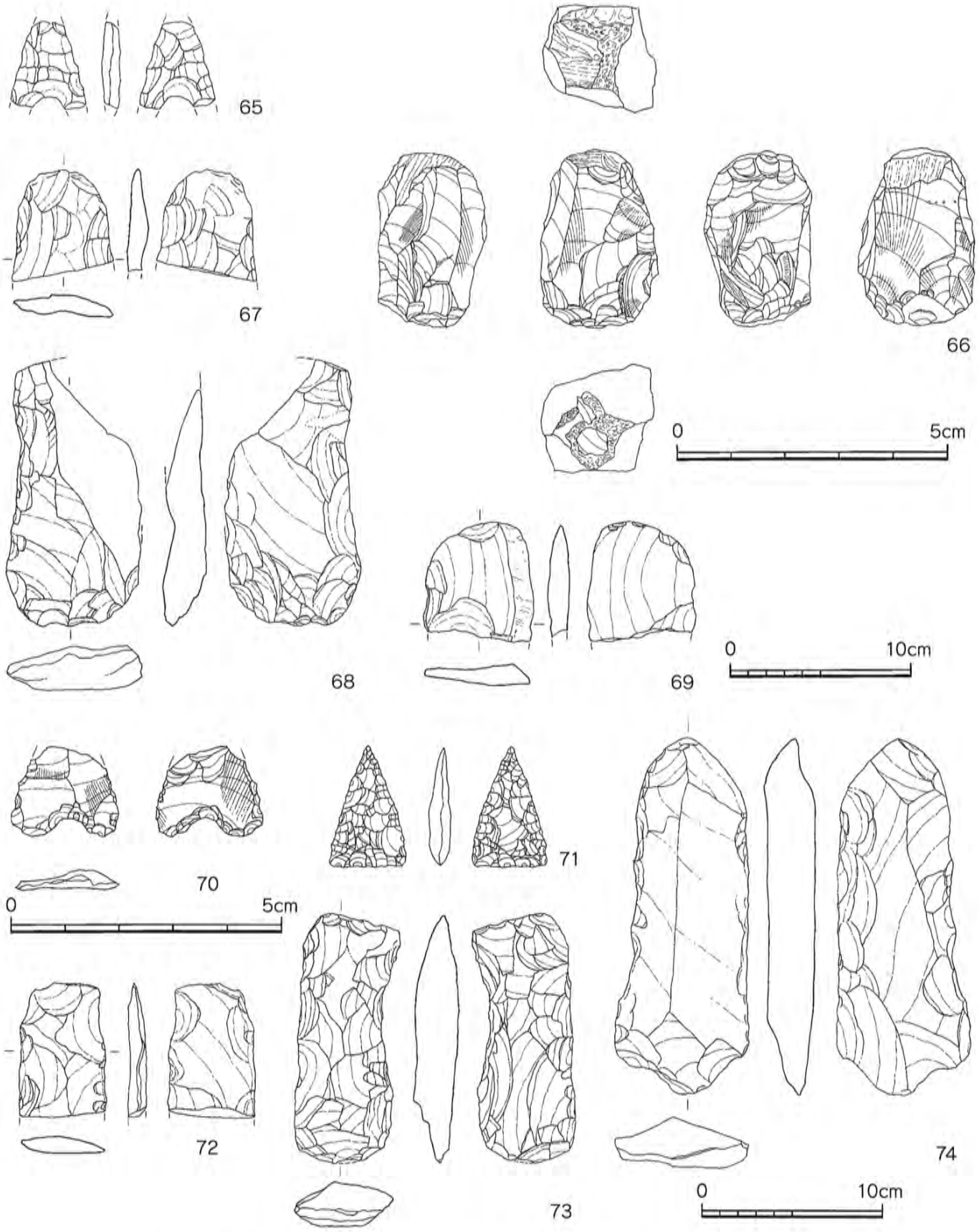
34～39 SX2002　40～55 SX2032

第7-9図　2区弥生時代SX出土土器実測図（47～55はS=1/4、他はS=1/3）



56～60 SD2031　61・62 SD2093　63 J-11区　64 2D区トレンチ1

第7-10図　2区縄文～弥生時代SX・SD出土石器実測図（56・57はS=1/1、他はS=1/3）



65～69 SX2099　70～74 SX2098

第7-11図　2区弥生時代SX出土石器実測図（65・66・70・71はS=1/1、他はS=1/3）

2.9cm・残存重量291.4gを測る。後面が主要な磨面となる。**77**は玄武岩の縦長剥片で、長さ10.5cm・幅5.6cm・厚さ1cm・重量44.9gを測る。**78**は硬質緻密な緑灰色の火山岩（安山岩・玄武岩）で作られた叩石で、径7.65cm・厚さ5.2cm・重量443.9gを測る。後面は凹凸のある自然面を残すが、前面は剥離・敲打によって断面三角形状に成形している。下部縁に細かい敲打痕・摩滅が認められる。その他、玄武岩の剥片・分割礫、花崗閃緑岩の石皿片、黒曜石片が出土している。

その他石器

中世の遺構および遺構検出面から縄文～弥生時代の石器が出土している。**79**はSD2030の南端で出土した頁岩製の柳葉形磨製石鏃未成品で、頭部が欠損しており、残存長5.1cm・茎幅0.7cm・刃部幅1.75cm・茎厚0.7cm・刃部厚0.7cm・残存重量8gを測る。**80**・**81**・**83**は、2A区検出面からの出土である。**80**は鈴桶型石刃技法による黒曜石製の縦長剥片で、長さ6.15cm・幅2.1cm・厚さ0.5cm・重量6.9gを測る。打面は平坦打面で、前面側縁辺に擦痕が認められ、剥離角は90°である。**81**は頁岩製磨製石鏃の刃先片で、残存長7.6cm・残存幅3.75cm・厚さ0.72cm・残存重量32.5gを測る。**83**は玄武岩製の打製石斧刃部片で、残存長7.15cm・幅8.3cm・残存厚2.6cm・残存重量166gを測る。前面の平滑面は素材の埋没風化面であり、刃部は剥離・摩滅が強い。**82**はSD2089から出土した玄武岩製の打製石斧刃部で、残存長5.8cm・幅7.8cm・厚さ1.66cm・残存重量94.8gを測る。**84**は2A区の試掘トレンチ2から出土した輝石安山岩製の打製石斧で、基部が欠損し、残存長8.6cm・刃部幅8.2cm・厚さ1.92cm・残存重量149.1gを測る。刃部縁辺は摩滅して丸みを帯びている。

2. 中世

以下の陶磁器・土師器の時期記述には、下記文献を参照した。

宮崎亮一編（2000）『大宰府条坊跡XV：陶磁器分類編』（第49集）太宰府市教育委員会
山本信夫（1990）「統計上の土器」『九州上代文化論集』乙益重隆先生古稀記念論文集刊行会
中世土器研究会編（1995）『概説中世の土器・陶磁器』　真陽社

掘立柱建物

柱穴の埋土は、灰色シルト質粘土で下部にむかってシルト質が強くなる場合がほとんどであり、ごく少数暗褐色シルト質粘土のものがみられた。2C区でも柱穴群を検出し、北方向と北東方向の並びがあるようにも見えるが、建物として明確な根拠をもって立てられるものはなかった。

SB2117（第7-2・13図、図版7-1）

2B区の北東で検出した東西方向、総長2.3mの柱穴列である。北と南に対応する柱穴列を確認できなかったため、柵の可能性もある。埋土が暗褐色粘質シルトで他の柱穴と異なり、黒色土器B類や緑釉陶器の図化に耐えないような小片が出土した。時期は10～11世紀と考える。

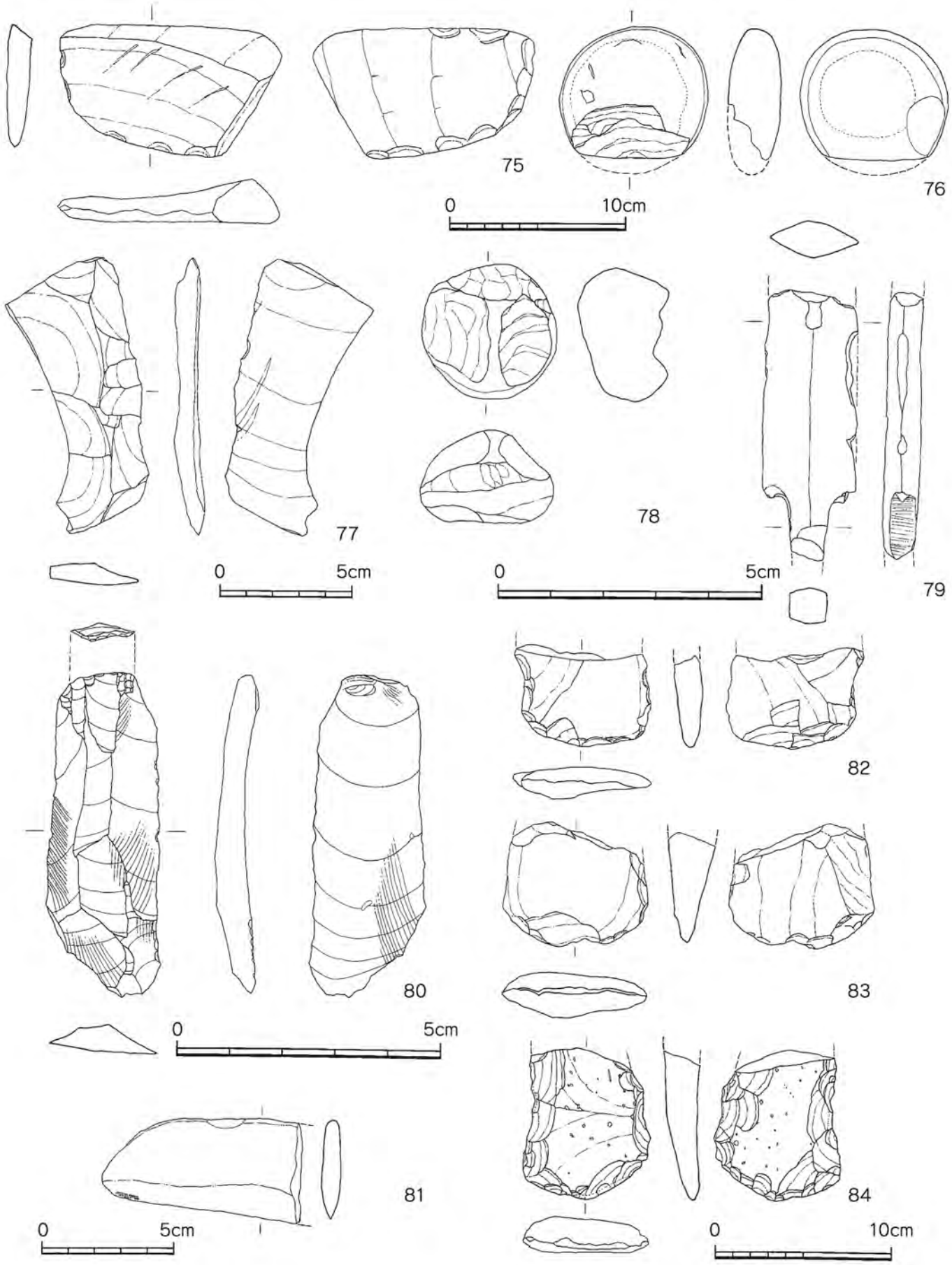
SB2118（第7-2・13図、図版7-1）　**出土遺物**（第7-15図、図版7-8）

2B区の東側で検出した桁行東西軸、3×2間（6.7×3.7m）の無廂建物である。柱間寸法は一定でなく、屋内柱穴は総柱となるか床束柱となるか不明である。時期は12世紀中頃～後半と考える。

85は、SP2095出土の同安窯系青磁碗I-1b類である。胎土は淡灰色、釉は灰オリーブ色を呈す。**86**は側柱SP2096出土の土師器坏で、1/4が残存し、復元口径16cm・復元底径11.6cm・器高2.8cmを測る。底部外面には回転糸切り痕と板状圧痕が残る。時期は12世紀中頃～後半である。

SB2119（第7-3・14図、図版7-1）　**出土遺物**（第7-15図、図版7-8・9）

2A区の北側で検出した桁行東西軸、5×3間（10×7m）の無廂建物である。柱間寸法は2～2.3mで、屋内柱穴は側柱穴よりも小さく浅いものが多く、間仕切柱の可能性もある。以下の柱穴には特徴的な内



75・76 SX2002　77・78 SX2032　79 SD2030　82 SD2089　80・81・83 2A区検出面　84 試掘トレンチ2

第7-12図　2区弥生時代SX・その他出土石器実測図（79・80はS=1/1、75・77・81はS=1/2、他はS=1/3）

容物が含まれていた。SP2129（径10～15cm花崗岩亜円礫5個。受熱痕あり）・SP2109（径15cm片岩礫2個、径5cm頁岩円礫1個）・SP2130（径10～15cm花崗岩・片岩礫5個、径5cm片岩円礫1個）・SP2104（炭）。建物の時期は12世紀中頃～後半と考える。

87は側柱穴SP2060出土の土師器坏である。1/4が残存し、復元口径14.8cm・復元底径9cm・器高2.2cmを測る。底部外面に回転糸切り痕とハケメが認められる。**88**は屋内柱穴SP2069出土の鉄釘で、残存長7.1cm、断面形は方形で1辺0.4～0.5cmを測る。**90**は屋内柱穴SP2071出土の土師器小皿である。1/4が残存し、復元口径8.8cm・復元底径6.4cm・器高1.2cmを測る。底部外面に回転糸切り痕が認められる。**93**は屋内柱穴SP2102出土の土師器小皿である。1/4が残存し、復元口径8.4cm・復元底径7cm・器高1.1cmを測る。底部外面には回転糸切り痕と板状圧痕がみられる。以下のSP2087・2073・2107・2088は梁行に平行して通る柱穴列である。**95**・**89**はSP2087からの出土である。**95**は土師質の鍋上半部で、色調は橙色を呈す。外面下半は粗いハケメで、ススが付着する。外面上半と内面は丁寧なナデ・ミガキ調整である。**89**は石英円礫の叩石で、長さ4.5cm・幅4.2cm・厚さ2.7cm・重量74gを測る。上・下端に細かい敲打痕が認められる。**91**・**92**・**97**はSP2073からの出土である。**91**は土師器小皿で1/8が残存し、復元口径10cm・復元底径8cm・器高1.1cmを測る。底部外面は摩滅のため詳細が不明である。**92**は土師器小皿で1/6が残存し、復元口径10cm・復元底径7.6cm・器高1.1cmを測る。底部外面に回転糸切り痕が認められる。**97**は滑石製石鍋転用の石製品で、長さ8.1cm・残存幅5.4cm・厚さ1.05cm・突起高1.8cmを測る。内外面にススが付着し、吊手の鉄軸が残っている。**94**はSP2107出土の須恵器椀口縁部片である。色調は暗灰色を呈す。**96**はSP2088出土の白磁碗V-4a類である。胎土は淡灰色で、釉はオリーブ色がかった灰白色を呈す。口縁部内面には釉溜まり、見込みに2カ所の目跡がみられ、外面下半は露胎である。遺物の時期はすべて12世紀中頃～後半である。

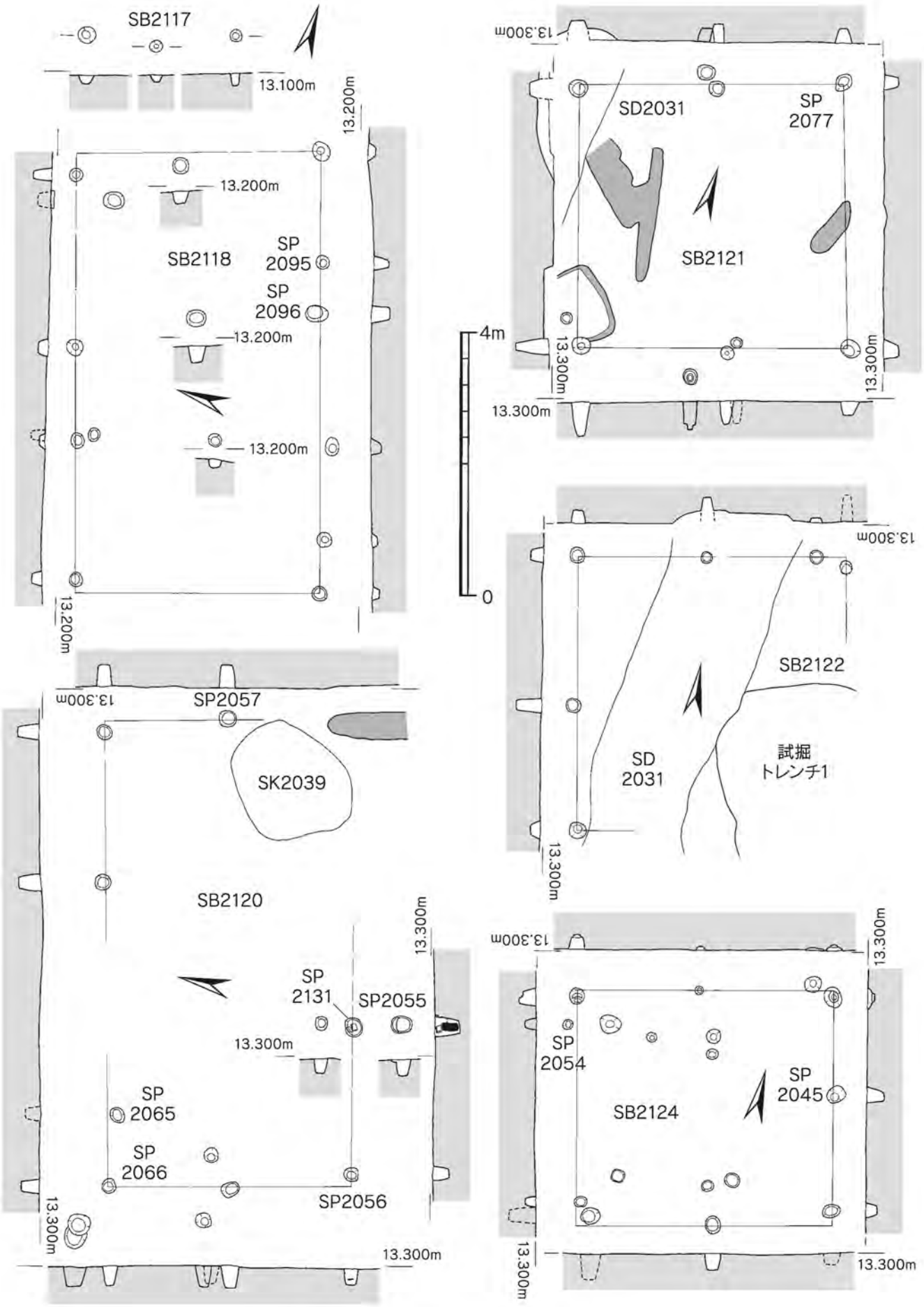
SB2120（第7-3・13図、図版7-1）　**出土遺物**（第7-15図、図版7-9）

2A区の中央東側で検出した桁行東西軸、3×2間（7×3.7m）の無廂建物である。柱間寸法は1.8mに近い。側柱穴SP2131からは方柱状の花崗岩が出土した。建物の時期は12世紀中頃～後半と考える。また、屋内東側の土坑SK2039は、SB2121と同時存在であれば竪穴付掘立柱建物となる。

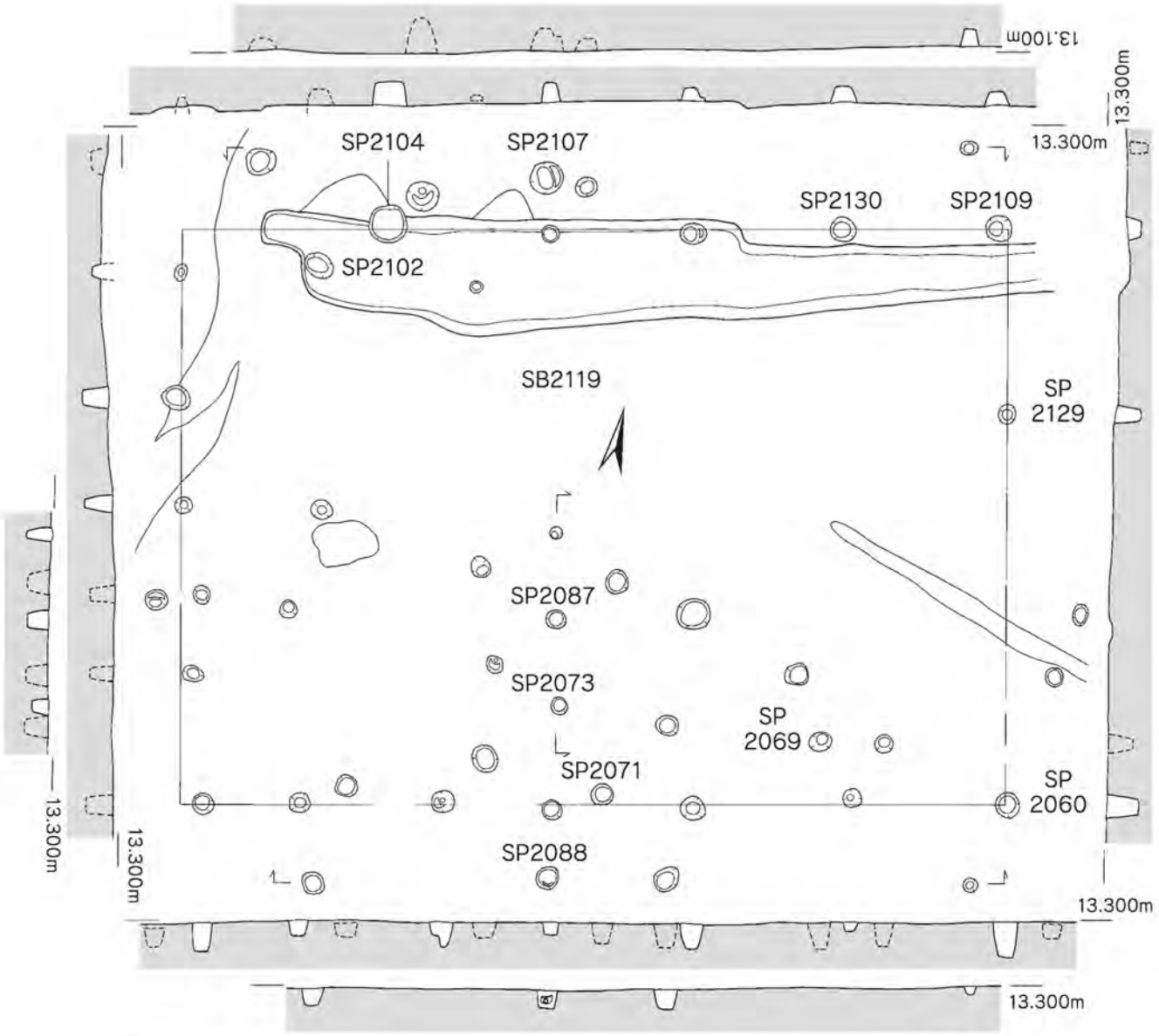
98は炭を多く含む側柱穴SP2056から出土した同安窯系青磁碗III-1c類である。胎土は淡灰色で、釉は薄く雑にかけられ、細かい貫入が入り、オリーブ灰色透明を呈す。**110**は側柱穴SP2066から出土した土師器小皿である。1/6が残存し、復元口径9.6cm・復元底径8cm・器高1cmを測る。底部外面に回転糸切り痕が認められる。**109**は屋内柱穴SP2065から出土した土師器小皿である。1/6が残存し、復元口径10cm・復元底径7.6cm・器高1cmを測る。底部外面は摩滅のため痕跡が不明である。**99**～**104**は外周柱穴SP2055から出土している。**99**は同安窯系青磁碗I-1b類で、胎土は灰色、釉は灰オリーブ色透明を呈す。胴部下半は露胎である。**100**は龍泉窯系青磁碗I-6類で、胎土は黄色味がかった灰白色、釉は暗オリーブ色を呈す。高台部は露胎で、高台外底に曲線状の墨書を残す。**101**は同安窯系青磁碗III-1c類で、胎土は灰色～淡黄色、釉は薄く雑にかけられ、細かい貫入が入り、ややオリーブ色がかった灰色を呈す。胴部下半は露胎で、胴部下端には飛鉋風の成形痕が認められる。**102**は同安窯系青磁碗I-1b類で、胎土は淡灰色、釉は灰オリーブ色透明を呈す。胴部下半は露胎で、胴部下端には飛鉋風の成形痕が認められる。**103**は滑石製石鍋口縁部で1/10が残存し、復元口径29cmを測る。鍔以下の外面にススが付着する。**104**は褐釉陶器の無耳壺I-1類で、SP2057出土破片と接合した。1/6が残存し、復元口径10cmを測る。胎土はベージュをおびた淡灰色で、釉は薄く、茶緑色を呈す。口唇部から口縁部内面に白い目跡がある。遺物の時期はすべて12世紀中頃～後半である。

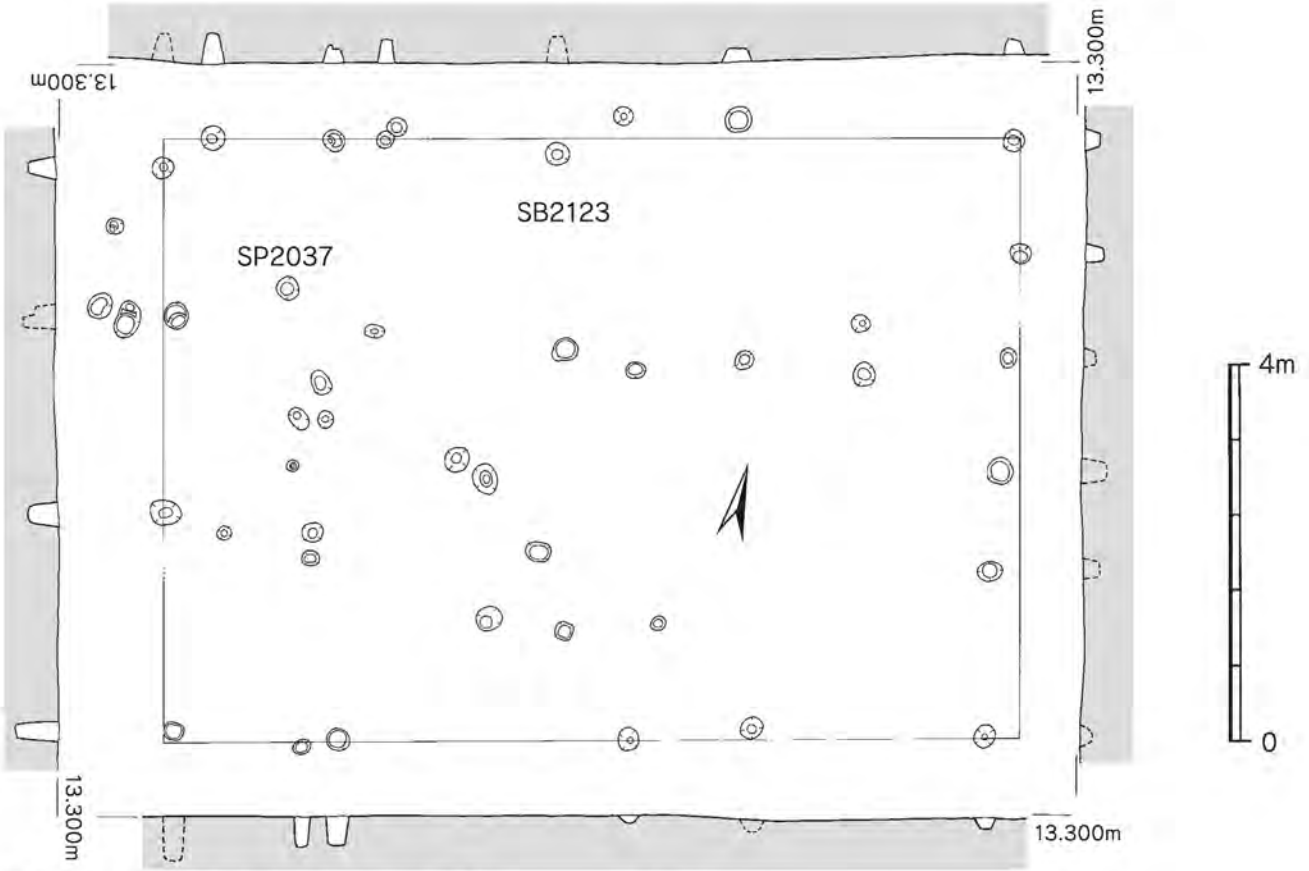
SB2121（第7-3・13図、図版7-1）　**出土遺物**（第7-15図、図版7-9）

2A区の中央で検出した桁行東西軸、2×2間（4×4m）の無廂建物である。柱間寸法は2m、柱筋の通



第7-13図　2区中世SB実測図1（S=1/80）





第7-14図　2区中世SB実測図2（S=1/80）

りは比較的よい。屋内・外周柱穴は明確でない。建物の時期は12世紀代であろう。

107は、側柱穴SP2077出土の滑石製石鍋を転用した模造鏡である。径5.5cm・重量37.8gを測り、右端に径6mmの穿孔が認められる。時期は12世紀代と考える。

SB2122（第7-3・13図、図版7-1）

2A区の中央西側で検出した桁行東西軸、2×2間（4.2×4.1m）の無廂建物である。柱間寸法は2m、柱筋の通りは比較的よい。出土遺物は図化に耐えない土師器・土師質土器小片である。SB2121・2124と形式が類似することから、建物の時期は12世紀代と考える。

SB2123（第7-3・14図、図版7-1）　**出土遺物**（第7-15図、図版7-9）

2A区の南側で検出した桁行東西軸、4×3間（9×6.3m）の無廂建物である。柱間寸法は一定でなく、屋内柱穴は床束柱か間仕切柱の可能性がある。出土遺物が少ないが、時期は12世紀後半と考える。

108は、屋内柱穴SP2037から出土した東播系須恵器の甕胴部片である。色調は灰色で、内外面ともに平行タタキを施し、外面には一部帯状に格子目タタキが認められる。時期は12世紀後半であろう。

SB2124（第7-3・13図、図版7-1）　**出土遺物**（第7-15図、図版7-9）

2A区の南側で検出した桁行東西方向、2×2間（3.9×3.6m）の無廂建物である。柱間寸法は1.8～2m、柱筋の通りは比較的よい。建物の時期は12世紀中頃～後半である。

111は、SP2045出土の瓦器椀胴部片である。時期は12世紀代であろう。**105**は、SP2054出土の龍泉窯系青磁碗I類（D期：12世紀中頃～後半）である。胎土は灰色で、釉は厚く細かい貫入があり、灰オリーブ色透明を呈す。内面は片切彫の劃花文と櫛描線文、釉は一部高台畳付までかかっている。

その他ピット（第7-2・3図、図版7-1）　**出土遺物**（第7-15図、図版7-9）

106は、SK2040に切られるSP2042出土の土師器坏で、1/4が残存し、復元底径10.8cmを測る。底部中央付近に径2cmほどの孔があるが、器面の摩滅が著しく、穿孔かどうか判断がつかない。**112**は、2C区SP2097出土の土師質の擂鉢胴部片である。胎土は細～粗砂を多く含み、色調は橙色を呈す。その他、2C区の特徴的なピットの内容は以下の通りである。SP2101：径3～7cm片岩亜円礫9個。白磁片。SP2097：径3～5cm片岩亜円礫16個。SP2125：径1～5cm片岩亜円礫15個。SP2114：径3～5cm片岩亜円礫31個。須恵器片・土師質片。SP2126：径3～5cm片岩亜円礫15個。SP2127：径7cm頁岩亜円礫1個。SP2128：径2～4cm片岩亜円礫6個。

溝　SD2089（第7-2～4・6図、図版7-1～4）　**出土遺物**（第7-16図、図版7-9・10）

2A区北西端から北北西に延び、2C区で90°西へ曲がり、調査区外まで西西南に走る区画溝である。幅は1.8～2.8m、断面形は東側では幅広な逆台形で深さは28cm、西側でV字状・U字状へと変化して32～48cmの深さを測る。埋土は東側では灰オリーブ色粘質シルト、西側ではシルト・砂質が強くなる。曲がり角の部分に径5cmの丸木杭がやや東に傾いて残っていた（図版7-4-27）。東側の溝底面に径5cmの灰色シルト質粘土の層が散漫にみられたが、これらも丸木杭の痕跡かもしれない。西側では遺物包含層SX2099から縄文・弥生土器・黒曜石片が流れ込んでいる。溝の時期は、14世紀代であろう。

113は青磁碗口縁部で、胎土は灰白色、釉はわずかに青緑色がかった透明を呈す。**114**は白磁碗口縁部で、胎土は灰白色、釉はややオリーブ色がかった灰白色透明を呈す。**115**は11世紀後半～12世紀の白磁皿口縁部で、胎土は灰白色、釉は薄くかけられ、ややオリーブ色がかった灰白色を呈す。**116**は龍泉窯系青磁碗IV類（G期：14世紀）の口縁部である。胎土は淡灰色、釉はやや厚くかけられ、細かい貫入が入り、透明な明オリーブ色を呈す。**117**は龍泉窯系青磁坏III類（F期：13世紀中頃～14世紀初頭前後）の口縁部で、胎土は灰黄色～灰色、釉はやや厚めで細かい貫入が全面に入り、透明暗オリーブ色を呈す。**118**は14世紀以降の褐釉陶器の壺胴部で、胎土は赤灰色、釉は光沢のないにぶい褐色、黄褐色を呈す。